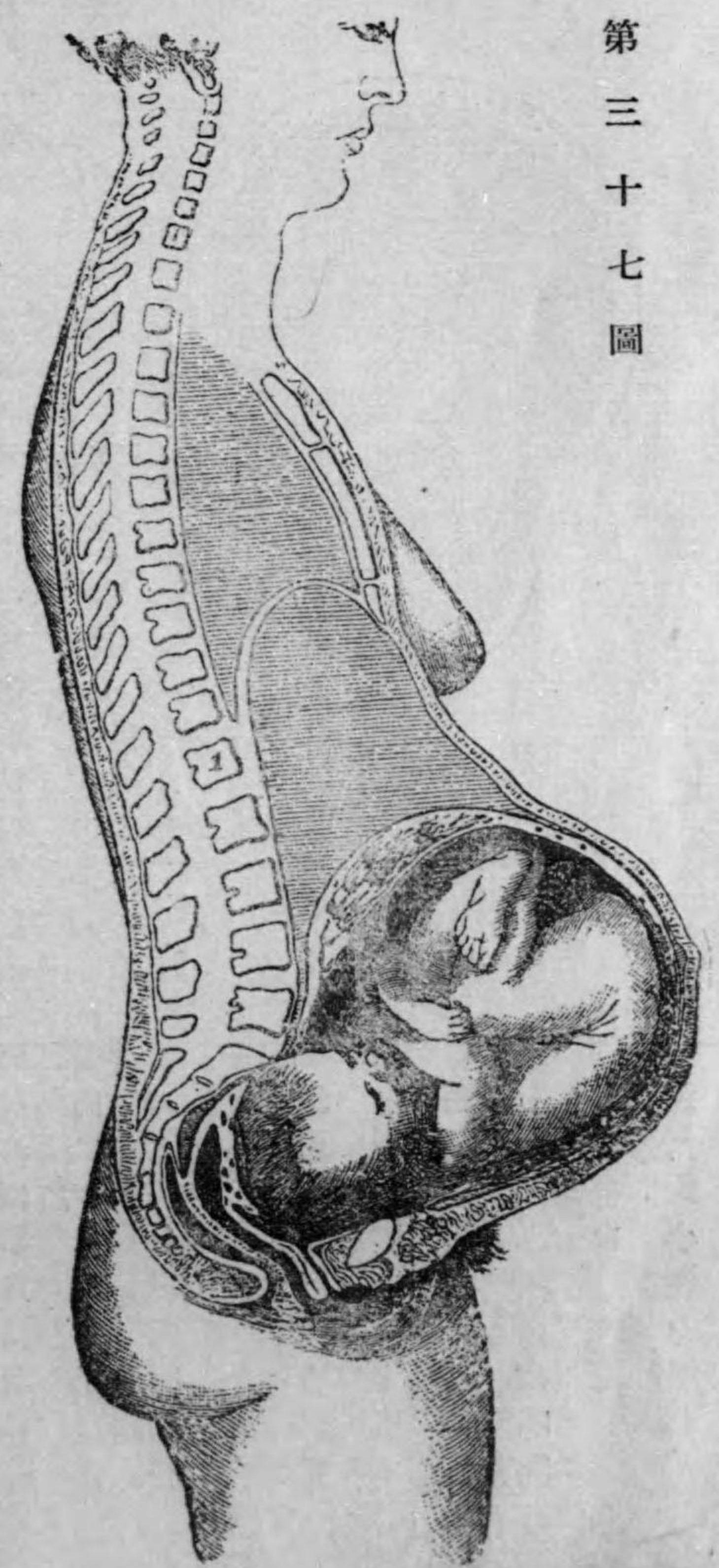


囊と云ふ。

第三十七圖



妊娠四十週に於ける婦人の左半身 (天然大六分の一) 1 は第一腰椎

第十章 成熟胎児の頭蓋

成熟胎児の頭蓋

成熟胎児の頭蓋は、最も大にして、堅きが故に、分娩に際し、頗る緊要なる關係を有するを以て、之を詳述せざるべからず。而して胎児の頭部は、頭蓋と顔面とに別つこと、尙大人に於けるが如きも、其の異なる點は、二箇に區別せらる可き前頭骨と、顱門、及び稍々移動性を有する縫合の存在することなりとす。此の如く縫合の未だ閉合せずして移動し得るは、分娩時に於て骨縁重積し、頭蓋を縮小するの作用を營むものなり。顱門の主なるものは、大顱門及び小顱門にして、側顱門は頭蓋の側方に於て、左右各前後にあれども、毫も緊要なるものにあらず。

大顱門 (菱形顱門)

小顱門

大顱門は、冠狀縫合と、矢狀縫合及び前頭縫合との間に形成せられ、菱形を呈す、故に之を菱形顱門とも稱す。

小顱門は、矢狀縫合と三角縫合との間にありて、三角形を成し、大顱門よりも小なり。

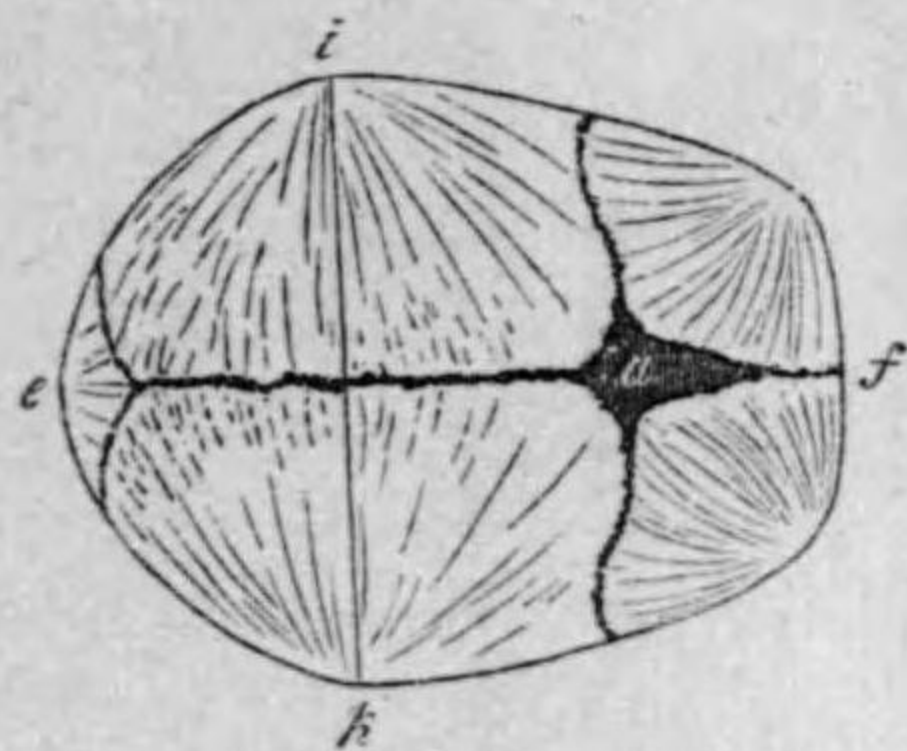
頭蓋の縫合に就きては、既に解剖編に於て説明したるを以て、左に其の大要を述べんとす。

前頭縫合
冠狀縫合
矢狀縫合
後頭縫合

兩前頭骨間にあり。
前頭骨と顛頂骨との間にあり。
左右顛頂骨間にあり。
顛頂骨と後頭骨との間にあり。

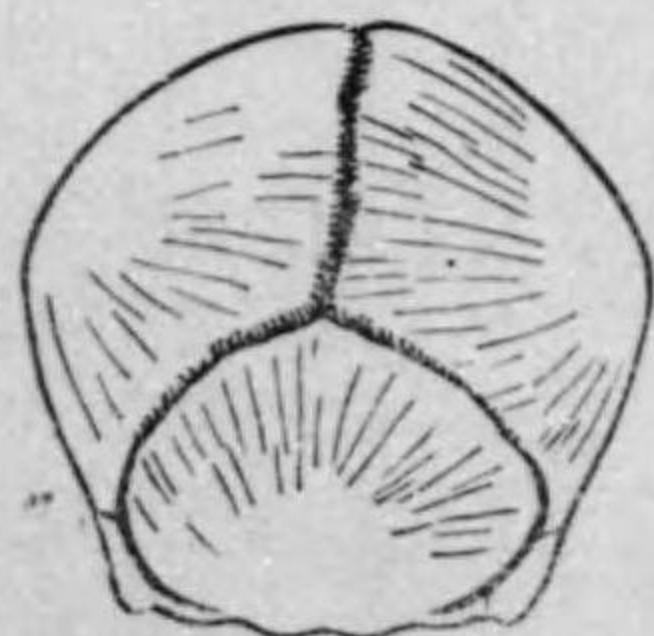
門門門合合合線線線線線
顛顛顛顛顛顛顛顛顛顛顛顛顛
大小側側側側側側側側側側側
a b c d a b f a c b d e f i k b g f

圖八十三第

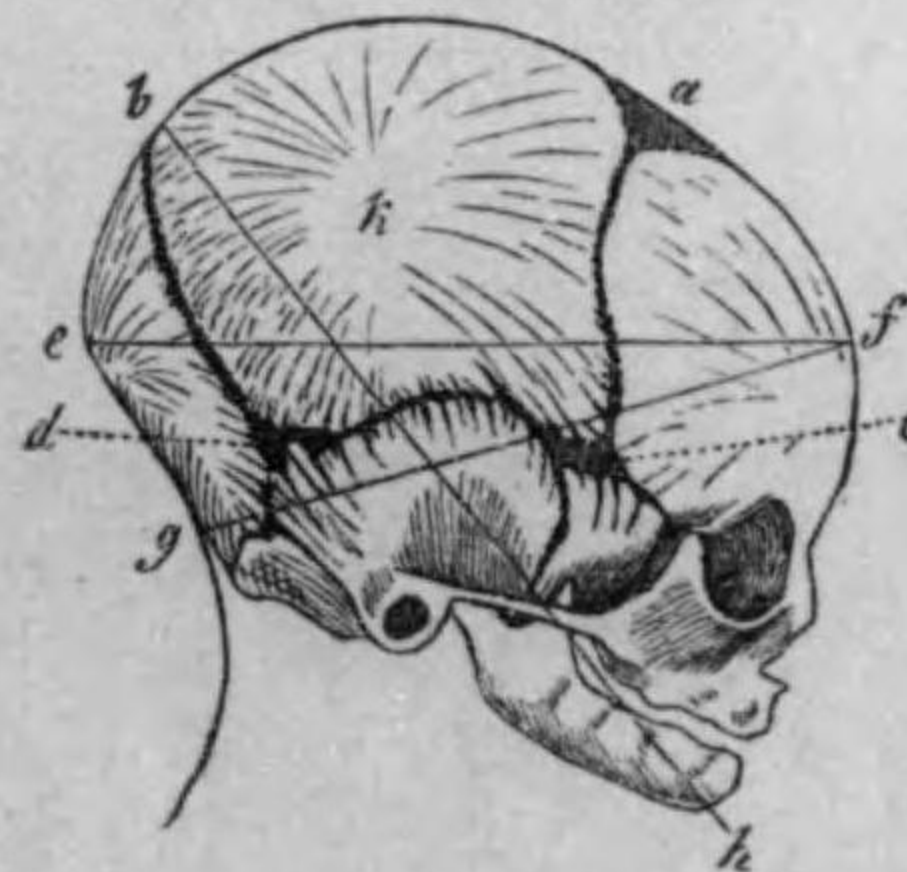


一分三の大然自

圖九十三第



圖十四第



一分三の大然自

嬰兒の熟否を知る

嬰兒の熟未熟を知るには、頭蓋の大小をも測定せざるべからず。但し成熟せる胎児の頭蓋は、左の如き徑線あるものとす。
直徑線 眉間より後頭骨最突出部間……………一二〇仙米 (日本人は)

頭蓋周圍徑

大橫徑線 兩顛頂結節間……………九・五仙米 (日本人は)
小橫徑線 兩顛顛部間……………八〇仙米 (日本人は)
大斜徑線 顛部尖端及び後頭突起間……………一三〇仙米 (日本人は)
小斜徑線 頂窩及び大顛門間……………一〇・五仙米 (日本人は)
頭蓋周圍徑 直徑に沿うて頭蓋を一周せるもの三四〇仙迷……
頭蓋の最小周圍徑は、小斜徑線に於て三十二仙迷を有し、最大なるは大斜徑線に於て三十六仙迷なり。而して正規の分娩にては、此の最小なる周圍徑を以て、骨盤内を通過するものなり。

第十一章 子宮内に於ける胎児の状態

子宮内に於ける胎児の状態を胎勢、胎向、胎位の三に區別す。

第一 胎勢

圖一十四第 向胎一第



(一分五の大然天)

圖二十四第 向胎二第



一分五の大然天

胎勢は、子宮腔内に於ける胎児の姿勢にして、正規の妊娠にありては、兒體の各部分が子宮腔の形狀に一致せんが爲に一定の胎勢をなすものなり。即ち其の背を屈し、頤部を胸上に接せしめ、上肢は肘關節に於て屈曲し、之を胸面に置き、左の右の前膊を相交せしむ。下肢は又膝關節に於て屈し、之を腹壁に接し、左の右の下肢又相交して、

足踵を臀部に接觸す。而して臍帶の腹部は前面に於て、四肢の間在す可し、之を正規の胎勢と云ふ。此の兒頭より臀部までを連結せる線を胎児の長軸と云ふ。若し手足又は頸を伸展し、或は四肢に臍帶の纏絡するが如きは異常に屬す。此の如き胎勢は、母體或は自己の運動により、屢々變ずる事あれども、決して久しく其の變位に止るものにあらず。

第二胎向

胎向とは、胎児の背部、母體の何れの方に向るかにより定むるものにして、兒背が母體の左方に向ふ時は、第一胎向と稱し、右に對する時は第二胎向と云ふ。通常第一胎向を多しとす。此の各胎向に於て、兒背の少しく前方に向ふものを第一分類と云ひ、少しく後方に向ふものを第二分類と名く。然れども、予は諸子の記憶に便ならしめんが爲に、左の如く是を區別す。

第一胎向 兒背が母體の左前方に向ふもの。

第二胎向 兒背が母體の右前方に向ふもの。

第三胎向 兒背が母體の右後力に向ふもの。

第四胎向 兒背が母體の左後方に向ふもの。

横位にありては、兒頭と兒背とによりて、區別すること次の如し。

第一横位 兒頭左側にありて兒背前向するもの。

第二横位 兒頭右側にありて兒背前向するもの。

第三横位 兒頭右側にありて兒背後向するもの。

第四横位 兒頭左側にありて兒背後向するもの。

以上記せる胎向は屢々變じ易く、兒背の左前方のもの、或は左後方に、或は右前方のもの、或は右後方に變化することあり。殊に小なる胎児、或は子宮腔の大なるものに著し。

第三 胎位

胎位 は、胎児が子宮腔内に於ける位置、即ち縦なるか、或は横なる

胎位
縦位
斜位

かに因りて定むるものにて、即ち前者を縦位と云ひ、子宮の縦軸と、胎児の縦軸と相一致し、後者を横位と稱し、子宮の縦軸と、胎児の縦軸と交叉するものを云ふ。この他斜位なるものあり。之胎児が縦位より變じて横位たらんとするに際し、其の身體の子宮に對し傾斜せるものにして、子宮の縦軸と、胎児の縦軸との斜めに交叉するものなり。而して全く横位を成すものは少なく斜位を形成するもの多し。

縦位に於ける胎児は頭部又は骨盤を下方に向て先進するにより頭位(頭産)又は骨盤端位(逆産)と名くることあり。而して其の先進の部位を更に區別し頭位に於ては後頭位、顛頂位、前頭位及び顔面位とし、骨盤端位に於ても亦臀位、膝位、足位に區別す。但し詳細は後章に述べべし。

第十二章 胎児の生理

第一項 胎児の營養

卵 は、初め絨毛膜に因りて、子宮の脱落膜より營養物を取り、次で胎

營養作用

第二項 胎児の血液循環

胎児の全身を營養する血液 は、二條の臍帶動脈より胎盤に通じ、其の毛細管に至りて營養物を攝取し、老廢物を排出して、新鮮なる血液となりて、一條の臍帶靜脈に湊合し、夫より胎児の臍に入りて全身を營養す。胎児の體內に於ける血液循環の状況は、生産後に於けるものと、大に其の關係を異にす。即ち心臟の左右兩房間には、卵圓孔なる一孔を存して互に交通し、肺動脈と大動脈との間に二者を連絡する一管あり、之をボタリー動脈管と云ふ。臍帶動脈は骨盤内に起り、膀胱の兩側に沿うて上行し、遂に臍に達す。

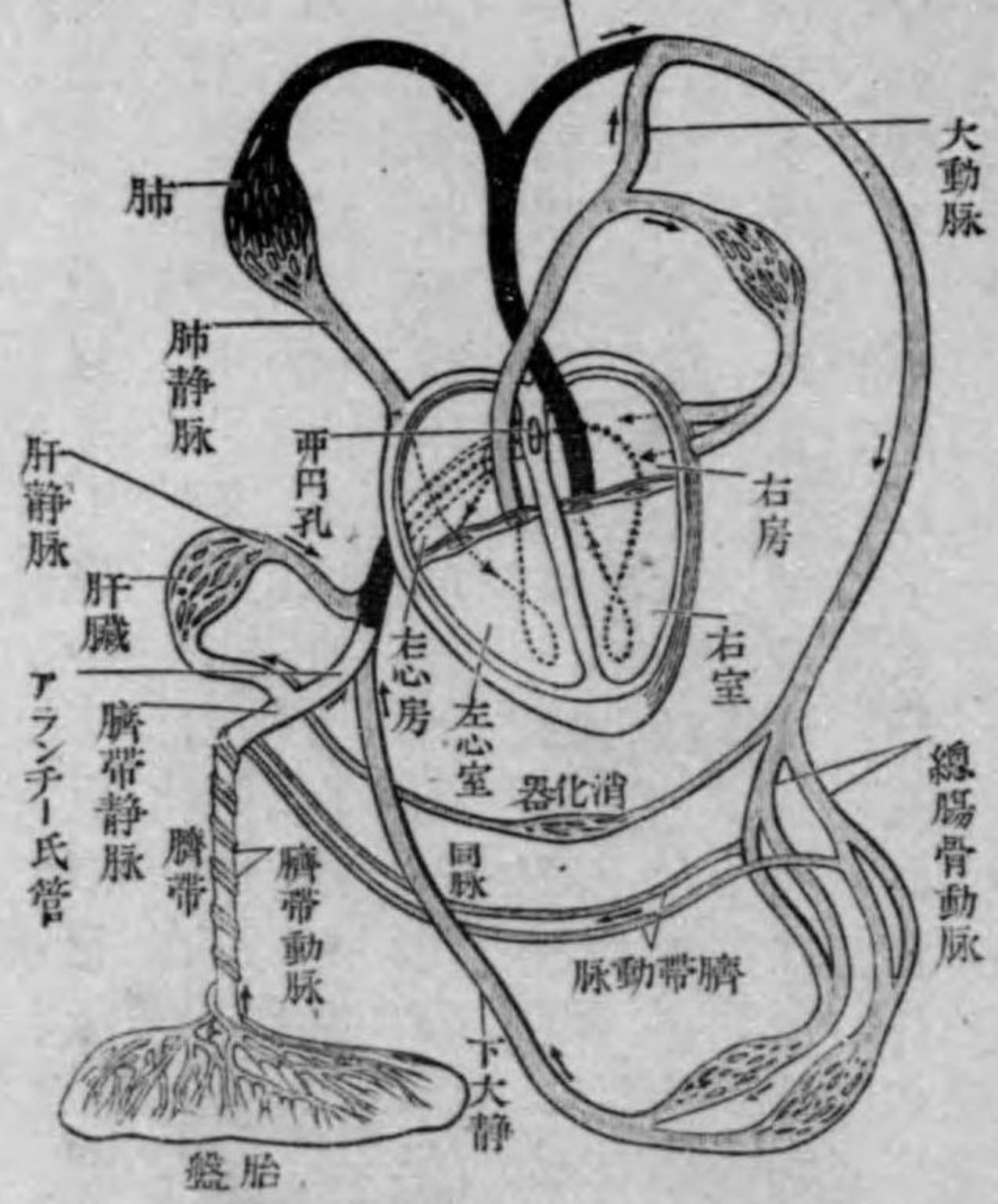
ボタリー動脈管
アラランチー靜脈管

大靜脈に連合する二枝あり、之を肝靜脈と稱す。

胎盤を循環

して新鮮となれる血液は、臍帶靜脈より兒の體內に入り、肝臟の下面に至りて、一部は門脈により肝臟に注ぎ、他の一部はアラランチー靜脈管を経て、下大靜脈に達す。而して其の肝臟に循環る血液は、再び肝臟脈より出でて下大靜脈内に注ぐを以て、下大靜脈は下肢及び腹部内臟より環流し來れる血液と、臍帶靜脈より來れる新鮮なる血液と、更に心の右房に至り、上體の血液を湊合せる、上大靜脈と共に右房内に注ぐ、茲に於て房の收縮起れば

圖三十四第



環循環液血の兒胎

右房なる血液の一部は右室に入り、室の収縮に由て肺動脈中に出さる。次で其の大部分はボタリ動脈管を経て、直に大動脈に注ぎ、一部分のみ肺中を循環して肺動脈となり、心の左房に注ぐ。即ち胎児の肺は、未だ呼吸を營まざるを以て、僅少の血液を流通せしむるに過ぎず、此の如く右房内に於ける血液の一部は、右室に入ると雖、他の一部は卵圓孔を通りて左房に入り、肺静脈より來れる血液と共に、房の収縮に由て左室内に出さる。次で室の収縮發作すれば、此の内の血液は、悉く大動脈内に注ぎ、先にボタリ動脈管を経て來れる血液と共に、大動脈の經過に沿うて、一部は、上體に循環し、遂に上大静脈となる、他の一部は下體に循環せんが爲に骨盤内に至り、更に二分せられ、一は臍帯動脈となりて、臍より出で、一は下半身を循環りて、遂に下大静脈に湊合す。此の如く胎児の血液は胎盤及び體内を循環して絶ゆる間なし、之を胎児の血液循環と云ふ。

分娩後に於ては、新鮮なる血液と、陳舊なる血液と、互に混合することなしと雖、胎児に於ては、之に反して全く混合するものにして、新鮮なる

血液は臍帯静脈を経て、アランチー管によりて下大静脈に入ると同時に、陳舊なる血液と全く混合すべし。此の混合せる血液は、心臓を経て全身を循環し、其の營養を司るの外、臍帯動脈より胎盤に入りて物質の交換を營み、新鮮なる血液となるものなり。故に純粹に陳舊なる血液は、上下の大静脈のみを流通し、純粹に新鮮なる血液は、臍静脈内のみあるなり。

第三項 胎児の無呼吸及び早時呼吸

無呼吸
早時呼吸
初生兒假死

胎児 は、子宮内に於て呼吸を營むことなく、胎盤血行により酸素を攝取し、炭酸を排泄するものなり。此の状態を無呼吸と云ふ。

今若し臍及び子宮の血行不良となる時は、胎児の體内には酸素缺乏し、炭酸蓄積するが故に、無呼吸の状態を保つこと能はずして、遂に呼吸作用を發す。之を早時呼吸と云ふ。此の場合に於て、吸取する所のものは、酸素にあらすして、胎児の周圍に存せる羊水なるを以て、胎児は直に是を嚥下し窒息す。之を初生兒の假死と稱し、娩出すれば發啼術を施し、蘇生せ

しむるを得べし。

第十三章 妊婦の身體に現はるゝ變化

第一項 生殖器の變化

第一 子宮

子宮の増大 は、通常妊娠せざる若年の婦人に於て、其の長さ凡そ八仙迷なれども、妊娠する時は漸次増大し、其の末期に至らば、凡そ三十五仙迷に達し、其の内腔の廣さは五百倍餘となる。而して子宮壁は、殊に子宮底部に於て著るしく厚さを増し、子宮血管も亦頗る擴大し、且つ増加するに至る。

子宮の位置 は、最初一二箇月間は、骨盤内にありて益々深く下降し、其の前轉前屈を強からしむるも、三箇月より漸次上昇し、四箇月に至り、大骨盤内に出で、爾後子宮増大するに従ひ、子宮底の位置は漸々上昇し、九箇月に至らば遂に心窩に達すれども、十箇月に及べば再び下降す。

子宮の増大

子宮の位置變動

子宮頸部の變形

脱落膜形成

腔と外陰部

妊娠と月經

子宮頸部 は、漸次弛緩し、柔軟となり、且つ頸管内より多くの粘液を分泌す。又妊娠月數を重ねるに従ひ、子宮頸は漸く短縮し、其の末期に至り唯薄き縁を残すに至る。

第二 腔及び外陰部

腔及び外陰部 に於ては、血液の流入多きが爲に、著るしく溫暖となり。且つ弛緩して分泌増加す。又前庭、腔壁、子宮腔部等は、變化して帶青赤色を呈し、大陰唇は時として靜脈の怒張を現はすことあり。

第三 月經

月經は妊娠中 全く閉止すれども、稀には初め一二箇月の間、尙不規則なる來潮を見ることあり。

第四 乳房

初乳 は、三箇月の頃より漸次増大して、柔軟となり、妊娠末期に至り、之を壓搾すれば、稀薄水様の乳汁を分泌す。之を初乳と云ふ。乳量は其の着色を増して、赤色或は黒褐色を呈すべし。

第二項 生殖器以外の變化

妊婦の容貌

妊婦の容貌 は、多くの婦人に於て、其の固有の光澤を失ひ、豊艶花の如き顔貌も、變じて皮膚の弛緩を現はし、且つ屢々黄色となり、眼の周圍に青色の輪を印するに至る。而して妊婦全體の形狀は、腹部を強く前方に突出し、上體を後方に反張す。

消化器系の影響

消化器系 に於ては、悪心、嘔吐を催し、殊に早朝、或は空腹時に著し、又時としては嘔吐、便秘、食物異好等の變化を現はし、唾液の分泌著しく増加するものあり。

神経系の影響

神経系 に於ては、頭痛、齒痛、關節痛、神経痛、不眠等を發し、屢々倦怠の感あり。その他精神過敏となり、忽にして悲しみ、又忽にして愉快を感じるものなり。時としては往々卒倒することあり。

血行器系の影響

血行器系 に於ては、心臟の機能増進して心悸亢進、胸内苦悶を來し、且つ血液頭部に集中するが爲、眩暈、衄血等を致す、又子宮増大の爲、骨盤内の靜脈を壓迫し以て血液の還流を妨げ、下肢に浮腫を來すことあり。

泌尿器系の影響

泌尿器系 に於ては、屢々尿意頻數となり、時としては尿閉を來すことあり。

呼吸器系の影響

呼吸器系 妊娠時は、腹部膨大するが故に、呼吸運動を妨げられ、呼吸に苦悶を感じるものなり。

皮膚の影響

皮膚 は、所々に着色を現はし、眼圍、乳暈、白條線部、臍部、外生殖器等に於て褐色を呈す。又腹部の膨大によりて、其の部の皮膚緊張し、皸裂を生じて皮面に帯赤色の線狀となりて現る。之を妊娠線と云ふ。此の線は分娩後白色に變じ、永く遺残するものなり。時としては乳房の膨大著

しき爲め、其の部にも妊娠線を呈することあり。

第十四章 妊娠の徴候

婦人妊娠せば、上述の如き種々の變化を呈すれども、亦他の疾病に於ても、之に類する症状を呈することあり。故に其の妊娠せるや否やを判断するは、決して容易なるものにあらず。今妊娠の徴候を三種に區別して説明すべし。

第一 確證 胎兒より發する徴候にして、左の如し。

- 一 胎兒の心音聴取。
- 二 臍帶雜音の聴取。
- 三 胎動の認知。
- 四 胎兒體部の觸知。

此等の徴候は、妊娠の五箇月以後に非ざれば發せざるを以て、其の以前に於ては、確實なる妊娠の診斷を下すこと能はず、若し此等の徴候の一種

にても證明するを得ば、既に妊娠なること明なり。

第二 疑證 妊婦の生殖器に發する變化にして、即ち

- 一 月經の閉止、殊に平素整順なるものと停滞。
- 二 子宮の増大及び其の軟化、(ヘーガル徴候)
- 三 膈内の溫暖、分泌の増加及び膈壁の着色。
- 四 乳房の増大、乳暈の着色、初乳の分泌。
- 五 子宮雜音の聴取。

是等の徴候は、略々其の妊娠たる事を定め得べきを以つて、疑證の名ありと雖、未だ確實なるものと云ふを得ざるなり。

第三 不確證 妊婦の生殖器以外に發する變化にして、今主なるものを列挙すれば。

- 一 消化器系に於ては、惡心、嘔吐、吞酸、嘔噎、吃逆、異嗜、唾液分泌過多等。
- 二 神経系に於ては、頭痛、眩暈、全身倦怠、精神鬱憂、齒痛。

- 三 皮膚に於ては、着色、妊娠線等。
 - 四 泌尿器系に於ては、尿意頻數及び便秘等。
 - 五 循環器系に於ては、下肢及び陰部の浮腫、静脈瘤。
 - 六 呼吸器系に於ては、妊娠の末期に至り、胸内苦悶、呼吸困難等。
- 以上の諸徴候を顯すものなり。

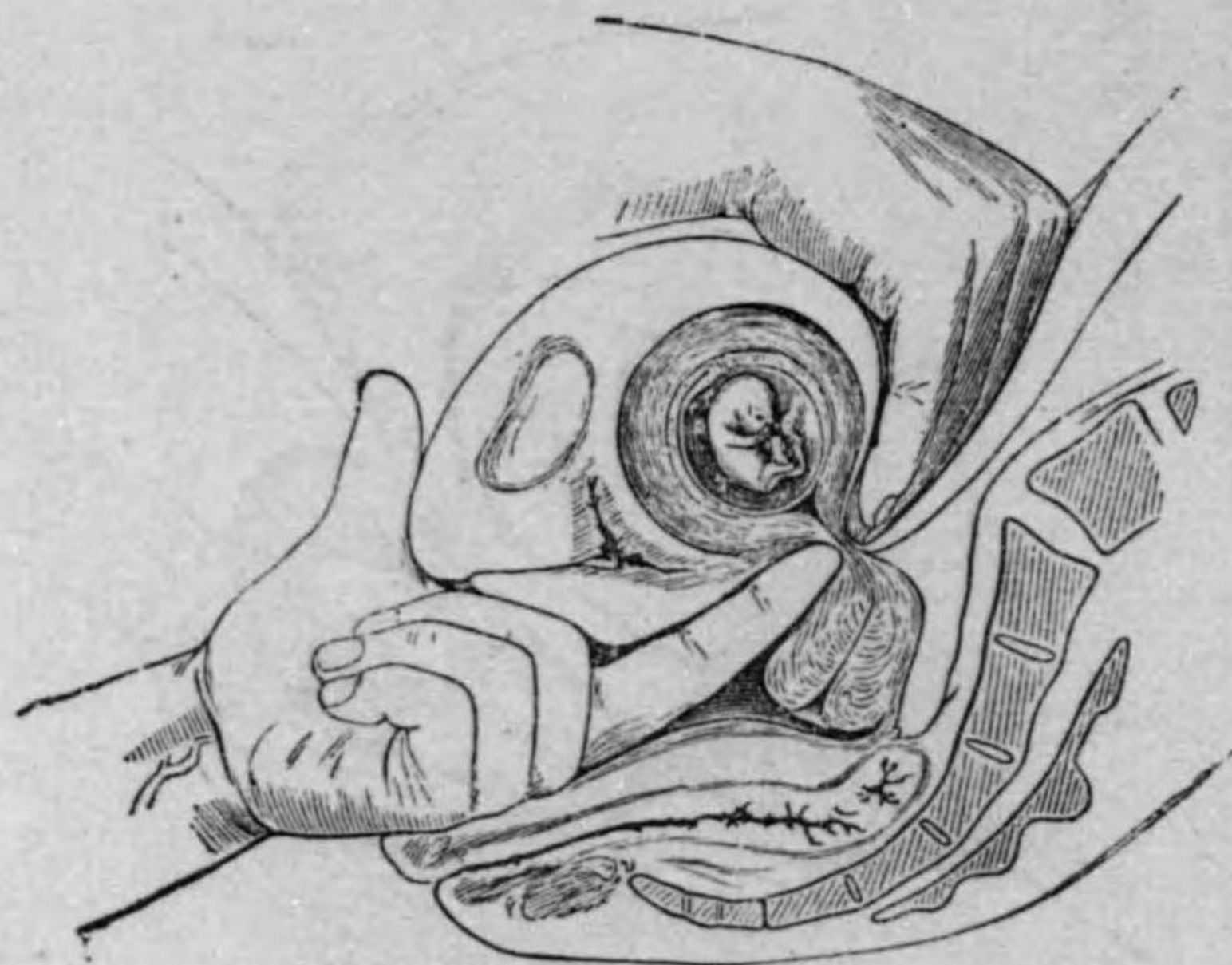
第十五章 妊娠各月の徴候

妊娠時期を診断するや、單に妊婦自己の證言によりて、最終月經の時日を聞くのみなるが故に往々正鵠を失ふものあり。されば之を確むるが爲に検査を施すを緊要とす。而して初妊婦に於て、其の各月を鑑定すべき徴候は左の如し。

一箇月末 に至れば、膈内の分泌頗る増加し、且つ一般に溫暖となり、熟練なる検査による時は、子宮體の柔軟となり、稍々腫大せるを觸知すべし。妊婦の自覺症としては、下腹部内に溫氣を感じ、胃部苦悶、悪心、嘔吐、異嗜等なり。

ヘーガル妊娠第二徴候

第四十四圖



ヘーガル第一徴候

は手拳大となり、殆んど小骨盤内を充たし、横徑に達す。柔軟餅の如くなるを觸るべく。膈壁及び他部には初めて着色

三箇月末 に至れば、子宮

二箇月末 に至れば、子宮は殆んど鶯卵大に達し、益々柔軟となる。然れども、其の頸部は體部に比し稍々硬し、故に之を検査する時は、恰も四十四圖の如く子宮は頸體の中間に於て兩斷せらる。之をヘーガル妊娠第二徴候と稱す。此の徴候は、他の子宮疾病にありては、決して現はるゝものにあらず。

圖五十四第



候徴二第ルガーヘ

雑音を聴取し得べく、時としては胎動音を聴き、胎児部分に觸知す。

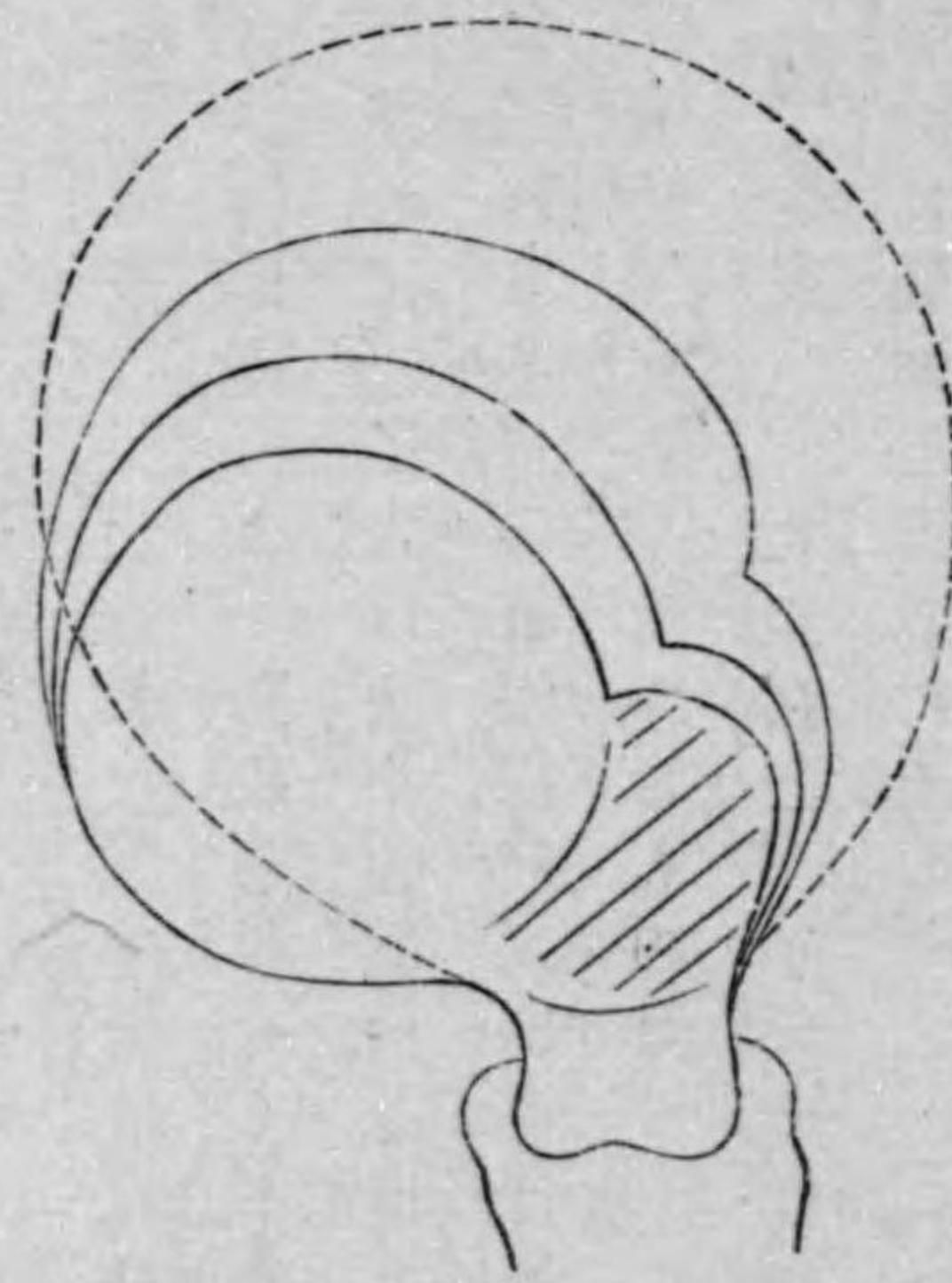
第三編 正規妊娠及び其の取扱法 第十五章 妊娠各月の徴候 一三四
を見、下腹部は少しく膨隆するを認む。妊婦の自覚症は益々増加し、尿意頻數、便秘、神経痛等を來し、時としては下肢の浮腫を現すことあり。是

子宮増大の爲膀胱、直腸、其の他骨盤内に存する血管、或は神経等を壓迫するに由る。而して此の月より乳房は稍々緊満して着色し。ヘーガル確徴明かに現はる。

四箇月末

凡そ兒頭大となり。至れば、子宮充たし、其の底部は骨盤入口上に出づ、故に外部より明かに恥骨縫際上に於て球形を成せるを觸知し得べし。又外診上能く子宮血管の

圖六十四第



ビスカツエタ妊娠徴候

因に云、ヘーガル妊娠第一徴候とは第四十五圖に示す如く、通常の子宮にありては、子宮前壁に皺襞を形成し、後屈子宮にありては、後壁に顯はるものなれども、助産婦には斯の如き精細なる診断を行ふの必要なし。

其の他妊娠初月に於てヘーガル徴候の外に又ビスカツエタの徴候なるものあり。そは、妊娠初月に於て、卵子の子宮内に附着したる部分の膨隆し、(第四十六圖の如く)子宮の一方に向て突隆し、その

抗抵頗る軟にして、他の子宮部との境界に於て、溝状の凹窩を觸知するを云ふ。而してこの局處の隆起は、漸次子宮の増大すると共に、妊娠四箇月頃に至れば遂に消失すべきものなり。

妊娠初期に於て卵の子宮底の偏側に附着し、其の部の子宮底は第四十六圖の如

く球形に膨隆して、其の部は柔軟にして他部との境界に於て外診上溝状の凹陷を觸知す、これをピスカツエク徴候と稱す、この變化は妊卵の増大すると共に漸次硬度を均一にし、妊娠中期に至れば妊娠子宮の如く卵圓形となるものなり。

五箇月末 に至れば、子宮底は臍と恥骨縫際との中間に位し、胎兒

妊娠不快症
状の消散

の心音は、此の月より聴取し得べく、妊婦は胎動を感ずるに至る。此の時期に達すれば、子宮は全く骨盤内を出で、周圍を壓迫する事なきが故に、壓迫に因れる不快の妊娠症状、即ち浮腫、便秘、神経痛等は頓に消散し、悪心、嘔吐も亦全く治するものなり。

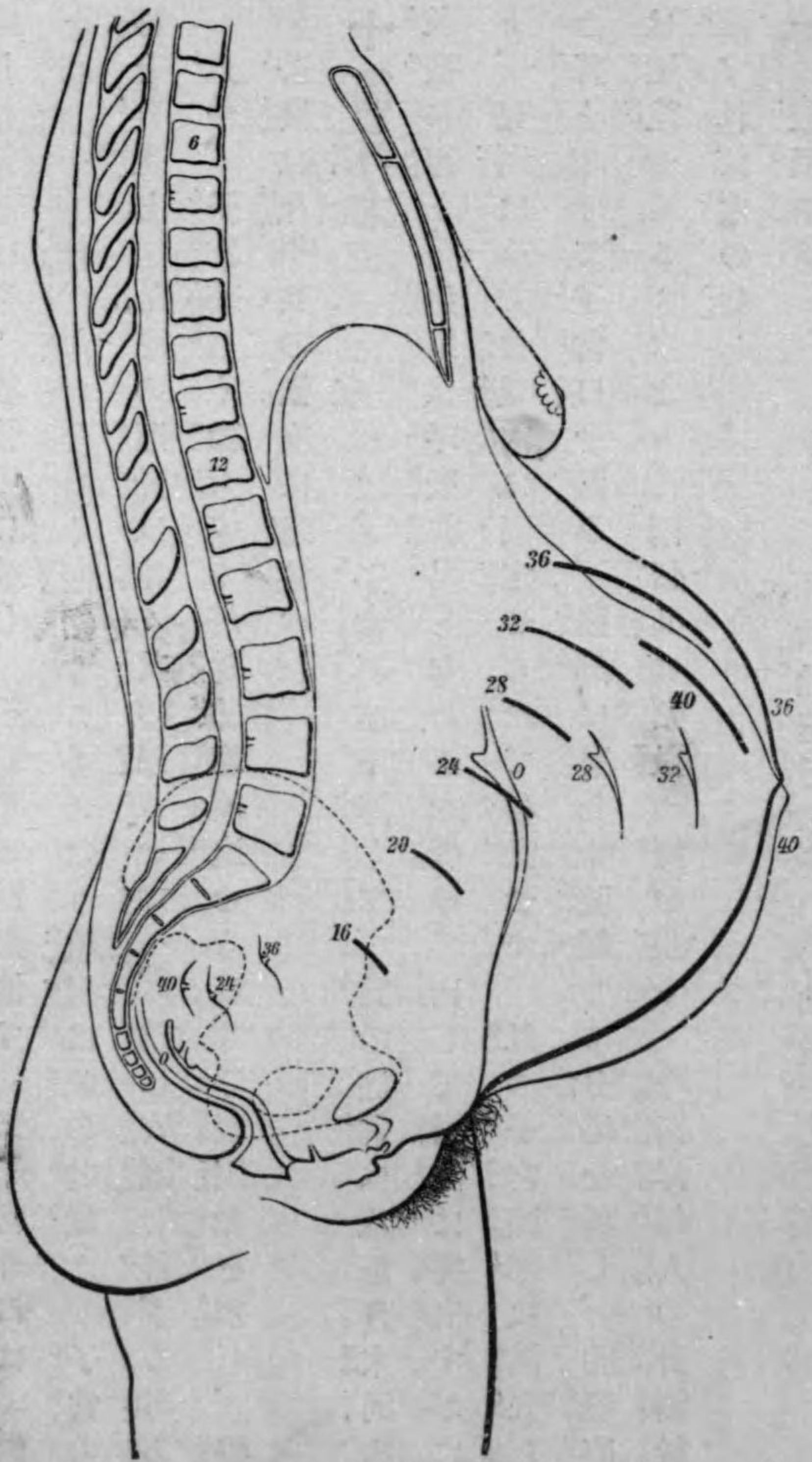
六箇月末 に至れば、子宮底は殆んど臍の高さに達し、胎兒の各部を明かに觸知し得るに至る。

七箇月末 に至れば、子宮底は臍上一指横徑の部に達し、下腹部は膨大して、妊娠線を現はす。

八箇月末 に至れば、子宮底は臍と胸骨劍狀突起との中間に達し、臍窩は全く平坦となる。

妊娠各期の子宮底子宮腔部及び腹壁(天然大の五分の一)

第四十七圖



數字は妊娠各週を示す

全腹緊満

子宮收縮自覺

計測數

第三編 正規妊娠及び其の取扱法 第十五章 妊娠各月の徴候

一三八

九箇月末 に至れば、子宮は心窩部に昇り、其の底部は劍狀突起下に達し、側部は全く肋骨弓に接し、全腹至る所緊満す。又子宮外口は、僅かに哆開すと雖、内口は堅く閉鎖するものなり。妊婦は此の時期より子宮の收縮を自覺し、胎兒の運動は益々其の強さを加へ、爲に安眠し得ざる事あり。且つ、子宮著しく膨大するが爲に肺臟壓迫せられ、呼吸困難を來し、妊婦の苦悶は今や其の極度に達すべし。

十箇月末 に至れば、子宮再び下降して、其の底部は八箇月末同高の位置に至り、妊婦は呼吸輕易となれるを覺ゆ。而して臍窩は突出するに至り、兒頭は全く骨盤内に固定せられて移動せず。且つ子宮腔部は消失し、薄き縁となりて子宮口を圍み、陰部は著しく弛緩して分泌を増し、膀胱直腸は壓迫せらるゝにより、兩便共に頻數の感を生ず。今西洋婦人の計測數を記すれば左の如し。

- 一 腹圍……………九六仙迷乃至一〇〇仙迷。
- 二 胎弓……………三五仙迷乃至三七仙迷。

鑑別點

經妊婦と初達妊婦との差

三 胎軸……………二五仙迷。

以上述べたる所により、子宮底の位置を検して、殆んど確實に妊娠の月數を知るを得べし。但し八箇月と十箇月とは、子宮底同一の高さにあるを以て、之を區別せざるべからず。其の鑑別點左の如し。

- 一 八箇月末……………十箇月末
- 一 胃部の腹壁頗る緊満す、……………弛緩す、
- 二 臍窩は平坦となる、……………突出す、
- 三 兒頭骨盤入口上に移動す、……………既に固定す、
- 四 子宮腔部は尙一指節の長さを……………楔狀をなし又は全く消失して觸る有す、

經妊婦に於ける各種の變狀 經妊婦に於ては、既に一旦妊娠を経過せるを以て、其の變化は初妊婦の如く正しからず種々の差あり。

一 腹壁 は、既に弛緩せるが故に、子宮底は正しく上昇することなく、主として前方に挺出し、其の甚だしきものは、腹壁囊狀を成して下垂

第三編 正規妊娠及び其の取扱法 第十五章 妊娠各月の徴候

一三九

するに至る。之を懸垂腹と云ふ。

二 兒頭

は、分娩に至るまで全く骨盤内に固定せずして移動し易し。

三 子宮腔部

は、妊娠末期に至ると雖、全く消失することなし。

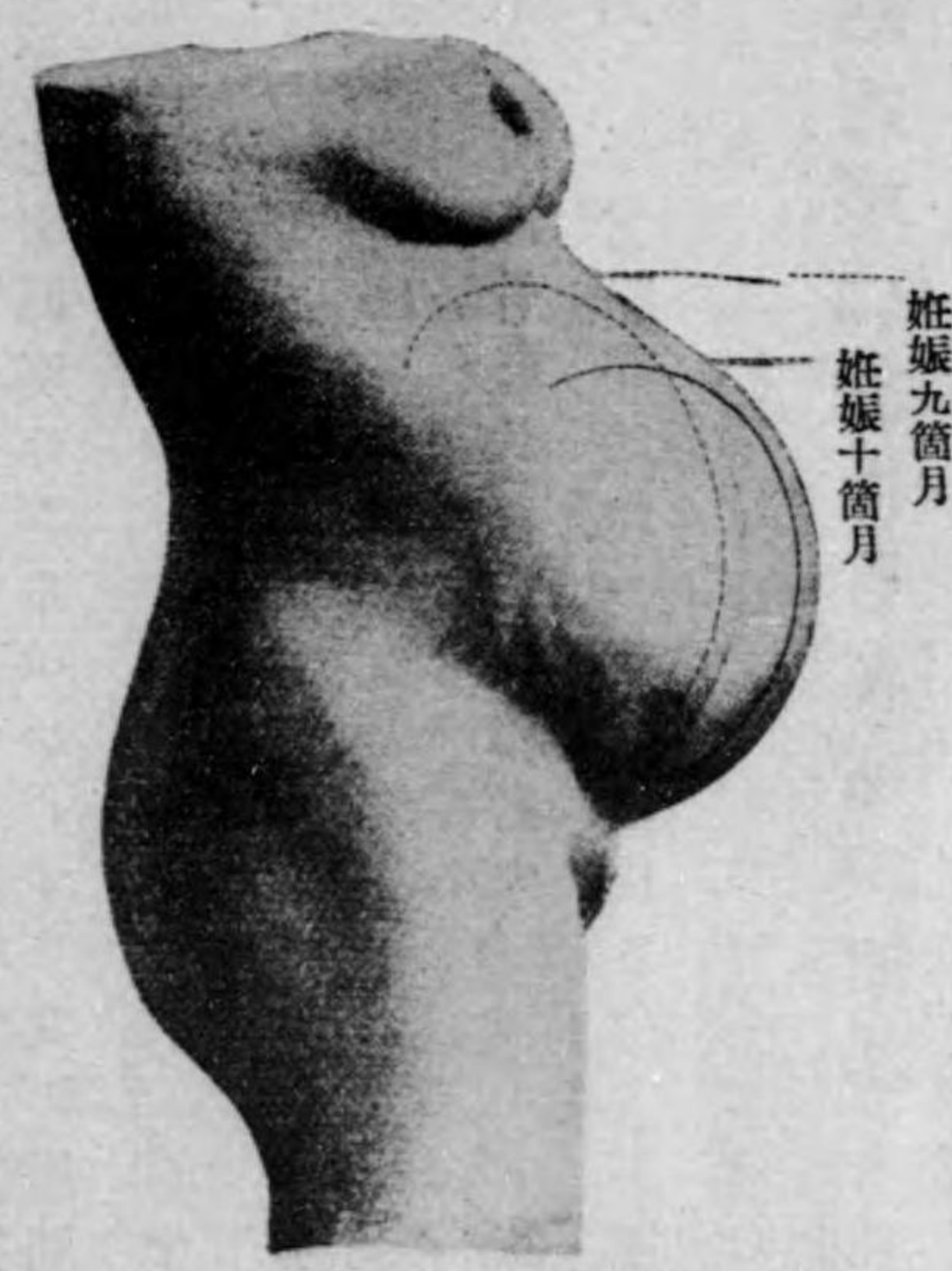
四 子宮口

妊娠九箇月に至れば、内外口共に哆開して頸管内に一指を挿入し得可し。

五 胎動

經妊歸の胎動を感ずるは、初妊婦よりも一週間早きを常とす。

第四十八圖



其の他初産婦にありても、羊水多量なるか、胎兒大なるか、雙胎なる時は、子宮底は過度に上昇し、正規に従ふものにあらず、又骨盤の狭窄ある

ときは兒頭骨盤内に入し能はざるが故に、十箇月に至るも、子宮底下降せず、時として懸垂腹を生ずる事あり。

第十六章 分娩期日算定法

妊娠の持續

は、受胎後平均二百八十日なるが故に、分娩期日は、即ち終末月經の第一日より起算して、二百八十日に相當する日なりと雖、毎常之を計算するは頗る煩しきを以て簡單なる方法によりこれを算出すべし。

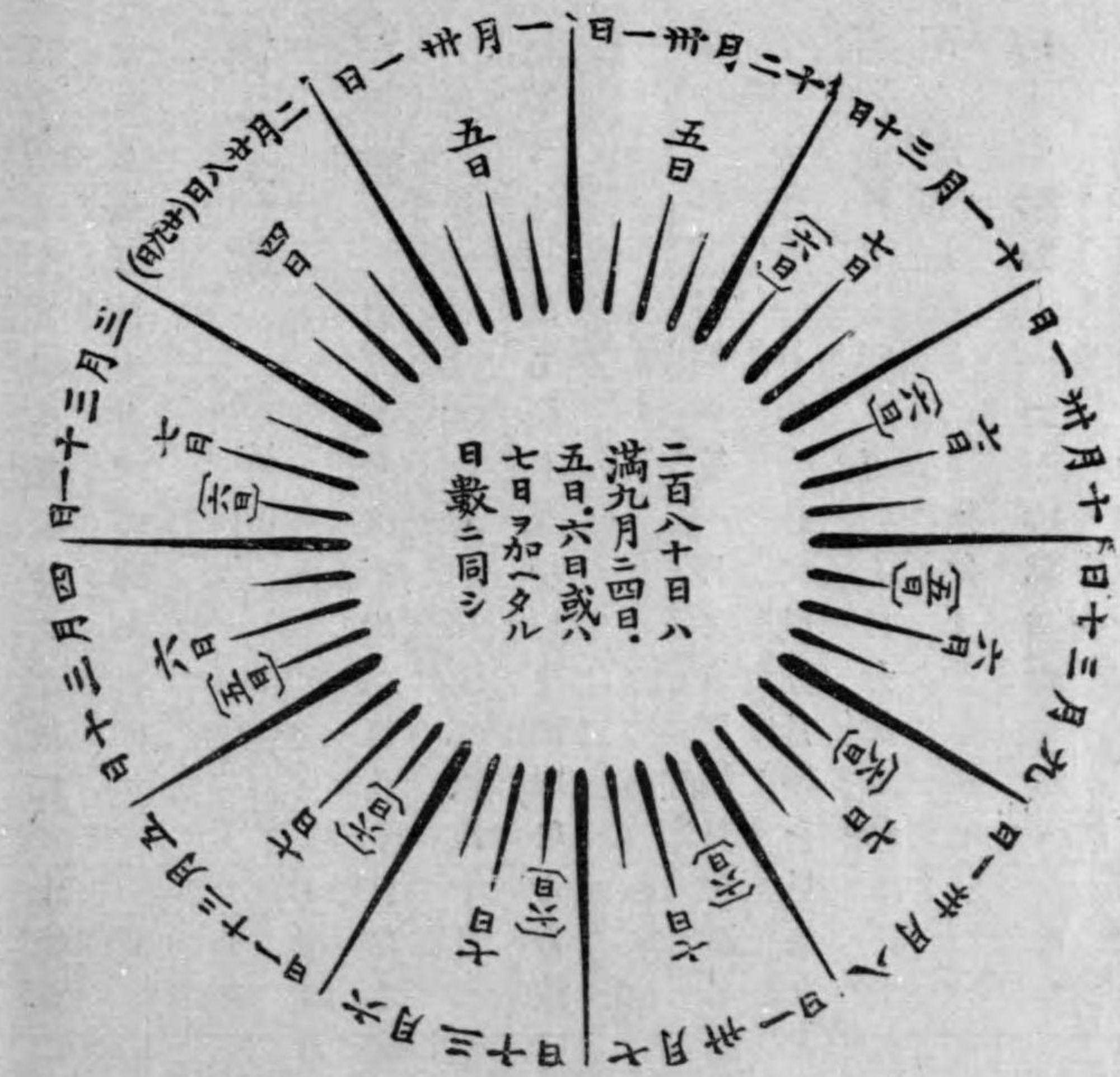
第一法

終末月經の第一日より三箇月を減じ、之に七日を加ふるの法にして、例へば今一月の十日に最終月經を見たりとすれば、之より三箇月を減じ、十月十日を得、更に七日を加ふれば、十月十七日となる。即ち此の日に於て分娩するものと概知すべし。

第二法

終末月經に九箇月を加へ、更に七日を加ふるの法にして、

第四十九圖 妊娠曆



一四二
 例へば一月の十日に最終月經を見しものは、之に九箇月を加へ得たる處の十日に七日を加ふれば、前の計算法と同一の分娩期日を得べし。
 如左田譜十〇
 曆月十七日
 分産器口
 尙更に精密なる算定をなさん

とすれば、第四十九圖に示すが如き、分娩日測算曆により之を算出すべし。其の法は、即ち圖中矢の方向に向て、終末月經の月より三箇月を算へ、各月の下に記せる數字を、最終月經の第一日に加ふべきものとす。括弧内に記せるものは、閏年に用ふるものなり、今十二月一日を終末月經の第一日とすれば、右方に三箇月を算へて九月を得、其の一日に六日を加へ九月七日となる、閏年において九月六日なり、即ち此の日は終末月經の第一日より二百八十日に相當するものにして分娩すべき期日なり。

第三法 胎動初發の時期より算するものにして、通常胎動は二十週より發起す、故に妊婦の始めて之を自覺せし日に、二十週を加ふる時は、分娩期日を得べし。然れども胎動を感ずるは頗る不確實なるを以て、此の法は實際に應用し難し。

第四法 受胎したる交接の日より計算するものにして、例之ば、只一回の交接により妊娠せしとすれば、その日に九箇月を加ふるか、或は三箇月を減する時は、豫定の分娩日を得れども、こは多數の場合に適合しがた

第十七章 妊娠の診断法

妊婦を検査するには、必ず先づ次の順序に由りて問診すべし。

- 一 姓名年齢及び職業。
- 二 既往疾病の有無。
- 三 月經初發の年齢及び其の順不順並に日數。
- 四 既往妊娠の有無持續及び其の経過、殊に産科手術を要したるや否や。
- 五 終末月經の期日。
- 六 胎動の有無及び其の初發の時期。
- 七 妊娠末期に於ては、子宮の下降せる感ありや否、並に其の下降を初めたる期日。
- 八 分娩の経過。
- 九 産褥の経過。

外検査法

此の如く問診したる後、産科的検査法を施すべきものにして之に三種あり。外検査法、内検査法、雙合検査法是なり。

第一項 外検査法(外診法)

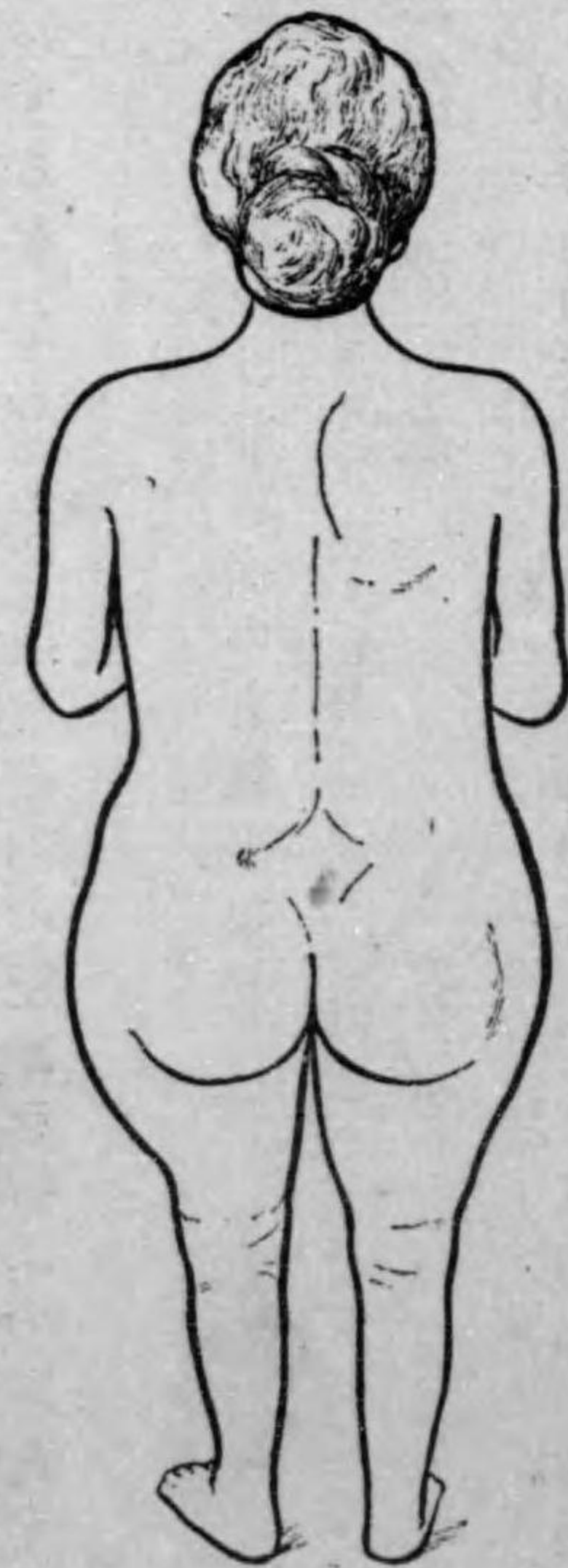
外検査法とは、身體外部を診査するものにして、之に視診、測診、觸診、聽診の四種あり。

第一節 視診

視診とは、妊婦一般の状況を視察するものにして、之を區別すれば、次の如し、

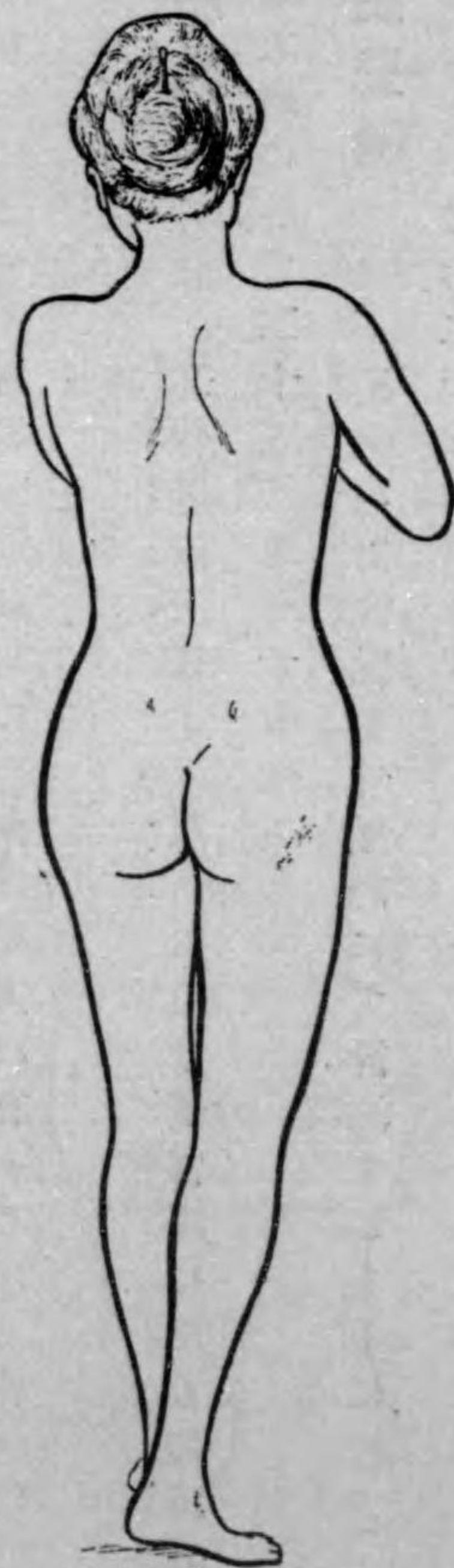
- 一 一般の検査 既に問診を終らば、次で妊婦の體格、營養、歩行、姿勢、上肢、下肢及び脊椎の異常等を檢すべし。
- 二 乳房の検査 乳房の形状、乳頭の大小、形状、乳腺の状態、乳暈の着色、乳嘴其の他の疾病の有無等を視察す。

圖三十五第



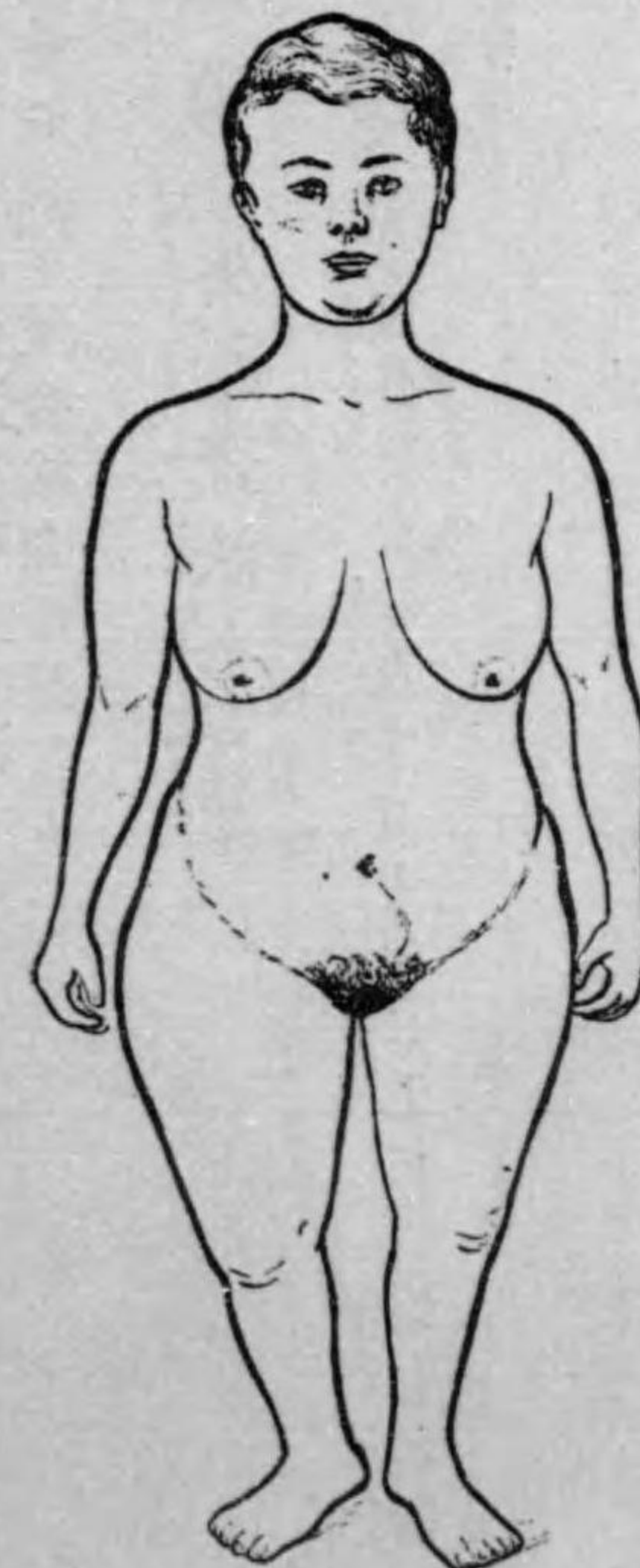
(面背)勢姿の人婦性病儂恂

圖二十五第



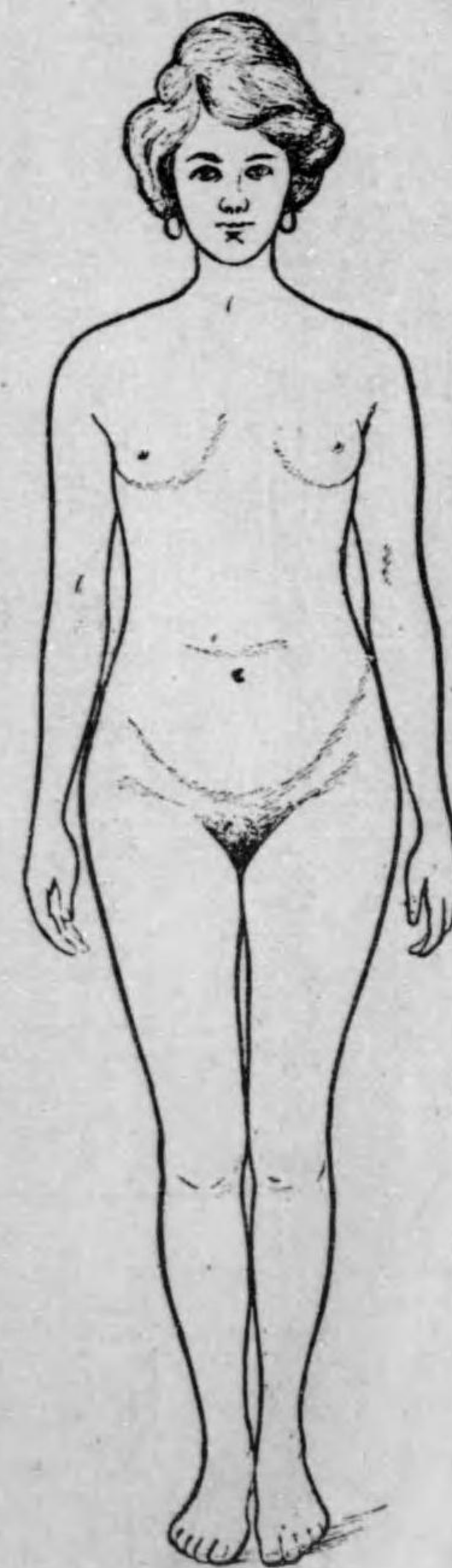
(面背)勢姿の人婦常通

圖一十五第



(面前)勢姿の人婦性病儂恂

圖十五第



(面前)勢姿の人婦常通

腹部の検査 腹部の大小、形状、臍窩の状態、妊娠線の有無、並に其の新舊等を視診するものにして、通常腹部の觸診を行ふの際施すべきものなり。

下肢の検査 浮腫及び靜脈瘤の有無等なり。

第二節 測診

測診 とは、測帶を以て妊婦及び産婦の腹圍、又は胎兒の身長を計測するものにして、妊娠末期に於て、西洋婦人に在りては、約一〇〇仙迷ありども、日本人は約一〇〇仙迷小なり。

胎兒弓 は、恥骨縫際上縁より腹壁に沿ひ子宮底に至るの距離にして、妊娠末期に於て三十五乃至三十七仙迷あり。

胎兒軸 は、胎兒弓計測點を骨盤計にて計測するものにして、妊娠末期にありては約二十五仙迷あり。

妊娠子宮は其の月數の増加と共に、腹腔内に上昇するを以て、其の胎兒

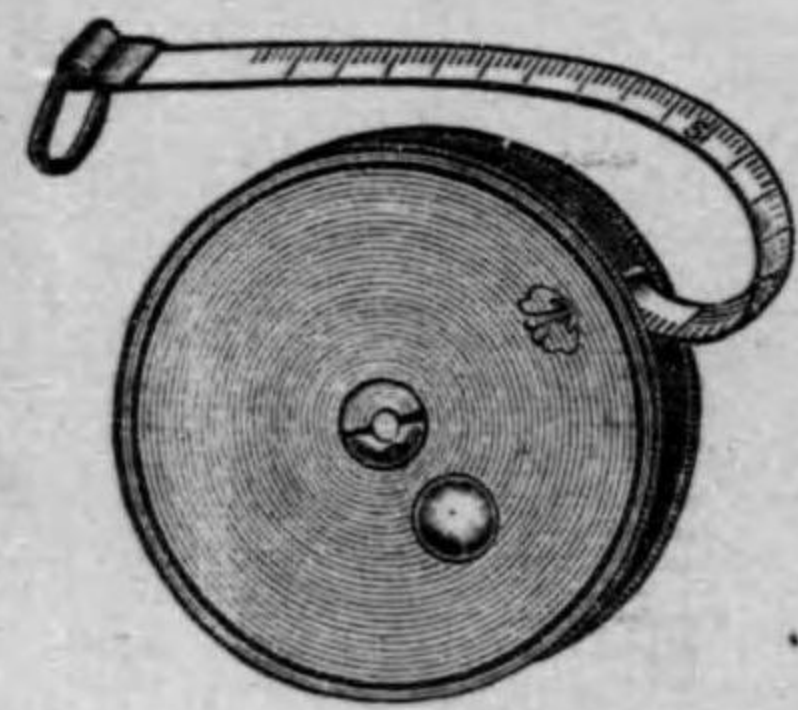
弓、即ち恥骨縫際より子宮底に至る距離を腹壁に沿ふて計る時は、妊娠何箇月に相當するかを知ることを得べし。

本院に於て多數患者に計測せし平均數は左の如し。

四箇月末	一一、八仙迷
五箇月末	一五、三仙迷
六箇月末	一八、七仙迷
七箇月末	二二、九仙迷
八箇月末	二六、二仙迷
九箇月末	二七、二仙迷
十箇月末	三一、六仙迷

以上の計測表は、妊娠月數を確診すること能はず、如何となれば各人により腹壁の弛緩、膀胱及び腸管の虛實等に異同あるのみならず、計測者の巧拙も、又著しき差を生ずればなり。然れども診断不明の場合に於ては、この法によりて妊娠月數を知るの補助となることあり。尙簡單なる法は、手掌横徑を以て計るにあり。即ち吾人の手掌横徑は約一仙迷なるを以て、子宮底の恥骨縫際を距るの高さを計るときは、其の月數を推知することを得べし。

圖四十五第



- 一手掌横徑のもの 妊娠五箇月末
- 二手掌横徑のもの 妊娠六箇月末
- 三手掌横徑のもの 妊娠八箇月末

第三節 觸診

觸診 とは、手指を以て觸察するものにして、産科的診斷上最も必要なる診法なり。之を分ちて腹部及び骨盤の検査とす。

腹部の検査

妊婦を仰臥せしめ、兩脚を屈し、上半身を稍々高くし、衣服、腹帶等は全く之を緩解せしむ。但し可成身體を暴露せしめざる様注意すべし。先づ視診によりて該條下に記せる諸種の状態を検し、次に豫め温めたる兩手を用ひて検査すべし。此の際検査者は妊婦の一侧に坐し、其の顔面と對向すべし。而して此の法に四式あり。

第一式

子宮底の位置を検す。

検査者は一手又は兩手指を伸べ指端を接近せしめ、八字形に腹壁の中央部に置き、次に兩手を此の位置に保ちつ

つ、同時に軽く上方に移して子宮底に貼し、其の部を上方及び深部に壓するを可とす。此の如くする時は、

- 一 子宮底の部位を明かにし。
- 二 胎兒の大小、及び位置の縦横を觸知す。
- 三 妊娠の時期を診定し得べし。
- 四 子宮底部に存するもの、頭部なるか、臀部なるかを知り得べし。

第二式

先進胎兒の大部分を診す。子宮底部に貼したる兩手を左右に開き、以て子宮の側壁に貼す。此の

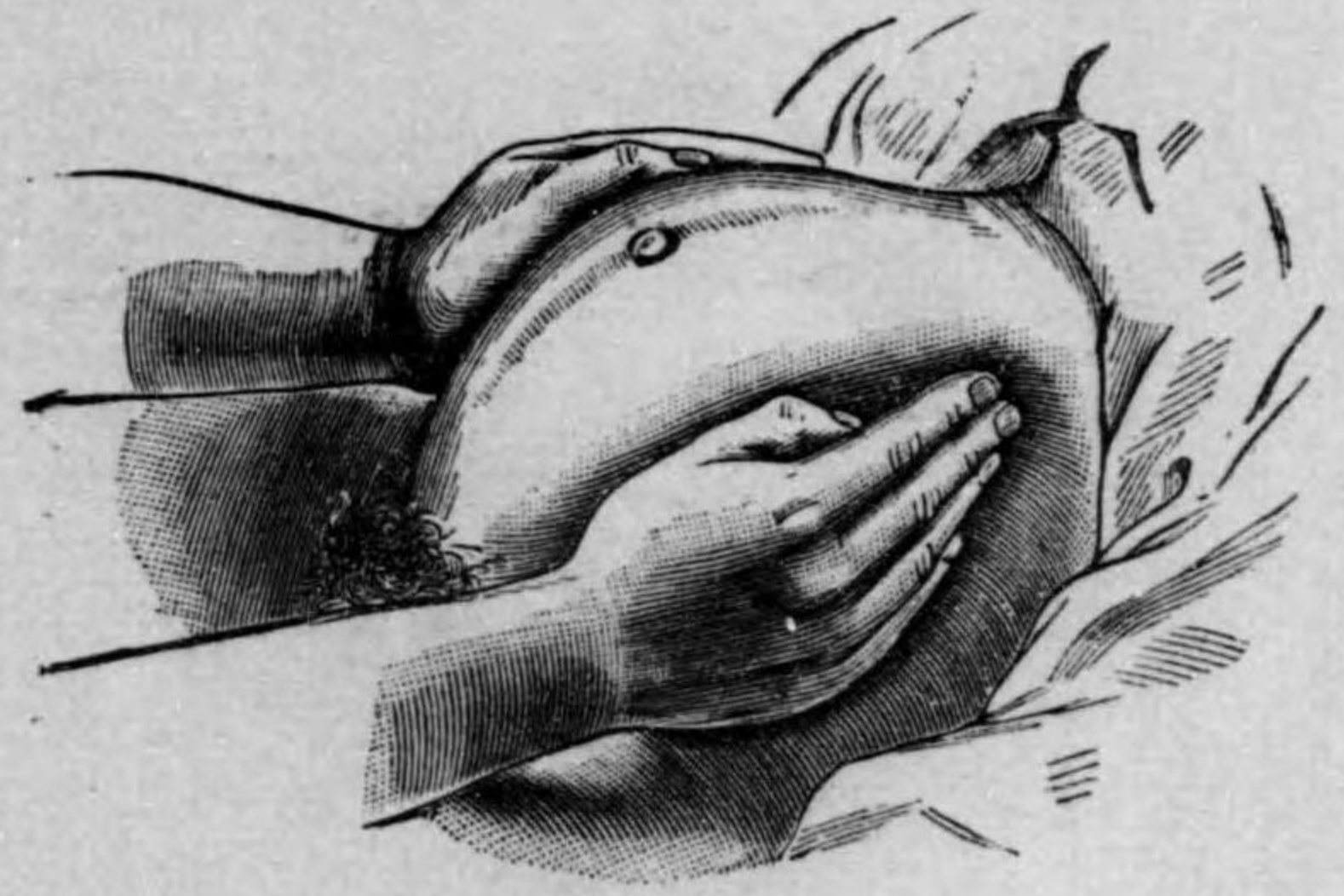
第五十五圖



觸診法第一式

手指は常に並列せしめて之を側腹部に移し、以て子宮の側壁に貼す。此の

圖六十五第



式二第法診觸

一 先進兒部、頭部なるや或は臀部なるや。

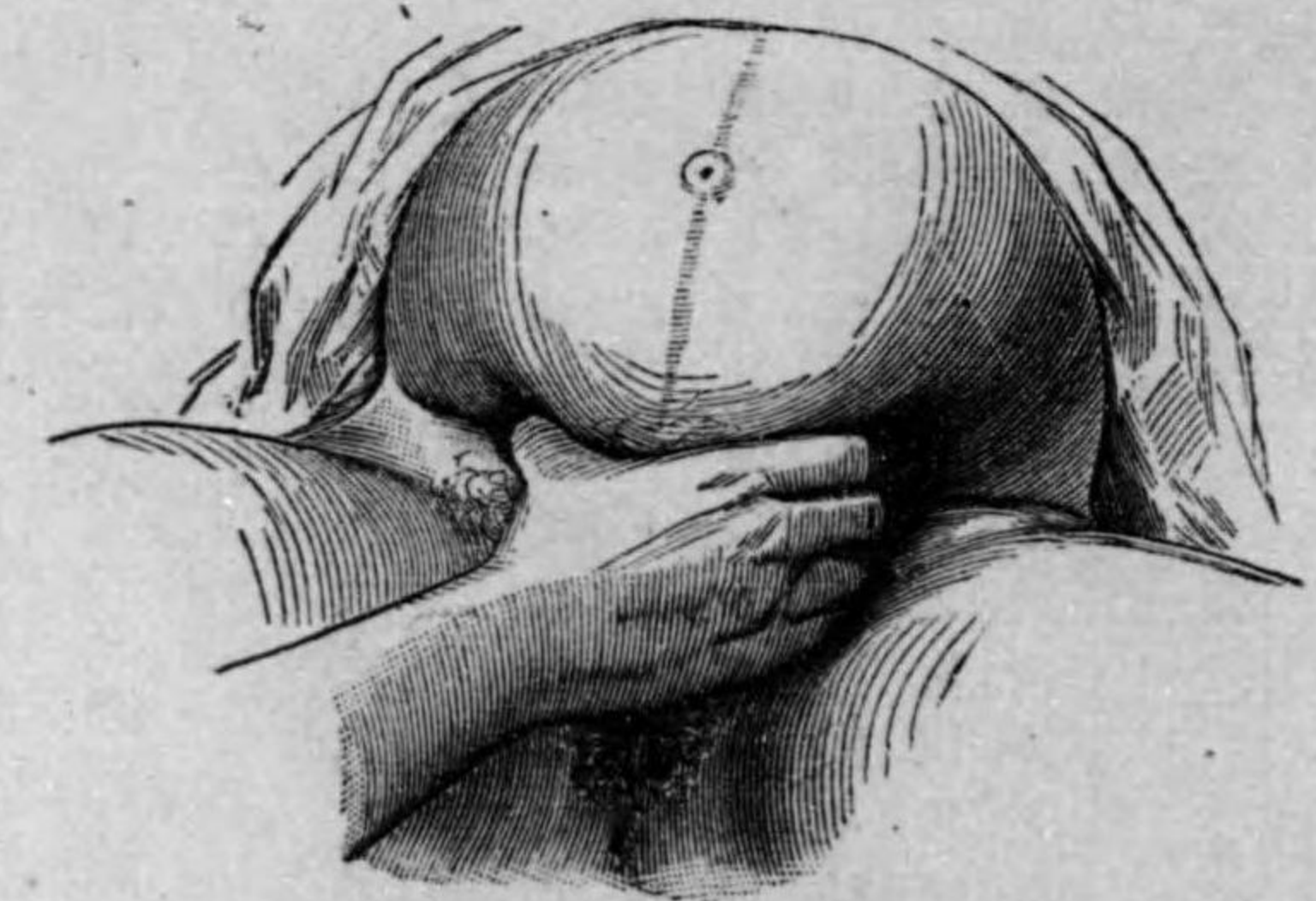
際多くは一手に小部分即ち四肢を觸れ、他手は兒背に應ずべし。然れども若し胎兒横位を取る時は、一手に頭部を、他手に臀部を觸知するなり。此の法によりては、

- 一 子宮壁の緊張度を知り。
- 二 子宮收縮力の程度を認識す。
- 三 胎動を觸知し。
- 四 胎兒の胎向及び心音聴取の部位を判す。

第三式 胎兒の先進部を診す。

左若くは右の一手を以て、其の拇指及び中指の間に兒の先進部を把握すべし。此の法に於ては、左の條項を知るべし。

圖七十五第



式三第法診觸

圖八十五第



式四第法診觸

二 先進兒部の骨盤内に固定するや否や。

第四式 胎兒先進部を審査す。

産婦を仰臥に就かしめ、検査は其の背側に坐し、両手尖を兩鼠蹊部の上に加へ、徐々に骨盤の側壁より深く其の中に進ましむ。此の法は先進児部の深く骨盤内に入らせる際に施すべきものにして、通常は第一式乃至第三式を以て足れりとす。

以上に記述せる法式に依り、胎児の子宮内に於ける状況を知らんと欲せば「パントム」(模型演習器)により、日常之を演習すること、恰も生活せる婦人を診査するが如くに細心注意して精密に之を演習せんことを要す。

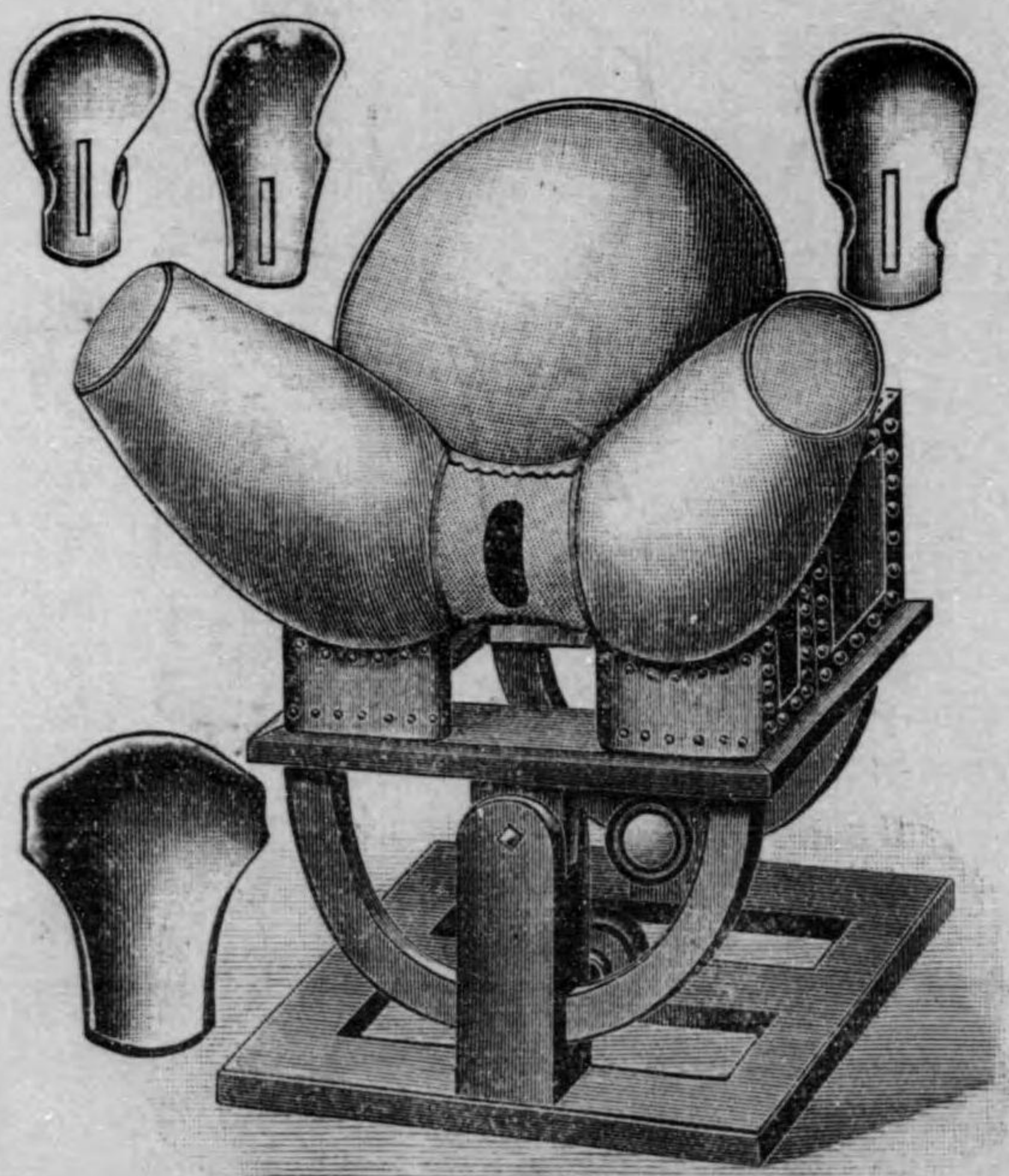
何となれば、「パントム」は一種の演習器なるを以て、多くの學生は漫に之を器械的に使用し不注意のもとに演習するを以て、一朝生體に就き演習するや、屢々粗略に亘り爲に誤りを來すの虞あればなり。就中、胎兒先進部の内診に際しては、特に以上の趣旨に基づき之を演習する時は、生體即ち妊娠産婦を検査するに當り精確の診断を施し得て分娩機轉を明確に知るの便あり。但し之により認識すべき胎兒の部分左の如し。

一胎兒の頭部 は、圓形にして頗る固く、一手或は兩手間に把握し振動せしむる時は、兩側の手指に衝突するを感知すべし。之を浮遊運動と云ふ。此の運動は頭の特徴にして、臀部に於ても存する事なきにあらずと雖、頭部の如く著しからず。

二胎兒の臀部 は其の形狀不正にして、頗る柔軟なり。胎兒の頭部及び臀部を

浮遊運動

圖九十五第



稱して大部分と云ふ。

ムートンバ

査に區別す。腹部の検査終らば、骨盤外部の状態を検すべし。

三胎兒の臀部
は手掌を貼して
之を試みるに、平
圓にして長き面
を觸知すべし。
四胎兒の四肢
は、即ち小部分と
稱し、大小不正な
る突起状をなし
て觸知し、殊に胎
兒の運動の際著
明なり。

生體に於ける骨盤計測法

生體に於ける骨盤の計測法を左の如く區別す。

骨盤の計測

一 器械を以て計測する法

骨盤の外徑を計測するは、醫士の施すべきものなれども、助産婦も、時として必要の場合あり。是を計るに

骨盤計

第十六圖



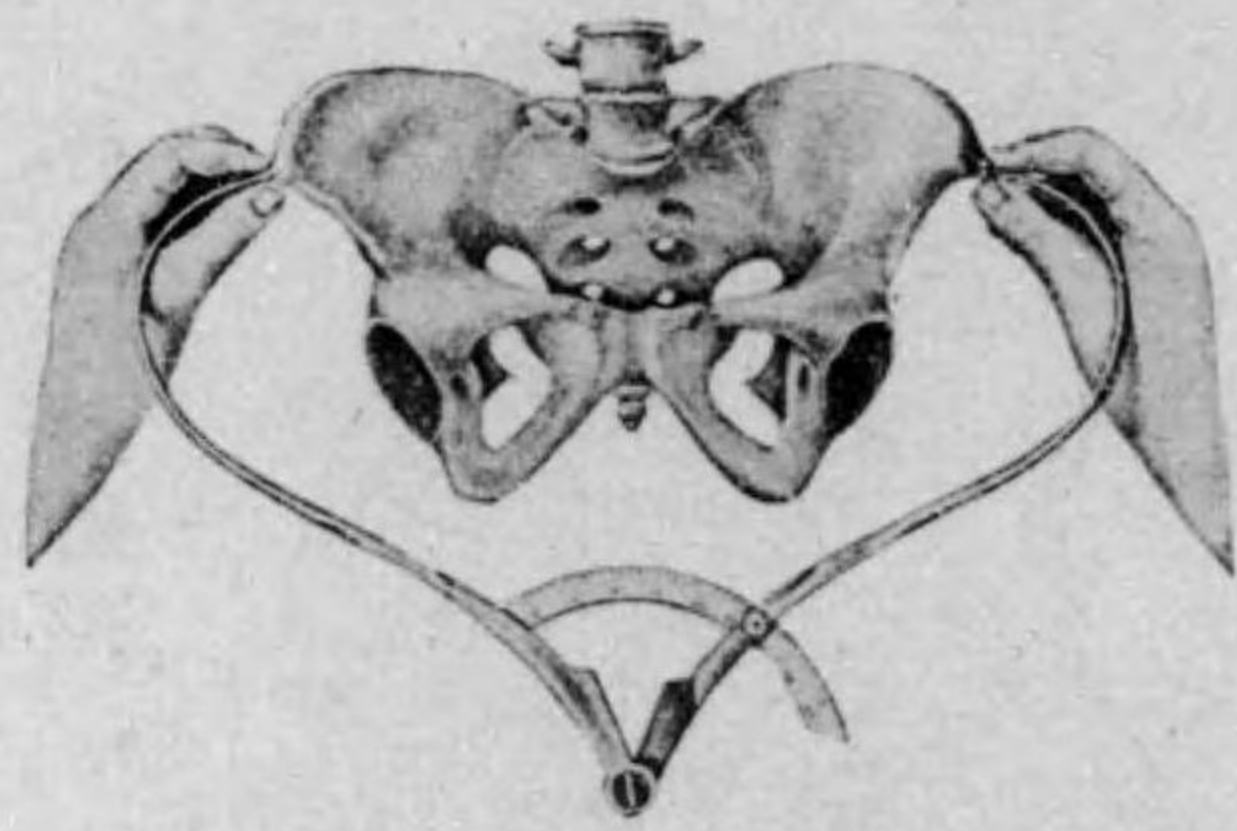
骨盤計測器

は、マルチンの骨盤計測器(第六十圖)を用ふべし。而して之れを計測するには、檢者は先づその兩端を各々拇指示指の尖端に挟み、脚は拇示兩指間に支持し、中指の尖端を以て計測点を求め、この部に骨盤計の尖端を貼し強く其の部を壓迫し、然る後柄部にある度目を見るときは、その距離を測知し得べし。左に擧ぐるは予が日本婦人に就いて、計測したるものなり。

一 腸骨前上棘間の距離

二三〇仙迷

第十六圖

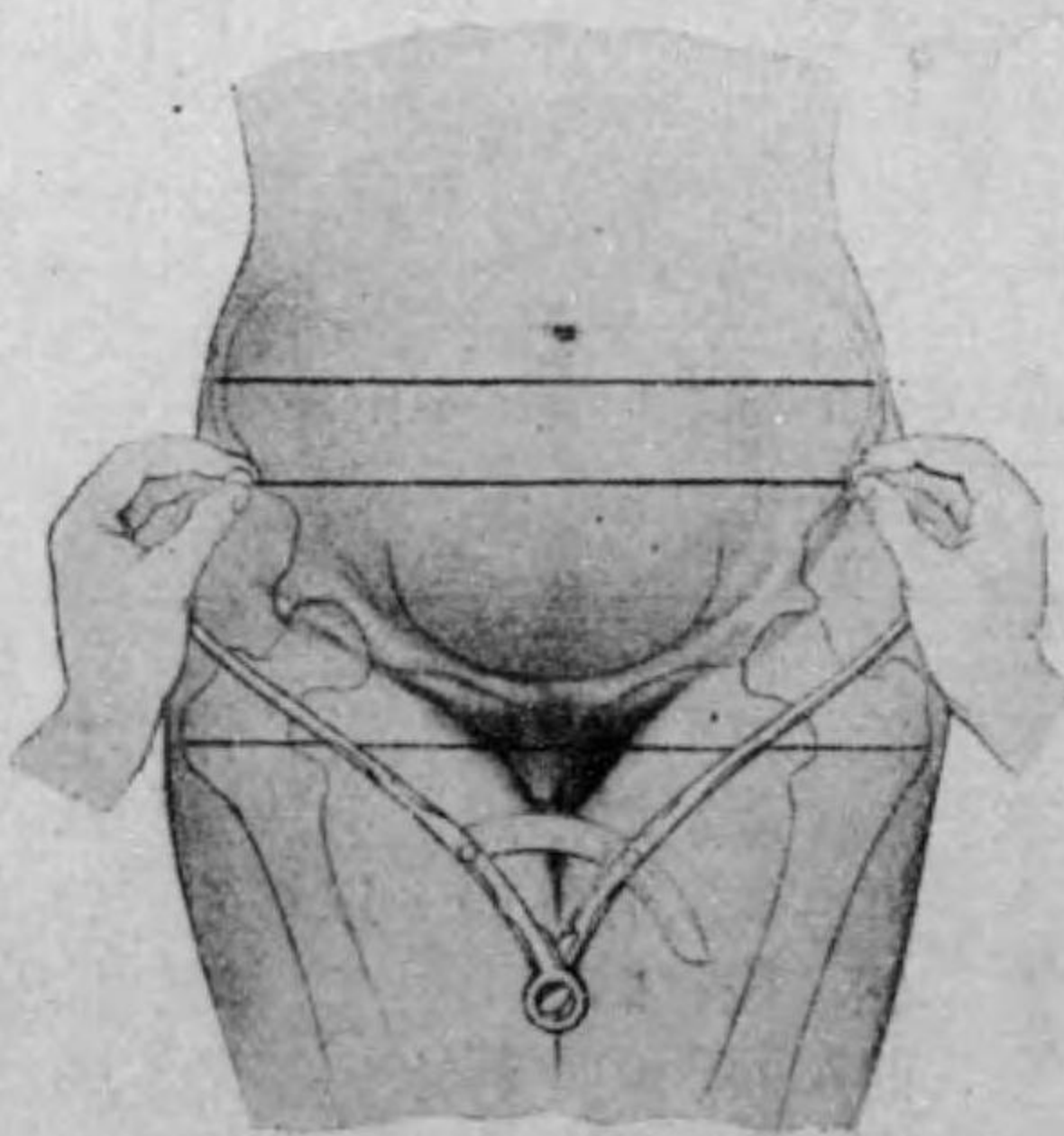


腸骨前上棘間の計測

- 二 腸骨櫛間の距離
- 三 大轉子間の距離

二六〇仙迷
二八〇仙迷

第十六圖



腸骨櫛前上棘大轉子間の計測

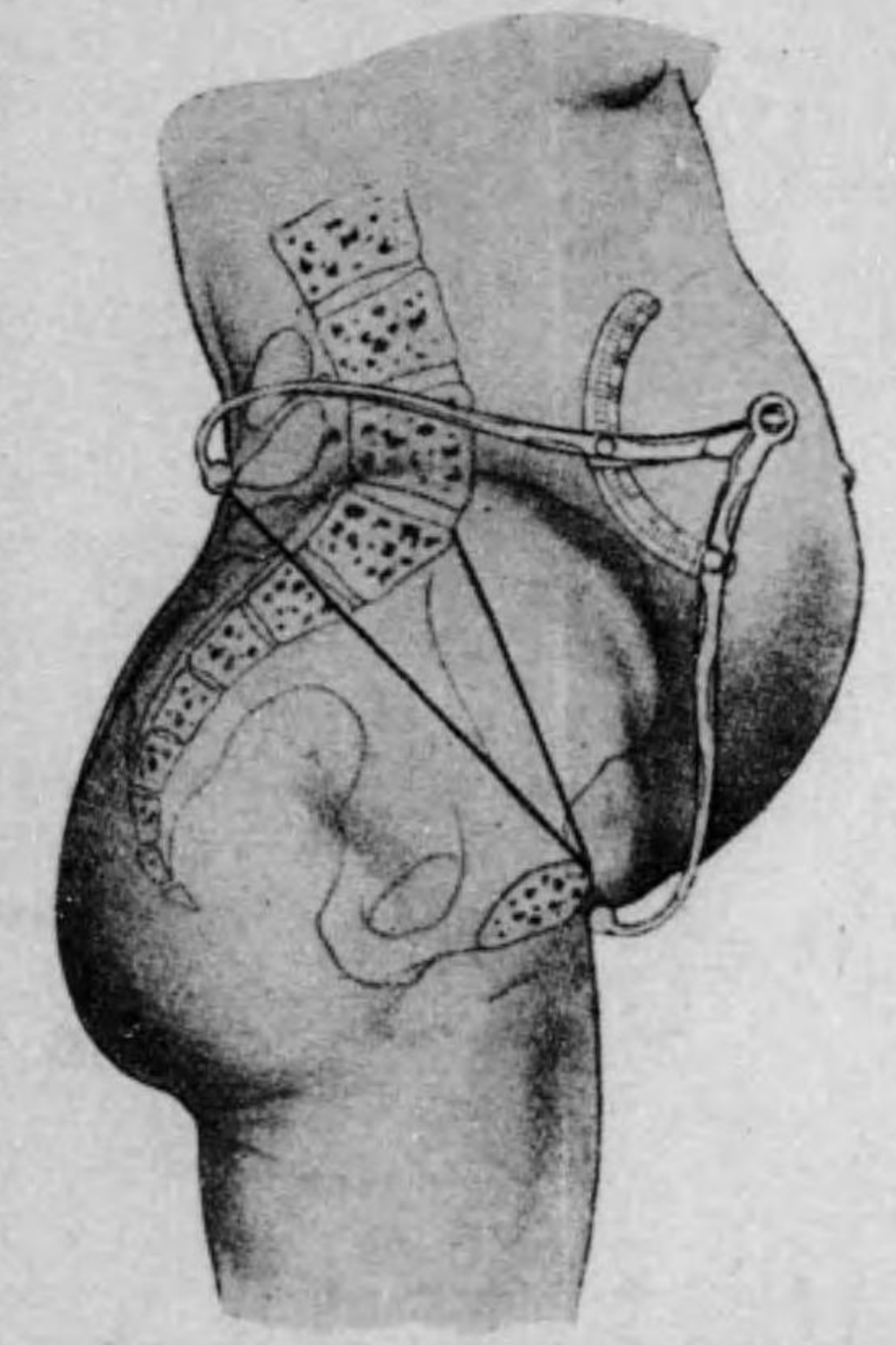
- 四 外斜徑の距離
- 五 外結合線(又ポードロツク徑)

二〇〇仙迷
一八〇仙迷

外結合線は、第五腰椎の棘状突起の下端と、恥骨縫際上縁の距離にして、前者を求むるには、腰椎棘状突起を上方より壓して下方に降れば、第五腰椎及び第一薦骨椎の兩棘状突起間に、凹窩を觸知するによりて知るべし。

六 骨盤の周囲徑

七八〇 仙迷



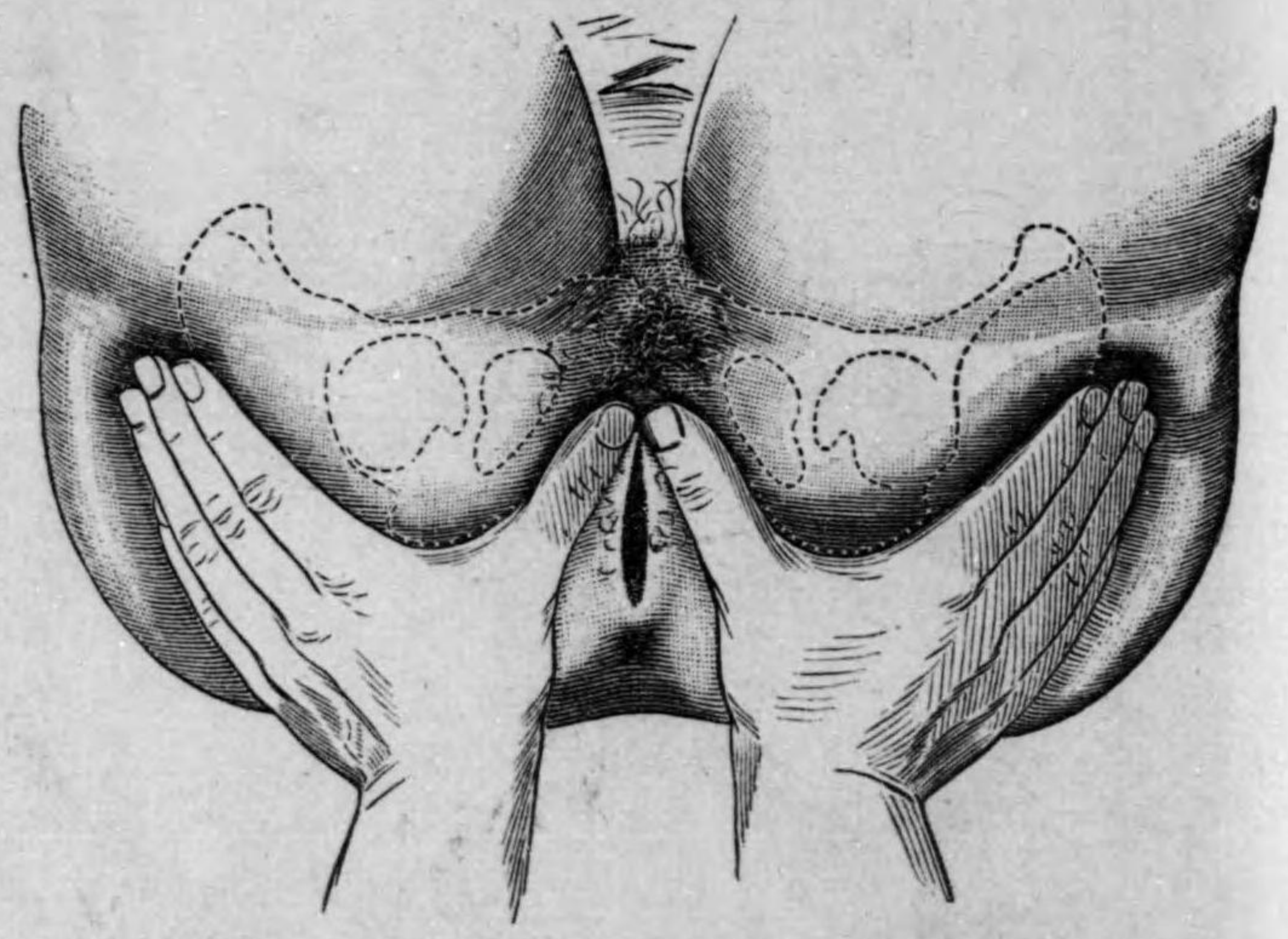
係關のと線合結眞及び測計の線合結外

骨盤の周囲徑は、仙迷計を以て、前方は恥骨縫際の上縁より、側方は腸骨櫛の下を圍り、後方薦骨後面の中央を経て、再び前方の計測點に來り、その周囲徑を計るものなり。

圖三十六第

二 手指を以て検査する法
 便利あり。先づ一手を骨盤の後側に、他手を前側に貼し、薦骨及び恥骨縫

圖四十六第

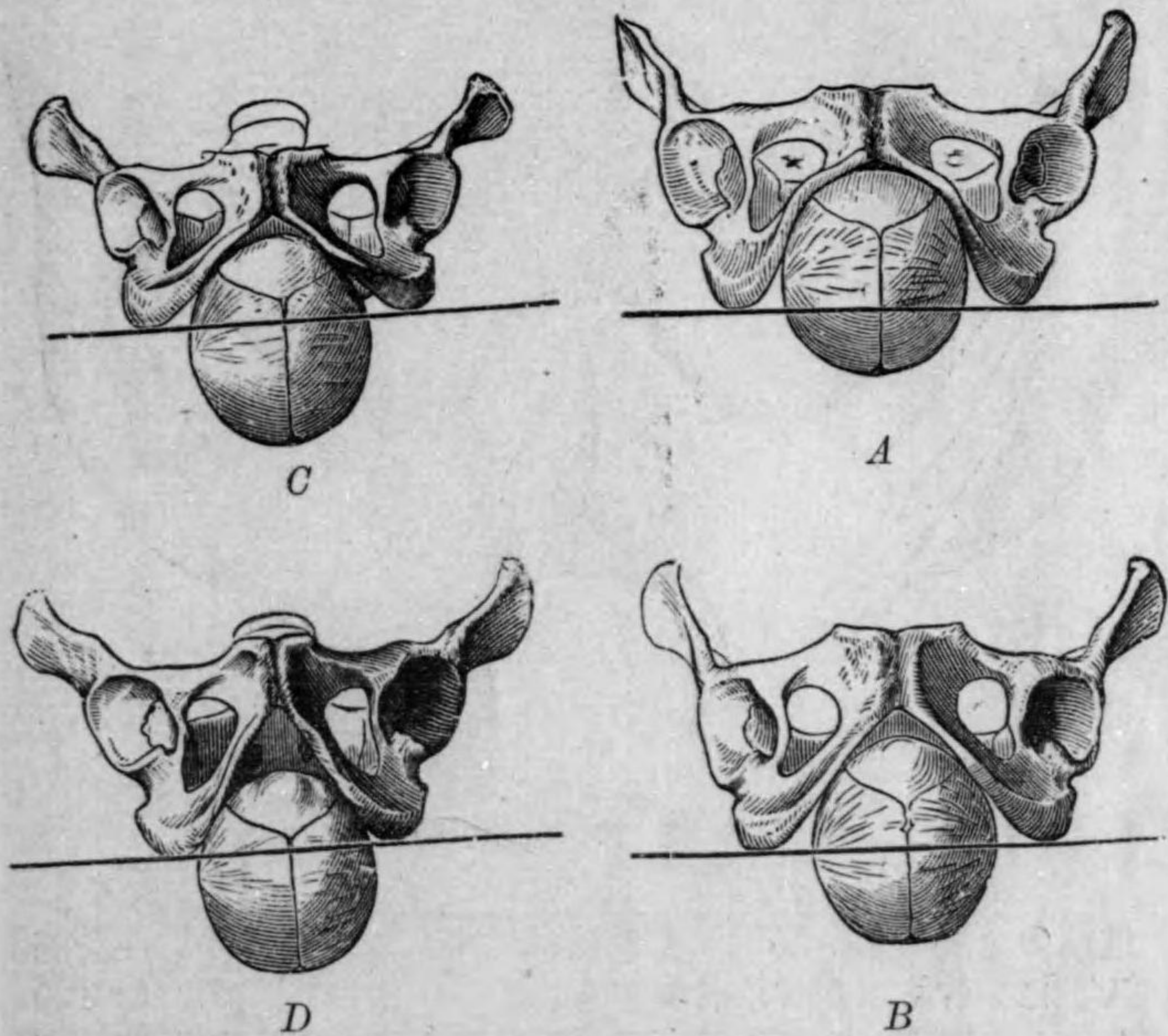


法查檢弓骨恥

際の突出せる度、並に前後徑の廣狹を概診し、次に一手の拇指と、小指とを伸展し、兩腸骨前上棘に達し得ることなきやを検するを要す。若し容易く達するとき、其の骨盤狭きを知るべし。

骨盤出口の重要部分、恥骨下枝及び座骨下枝より形成せらるる恥骨弓、及び恥骨角の面積に關係するものにして、分娩中この部に進入し來る兒頭は、その穹

第六十五圖 恥骨弓に於ける後頭の關係



A 好適の恥骨弓
B 輕度扁平骨盤

C 尙健性病性骨盤に於ける低且廣き恥骨弓
D 未熟型骨盤に於ける狭且高き恥骨弓

適に適合すると否とは、頗る分娩に難易を生ずべし。故に(第六十四圖)に示す如く、仰臥位に於ける婦人の恥骨弓下に手指を貼し、この兩拇指の尖端を接着せしめ其の間に形成すべき角度を模擬する時は、大抵その廣狹高

低及び形狀等の變化を豫測し得らるるにより、この骨盤は兒頭の通過に對し、好適なるべきや、或は兎に角分娩し得るや、或は到底不可能なるや等、判定し得べきものとす。(第六十五圖)に示す其A圖は通常の骨盤にして、兒頭はよく弓下に適合すれども、其B及びC圖は尙健性病性扁平骨盤にして、恥骨弓の廣く、且つ低く、又其D圖の如き弓の角度強きものは、齊しく分娩に際し著しく後下方に突出せる兒頭によりて壓迫を受くる爲に、會陰破裂の危険甚だ大なることを知るべし。

レントゲン放射線による骨盤の検査は近來其の技術大いに進歩し、骨盤の形狀變化を透寫するのみならず、其の内腔の大小及び其の係數をも透寫により推知するを得るに至れり。

第四節 聽診

腹部の聽診を行ふには、妊婦を仰臥せしめ、觸診によりて得たる部位に聽診器を貼すべし。若し此の器を有せざる時は、薄き布片を腹上に

圖六十六第



器診聽撰方緒

一 胎兒の心音

二 胎動音

三 臍帶雜音

四 子宮血管の雜音

五 腸内瓦斯の雜音

六 腹部大血管の雜音

以上の中前三者は胎兒より發し、後三者は母體より來るものなり。

胎兒の心音は、千八百十八年マヨールの始めて聴取したるものにして、

兒背の子宮壁に接したる部に於て最も明かに聴取し得べしと雖、若し胎勢の變化即ち頤部を胸壁より離し、却て後頭を背部に接せる時は、胎兒

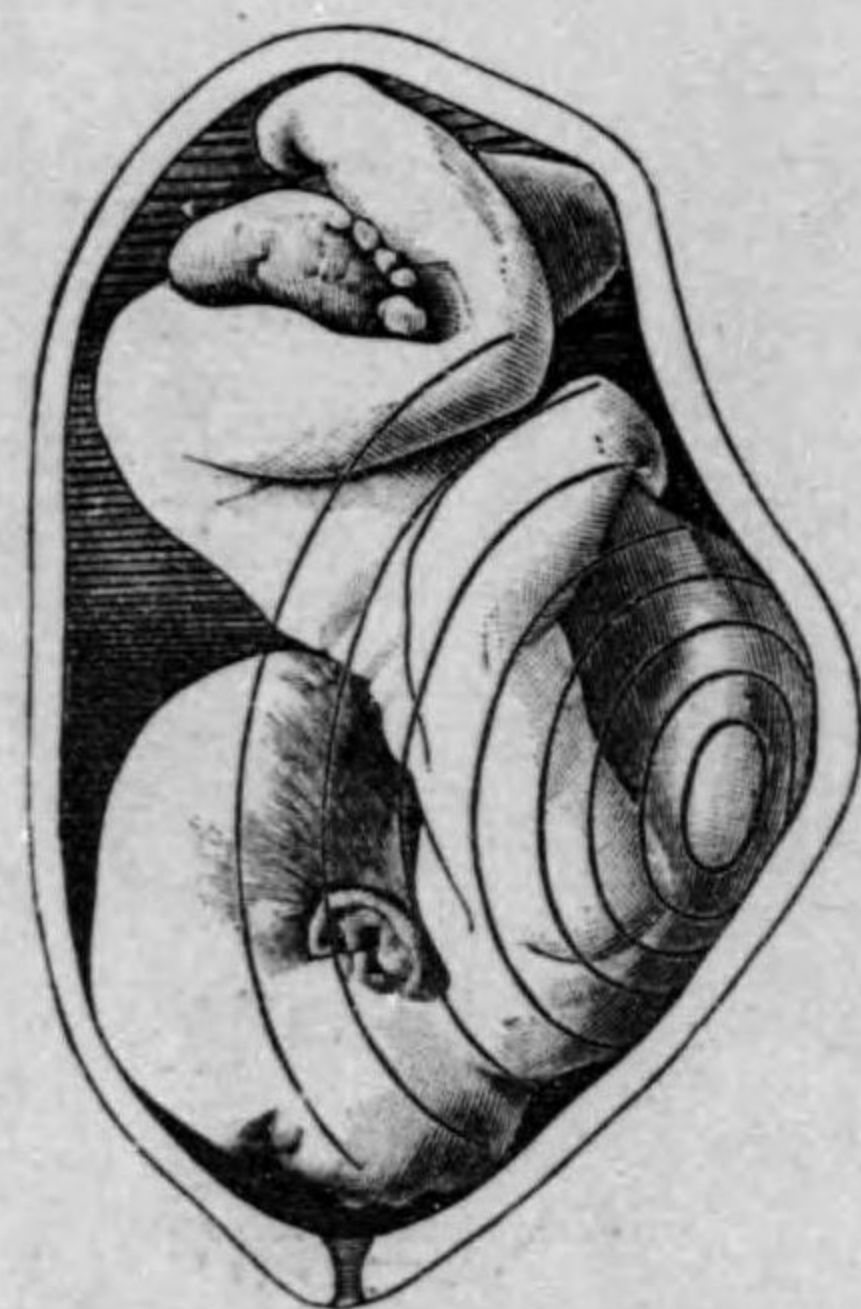
置き、直ちに檢者の耳を貼して聴診するを要す。而して聴取し得べき音に六種あり。

圖七十六第



位部の達傳音心るけ於に位屈

圖八十六第



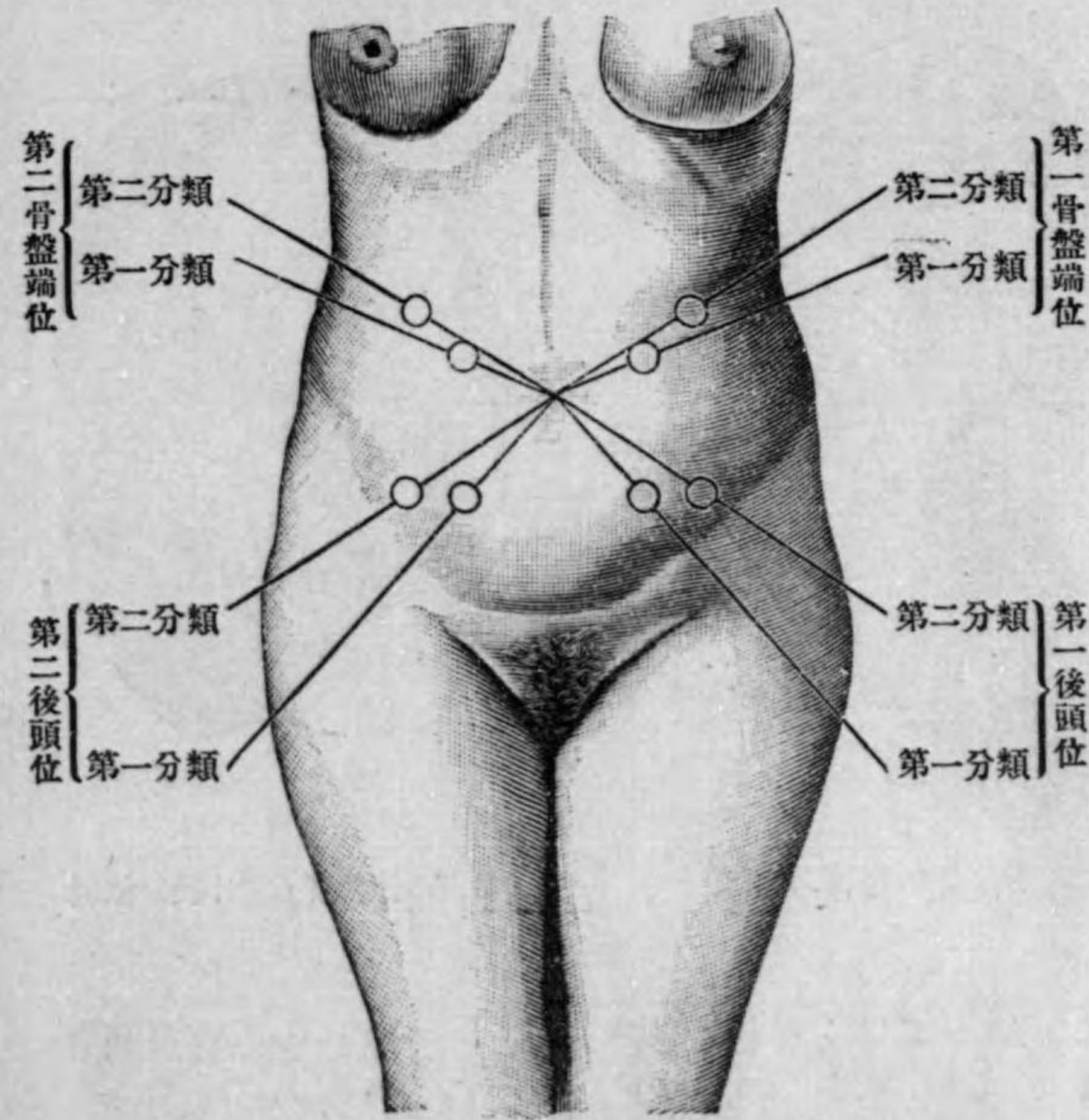
位部の達傳音心るけ於に位屈反

の胸面は背面よりも子宮壁に近きを以て、心音は小部分の存する方向に於て聴取し得るものなり。而して其の音は、他の諸音に比し、最も明瞭にして規則正しく、恰もチクタク／＼と云ふが如く響き、其の數平均百四十至にして、通常之より以下なる時は男兒とし、以上なる時は女兒となす。母體或は胎兒の運動するか、母體の體溫昇騰するか、又は胎兒當さに窒息せんとする時は、其の數を増加するも

のなり。

第三編 正規妊娠及び其の取扱法 第十七章 妊娠の診断法

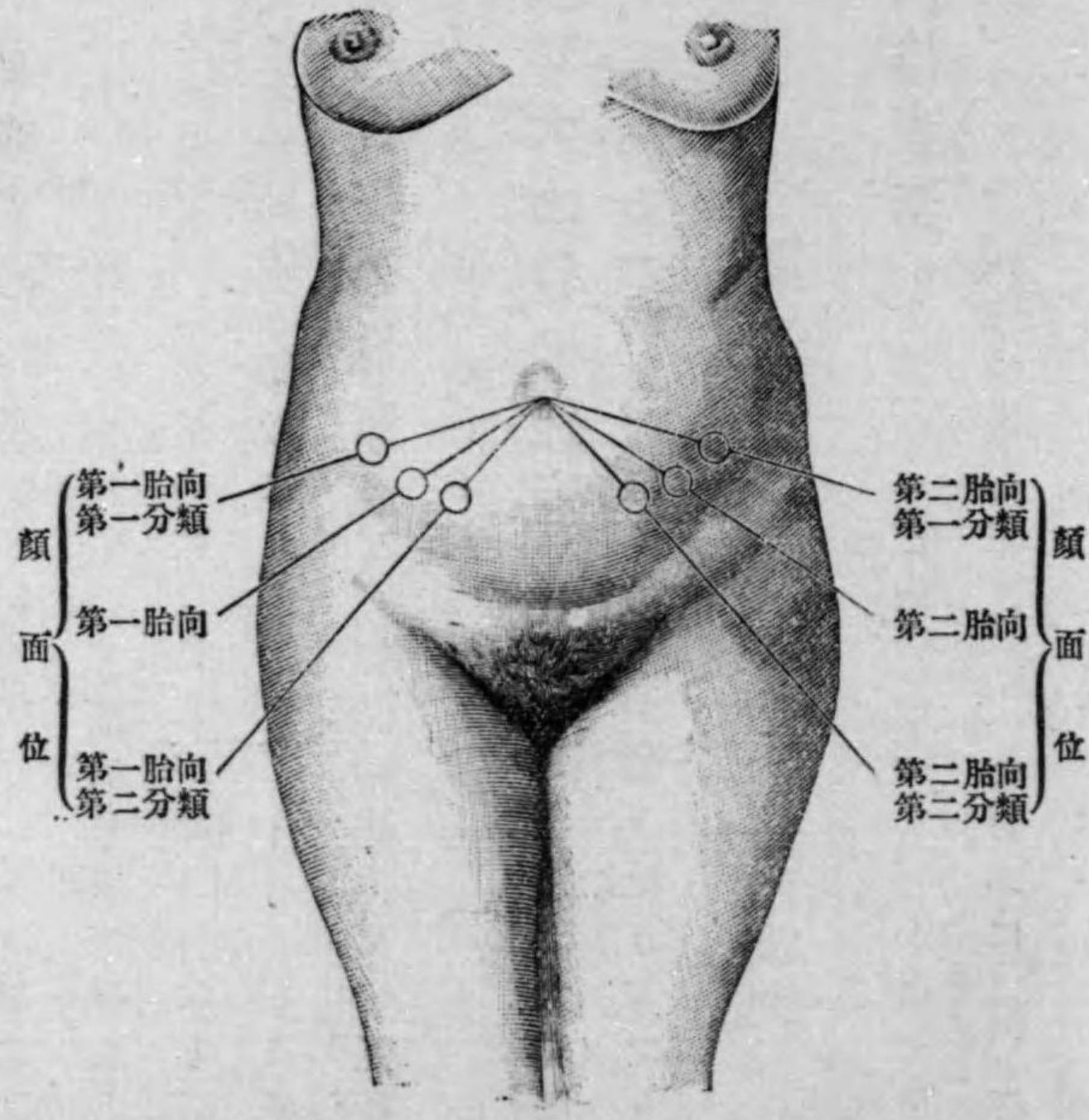
圖九十六第



胎動音は、胎児の運動する際に發し、恰も、指を以て軽く物を打つが如き甚だ低く短き音にして、こつくと物體の衝突するが如し。

稀には妊娠四箇月の終りに於て、心音に先ちて之を聴取し得るこ

圖十七第



顔面位及前頭位に於て胎兒心音を最も明瞭に聴取し得べき部位

とあり。

臍帯の雑音は、心音に一致し、恰も軽く吹くが如き雑音を發し、臍帯に壓迫若くは結節を生ずる場合に於ける血液が、其の狭められたる血管内を流通する時に發する音なれば、稀に能く之を聴

聴くことあるのみなり。

殊に臍帯の頸部に纏絡せる際に於て、能く之を聴

第三編 正規妊娠及び其の取扱法 第十七章 妊娠の診断法

子宮血管の雑音

取し得べし。其の數一分間に約百四十を算す。
子宮血管の雑音 は、妊娠により増大せる血管内に血液の流通する音にして、子宮の兩側、殊に下方に於て聴取し得べく、其の數は母體の脈搏と一致し、恰も風の吹き鳴るが如き音なり。其の數一分間に約七十を算し、母體脈搏と同數なり。

腸内瓦斯の雑音

腸内瓦斯の雑音 は、母體の腸内にて瓦斯の運動する爲に生じ、ごろ／＼と恰も雷鳴の如き腹鳴なり。

腹部大血管の雑音

腹部大血管の雑音 は、母體腹部大動脈中に血液の流通する音にして、脈搏と一致し、軽く敲くが如き低き音なり。

第二項 内検査法（内診法）

内検査法

内検査法 は、之を内診と稱し、手指を腔内に挿入して、骨盤及び胎兒の狀況を検査するを云ふ。之を行ふには、必ず嚴重なる殺菌法を施したる後に非ざれば、決して手を下すべからず。

第一節 殺菌法

殺菌法

殺菌法 とは、細菌を撲滅して、之を無菌たらしむるの法にして所謂消毒法之なり。若し之を忽諸に附する時は、遂に産婦、褥婦、若くは初生兒の生命をも損するに至るものなれば、助産婦たるものは、寸時も忘却すべからざるなり。

傳染病

細菌 とは、極めて微小なる小體にして、若し、一箇たりとも身體内に入る時は、忽ち繁殖して數萬の多きに達し、以て劇しき疾病を發す。此の如く細菌の身體内に襲來し、障害を起すものを傳染と云ふ。吾人身體の表面には、上述の如く多數の細菌を附着すれども、其の害を致さざる所以は、即ち身體の表面に表皮ありて、能く之を被ひて保護し、其の進入を防ぐに由る。然るに今此の部に損傷を生ずるときは、假令目視し能はざる小創なりと雖、細菌は容易く進入し以て傳染の危険を發すべし。殊に産婦、褥婦等は生殖器に多くの創傷を有するのみならず、此の部の組織は血液に

富み著しく柔軟なるを以て、能く細菌の浸入に適し、且つ悪露は最も細菌に良好なる培養器なるを以て、其の危険の甚だしきや言を俟たず。故に助産婦は、自己の手指は勿論、検査を施さんと欲する婦人に對し必ず嚴重なる殺菌法を行はざるべからず。

第二節 傳染と殺菌法

創傷 細菌の危険なることを知らしめんが爲、創傷と傳染との關係を明にすべし。創傷とは一般に皮膚粘膜の剝脱、或は筋の截斷せられたるものにして、分娩時にありては、子宮内に於ける胎盤の剝離、腔粘膜の損傷、會陰破裂等極めて多くの創傷を有するを以て、疾病を起すべき細菌の、其の部に附着する時は、容易に傳染し、局部或は全身に起るべき創傷傳染病の原因をなすものなり。是等傳染毒を避けんとせば、完全なる消毒法を行ふべし。

殺菌法は、疾病を起すべき細菌を殺盡する方法にして、自ら傳染を防ぎ

創傷とは何ぞや

消毒法の理

その細菌を遠ざくるにあり。近時世人も熟知する如く、單に水のみを以て洗ふは愚の極にして、特殊の殺菌薬を用ふるに非ざれば効なきなり。此の殺菌法は、醫及び助産婦の共に攻究すべき問題なりとす。昔時殺菌法の未だ一般醫師社會に知られざりし頃は、不潔の爲に、如何に多數の者が害を被り、或は産褥中母の死亡せし爲に、其の家族が如何に不幸に陥りしか、彼の産褥に發生する最も恐るべき産褥熱豫防法の歴史は、吾人に悲惨の實況を誨へたる事を追憶せざるべからず。是予が特にこの豫防法の由來を茲に詳述する所以なり。

第三節 産褥熱豫防法の由來

今より凡そ百年前、乃ち十九世紀の始より其の中葉に至るまで、歐洲の産科院に於て或は私宅分娩の場合に於て、百人の産褥婦中、五乃至十人、即ち殆んど十分一の婦人が此の恐るべき産褥熱の爲に死亡せしが、現今の殺菌法行はれし以來、創傷傳染の爲に死亡する婦人は、非常に減少し充分設備の完成したる産科院にては、全く死亡者の蹤を斷ち、或は稀に發生するも、僅かに産婦の千分の一に過ぎず。今より六十七年前、即ち十九世

紀の中葉に至り、婦人科醫ゼンメルワイスが、屍毒の産婦及び褥婦に對する危険を知りて、之を豫防する方法を公にし、千八百七十年の始、英醫リストターが消毒薬として、外科術に石炭酸を應用し、始めて細菌撲滅の法を實行するに至れり。かくて此の方法は漸次助産科にも應用せられたり。我邦にても明治十年西南戦争の時、始めて此の石炭酸を用ひて、創傷療法を試み、良成績を得たり。

石炭酸消毒法の發見によつて、古來外科病院にて非常に恐れたる創傷熱、化膿熱等の死亡者も減少し、助産科に於ても其の利益ある事を認め、手、器械、殊に創傷を清潔にする爲に使用せられ、尙時代の進歩に伴ひて、石炭酸使用の法則及び助産の方法は著しく變化し、就中ローベルト、コッホ博士の研究に依つて、細菌の本態培養法及び其の症狀に關する充分なる研究を遂げ、終に今日の如き防腐法及び消毒法の完成を來したる事を忘るべからず。

産科院及びその他に於ても、産褥熱の爲に死亡したる者非常に多く、獨逸にては毎年産褥熱の爲に斃ふる者は尙數千人(大凡五千)の多數に達すれども、我邦の如き、未だ産褥熱に對する醫師及び助産婦の責任を重んぜず、又是等に關する法令の發布なきにより教育なき舊産婆及び未熟の助産婦が分娩に従事するが爲、果して幾許の産褥熱ありしや不明なるは、實に遺憾の事實なりとす。

ゼンメルワイスは、最初産褥熱を創傷疾病と見做し、且つ或褥婦より他の褥婦に傳染する事を知りしかど、悲しいかな、彼の説は當時の人心に了解せられず、彼が嚴正に手を

格魯兒にて洗滌し、産褥熱の死亡を防ぎしに拘はらず、尙未だ世人に認めらるるに至らざりき。然れども彼の功績は、今に至りその光輝燦然として世界を照し、今や産科學上の一大發見として、至る處その方法を稱用するに至れり。

氏の主唱により、清潔と消毒とは一般にあらゆる創傷に接するものには、必ず行はざるべからざる事となり、即ち、

第一 手の殺菌法

第二 器具の殺菌法

第三 繃帶材料の殺菌法

以上の三種の殺菌法は極めて嚴重に施行せざれば、細菌の傳染を來し恐るべき危険を起すに至るべし。今其の創傷傳染の狀態に就て吾人の心得べきものを簡単に説明せん。

諸子は、「バクテリア」乃ち細菌なるものを知れるか 凡そ吾人の生活する空氣中には、到る所殊に患者に接せる物品、或は其の周圍には、極めて多量にして、顯微鏡の力を假らざれば、毫も視る能はざる細菌、即ち植物性の分裂菌、所謂「バクテリア」の存在するならずや。若し又細菌にして創面に附着せんか、直に其の部分に重き炎症を起し、發赤腫脹し、熱と痛みとを感すべし。世人は昔時かゝる炎症は、寒胃とか、或は他の原因によりて發生するものと信じ居たりしが、今日にては、凡て炎症發生の原因明瞭となりし

のみならず、進んで創傷を起す細菌を培養して、其の生活状態を精密に研究するに至れり。然してかゝる毒性ある細菌は、肉眼を以て到底見る能はず、顕微鏡の力にて、千倍又は二千倍に拡大し始めて見る事を得べし。

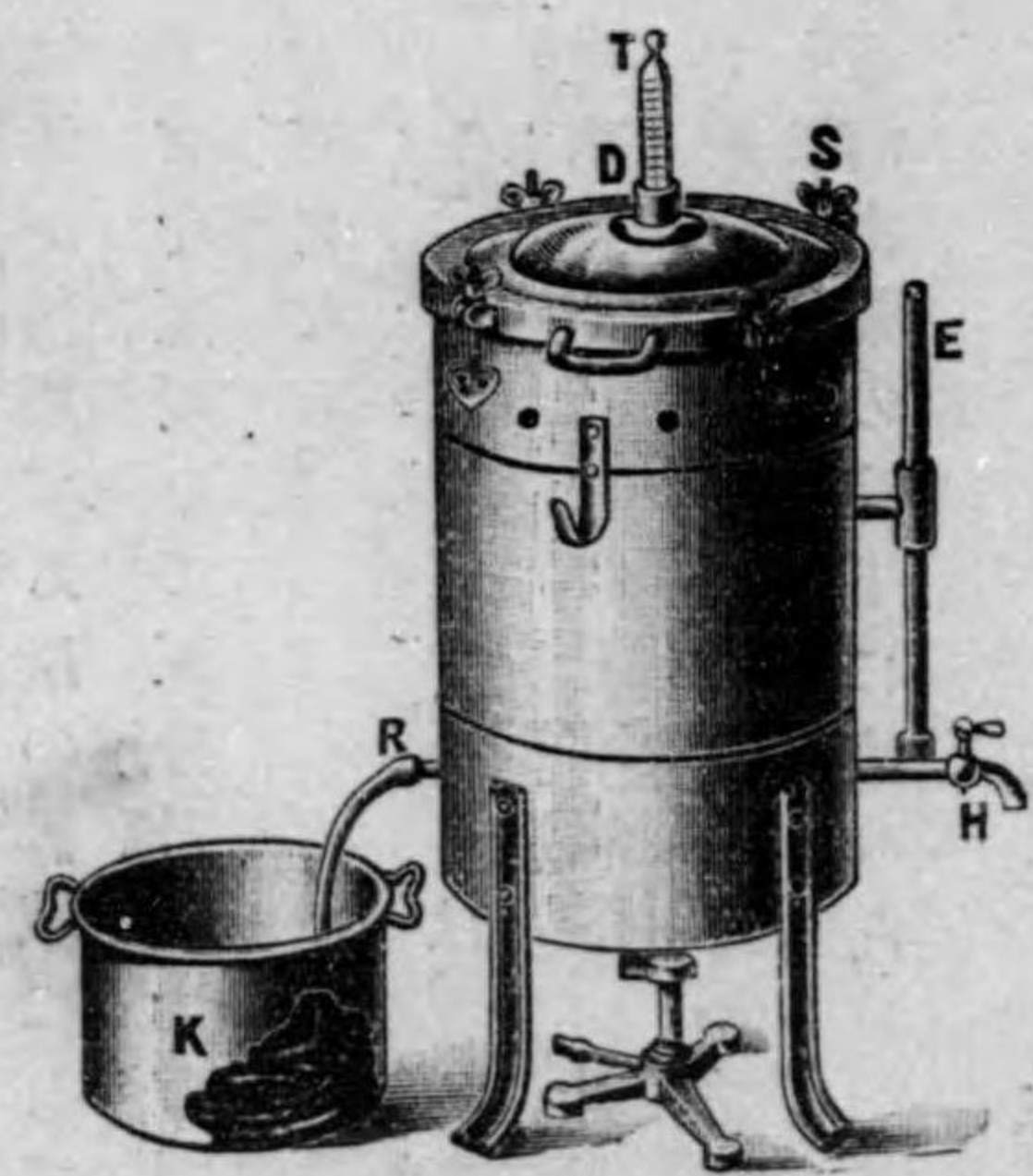
或は更に細菌を染色して、一層明瞭に之を見る事を得るなり。斯る病的細菌、或は創傷細菌(創傷分裂菌、化膿菌)は、唯創傷熱の時に限り見出さるゝに非ずして、所謂傳染病たる丹毒、猩紅熱、實扶的里亞、空扶斯、虎列刺、百斯篤等にも存在し、若し一朝細菌が創傷の開放せる血管又は吸收脈管たる淋巴管、淋巴腔等を通りて身體内、或は精密に云へば、血管系統に入る時は、忽ち局部の炎症と共に發熱し、體温の上騰を來し、明かに外部より侵入せし毒素に對して、身體の頰りに防戦しつゝあるを知らる。細菌は至る所空氣、土地、水、塵埃など、又は吾人の周圍なる物體の表面等に栖息して、最も危険なるは、手指附近等の化膿性傷部、又は炎症性の乳房に附着し、或は悪性の惡露、酸性の羊水等の中に生活するものなり。殊に僅少の細菌にても創傷、就中褥瘡の損傷部に入り、極めて重態に陥らしめ、往々死に至らしむる如き創傷熱を引き起す事稀有ならず。その細菌化膿菌を顕微鏡下に見る時は、極微なる連鎖状小球を形成し、創中に於て非常なる速力を以つて蕃殖し、僅の細菌より、須臾の間に數萬の細菌を生じ、之より毒素を發し以て組織を害するものとす。

抑々本來の目的は、かゝる細菌を遠ざけ、之に接觸する事を避け、更に之

を殺し、其の勢力を撲滅するにあり。若し一患者に於て細菌を發見せば、他の患者、殊に健康體(産婦、褥婦)に傳染する事を防止せざるべからず。

第四節 殺菌法の種類

細菌を撲滅しその作用を斷絶せしむる方法は種々あれども今之を區別すれば左の如し。



器毒消汽蒸エシツプルメンシ

一 理學的殺菌法 は、蒸気に依るもの、乾燥熱氣に依るもの、煮沸法に依るもの等あり、各々攝氏百度以上の温度を要すべし、但し産婦に要する器械、ガーゼ綿花及び其の他綿帶材料はシネルプツシエ蒸汽消毒器を用ゆべし。第七十二圖に示す

圖一十七第

ものは手が稱用する所の器械にして縲帶、結紮糸、ガーゼ及び綿花等は瓦斯ランプを應用して五分乃至十分間にして完全に殺菌し得るのみならず携帶にも便利なり。

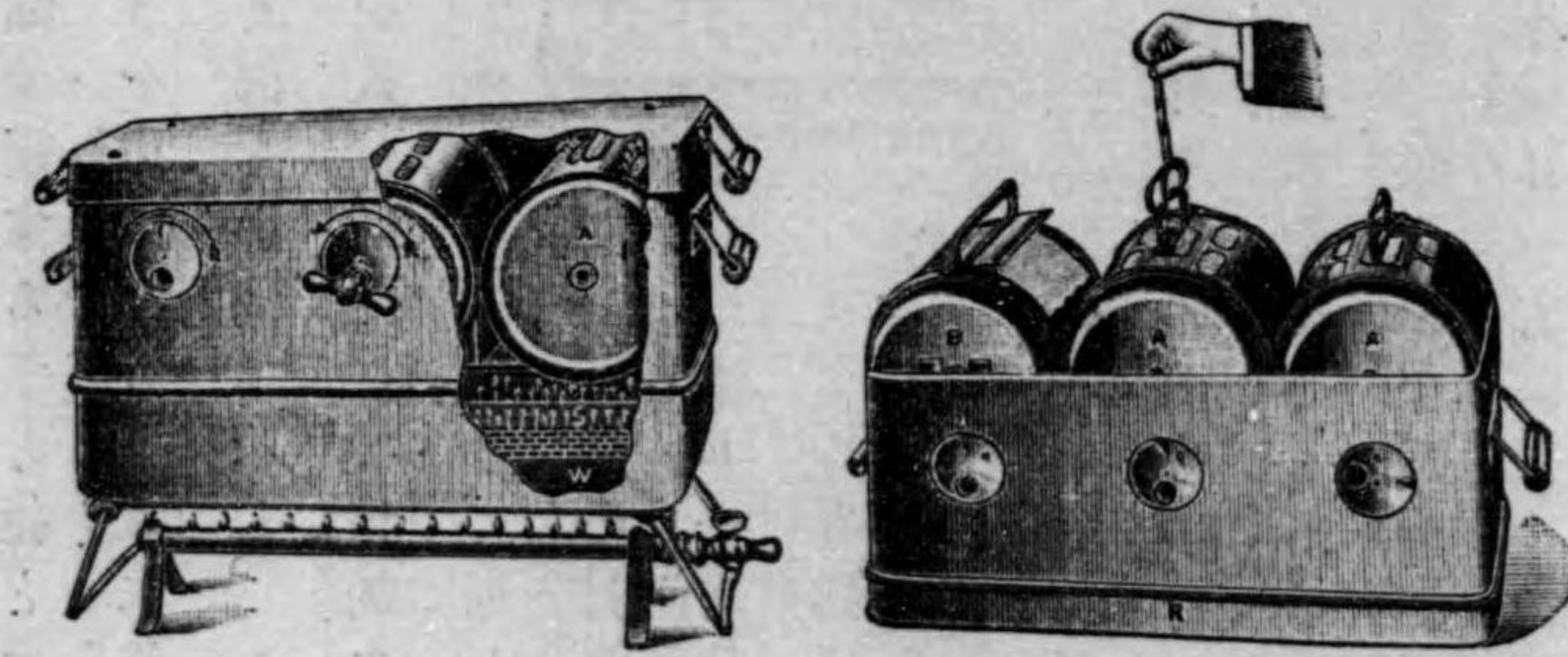
二 化學的殺菌法

は、防腐薬を應用し、細菌を撲滅するの法にして、從來普く行はれし石炭酸、昇汞水、リゾホルム、クレゾール石鹼、アルコール等にして藥物の性質と効力とにより各々其の用を異にす其の詳細は後章消毒薬の條下に述べん。

第五節 手指の殺菌法

診察に必要な手指の殺菌法を論ずるに當り、第一に説明すべきは、消毒薬を用ふるに至りし爲、温水と石鹼とを以て、手を洗滌する事を閑却されたることなり。こは誤の最も大なるものにして、常に肝要なるは絶対的清潔法にして、即ち刷子を用ひて、温水と石鹼とにて嚴密に洗滌すべし。斯の如くにして始めて他の消毒液に効果現はるべく、殊に近時稱用する「アル

圖 二 十 七 第



器菌殺花綿び及ゼーガ撰方緒

ルコール」を綿花或はガーゼに浸し皮膚の脂肪、垢等を拭ひ去り、消毒劑の作用を容易にする時は、殊に良結果を奏すべし。

助産婦が手指を消毒するに際し、使用するべきものは、

- 一 清潔なる二個の手洗鉢と、
- 二 少くとも二個の刷子を要す。即ち一方は大にして、水中に於て手指の洗滌に用ひ、他方は小にして消毒液に用ふ。

刷子は使用の前後熱湯にて煮沸すべし。助産婦は手洗鉢に温湯を湛へ、刷子を使用せざる時は、石鹼にて手指を洗ふべし。

是終始使用する手と指とは、前胸部に比較すれば、垢又は細菌の附着する事多きを以てなり。次に洗滌液を取り換へたる後、刷子を以て充分に手指と前胸部とを洗ふべし。かくて皿、又は小手洗鉢を取りて其の中へ「アルコール」を入れ、前に機械的に消毒せし皮膚に塗擦し、消毒薬の効果を助くべし、而して後第二の手洗鉢に、殺菌薬を用意し、〇一布

圖三十七第



子 刷

仙の昇汞液を用ふるを以て最良の方法とす。或は最初より一布仙の「リゾホルム」に浸したる刷子にて手指を拭刷するも妨げなし。従来三布仙の石炭酸液を用ひしも、現今にては餘りに用ひられず。勿論手指の殺菌には、昇汞液の常に最良なる結果を齎らせるを以て、茲には温水「アルコール」昇汞液の消毒法を述べし。

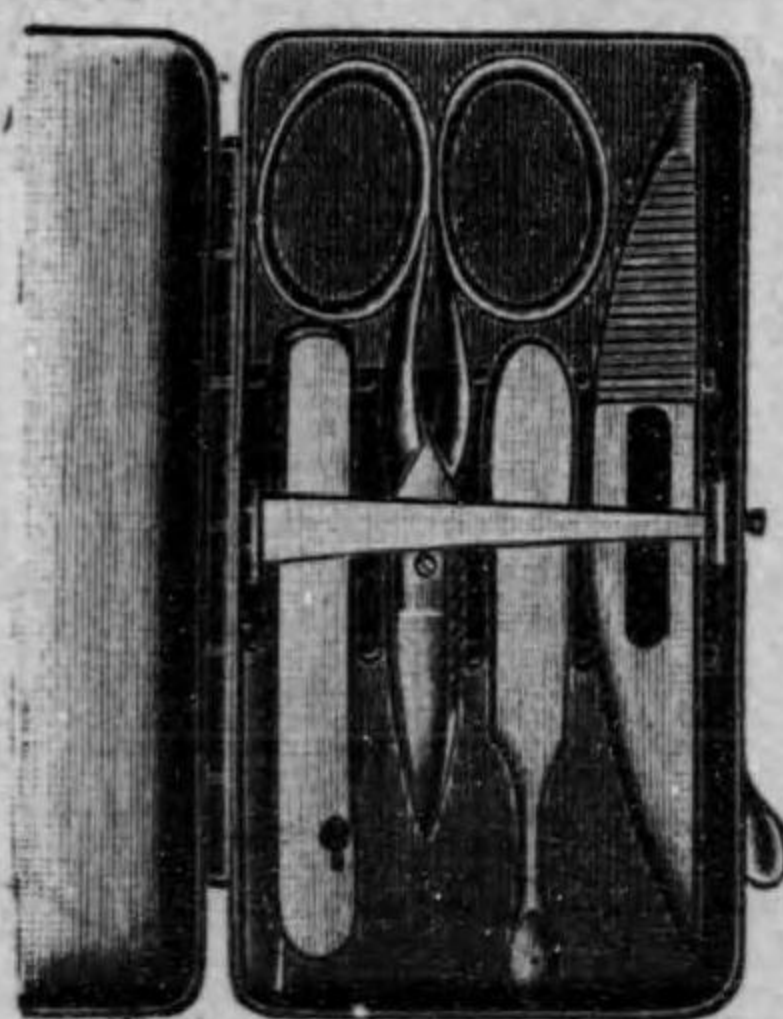
一 温水を湛へし鉢の中に刷子を用ひす能く手を洗ひ、指環等は取り外し、鉄を以て爪を圓く剪り、爪の裏面及び爪床に少しの垢をも留めざるやう洗ふべし。

圖 四 十 七 第



子 鑷 爪

圖 五 十 七 第



著者の用する指消毒器 毒に要する携帶器

二 次に水を取り換へ、成るべく温かく充分に煮沸したる温水と、石鹼とを以て、刷子を使用して、手と前胸部とを七乃至十分間許充分に洗滌すべし。此の機械的洗滌の時には、特に指と指との間の清潔に注意し、然る後石鹼と清水にて洗淨し殺菌したる手巾にて能く拭ひ乾かすべし、

三 かくて、手と前胸部とは七十布仙の「アルコール」中にて洗ひ「ランネル」布にて三分間

許拭ひたる後、

四 〇一布仙、即ち千倍の昇汞水中にて、二番目の小さい刷子を用ひて三分間程洗滌すべし。

圖六十七第



指手に護手袋を用ひたる形

若し七〇布仙の「アルコール」の缺乏せし場合には、**燃焼酒精を代用するも妨げなし。**以上述べ來りし方法を以て、**機械的に清潔にし、「アルコール」を用ひ、昇汞水にて充分に消毒せるを、初て完全な**

手指の清潔と云ふべし。
勿論湯温婆又は、**悪露の如き不潔物に接したる後は、必ず再び殺菌せざるべからず。**是手指に**細菌の附着せざる時間**は極めて短かきを以てなり。此の殺菌法は手と前

圖七十七第

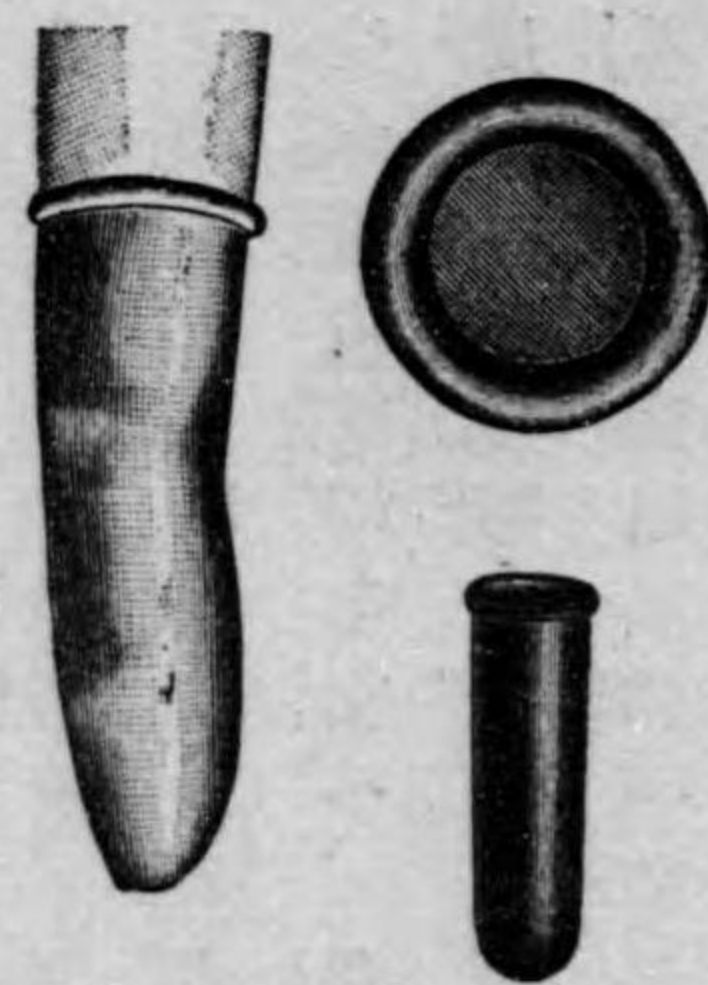


指手するに潔不は或傷創袋指護きべゆ用に

一布仙の「リゾホルム」溶液、**或は單に煮沸せる温水を用ふるも可なり。**

は、**唯外陰部を洗ひ得るも、内部洗滌には用ふべからず。**恁る場合には、**醫師の指圖を待ち、**

圖八十七第



指手及び指袋に護るたひ用を袋指護

保つべし。

平滑なる皮膚を消毒するには、**粗雑なる皺多き皮膚よりも遙に容易にして、皮膚の裂口皺裂等に附着せる細菌は容易に除去せられず。**又指の癩疽の如き化膿せる場所には、**危険なる醗膿菌の發生せるを以て、殊に注意すべし。**手指の殺菌を可及的容易にせんが爲に、**度々温き石鹼水にて洗ひ、毎夕柔かき脂肪を擦り込むべし。**手指の**中第一に掃除すべきは爪なり。**爪の裏面、或は爪床は、**塵埃及び垢等の附着し易く、助産婦たる者平常之に注意し清潔を**

圖九十七第



護手袋

最も完全なる殺菌は、**傳染すべき局所、例令ば患者又は膿性分泌をなす、創傷、或は悪露の如き全く自然の分泌なりとも、必ず接觸せざる様爲すべきなり。**悪露は血液及び他の物質以外に**分焼の數日後より、色々の種類の細菌を附着し、之が爲に注意を要すべきは、助産婦が直接に悪露を入れし受器に、手或は指を觸るる事を避け、若し誤りて之に觸れし時は、直に前に述べたる方法に従ひ、再び手を消毒し、終りて後始て褥婦を看護すべし。**然し一旦傳染性物質に觸れて細菌の附着

したる時は、之を殺すに殺菌法のみにては不十分なるを以て必ず一度其の手指を消毒し、豫め殺菌したる護護手袋を被るを以て宜しとす。

第六節 内検査の方式

内検査の準備的處置

内検査を行はんとせば、先づ被検者に仰臥位置を與へ、膝を屈し、且つ之を開かしめ、腹部より以下には清潔なる廣き布片を被ひ、臀下には小なる枕を挿入し、且つ廣き受水盤を挿むべし。而して被検者の一側には、イルリガートルに殺菌液、即ち一布仙のリゾフォルム液を盛り、凡そ床上より三尺の高さに懸け、助産婦は被検者の兩股間に坐し、一側の膝部を以て、受水盤の前端を支へ、殺菌したる手指を以て、陰阜、太腿の内面、股間の周圍等を丁寧に洗滌し、次で其の尿管を腔内に挿入し、此の部を洗滌し、然る後助産婦は尙一回手指の殺菌法を行ひ、内診すべきものとす。又外陰部洗滌の際は、兼て此の部の視診を施すを良とす。即ち糜爛、或は浮腫等を存せざるや、分泌物多量なるや否や、其の他處女膜の状態、恥骨弓

内診方法

廣狹、坐骨結節の距離等を検知すべし。

内診するには、一手の拇指及び示指を伸べ、他の三指を屈し、之を陰門に進め、他手の拇指及び示指を以て、小陰唇を開き、而うして検査に用ふべき手指は、其の指腹を後方に向け、伸展せる示指を後連合に貼し、腔の後壁に沿うて骨盤誘導線の方向に従ひ、徐々に深部に送り、次で指腹を前方に向はしむ。其の骨盤の側壁に於て一の突起を觸るべし。之即ち坐骨棘にして、骨盤廣部及び狹部の境界部なりとす。而して前方に來らしめたる示指は、深く前腔穹隆部に至り、腔壁を隔て、其の上方に在る胎兒の先進部を探るべし。次で子宮腔部を周りて其の状態を検し、且つ指端を子宮口部に送り、外口の状況を知り、終りに示指を後方に進め、容易く薦骨に達し得るや否やを検査すべし、若し容易に此の部に達することを得ば、其の骨盤は狭くして、分娩に害あるものと知るべし。

第七節 内検査の所見

見 膈後壁の所

見 膈前壁の所

見 子宮膈の所

全膈の所見

今 内診によりて、検知し得可き事項を擧ぐれば、
一 膈の後壁に於て、挿入したる示指と、外方に存する拇指との間に會陰を狭み、其の硬軟により、會陰の延張性を検知し、且つ尾骶骨部に達し、薦尾關節の運動性を試むべし。

二 膈の前壁に於ては、先づ尿道下壁を壓し、其の疼痛の有無、及び壓迫によりて尿道口部に膿汁を排泄することなきや否や等を檢し、次で前腔穹隆部に至りて、其の上方に來れる胎兒の先進部の形状、硬軟、高低、及び移動性の有無等を知るべし。

三 子宮膈部に就きては、其の長短、形状、硬軟等を檢すべく、子宮口部に在りては、形状、口縁の状況、及び既に開大せるや否や、及び開大の程度を診すべし。

四 全膈に就て、腔の廣狹、及び其の延長性、恥骨弓の廣狹等を詳かにせんことを要す。

第三項 雙合検査法

雙合検査法 は、一手の示指を、内診と同方法によりて膈内に送り、同時に他手を腹壁上に貼し、子宮又は胎兒を下方に壓し、之を内手との間に挟み、子宮の大きさ、形状、硬軟（ヘーガル徴候）及び胎兒部分、並に其の移動性等を明かに觸診すべし。之を雙合検査法と云ふ。此の法は、殊に妊娠初期に於て必要にして、未だ恥骨縫際上に出でざる子宮の状態を知らんとせば、必ず此の法によるの外なしと雖、助産婦は猥りに施すべきものにあらず。

第十八章 内診に於ける一般の注意

妊婦及び産婦の内診を行はんには、先づ次の條件を忘るべからず。

- 一 検査を施す前には、豫め膀胱及び直腸を空虚ならしむべし。
- 二 検査の際は、無用の體部を露出すべからず。その他、總て妊婦の嫌

雙合検査法

内診上の
一
設の注意

ふことは、成るべく之を避くべく、殊に無用の人を近づけざるを要す。

三 検査は、一回の往診に一度となし、再三反覆して施す様のことあるべからず。

四 外検査法は、妊婦を診する毎に、丁寧に之を行ひ、成るべく内診の必要なからしむべし。

五 内診は、止むを得ざる場合の外、之を行ふべからず。一度綿密なる注意を以て内診を施さば、能く其の検知せる所を記憶すべし。而して、助産婦の通常内診すべき時期は、胎胞破裂直後と、産褥九日目との二回なりとす。然れど上記の如く子宮孔の開大も外診により能く推知し得べきものなれば猥りに行ふべからず。若し分娩後九日を経ずして、異常の状態を來したる時は、内診を待たず、速に醫師の診を乞ふべし。

六 助産婦若し産褥熱、其の他細菌の傳染に由て發すべき病者を取扱ひたる時は、此等患者に遠ざかりてより一週間の後ちにあらざれば、妊婦、産婦、褥婦等を診査すべからず、而して一週間後に於て診察する際には、

先づ沐浴し、新しき衣服と交換し、手指は特に嚴密なる殺菌法を施行せざるべからず。

七 此等の病家に至り、検査するには、其の前必ず衣服を交換し、全身浴を行ふべし。凡て屍體に接觸したる時も亦之に準すべきものとす。

八 助産婦の手指に、損傷、疔、潰瘍、化膿等ある時は、決して内診する事を得ず。

此の他助産婦の服膺すべき拾箇條の要則あれば、茲に掲ぐべし。

助産婦の服膺すべき拾箇條の要則

一 爾助産婦

努めてしばしば外検査を行へ、

さりながら

内診を稀には注意して施行せよ。

二 數次

胎兒の心音を聽け、

胎兒には時として

- 三 事由なくして
不意に危険なる事の起るものぞ。
卵膜を破るなかれ、
子宮口へは心して
指頭を挿入れまた衝くなかれ。
- 四 爾助産婦よ
外検査を知れるか、
胎兒の頭、背、臀または胎盤までも
悉く外部より觸れて明かに知らるべし、
斯くて診断確め得なば、
必ず内診を行ふの要なからん。
- 五 爾等が手と指とはた爪は
常に全く臭氣なく清らかならん事を勉めよ。
- 六 爾等産婦と胎兒とに
危き事の有りや無しやを確むる事を得ずば、
時を遅さず急ぎ
産醫に依頼せよ、
すべて不確なるものに

- 七 後産は
みだりに手を下さんは慎むべき事ぞ、
いちはやく其の道の
醫士に依頼すること其策なれ。
- 八 分娩終れば
氣長く見守れかし、
若し急ぎなば
爾等忽ちに過つことありなん
會陰の検査を忘れまじきぞ、
若し破裂したらんには
直に醫士の治療を受けしめよ。
- 九 分娩の際には始終
嚴そかに消毒清潔を守れかし、
かく爲さば母兒もろとにも
其の身を全うして醫士も心を安んずべきぞ。
- 十 助産婦よ爾等が
消毒清潔法を嚴かに守りなば、
その處置せし産婦は

みな健かにして行末永く爾が恵を享けん。
さりながら若し

爾等の處置せし産褥婦の病みたらば、
爾等が手指の

清潔をば忽せになせし罪なるぞ。
されば爾等は

其の責を負ひて速に深く罪を詫び、
再び過ちなからんやう

悔ひ改めて戒を守りゆめ違ふ勿れ。

第十九章 狹窄骨盤の診断

狹窄骨盤の疑ひある時は、醫士に依頼して、其の計測を受くべきものなれども、先づ助産婦自身是を、診断するの必要あり。

對角徑の計測法

對角徑の計測法は、助産婦も亦是を行ふことを得べし。乃ち先づ伸展せる左示指を第八十圖の如く腔内に挿入し薦骨胛に達するや、指頭を胛の中央(後測點)に貼し、同時に手指を測方に廻轉し、(第八十一圖)其の橈骨

側を恥骨弓靱帶より

縫際下縁(前測點)に向

て壓着し、次で外手

は陰毛及び皮膚の皺

襞を排して、一見前

測點を明ならしめ、

其の示指を根部に於

て屈し、背面を縫際

前面と對向せしめ、

以て鉛直に内診指の

前測點接觸部に爪端

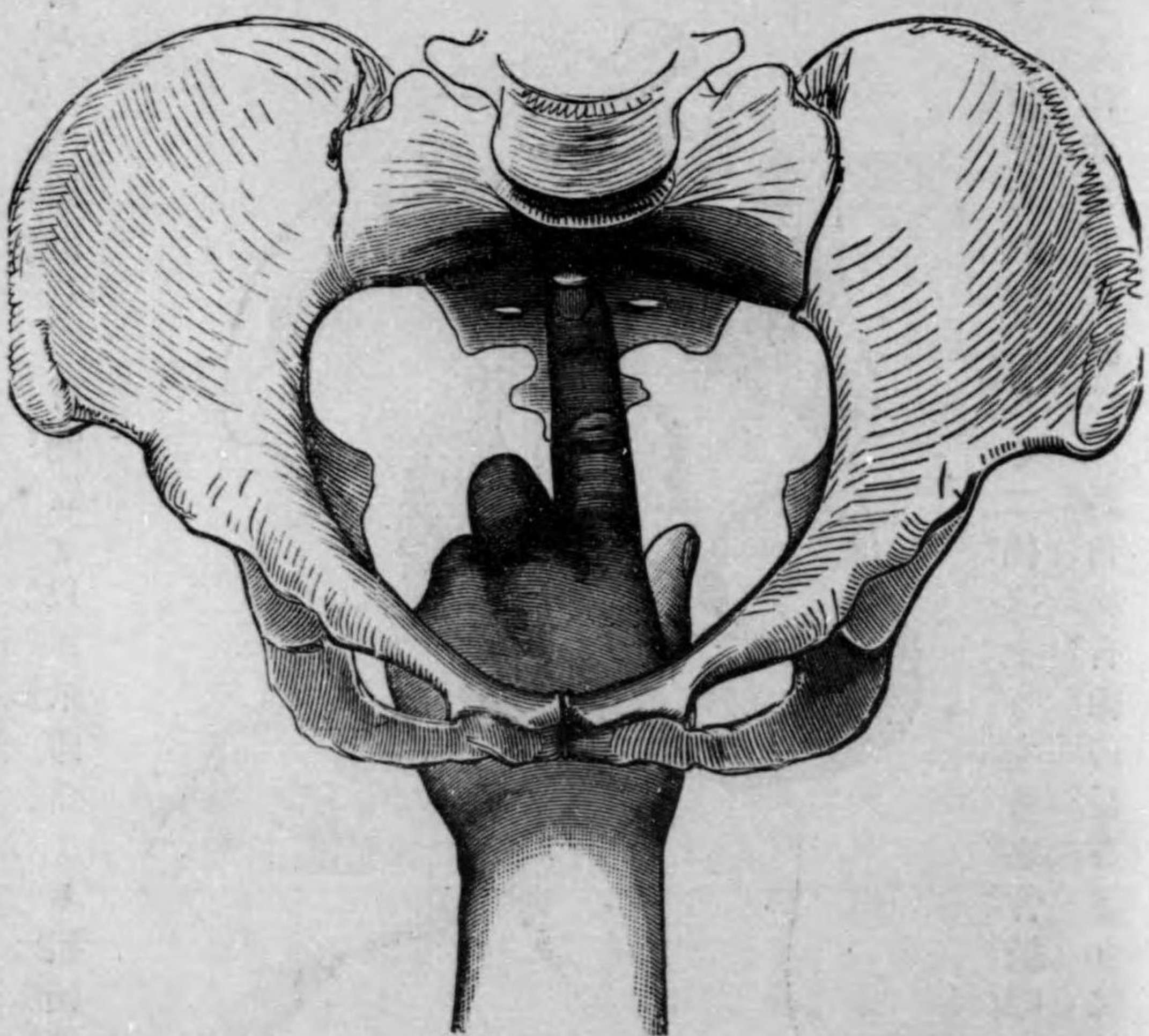
を貼する事(第八十一

圖)の如くし、次で爪

印を標記したる後、

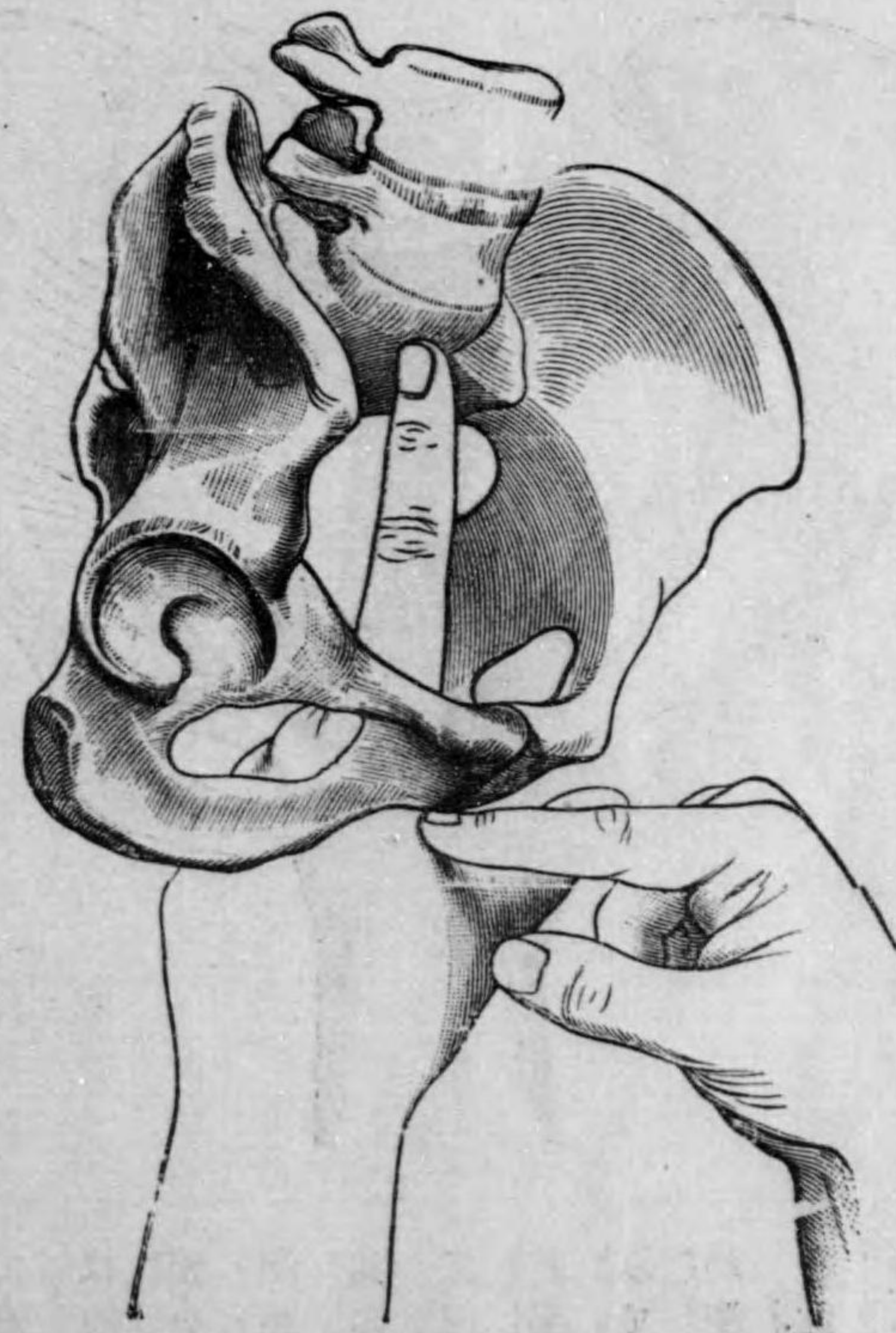
計測器の使用法

第十八圖



對角結合線
眞結合線
距離と狭窄の
骨盤

圖一十八第



第三編 正規妊娠及び其の取扱法 第十九章 狭窄骨盤の診断 一九〇

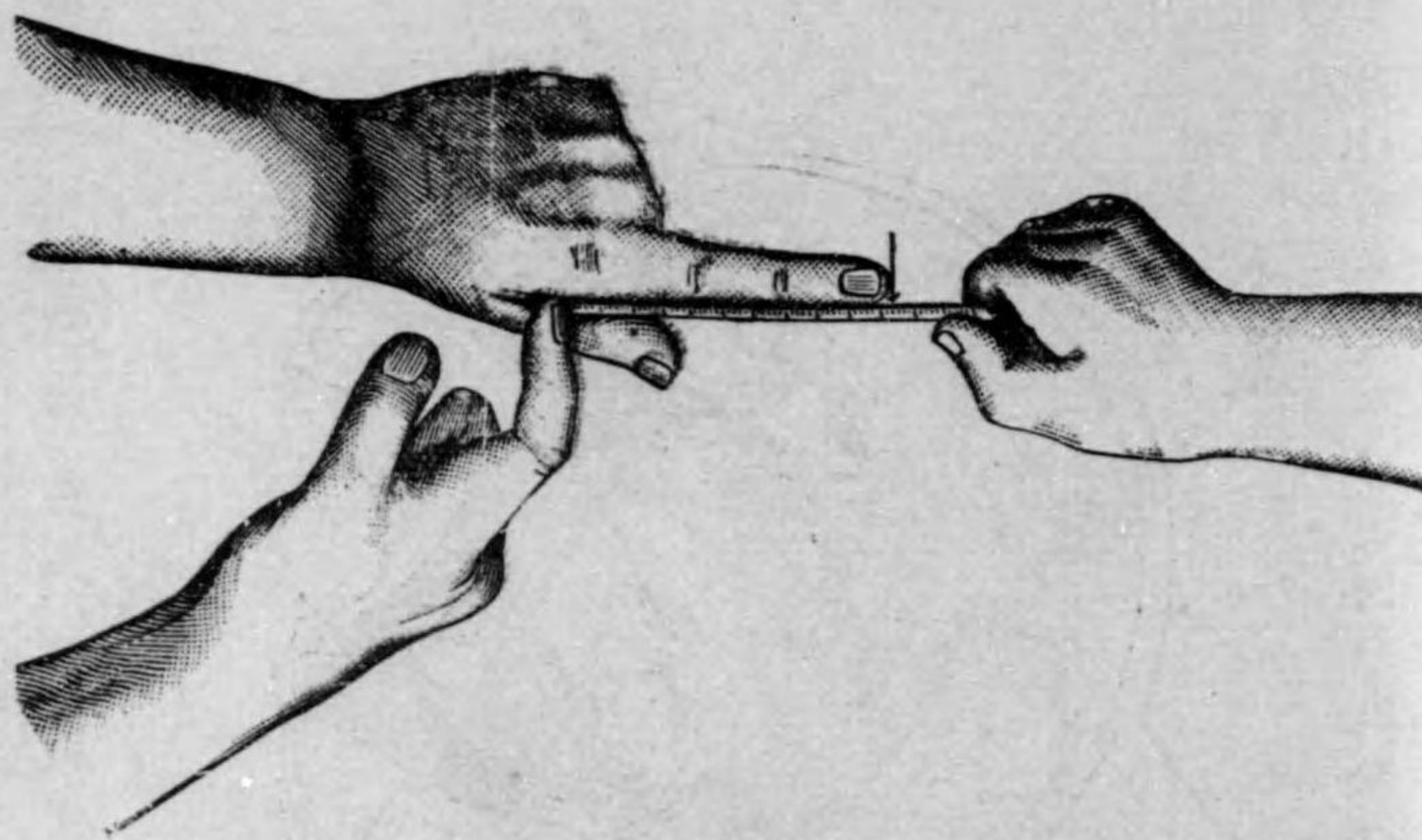
内指と共に抽出し、計測器を以て爪印點より指頭尖端に至る間の長さを計測すること(第八十二圖)の如くすべし。

此の如くにして、計測したる結合線の長さは、未だ眞の距離にあらずして、之より二仙迷を減せざるべからず。共に此の中に

含まらざるればなり。故に、對角結合線の長さより二仙迷を減じたるものは、

單純なる計
測法

圖二十八第



第三編 正規妊娠及び其の取扱法 第十九章 狭窄骨盤の診断

所謂眞結合線の距離にして、即ち骨盤入口の直徑線の長さと相同じ。されば、眞結合線は通常十一仙迷にして、之より短き時は狭窄骨盤なりとす。

又實地上極めて單純なる方法は、示指を腔内に挿入し、徐々に後上方に進め、薦骨岬に達し得るや否やを検するにあり。若し其の尖端が容易く、若くは漸くにして達し得るものは、其の骨盤は狭窄せるものと知るべし。

但しこの際、示指の短きものは到底薦骨岬に達し難ければ中指を用ひ計るべしと雖、尙困難なる者は第八十三圖の如く器械を以て測定することあり。

第三十八圖

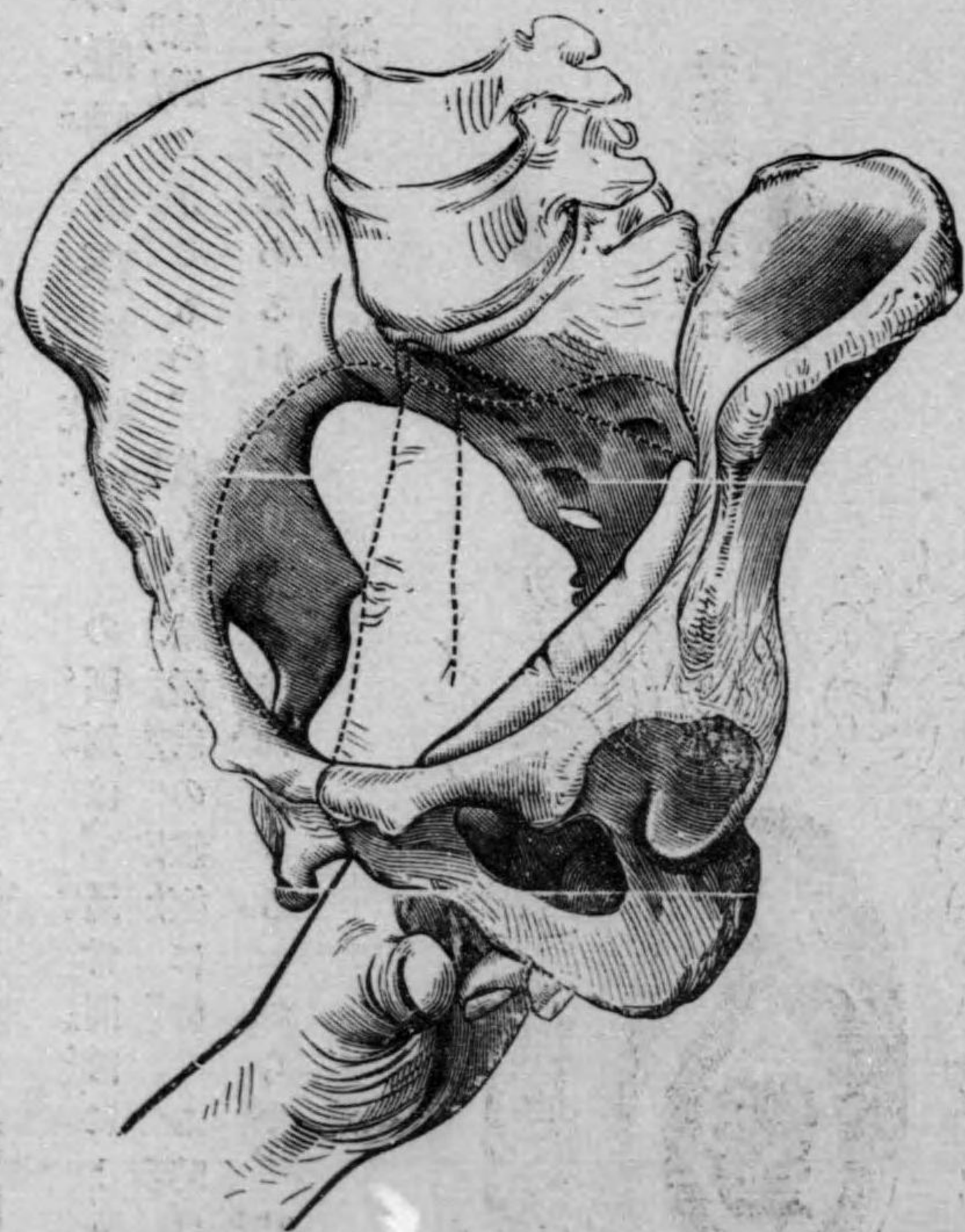


一手を擴げて之を下腹部に貼して、其の小指の尖端と、拇指の尖端とにて一側の腸骨前上棘より、他側の腸骨前上棘に達し得るや否やを檢するにあり。

助産婦に必要なきも醫士は器械を以て精察に計り得へし

り。若し容易く達し得れば其の骨盤は横徑に狭窄せるものとす。

第四十八圖



その他内診せる手指を以て第四十八圖の如く、無名線に容易く觸るゝや否や、及び左右坐骨結節の距離等を檢すべし。其の容易く無名線に觸れ得るものは、横徑の狭き骨盤にして、坐骨結節間の距離短き時は、骨

盤出口の狭窄なるものなり。

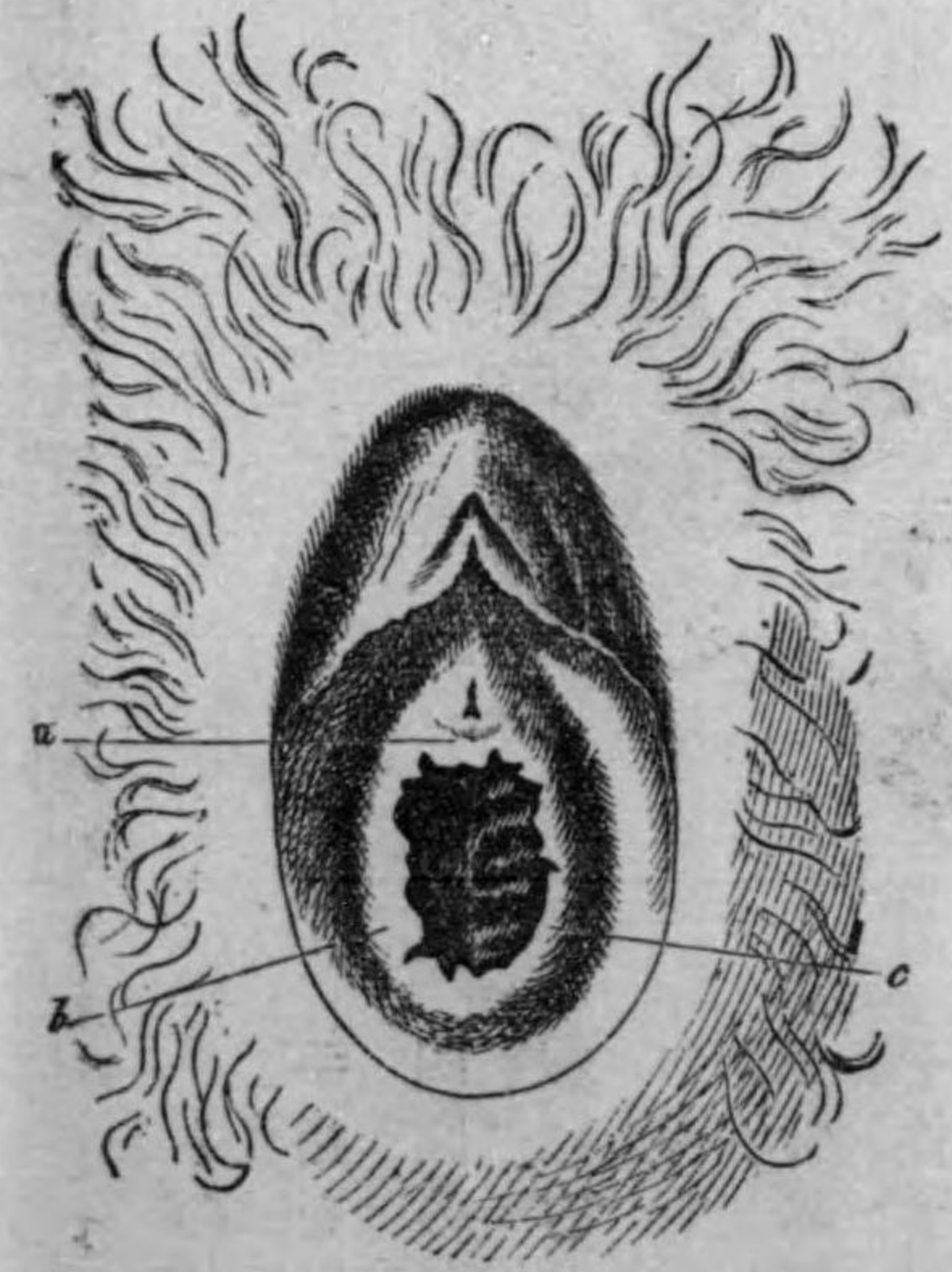
第二十章 初妊婦及び經妊婦の診断

初妊婦及び經妊婦の區別は、通常問診によりて知り得べしと雖、未だ結婚せざるもの、若くは結婚前の妊娠に屬する時は、往々妊婦の之を掩蔽することあるが故に、克く檢知せざるべからず。其の主なる鑑別點は左の如し。

圖五十八第

初妊婦の膈入口

(天然大の二分の一)

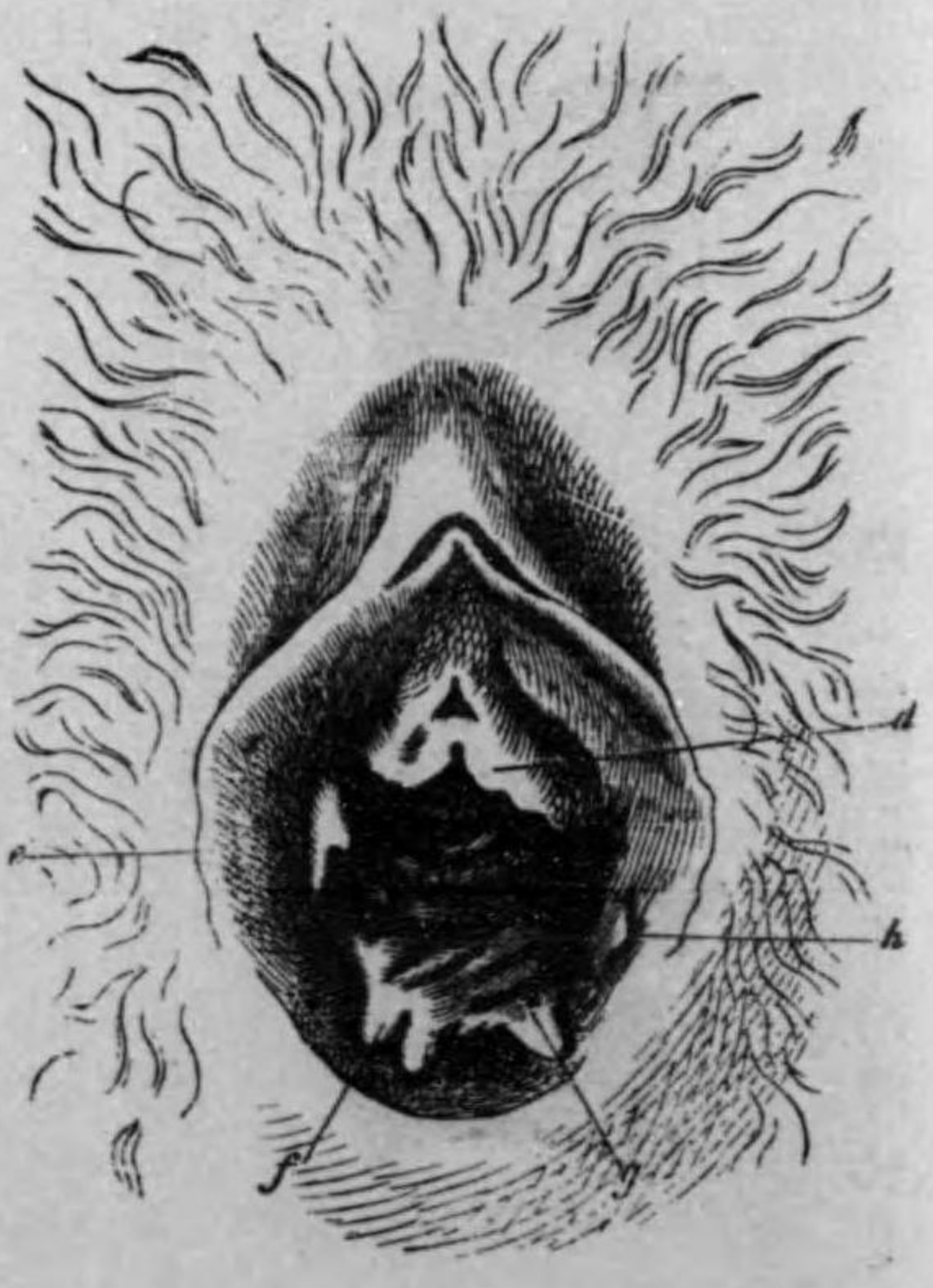


a、b、c、
輪狀處女膜

圖六十八第

經妊婦膈入口

(天然大の二分の一)



d、e、f、g、h、
ミルチ狀肉阜

- 一 初妊婦 處女膜は輪狀又は破裂あるも其の根部尙存す。
- 一 經妊婦 處女膜消失し或は分娩の爲破裂しミルチ狀肉阜を現す。(第八十六圖を見よ)。

- 二 陰門閉鎖す。
- 二 陰門哆開す。
- 三 會陰に損傷なし。
- 三 會陰破裂の癍痕あり。(但し完全)

妊娠後半期中に於ける初妊婦の子宮腔部

(天然大の三分の一)



圖七十八第



圖八十八第



圖九十八第

妊娠後半期中に於ける經妊婦の子宮腔部

(天然大の三分の一)



圖一十九第



圖二十九第



圖二十九第

四 腔腔狭く皺襞多し。

四 腔腔廣く滑澤にして皺襞少し。

圖十九第

圖七十八第

五 子宮口は圓形にして妊娠末期に至るも閉鎖す

五 子宮口は横裂をなし妊娠末期に至れば指を通せしむ。

六 子宮腔部は妊娠末期に至れば消失す。

六 末期に至るも消失せず、

七 乳房は緊張し乳頭短し。

七 乳房弛緩し乳頭長し。

八 腹部は長橢圓形に隆起し腹壁緊張し新妊娠線あり。

八 腹部は半球狀に膨隆し腹壁弛緩し舊妊娠線あり。

九 妊娠末期には兒頭骨盤内に固定す。

九 兒頭骨盤上口に移動す。

第二十一章 胎兒死亡の徴候

胎兒死亡の徴候

胎兒死亡する時は、従來明かに感知せる所の胎動全く止み、且つ反覆注意して診査するも、心音、臍帶雜音、及び胎動音共に聴取することを得ず。而して、羊水の吸収により子宮は漸次に變小し、柔軟となる。腔内よりは多量の分泌物を漏し、妊婦は倦怠、消化不良、下腹部寒冷、時々

惡寒等を感じ、時としては、母體の動搖に従ひ、異物の腹内に移動するが如き感を訴へ、乳房は漸々弛緩するに至るべし。

第二十二章 數胎

數胎 とは、同時に二兒以上妊娠するものにして、之を多胎とも云ふ。之に二胎即ち雙胎、三胎、四胎、五胎等の別あり。此の中最も多きは雙胎にして、凡そ八十九回の分娩中一回ありと云ふ。

雙胎の原因 雙胎は、二箇の卵、同時に受精するに由て、來るものなり。或は一箇の卵中に、二箇の精蟲進入して之を生ずるものあり。前者を二卵性雙胎と云ひ、後者を一卵性雙胎と稱す。其の他の數胎に於ても、之に同じき理由によりて成生するものとす。

雙胎に於ける卵膜及び胎盤の關係 羊腹は胎兒外皮の一系なるを以て、其の一卵性或は二卵性なるに關せず、各々別に之を有すべく、絨毛膜は卵の外圍より生ずるを以て、二卵性のものにありては各別に存在

數胎

雙胎の原因

雙胎と卵膜及び胎盤の關係

脱落膜

胎盤とその接合並に血管の吻合

雙胎と兩性關係

雙胎の診斷

第三十九圖



すと雖、一卵性のものは一の絨毛膜中に、二箇の胎兒を容るゝものなり。**脱落膜** は、二卵性雙胎に於ても單一なるを常とすれども、各卵の附着部遠隔せば、時として、各別に翻轉脱落膜を發生することあり。

胎盤 は、其の原各胎兒より發生するものなるを以て、各別に存すべきものなれども、多くは互に接合し、殊に一卵性のものにおいて、兩胎盤の血管は吻合し、互に交通を現すものなり。

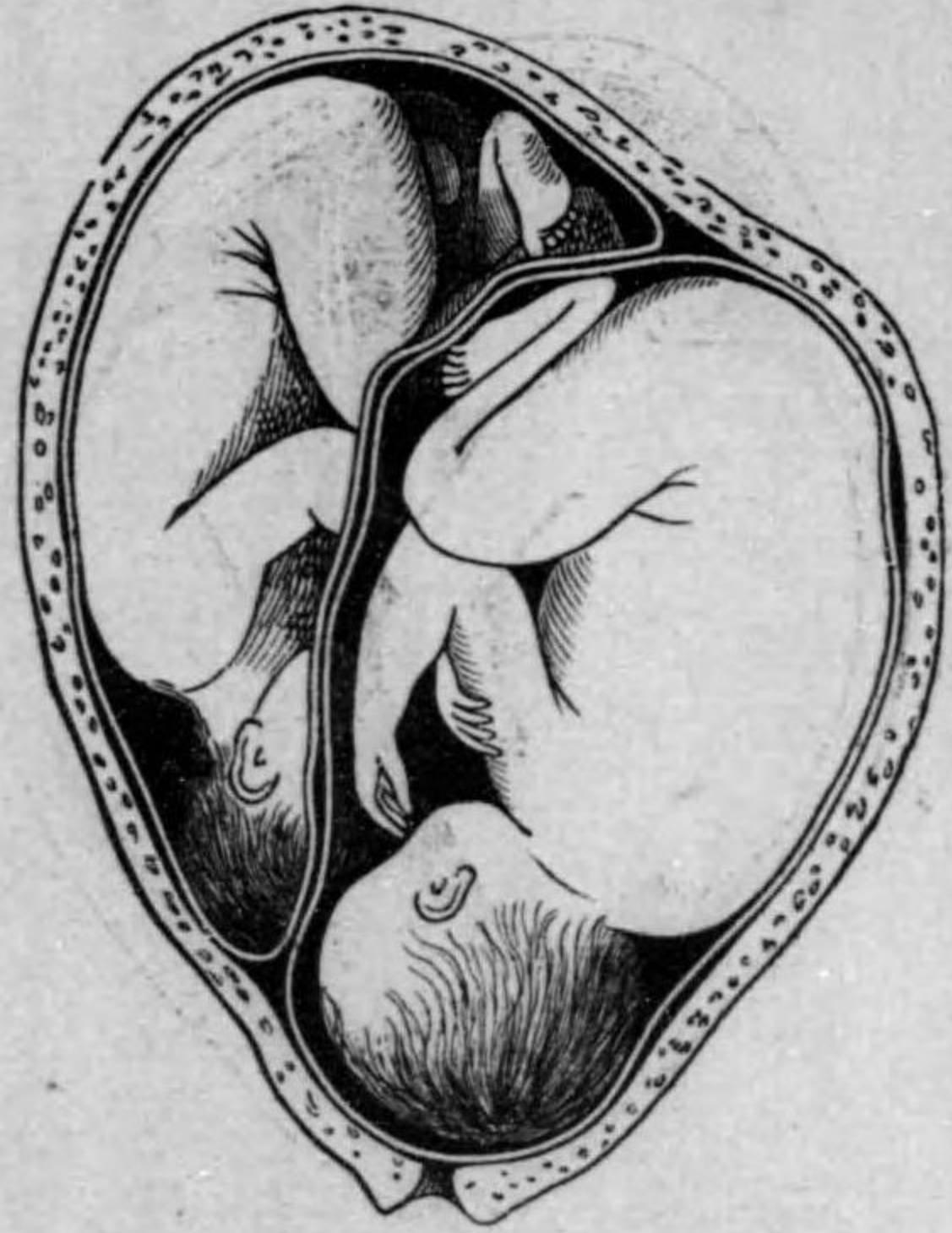
男女兩性の關係 一卵性雙胎なる時は、常に其の性を等しうす。二卵性雙胎なる時は、一定せずして同性なる事あり。或は異性なる事あり。

雙胎の診斷

は、決して容易なるものにあらず。之を診定せんには

左の徴候に注意すべし。

一 腹部の異常大、妊娠月數に適應せざる腹部の膨大は、最初に數胎の疑を生ぜしむべく、ときとして腹圍は百仙迷以上に達することあり。且つ妊婦の苦悶は通常のものより甚し。然れども、單に腹部の膨大のみを以て、數胎の診斷をなすべからず。胎兒軸の三十仙迷以上に達する時は、始めて疑を挾むべし。



圖四十九第

二 腹部中央の凹溝 是兩箇の胎兒境界部なり。此等の二徴候は、羊水多量なるか、若くは腹内に腫瘍生ずる時は、之を現すにより、未だ確實なるものにあらず。

知兩兒體の觸

胎兒境界部

胎兒軸の三十仙迷以上

三 兩胎兒の體部を明かに觸知す 是雙胎の確徴とも云ふべきものにして、即ち外検査により、二箇の兒體部を明かに觸知し得べき場

同強心音の聽取

分婉時の診知

合、例之ば二箇の兒背を兩側に觸れ、又は頭部子宮底に存在するに關はらず、尙骨盤上に於て、他の一箇を觸るゝ時は、其の雙胎なるや疑ひなし。

四 二箇所に於て同強の心音を聽取す 心音を聽診するには、殊に注意して行ふべし。今若し、腹部の兩側に於て、心音を聽取するも、之を以て直に雙胎なりと斷定すべからず。何となれば、心音は能く一側より他側に傳へ得ることあればなり。然れども、精しく之を聽取するに、一箇の心音にして、他側に遠ざかるに従ひ、漸次微弱となり、若くは全く消失し次で或部に至れば、再び高調となり、以て明かに兩箇の心音を區別し得れば、始めて雙胎の確診を下すことを得べし。

五 分婉時に於て知る 一條の搏動なき臍帶脱出せるに關はらず、腹部に於て心音を聽取し得べき時、又は同名の手、或は足二箇を觸知し得る時、或は一兒分婉するも子宮變小せずして、尙一兒の存在を診知し得る時等なり。

第二十三章 妊娠中の攝生法

妊娠は固疾にあらざると雖、甚だ疾病に犯され易きを以て。殊に其の攝生法に注意せざるべからず。

妊娠と疾病

一 飲食物

妊娠中は平素習慣せる生活法を變せざるを良とす。故に總て飲食物は從來の習慣に従ひ、唯其の量の度に過ぎざる様注意すべし。殊に晚餐は少量にして、消化し易き食物を選ぶべし。強き香料、即ち芥子、胡椒、蕃椒及び酸味多き果物、例へば不熟なる蜜柑、又は夏蜜柑、強烈なる酒類、濃厚なる茶、珈琲等、その他茶、大根、胡蘿蔔、午莖、芋類、豆類等、泡醃性の不消化物は之を避くべし。凡そ妊娠の希望する食物にして、害なきものは與ふるを可とす。若し妊婦嘔吐ある時は、消化し易き食物を與へ、數回に分ちて飲食せしむべし。早朝の嘔吐には、臥床内にありて牛乳、其の他の滋養品を食せしめ、一時間を経て起床せしむべし。

有害なる飲食物

二 排尿及び排便

妊婦は多く便秘を來すものにして、若し之あら

便通の方法

ば、努めて室外の運動を爲さしめ、熟したる果物、又は煮たる果物を食せしめ、寢時及び早朝、其の他一日數回、時間を定めて、一杯の清水を飲用せしむべし。殊に其の空腹時を良とす。此の如くするも、尙不通なる時は、溫石鹼水を以て灌腸を行ひ、或は醫の診を請ひ、下劑を服せしむべし。尿は妊娠の四箇月、及び十箇月に於て、頗る頻數の感あるものなれば、其の度毎に、速に排泄せしむべし。尿蓄積し、膀胱緊滿するは宜しからず。産褥に於ては、仰臥位にて排尿せしむるを要す。故に妊娠中より之に慣れしむべし。

過勞の害

三 業務

亦從來の習慣により、平時の如く營ましむべし。唯必ず其の過劇なるを避くるを要す。而して妊娠三四箇月間は、最も流産し易きが故に、大に注意すべし。

四 運動

適宜の運動は、妊婦に取りて甚だ緊要なるものなり。故に日々適當の時間を定め、屋外に出でて散歩すべし。之に反して長座し、或は長く臥床にあり、又は總て室内に於て坐業をなす等は害あり。即ち之が

爲消化不良を來し、又は大便秘結し、時として肛門に痔核を生じ、或は不眠症、神経過敏症等を發す。其の他舞踏、飛跳、乘馬、平坦ならざる道路の車行、長途の汽車旅行、或は重き物を提げ、又は荷ふ等、凡て甚しき身體の運動は大に害あり。

睡眠の注意

五 睡眠 は適度に、且つ規則正しく爲さしむべく、決して不定なる可からず。然れども、若し甚しき睡眠を貪る時、其の意のまゝに放任せば、血行障害、消化不良等を發することあり。

精神の安和

六 精神の保養 妊娠は、極めて精神を安靜に保たしむべきものにして、若し其の分娩を憂ふるが如き時は、助産婦は温言を以て、之を慰諭すべく、且つ助産婦たるものは、妊娠に向て、難産、畸形兒、又は不幸なる分娩の事を語るべからず。精神の劇しき感動は、胎兒に危険を發せしむるものなれば、甚しく驚き、怒り、恐れ、其の他非常の喜び、悲しみ等は注意して避けしむべきものとす。

衣服の注意

七 衣服

妊娠の衣服は、季節に應じ、稍々温暖なるを良とす。總て

精神の激變を忌む

清潔法

狭く窮屈なる衣服、殊に胸部、腹部等を緊縛するものは用ふべからず。又労働中は、必ず之を緩めざるべからず。但し之に代ふるに、弾力性の胸巻を緩く締むるは害なし。又適當なる腹帯は、妊娠の後半期に至りて必ず用ふべく、殊に經妊娠にありては、最も必要なるものなり。

八 清潔法

或は三日に適宜に温浴を爲さしむべし。然れども、長時間高温度の浴は、子宮を收縮することあるが故に、注意を要す。虚弱なる妊娠にありては浴後一時間、身體を安靜ならしむるを佳とす。坐浴、脚浴、冷水浴、又は頻回の温浴は禁すべし。然らざれば、流産若くは早産を致す事あり。其の他妊娠の頭髪は屢々梳り、襯衣、及び敷布は時々清潔に洗濯せしむべし。又妊娠の外阴部は、妊娠末期に至れば、分泌増加するが故に、一日二三回づつ微温湯を以て洗滌せしむるを要す。腔内も亦多量の分泌物ある時は、「イブリガートル」を用ひ、其の嘴管を僅かに腔内に送入し、煮沸殺菌水、或は一布仙の微温リゾフォルム水を以て洗滌せしむべし。

九 交接 は子宮に充血を來すを以て、流産を起すことあり、殊に、八週乃至十六週の間は注意せんことを要す。妊娠末期に至れば、必らず行ふべからず。然らざれば、産褥熱、其の他の疾病を來すの危険あることを論すべし。流産の癖ある婦人は、特に、交接は最も慎重なるべきものとす。

十 乳房 は溫暖に保ち、衣服の壓迫を避けしめ、乳頭は毎日冷水を以て洗ひ、且つ指を用ひて之を牽引し、其の形狀を美良にし、又時々冷水を以て洗ひ或は其の部に酒精を塗布して、皮膚を強固ならしむべし。

第四編 正規分娩及び其の取扱法

第一章 分娩

分娩 とは、胎兒及び其の附屬物、即ち胎盤、臍帶、卵膜、羊水等が自然の力によりて、母體より排出せらるるを云ふ。胎兒を排出する所の自然の力は、之を分娩力或は産出力と稱し、主に陣痛と稱する、一種の子宮收縮より成り、腹壓及び腔壁收縮力も、亦之を補助するものなり。而して胎兒は此の産出力により、母體より排出せらるるの際に於て、必ず一定の道路を通過す。之を産道と云ふ。分娩を左の二種に別つ。

一 正規分娩 とは、胎兒及び其の附屬物の排出、並に胎兒の通過すべき産道、及び産出力等に異常なく、自然に産出し、然も母兒兩體に害なきものを云ふ。

二 異常分娩 とは、胎兒及び附屬物、又は産道、或は産出力等に異常を生じ、母體又は兒體に危険を來すの虞あるが爲に、人工遂娩術を要す

人工産産術

常産

遅産

早産

流産

産道を二種に分つ

るものを云ふ。

又分娩の時期に關し、之を種々に區別す。

一 常産 とは、妊娠三十九週以後、四十週迄に分娩するを云ふ。

二 遅産 とは、妊娠四十週以上にして、分娩するを云ふ。

三 早産 とは、妊娠二十九週以後、三十八週迄の分娩にして、小兒は

既に胎外に於て生活を営み得べきものなり。

四 流産 とは、妊娠二十八週末に至らずして分娩するものを云ひ、

小兒は胎外に於て生活し能はざるものなり。然れども、近時學術の進歩により、種々の器械、例へば保育器の如きもの發明せられたれば、嚴重なる注意を與へて養育する時は、稀に生命を保つべし。

第二章 産道

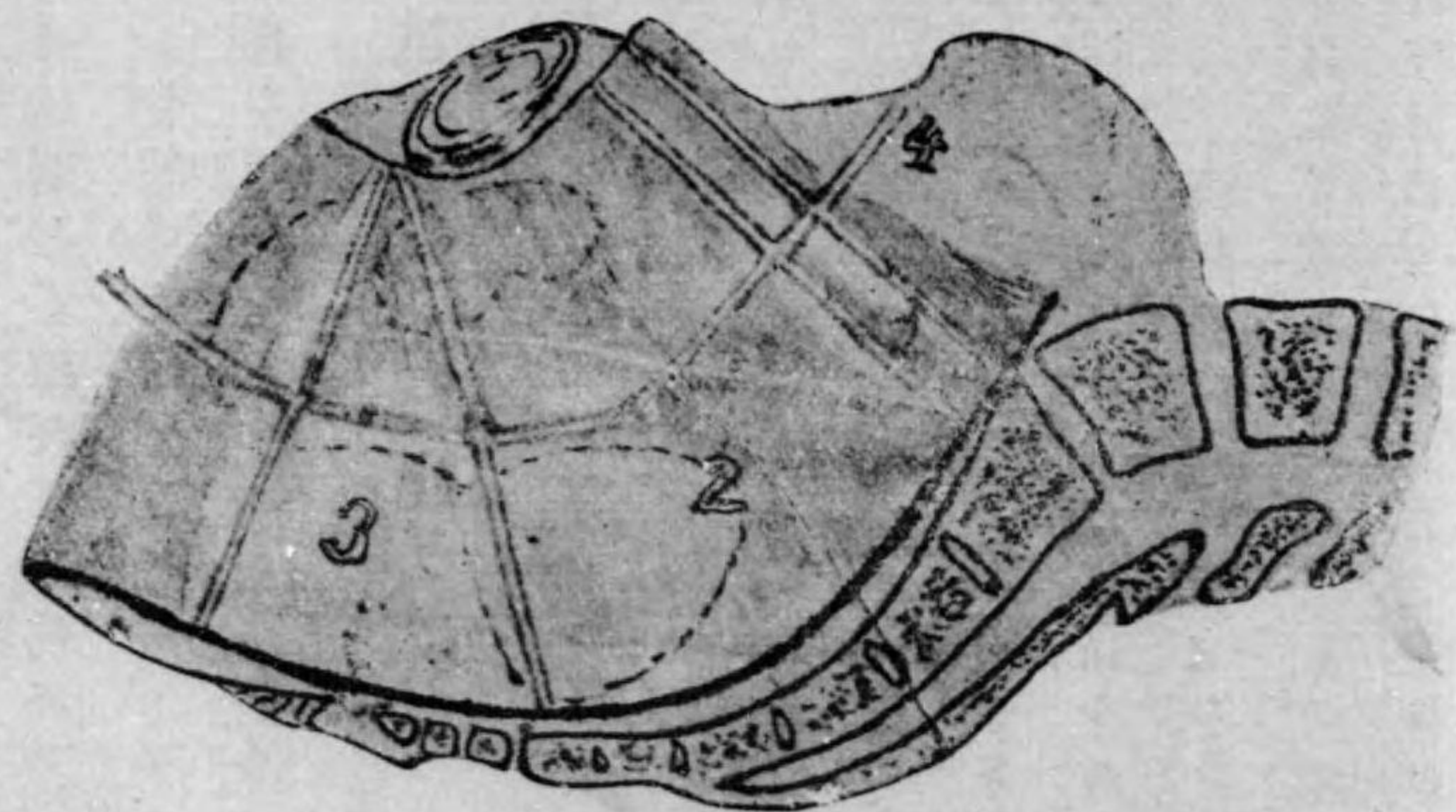
産道 は、之を二種に分ち、骨部産道及び軟部産道と云ふ。

一 骨部産道 とは、即ち骨盤腔を云ひ、小兒を通過せしむべき部

骨部産道

軟部産道

第九十五圖 骨部及軟部産道



1 骨盤入口 2 骨盤腔 3 骨盤出口 4 産道軸

位は、管状をなすを以て、一之を骨盤管と稱す。而して此の骨盤は分娩の際に僅微の擴張を營むものなれども、其の度甚だ僅少なるを以て、著しき關係を有せず。故に、假りに之を一定不動のものと見做すを得べし。

二 軟部産道 とは、骨盤の内部に位するものにして、即ち、子宮頸管、膈及び外陰部を云ひ、骨部産道に反し、能く延張して、胎兒の通過を自由ならしむ、而して、分娩

の際、會陰は著しく延長し、爲に腔口は全く前方に向ふを以て、軟部産道の方向は、骨盤の誘導線に従ひ、前上方に向ふものなり。されば胎児は常に此の方向を以て娩出すべし。是分娩の處置上注意すべき事とす。

第三章 産出力

産出力

とは、一に排出力或は娩出力とも云ひ、陣痛、腹壓及び腔壁收縮力の三者を稱合せものにして、此の力により、胎児を母體より産出せしむるものなり。

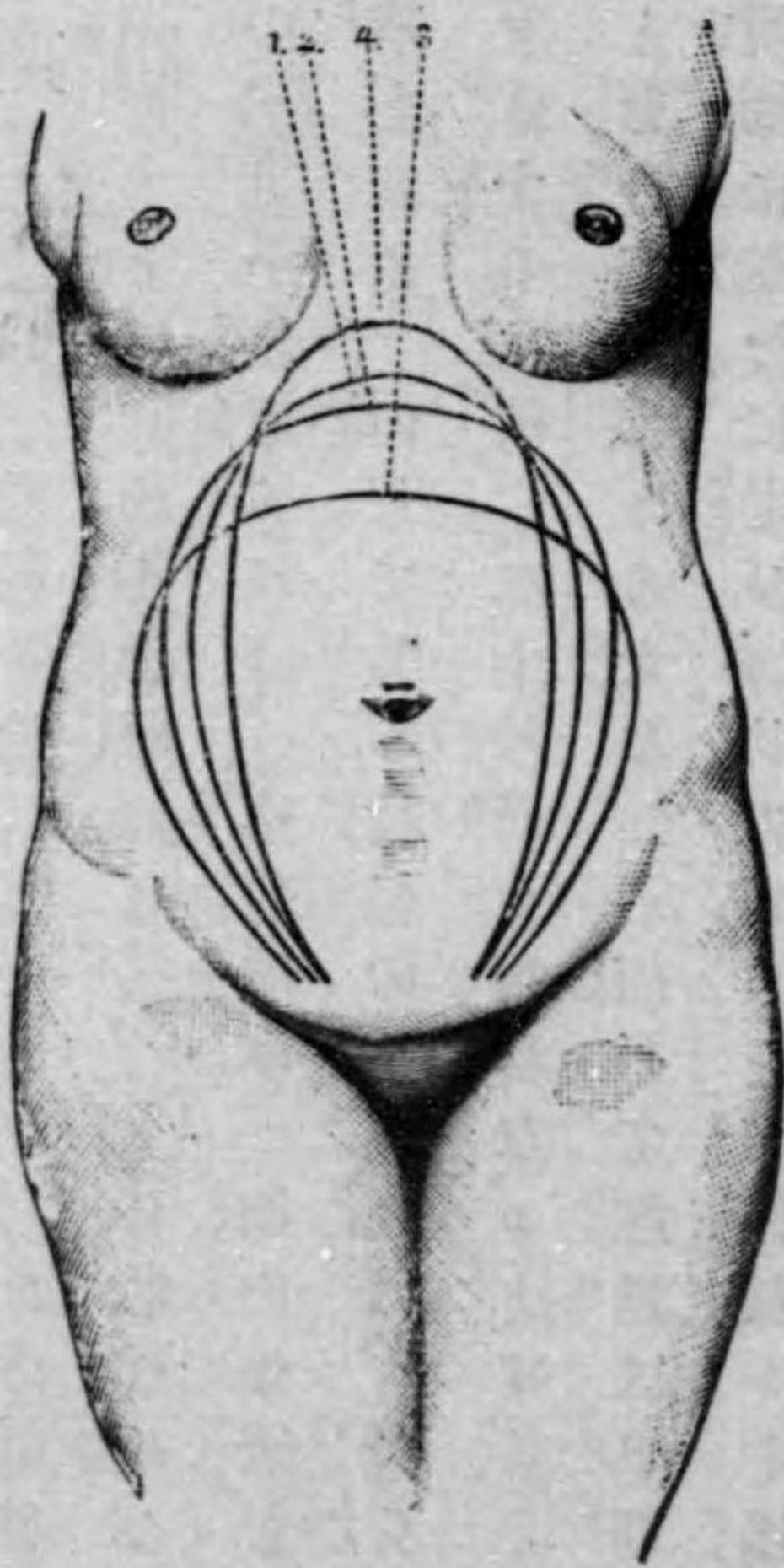
陣痛

産出力
陣痛
腔壁收縮力

正規陣痛の
発作

一 陣痛 とは、定期性に反覆發作する所の子宮筋肉の收縮にして常に疼痛を伴ふを以て此の名あり。産出力の中最も主要なるものなり。而して其の收縮する毎に産婦は疼痛を感ずべし。此の如き陣痛發作は、不隨意運動にして、産婦の意を以て之を制し、或は之を促すこと能はずと雖、時として或は強く或は弱からしむる事あり。又陣痛は温熱、擦摩等の刺戟を子宮に施す時は、反射的に之を催進し得べし、陣痛發作すれば、子宮は收

第九十六圖



- 1 妊娠満九箇月
- 2 妊娠満十箇月
- 3 開口期終末の子宮
- 4 娩出期

妊娠末期及び分娩時に於ける子宮の状態

縮して漸次硬固となり。遂に其の極度に達すれば、殆んど石の如く硬く、且つ前方に突隆して穹状をなす。故に此の際手を腹上に貼すれば、明かに

其の收縮せる子宮を觸知し得べし。而して其の發作時に於ける疼痛は、始は弱く、先づ腰部及び薦骨部に起り、次第に強くなり、進んで下腹部に至

り、子宮弛緩して、再び舊形に復すると共に、疼痛も亦緩解すべし。

陣痛に三期の別あり進期、極期、退期と云ふ。

進期 とは、最初子宮の収縮徐々に起り、漸次強劇となるの期を云ふ。

極期 とは、収縮極度に達し、暫時此の状態に止まるの期を云ふ。

退期 とは、極期を終れる後、其の収縮再び徐々に弛緩するの期なり。

此の三期を経過すれば、疼痛歇み、筋肉弛緩して暫時休止し、之を陣痛

休止時と云ふ。而して其の収縮の全経過は、數分間に亘ると雖、一陣痛中

疼痛を感じるは僅に二十秒乃至百秒なりとす。その中極期最も長く進期と

退期とを合するよりも大なり。而して進期は退期よりも長しとす。又陣痛

は分娩期に進むに従ひ、其の強さと發作數とを増加すべし。此の如く陣痛

に發作及び休止あるは、最も緊要なる事項にして、之が爲に能く胎兒を下

降せしめ、娩出することを得べし。若し絶えず子宮収縮する時は、血行を

障害して胎兒を窒息死亡せしめ、決して産出せしむること能はざるものと

す。

假陣痛 とは、妊婦の腸加答兒、痙攣或は腸内に風氣の發生したる時

若くは便秘したる時、其の他種々の原因によりて、屢々下腹部に疼痛を發

するものにして、正規の陣痛と混同すべからず。

分婉痛 とは、子宮の収縮によりて發する疼痛、即ち陣痛と、胎兒が

軟部産道を通ずるの際、著しく之を延長し、且つ骨盤壁を壓するが爲に

發する疼痛とを合せ稱するなり。故に分婉痛は、兒頭將に外陰部を出でん

とするに當りて最も強し。されば陣痛と分婉痛とは、決して同一のものに

あらざるなり。

二 腹壓 とは、腹壁の筋肉緊張によりて生ず、産婦は隨意に之を營

み得べきも、分娩の末期、殊に兒頭將に産出せんとする際、不隨意に起り、

産婦自ら之を制すること能はざるに至る。所謂努責陣痛之なり。而して此

の腹壓は大に腹内壓を助けて、胎兒の娩出を容易ならしむるを以て、産出

期に於ては缺くべからざるものなり。今分娩に際し、兒頭既に腔中に下り

陣痛發作するや、産婦は膝關節を屈し、兩足を臺上に支へ、且つ手に物體

を握り、深き吸氣を營み、以て呼吸を停止し、同時に腹筋を収縮せしめ大に努責して之を壓出せんとす。是即ち腹壓なり。而して陣痛休歇すれば、腹壓も亦共に止むに至るべし。然れども又脊髄病失神或は深魔酔等、腹壓なきも遂婉し得べきにより、婉出力とは全然關係なく、只腹壓によりて陣痛も補助すべきものなり。

腹壁の收縮力

三 膈壁の收縮力 は、敢て緊要なるものに非ず、只後産を膈内より排出する作用を有す。

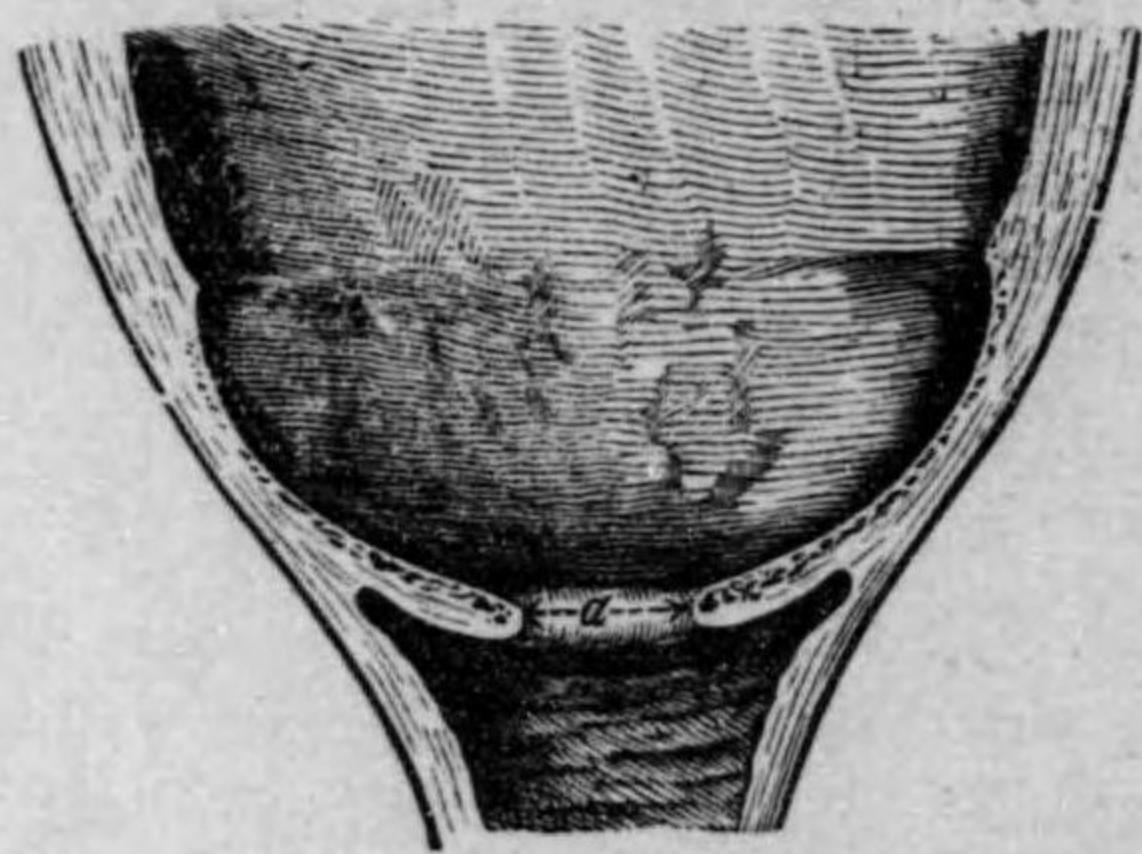
第四章 正規分娩の経過

分娩の前徴

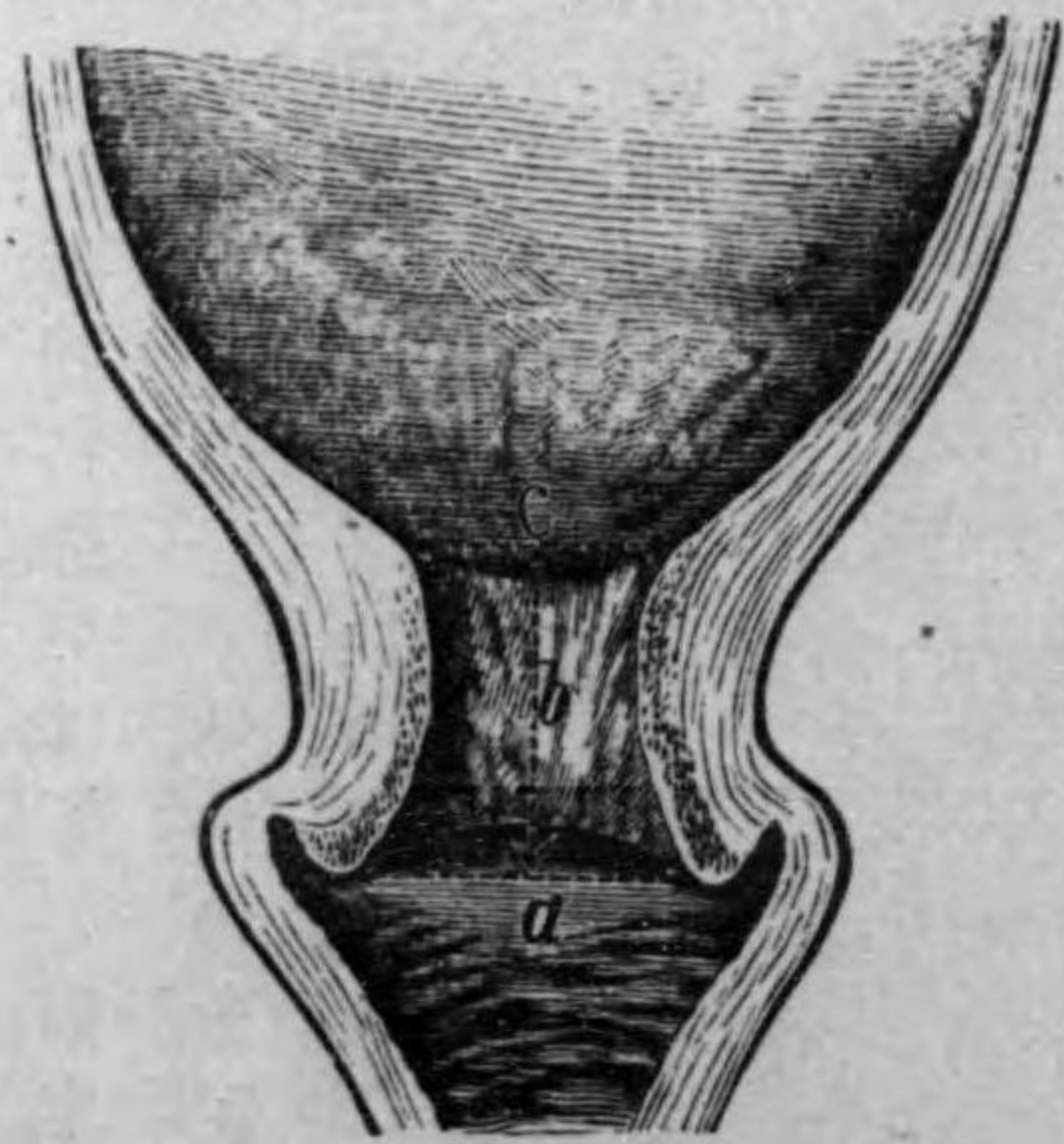
分娩 は、常に一定の前徴あり、而して後に來るものなり。前徴とは、一 前陣痛 の發作強く、且つ頻々たることにして、妊娠の後半期に於ては、時々子宮に收縮を發すと雖、甚だ弱くして、妊婦は之を自覺するに至らず。然れども末期に達すれば、疼痛を伴ひ、妊婦は其の收縮を感ずるに至る。是即ち前陣痛なり。而して此の陣痛は漸々強劇となり、頻發し

分娩時の外
検査
検査時の内

圖七十九第



圖八十九第



a 子宮外口
b 子宮頸管
c 子宮内口

て殆んど眞の陣痛と區別し能はざるに至れば、既に分娩の切迫せるを知るべし。此の際
二 外検査 を行ふに、兒頭は深く骨盤内に下降し、全く固定せらる。
三 内検査 を施す時は、初産婦に在ては、頸管殆んど消失して紙の如く薄くなり、外口は僅かに哆開す。經産婦に於ては、内口も亦開きて全

頸管は既に指を通せしむるに至る。然れども子宮腔部は短縮するのみにして消失することなし。而して兒頭は初産婦に於ては頗る固定すべし。

四 腔壁 は、弛緩して柔軟となり、著しく粘液の分泌を増加し。
五 妊婦 は、身體の運動に困難を感じ、且つ兩便共に頗る頻數を訴ふ。

次で正しき陣痛を發し、子宮口の開大を始め、之即ち分娩の初期にして之より其の婦人を産婦と名く。

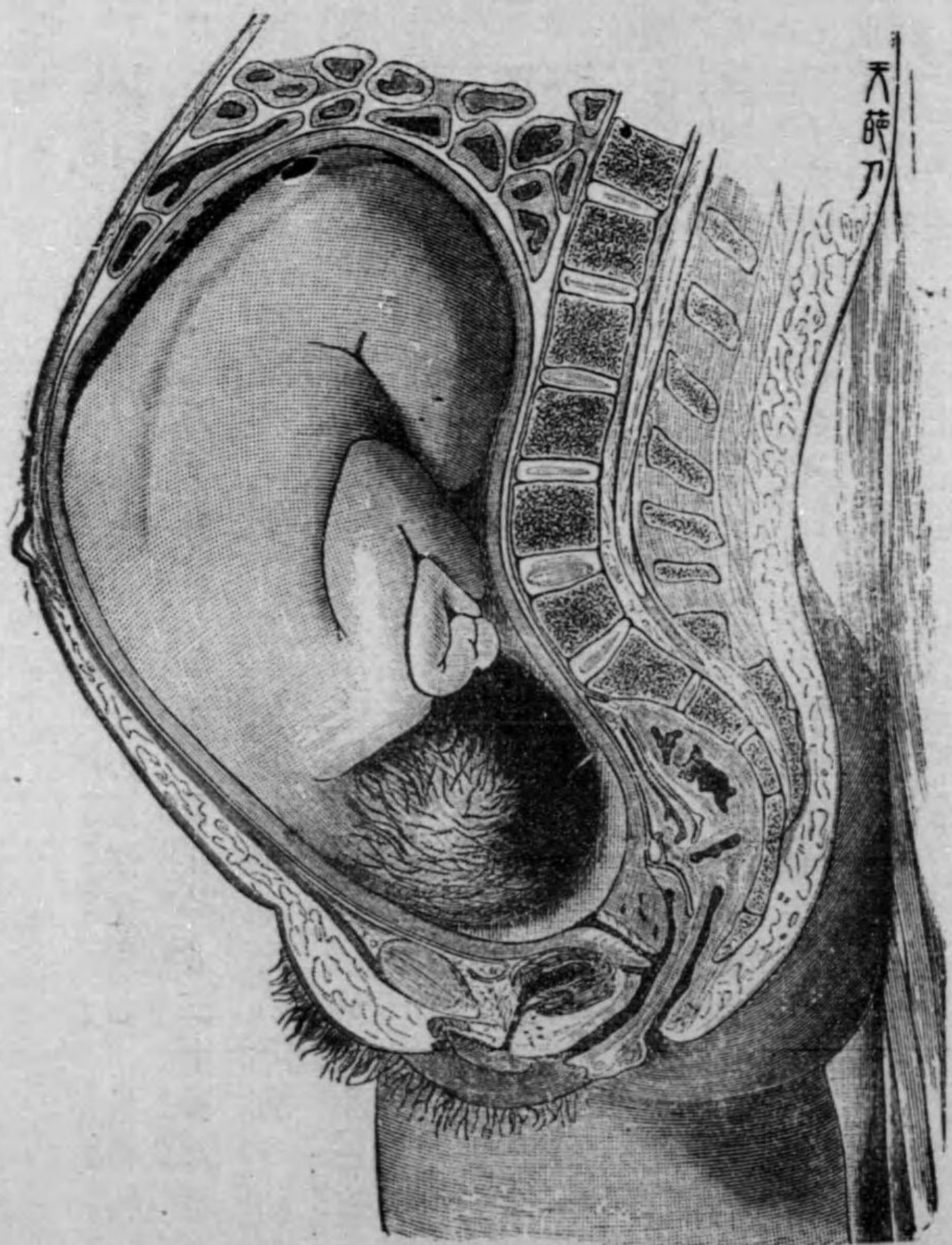
分娩の経過を次の三期に區別す。

- 第一期分娩即ち開口期
- 第二期分娩即ち産出期
- 第三期分娩即ち後産期

第一 開口期(第一期分娩又準備期)

開口期 とは、正しき陣痛の發作に始り、子宮口全く開大するの時期

第九十九圖



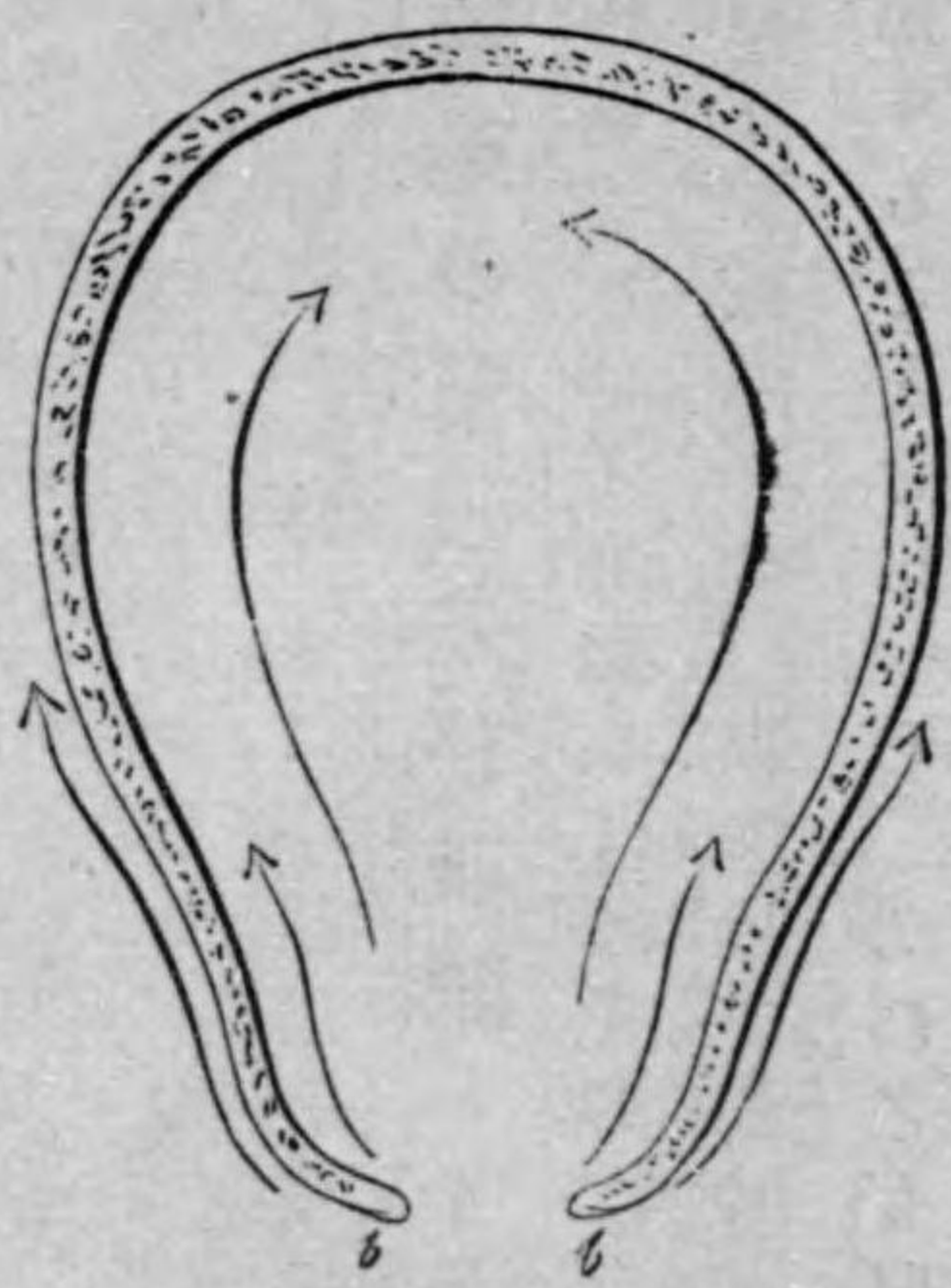
管頸宮子び及宮子るけ於に期口開

にして、此の陣痛を開口期陣痛或は準備陣痛と云ふ。今其の順序を述べれば左の如し。

一 開口期陣痛の發作 分娩の前徵完備し、最初約一分乃至一分半なれども、後には三乃至五分となり、發作時にも三十秒乃至五十秒持續するに至れば、開口期陣痛に移行せるものなり。此の陣痛の始に於ては、下腹部及び腰部緊満の感覺著しきも、疼痛は甚だしからず、次で漸次強劇となり、其の度數を増加するものなり。

二 胎胞の形成 開口期陣痛の發作するに至れば、下方に存する卵膜の一部分剝離せらる。此の際羊水は陣痛の爲下方に壓せられ、其の一部は兒頭と卵膜間とを通つて下方に集り、剝離せる卵膜を球狀に膨出せしむ。而して頻回の陣痛發作により、此の中の羊水は漸々増量するが爲に、益々膨大して子宮頸管内に進出し、遂に子宮外口に達し以て之を開大す。此の如く卵膜の一部分が子宮外口に膨出せるものを胎胞或は卵胞と稱し。此の中に存する羊水を前羊水又は第一羊水或は第一胎水と云ふ。

第百圖 子宮開口期の状況



(天然の大の五分の一)

三 子宮口の開大 子宮口は二種の力によりて開大せらる。第一は開口期陣痛にして、其の發作毎に子宮口縁は延長して薄くなるのみならず、漸々上方に牽かるゝが故に、子宮口は次第に開大すべし。第二は胎胞の力にして、漸次膨大するが爲、子宮口は自然に上方より壓開せらるゝものとす。而して胎胞の形成せらるゝ際、子宮口は陣痛の力により開大するものにして、其の全く開大する時は、直徑約十仙迷の大きさを有し、腔管と一管をなし産出期に移行す。

助産婦は分娩の経過を醫師に通知し或は記録に記入する必要あれば、その大小を理解し易からしめんが爲左の如く假定するを良とす。

一 子宮口十錢大に開大す(又一指大約一仙迷)

- 二 子宮口二十錢貨大に開口す(又二指直徑大約二仙迷)
- 三 子宮口五十錢貨大に開口す(又三指直徑大約三仙迷)
- 四 子宮口壹圓貨大に開口す(又四指直徑大約四仙迷)
- 五 子宮口全部開大す(又十指直徑大約十仙迷)

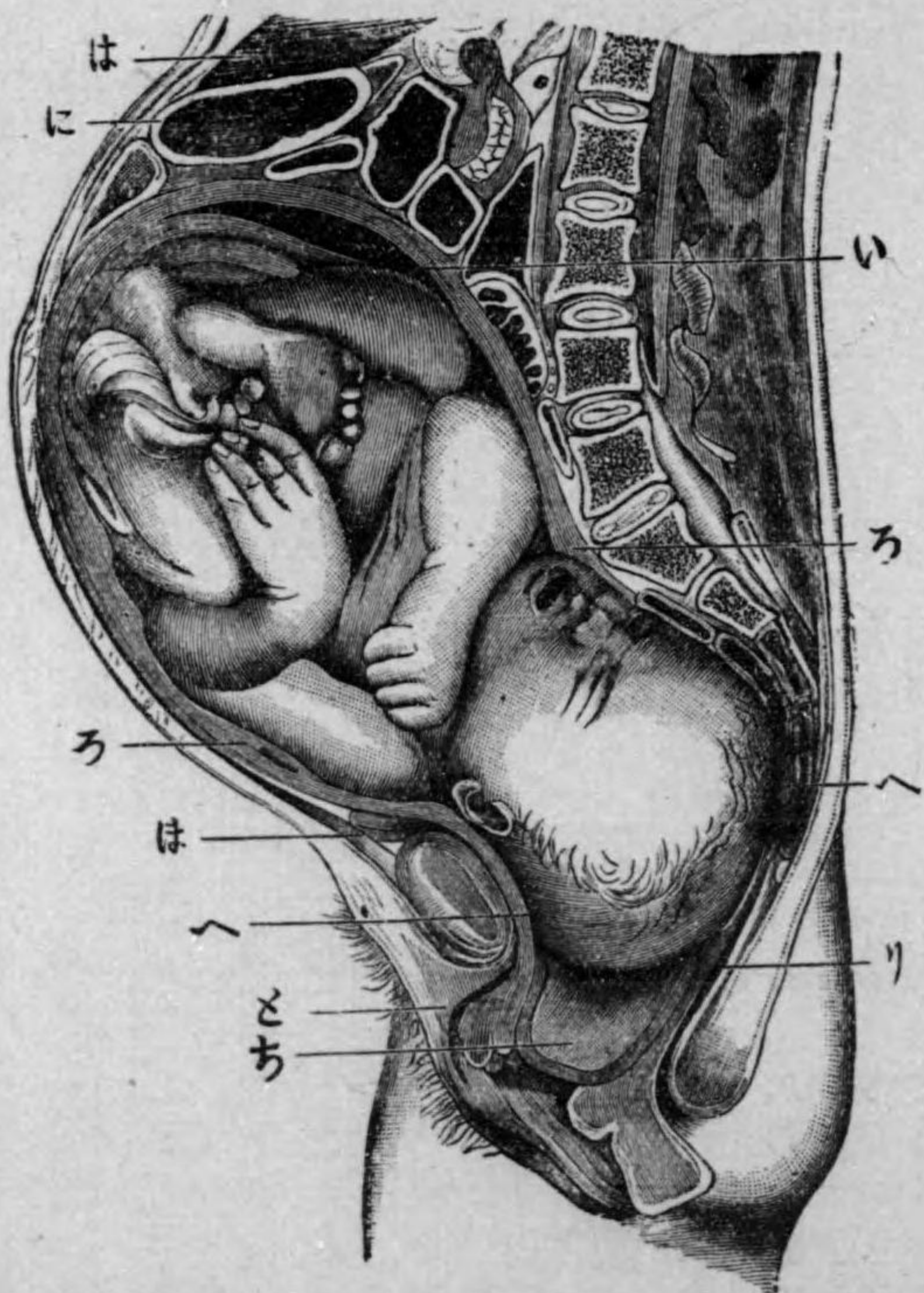
四 分泌物の増大及び血液の混入

開口期に於ては、腔内の分泌物頗る増多し、初め透明粘液様なれども、胎胞形成の爲、卵膜の一部分離するのみならず、其の膨大によりて、子宮口開大せらるゝに際し、口縁甚だしく緊張して、遂に小裂傷を生ずるにより血液を混ざることあり。

胎胞の緊張と破開

五 胎胞の緊張及び破開 胎胞は始め陣痛時に於ては緊張膨出すと雖、休憩すれば子宮弛緩するを以て、前羊水は再び子宮腔内に歸るが故に、胎胞亦弛緩す。此の際内診する時は、能く卵膜を隔て、胎兒の先端部を觸知することを得べし。然れども開口期の終りに至れば、兒頭深く骨盤内に下降するが故に、之と卵膜間に於ける腔隙を鎖し、陣痛休憩時と雖、前羊水をして子宮腔内に歸流するを得ざらしめ以て絶えず緊張す。此の際

第 百 一 圖



- 胎胞の形成
- い、胎盤
- ろ、收縮輪
- は、肝臓
- に、胃
- ほ、膀胱
- へ、外子宮口
- と、尿道
- ち、胎胞
- り、直腸

子宮口は既に直徑七仙迷以上に開大せり。此の如く胎胞弛緩せざるに至れば、

之を形成せる卵膜は遂に其の緊張に耐ふること能はずして一刹那に破

第四編 正規妊娠及び其の取扱法 第四章 正規分娩の経過 二二二
裂し、前羊水即ち第一羊水を漏す、之を前期破水と云ふ。前羊水の量は二十乃至三十瓦なり。次で陣痛起り、兒頭骨盤内に下降し遂に胎胞緊張し破裂するものなれども、時として胎兒は全く卵膜に被包されたるまゝ娩出することあり。之を幸朝兒或はふくろ兒と云ふ。

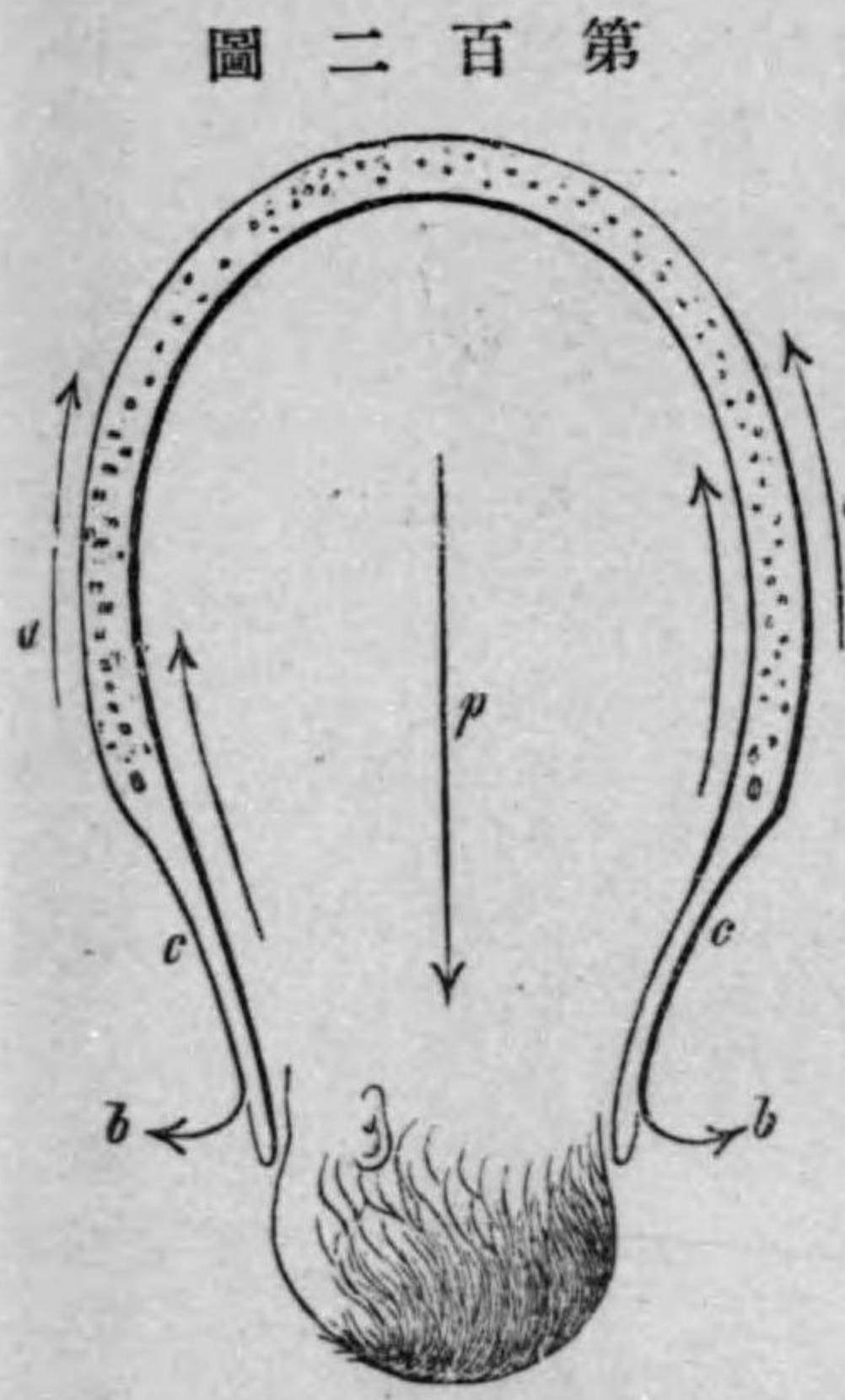
第二 産出期 (第二期分娩)

産出期

は、子宮口の全開大に始まり、胎兒の娩出に終るものにて、左に其の順序を述べべし。

一 産出期陣痛の發作

破水の後陣痛少時休止し、次で開口期陣痛より更に強く、且つ其の發作時間永くして休憩時少なき所の陣痛を來す。之即ち産



圖二百第 況狀の痛陣るけ於に期出娩 (一分五の大然天)

出期陣痛なり。此の陣痛は益々強劇となり。遂に兒頭將に陰門を出でんとする時は、最も劇烈にして全身震戦するに至る、之を震戦陣痛と稱す。又前羊水は陣痛の發作毎に僅かづゝ漏泄して産道を濕し、滑澤ならしむるものなり。

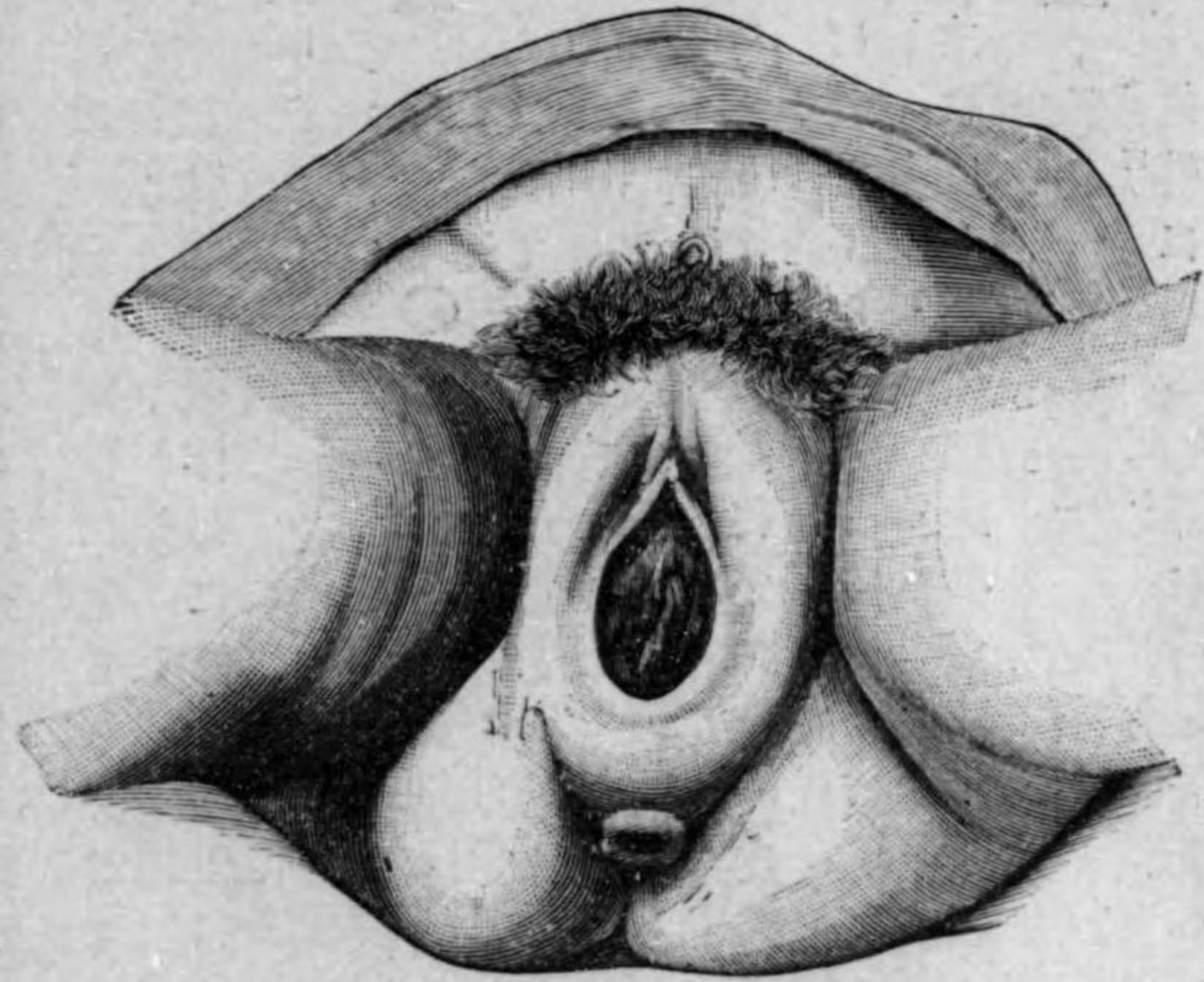
二 産瘤の形成

産出期陣痛發するに至れば、兒頭は著しく下降するものにして、其の産道を通過するに當り、兒頭の下向部は劇しく産道より壓迫せられ、血液此の部に鬱滯し、漿液は血管外に滲出し、漸々腫張す、之を産瘤と云ふ。故に此の部の皮膚は暗紫色を呈すべく、殊に其の大なるものに於て著しとす。産瘤は産出期の経過愈々長きときは、益々大となるも、之に反し其の経過甚だ短きときは發することなし。

三 腹壓の發起

兒頭深く腔内に下る時は、産婦は兒頭を壓出せんが爲、近傍にある物品に手足を支へて呼吸を止め、強く努責す。此の腹壓は幾分か産婦をして陣痛に堪へ易からしむるものとす。此の際診すれば、陣痛發作時に於ける兒頭の下降は頗る明かに觸知し得べく、休憩時には少

圖三百第



圖の臨排頭兒

第四編 正規妊娠及び其の取扱法 第四章 正規分娩の經過
しく退却するを診知す可し。而して兒頭既に

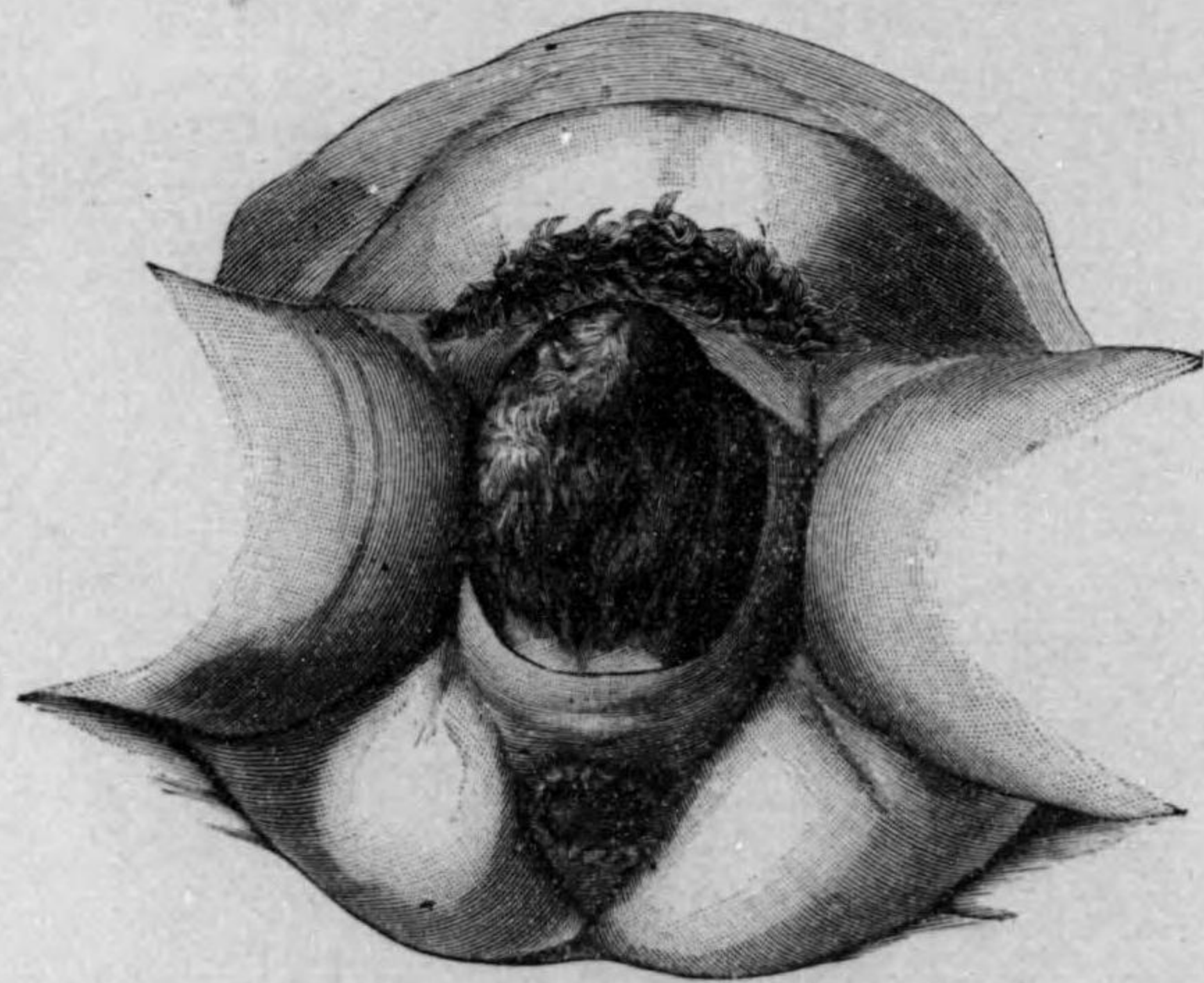
に陰門を出でんとするに至れば、陣痛は最も劇烈となり、同時に腹圧も亦不随意に發す。此の如き強き陣痛の發作及び腹壓の發作時に於ては、産婦の苦悶は最も極度に達し、顔面潮紅、口唇青色となり、且つ乾燥し、全身冷汗を流し、震戦するに至る、即ち震戦陣痛となりたるものなり。

四 兒頭の排臨

兒頭益

益下降する時は、膀胱、直腸を壓迫するが爲、頻りに利尿、排便の感覺を催し、會陰は著しく

圖四百第



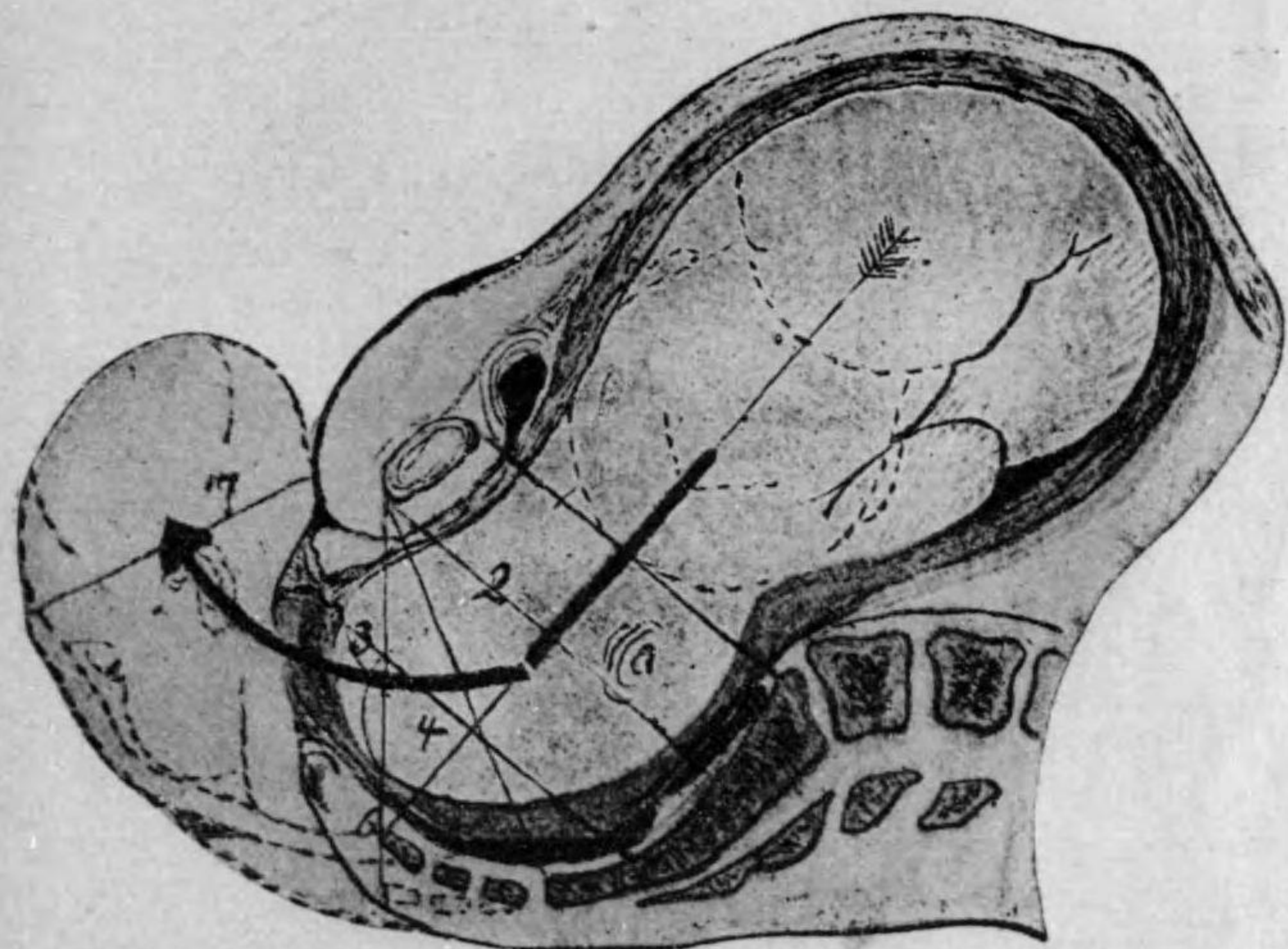
圖の露發頭兒

五 兒頭の發露

兒頭陰門に排臨し、

延長膨出せられ、長さ廣さ共に平素の二倍以上に達し、且つ頗る菲薄となり。肛門は哆開翻轉す。故に若し此の時直腸内に大便ある時は、不知不識之を漏すことあり。而して兒頭愈々下降し、陣痛の發作時には、其の一部陰裂間に現はれ、陣痛間歇時には再び腔内に退き、數回反覆して外陰部を開張せしむ。此の如く兒頭が陣痛に従つて現はれ、或は退きては又現はるるを兒頭の排臨と云ふ。陰門全く壓開せらるゝ時は、

第五百圖 分娩の程道圖 (自然の大約の四分の一)

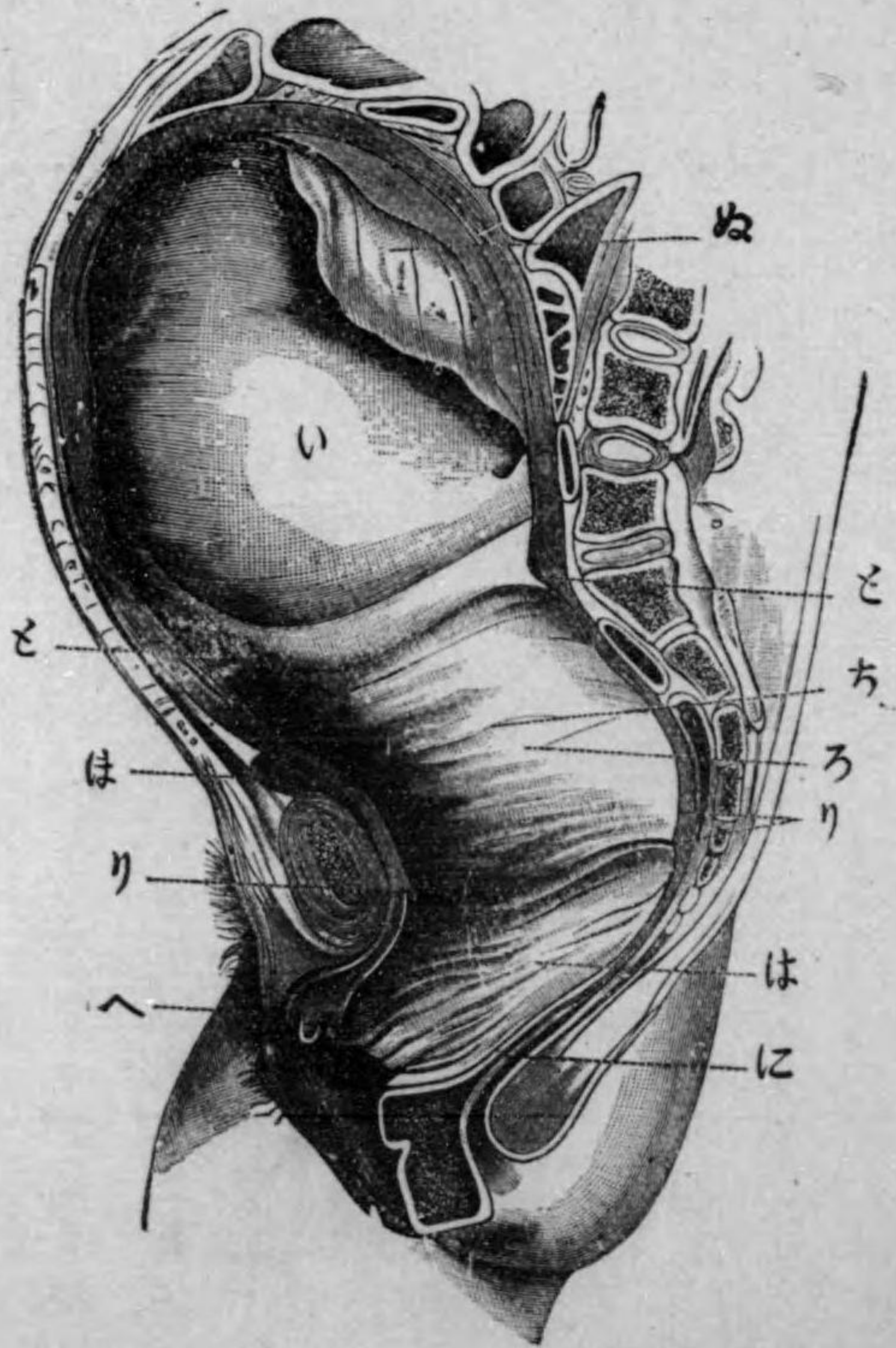


面断縦宮子るけ於に後出産

陣痛休息時と雖、再び退くことなきに至る、此の状態を児頭の發露と云ふ。次で起る強き陣痛により児頭は全く産出す。此の際には知覺過敏なる陰門が強く開張せらるゝを以て分娩經過中最も疼痛の劇しき時なり、時としては児頭の將さに發露せんとするに際し、分娩遅延する時は、更に頭部は陰裂間に絞挫せられて腫脹す、之を第二産痛と云ふ。

六 兒體の産出 兒

第六百圖 分娩後道産の状況



い 子宮體
ろ 子宮頸
は 陰
に 直腸
ほ 膀胱
へ 尿道
と 收縮輪
ち 子宮内口
り 子宮外口
ぬ 胎盤

頭産出すれば、陣痛暫時休止し、産婦は一時爽快を感ずるも、又直ちに次の陣痛發して肩胛を出し其餘の體部は難なく娩出す。此の如く兒體の娩

出は頗る容易なるものにして、僅かに二三回の陣痛にて足れりとす。之れ

産道は既に兒頭産出の爲に充分開大せらるゝを以てなり。又時としては兒頭と共に兒體を一頓に娩出することあり。

七 後羊水の流出 兒體産出すれば、殘餘の羊水は僅かに血液を混じて流出す、之を後羊水又は第二羊水、或は第二胎水と云ふ。

第三 後産期 (第三期分娩)

後産期 とは、胎兒の娩出してより後産の全く排泄し終るまでを云ふ、其の順序左の如し。

一 産婦著しく爽快を感じ 胎兒全く娩出すれば、産婦の苦悶は忽ち消失し、頗る爽快を感じ、此の際時として惡寒を覺え、或は著しく寒戦することあり。

二 後産期陣痛の發作 胎兒娩出後、一二分乃至十五分間を経れば、再び子宮の收縮を來す。之を後産期陣痛と云ふ。此の陣痛は開口期或は産出期陣痛よりも遙かに微弱なるを以て疼痛も僅微なり。

後羊水の流出

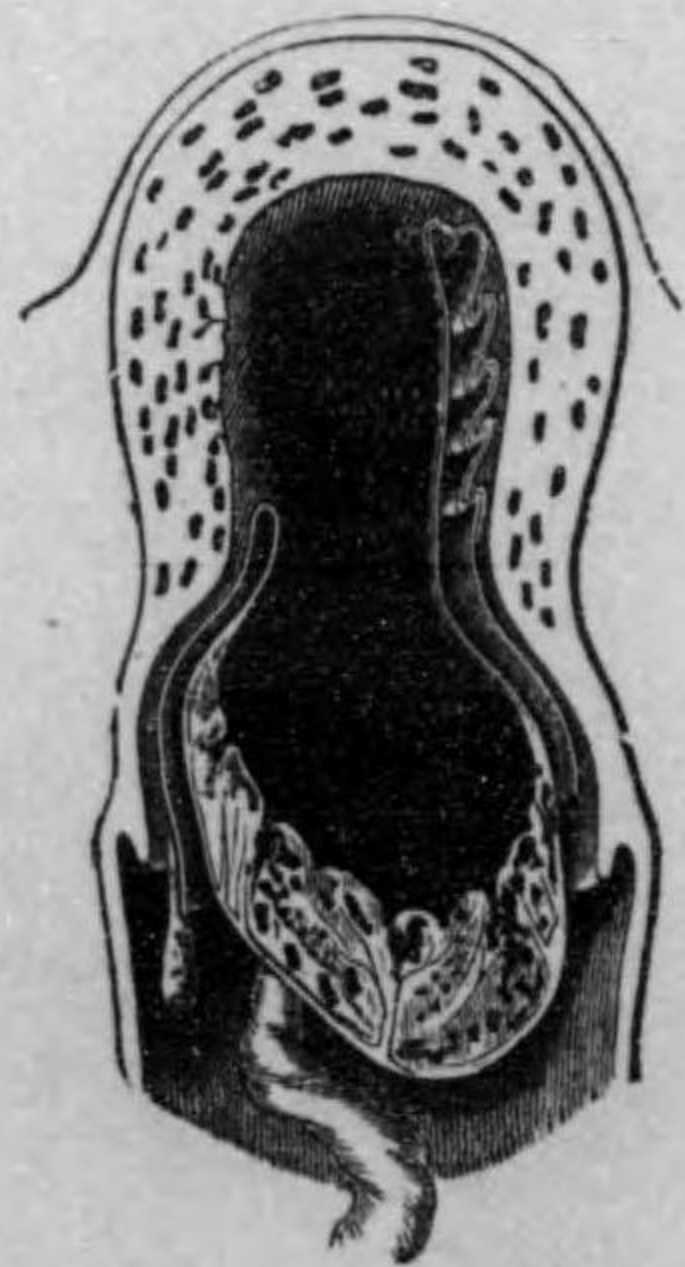
後産期の次

後産期陣痛

圖七百第



後式エチルユシ 況状の出娩産 (一の分五の大然天) 圖八百第



況状の出娩産後上同 (一の分五の大然天)

三 胎盤の剝離 後産期陣痛を發する時は、胎盤は全く子宮内面より剝離して漸く下方に壓出せらる。之と共に卵膜も亦剝離するものなり。

四 胎盤剝離に由る出血 子宮の血管は胎盤部に於て網の如くなり。此の中に進入せるを以て、今胎盤が子宮より剝離するときは、其の血管は断裂して出血するに至る。故に陣痛發すれば、此の血液は追はれ

圖九百第



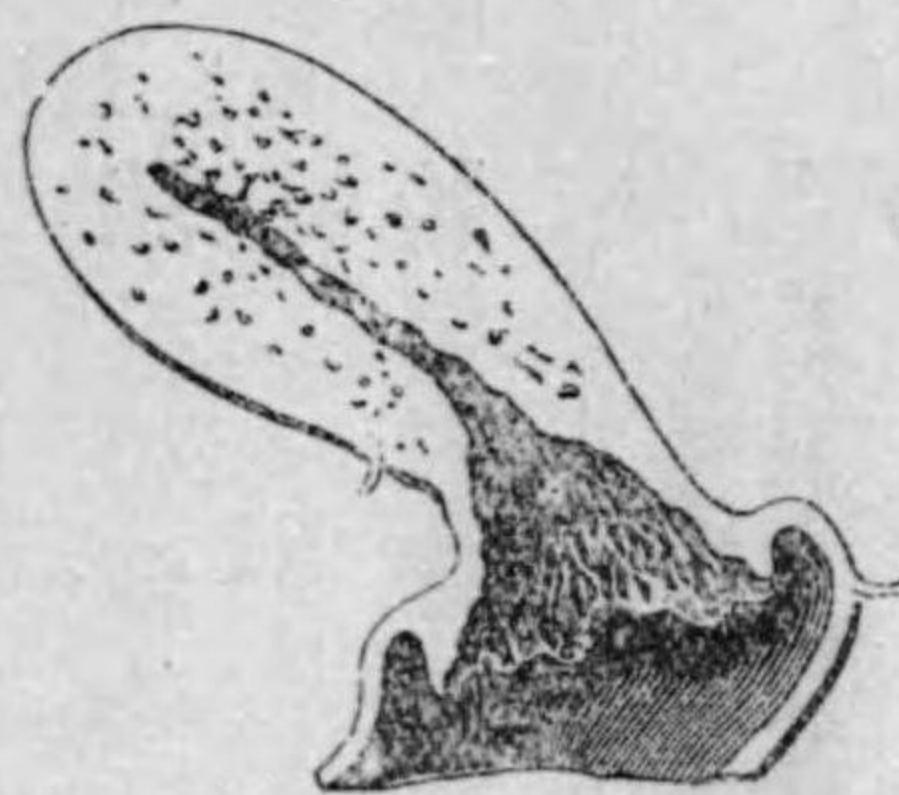
式ンカンダ 況状の出娩産後 (一の分五の大然天)

に陣痛發すれば、此の血液は追はれ

て腔内より流出するものなり。又子宮の血管は多少卵膜にも移行せるを以て、其の剝離に際しても僅少の出血を現はすものとす。然れども此の出血は胎盤及び卵膜が全く剝離すれば、子宮の収縮によりて血管の断裂口は自然に壓閉せられて止血するものなり。故に若し子宮の収縮充分ならず断口閉鎖せらるゝことなくば、危険の大出血を來すに至るべし。

危険なる大出血の因

圖十百第



子るれなと虚空し出排産後
者るたし斷縦に後前を宮
(一分五の大然天)

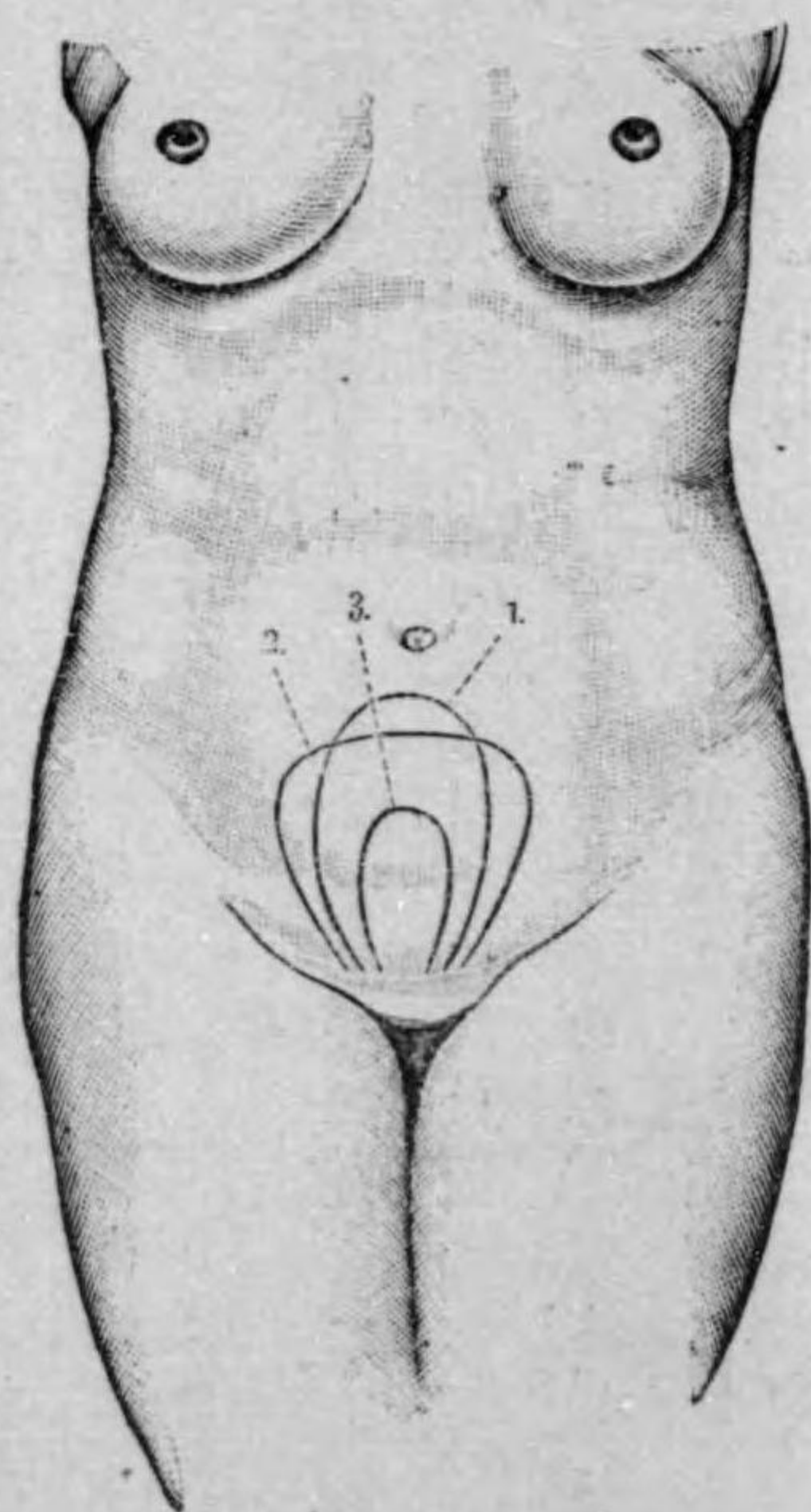
正規分娩に於ける出血量は、西洋人にありては六十乃至五百三十瓦、即ち平均二百二十五瓦にして、その五分の一は漿液状となり。他の三分の二は凝血となり排出す。

五 後産の産出

後産期の陣痛によりて剝離せる胎盤は次第に下降し、卵膜は翻轉して其の子宮面を包み、胎兒面を現して遂に腔内に出で、腔壁の収縮力により外部に産出せらる。之をシユルテエ式胎盤剝離と云ひ、

圖一十百第

態形の子宮るけ於に期産後



- 1 胎兒娩出後卵圓形の子宮
- 2 後産排出後短廣なる子宮
- 3 後産排出時狭長なる子宮

時としては卵膜翻轉せずして、其の子宮面を包む事なく娩出する事あり。

圖二十百第



子るれなと虚空し出排産後
圖るたし斷縦に右左を宮
(一分五の大然天)

之をダンカン式胎盤剝離と名く、蓋し通常胎兒面を以て現はるゝもの多し。後産既に産出すれば子宮は硬き球形を成し、其の底は恥骨縫際上凡そ四指横徑の高さにあり。

第五章 分娩の持續

分娩に要する時間 は、人々により種々の差あるものにして、即ち娩出力陣痛の強弱、産道の廣狹、胎兒の大小等に關係するものなり。故に經産婦は、既に其の産道一旦開大せられたるが爲抵抗弱く、初産婦の凡そ半分の時間を以て娩出せらるべし。日本人に於ける分娩時間は、歐洲人に比して、全經過約三分の二に短縮せり。即ち初産婦凡そ十二時間、經産婦凡そ六時間なり。而して三十歳以上の初産婦は、産道開大すること遅きが爲に、分娩も亦長時間を要するものとす。西洋人に在りては、日本人よりも分娩時間を要すること多く、初産婦凡そ二十時間、經産婦凡そ十二時間なり。又分娩各期中、最も長きは開口期にして、初産婦に於て凡そ九時間を要し、産出期は三時間を要するのみ、經産婦は此の二期に於ては、著しき短時間を以て分娩するものなり。後産期に於て、胎盤の腔内に排泄せらるるには、後産期陣痛發作後、三十分を要するものなれども、既に腔

晝夜出産数の差異

内に出づれば、爾後只腔壁の收縮のみを以て娩出せらるるが故に、若し自然に放置する時は、一時間乃至一時間半を費し、漸く後産産出するものなり。然れども胎盤腔内に達すれば、多くは人工にて補助し、之を娩出せしむるを以て、斯の如く長時間を費すことなし。

晝夜出産数の差異 を擧ぐれば、夜間十二時乃至三時には出産数最も多く、之に反して晝間十二時乃至三時には其の數最も少し。日本婦人にありては、午前中分娩のもの六二〇布仙にして、午後は三八〇布仙なり。

予が産科院に於て調査したる日本婦人の分娩時間は左の如し。

日本婦人の分娩時間平均数を擧ぐれば、

第一期に要せしもの……………九時三十五分五十秒、

第二期に要せしもの……………二時十八分四十六秒、

第三期に要せしもの……………十九分、

全分娩期を合計したるもの……………十二時十三分三十六秒、

今左に初産婦と經産婦との差を示す。

初産婦平均數

第一期に要せしもの……………十一時、
 第二期に要せしもの……………一時四十六分、
 第三期に要せしもの……………十九分、
 全分娩期の合計……………十三時五分、
 經産婦平均數

第一期に要せしもの……………五時二十一分四分、
 第二期に要せしもの……………一時四十分三十三秒、
 第三期に要せしもの……………二十一分五十秒、
 全分娩期の合計……………七時二十三分二十七秒、
 第三期に要せる時間も、歐洲婦人に比すれば、日本婦人に於ては稍々長く、初産婦は二と三と、經産婦は一と二との比をなす。

高年初産婦の分娩持續時間は、西洋婦人にありては、約二十七時間にして、最も長きもの三十二時間、最も短きもの二十四時九分なり。是を一般初産婦の分娩時間平均二十四時間に比して約三時間半遅延す。予の産科院に於ける高年の初産婦に就て検査せし成績に依れば、平均分娩時間二十二時間八分にして、後産は十九分間なり。然れども二三の場合に於ては、六

十時間以上七十時間を要したるものあり。

第六章 陣痛の種類及其作用

陣痛の種類
と其の作用

陣痛の種類並に其の作用 陣痛は時期に従ひて各々其の名稱を異にす。

一 前陣痛又は前驅期陣痛

とは、妊娠の末期に於て屢々子宮に收縮起り、且つ疼痛を伴ふものを云ふ。其の疼痛は常に甚だ弱くして、往往妊婦の之を感ぜざることあり。又時としては非常に強く、將に分娩するにあらずやの疑ひを起さしむることあり。然れども眞の陣痛ならざるを以て、分娩を催進することなく。多くは直に或は數時間の後に消失すべし。稀に此の如き陣痛に引續きて、眞の陣痛を發することあり。而して此の前陣痛の發作頻回にして、且つ強くなる時は、是によりて分娩期の近づけるを推察し得るものなり。故に此の陣痛は専ら分娩の準備をなすものにして、左の効用あり。

前陣痛の効

開口期陣痛の作用

一 分娩の前徴となり、其の期日を豫定し得べし。

二 胎児の位置を矯正して、分娩を易からしむ。

即ち子宮収縮する時は、其の内腔の横徑減じて縦徑を増加す。故に假令斜めに位する胎児と雖、是によりて矯正せられ縦位とならしめ、大に分娩に便ならしむるものなり。

三 兒頭を骨盤入口に進ませしめ、茲に固定するの用をなす。

二 開口期陣痛 開口期に發し、著しく兒頭を下降せしむるものにあらずして左の作用を有す。

一 胎胞を形成せしむ。

二 子宮口を開大す。

産出期陣痛の作用

三 産出期陣痛 産出期に發するものにして、専ら兒頭を下降せしめ、之を娩出するの作用を營むものにして此の陣痛強盛なれば震戦陣痛となる。

後産期陣痛の作用

四 後産期陣痛 後産期に發するものにして、左の作用あり。

後陣痛の作用

一 胎盤を剝離せしむ。

二 後産を子宮内より腔内に排出せしむ。

五 後陣痛 後産娩出後、即ち産褥期に發する子宮の収縮にして、強きものと弱きものとあり、左の作用を有す。

一 子宮を収縮せしめ舊形に復せしむ。

二 胎盤剝離面の血管を閉鎖し出血を防ぐ。

三 子宮縮小の爲に起る悪露を排出す。

第七章 胎児の位置及び其の分娩との關係

第一 胎児の位置

胎児の位置 即ち胎位を大別して縦位及び横位となし、胎児の斜に位するものを斜位と云ふ。然れども斜位は多く横位に變し易きを以て、此の兩位置を單に横位と云ふも可なるべし。又更に之を幾多の位置に小別すれば左の如し。

横位



頭蓋位に於ては、第一及び第二を後頭位と稱し、第三及び第四を前頭位と云ふ。又顔面位は通常第一及び第二顔面位のみを稱し、第三及び第四は之を省く。何となれば、此の位置は純粹の不良位にして甚だ稀なればなり。胎兒若し此の位置を取る時は、全く分娩し能はざるものとす。以上の區別法を用ひずして、左の如く區別するものあり。

分娩不可能

兒背左前方に向へるもの

第一胎向
第一分類

兒背左後方に向へるもの

第一胎向
第二分類

兒背右前方に向へるもの

第二胎向
第一分類

兒背右後方に向へるもの

第二胎向
第二分類

今之を前法と對照するに、第一頭蓋位は後方の頭蓋位、第一胎向の第一分類に相當し、第二頭蓋位は第二胎向の第一分類と等しきものなり。然れども後法は煩雜なるが故に予は前法を稱用せり。

近時ある學者は胎兒の胸腹及び四肢は子宮壁に近接するが故に兒腹の方向により胎向を區別すべしと説くものあり。

第二 各胎位に於ける分娩の多少

胎児は縦位 に於てのみ産出し得べきものにして、横位なる時は、通常娩出すること能はず。然れども後者は幸に頗る稀なるものなり。縦位中最も多數を占むるものは、頭蓋位にして、臀位之に次ぎ、顔面位最も稀なり。今其の割合を示せば、百回の分娩中、

縦位	生理的胎位	
	頭蓋位	臀位
斜位及横位	九五〇〇布仙	九四八六布仙
縦位	三二一布仙	四〇五布仙
顔面位	〇六〇布仙	〇七四布仙
生理的胎位	〇五六布仙	〇三五布仙

西洋人 日本人

なり。又頭蓋位中最も多きは第一頭蓋位にして、次で第二頭蓋位とし。第三及び第四頭蓋位は臀位よりも少なく、顔面位よりも多數を占む。凡そ頭蓋位を占むること多き理由を述べれば、胎児は子宮腔内に於て一定の胎勢をなし、其の全體の形状殆んど卵圓形を呈すべく、子宮の内腔も亦同じく縦に長く、卵圓形を呈するを以て、自然の形態に應じて縦位を取り、殊に頭部は兒體中、最も重きが故に下降して頭蓋位となるなり。

第三 各胎位と分娩の難易

胎児若し横位 を取る時は、分娩最も困難にして、胎児未熟なる場合に非ざれば、全く産出し能はざるものなり。故に其の害甚だしく、母兒の兩體に危険を及ぼし、遂には生命をも失ふに至る。而して縦位中最も分娩の容易なるものは、第一及び第二頭蓋位にして、第三第四頭蓋位即ち前頭位之に亞ぎ、第一第二顔面位は頗る難く、第三第四顔面位に於ては、全く自然に分娩を營むこと能はず。臀位は母體に向つては著しき害を與へずと雖、小兒に於ては頗る危険を來し易し。就中全足位は困難にして、膝位之に亞ぎ、臀位最も佳良なり、又不全足位は、全足位よりも容易にして危険亦少し。

第八章 正規分娩の器械的作用

骨盤

骨盤は、既に述べたるが如く、各部分によりて其の廣狹を異にせるを以て、胎兒此の内を通過するには、其の大なる徑線と骨盤の廣き部と適合するにあらざれば、容易く娩出し能はず。正規分娩に於ては、胎兒自然に回轉して兩者適合し、分娩を容易ならしむ、此の回轉を分娩の器械的作用又は分娩機轉と云ふ。分娩の際最も娩出に困難なるは、兒頭なるが故に、其の器械的作用を營むことも亦著しとす。今解し易からしめんが爲、第一頭蓋位に就て、其の器械的作用を詳述せん。

諸子は既に兒頭に就て、矢狀縫合及び大小顛門の存在を知るならん。此の二者は、分娩器械的作用を示すに、最も必要なるものなり。而して第一頭蓋位に於て、兒頭尙骨盤入口上に存せる際、兒背は母體の左前方に向ふが故に、後頭も亦骨盤の左前方に對し、前頭は右後方に向へり、然るに妊娠末期に至り、前陣痛強盛なれば、兒頭は下降して骨盤入口に進入し、茲

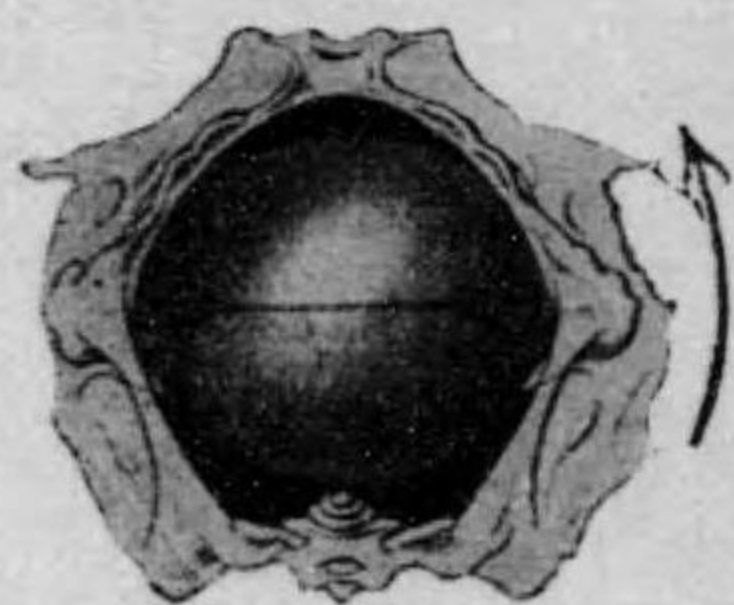
分娩の器械的作用 (分娩機轉)

矢狀縫合と大小顛門

矢狀縫合と横徑線の適合

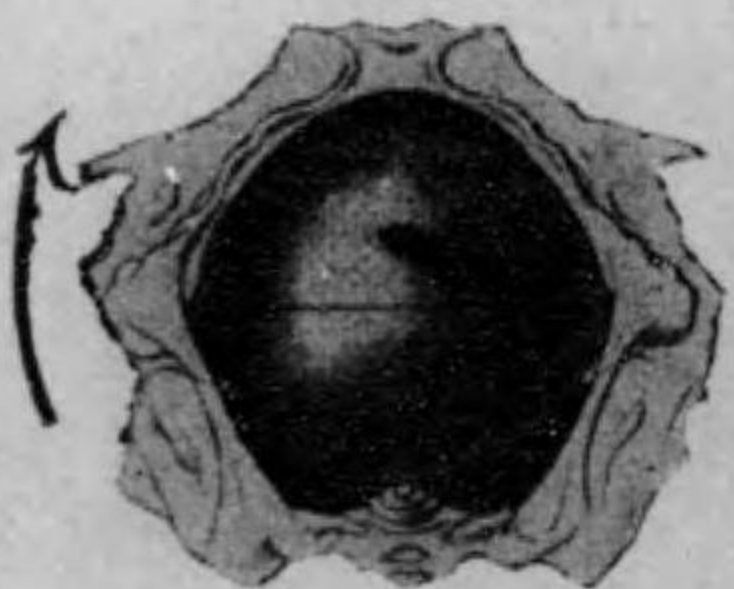
に固定せらるゝに至る。此の時兒頭は其の最も長き徑線、即ち頭蓋直徑と入口の最も廣き徑線、即ち横徑線と適合せしむ。故に第一頭蓋位にありては小顛門は入口の左方に、大顛門は右方に在り(第二頭蓋) 次で開口期陣痛強盛にして、將に産出期に移らんとするに至れば、兒頭は骨盤内に壓下せ

第三百十圖 第一頭蓋位



矢狀徑横徑線に一致す

第三百十圖 第二頭蓋位



同上

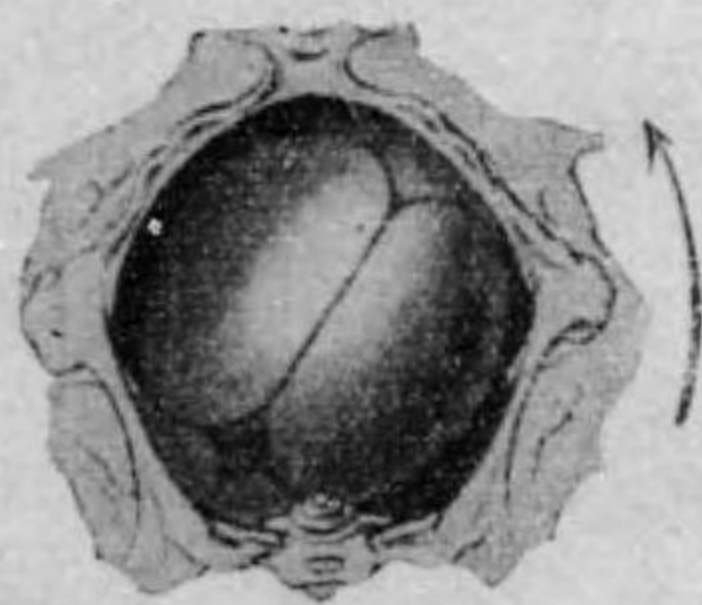
らる。此の際陣痛力は兒背に及ぼし、最も強く脊柱を壓す。故に脊柱壓と云ふ。而して脊柱の上端に附着するものは、頭部なるを以て、此の脊柱壓は遂に兒頭に達すべし。今正規の胎勢を案するに、兒頭は屈伏の状態を呈せるを以て、此の頭部に達したる壓力は、止むを得ず後頭に及ぼし、以て

(第一廻轉)
(横軸廻轉)

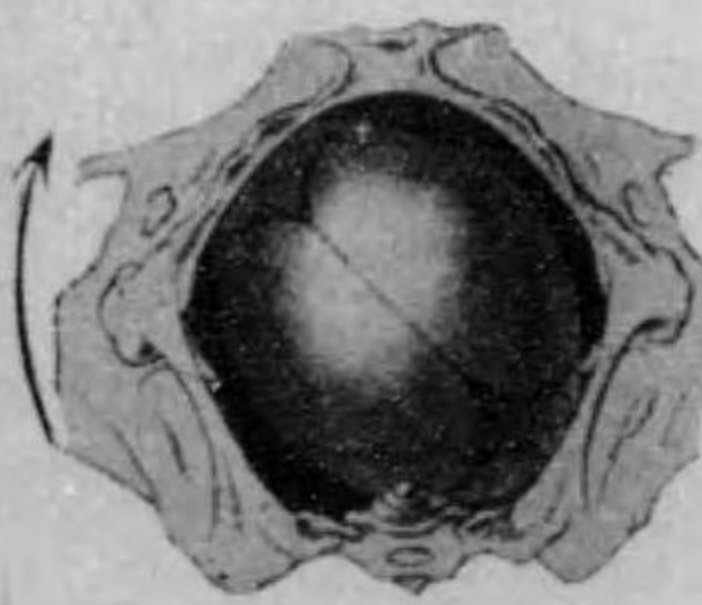
此の部を壓下す。故に頤部は益々胸壁に接し、兒頭は益々屈伏の状態をなす。之を第一廻轉又は横軸廻轉と云ふ。此の運動により、兒頭は後頭を下降して、骨盤腔内に入ります。即ち兒頭は其の最小なる小斜徑線の周圍徑を以て、骨盤腔内に入りしものなり。

骨盤腔の徑線は、入口に反し、斜徑線最も廣くして、横徑線は却て短小なるを以て、矢狀縫合は斜徑線に一致せざる可らず。茲に於てか、

圖五十百第
第一頭蓋位



圖六十百第
第二頭蓋位

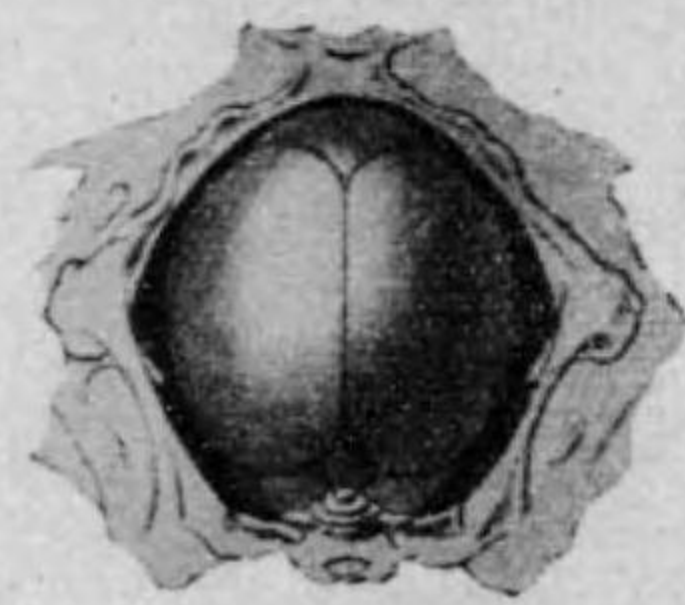


(第二廻轉)
(縦軸廻轉)

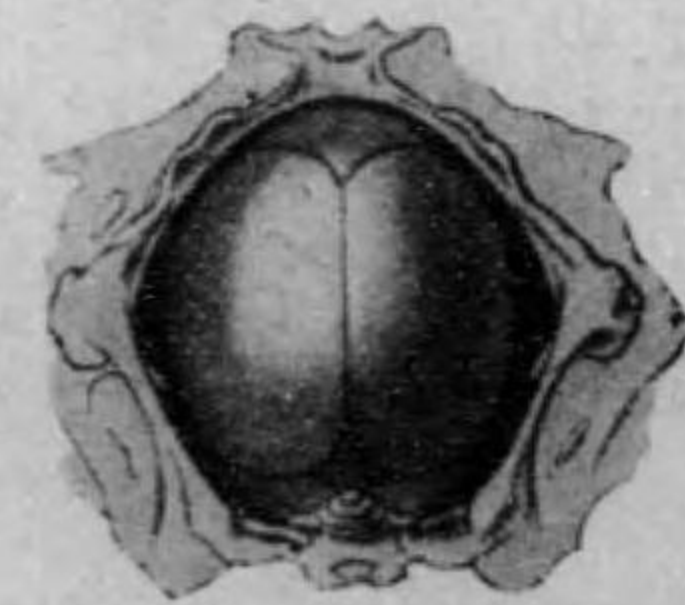
兒頭は第二廻轉即ち縦軸廻轉(此廻轉は兒頭の進行運動と並行するに)を營むを以て、入口に於て、左方に位せる小顛門は、左前方に廻り、右方に存せる

大顛門は、右後方に廻轉するに至る(第二頭蓋位)。故に小顛門は骨盤腔の左前方に、大顛門は右後方に位し、矢狀縫合は第一斜徑線即ち右斜徑線に一致す。而して此の第二廻轉は兒頭の下降すると共に漸次進行するを以て、兒頭骨盤出口に達すれば、矢狀縫合は遂に其の直徑線に一致するに至る。而

圖七十百第
第一頭蓋位



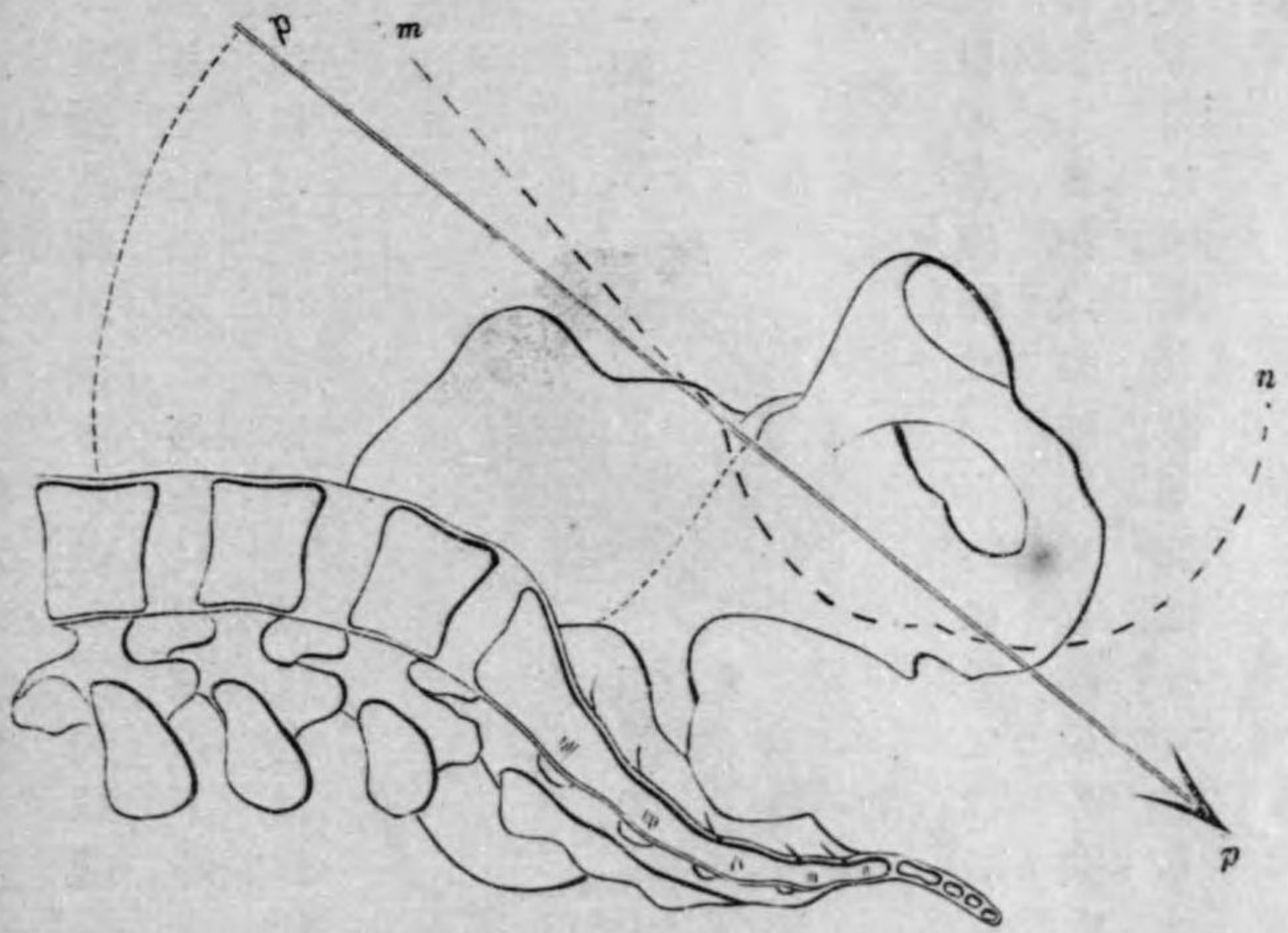
圖八十百第
第二頭蓋位



して出口の直徑線は、平時に於ては短しと雖、分娩時に至れば尾骶骨は後方に移動するを以て延長せられ最も廣大となる。故に後頭部は前方、即ち恥骨縫合下に來り、前頭部は後方即ち會陰に向ひ、矢狀縫合は其の直徑線に一致す。

第三廻轉
(橫軸廻轉)

圖 九 十 百 第



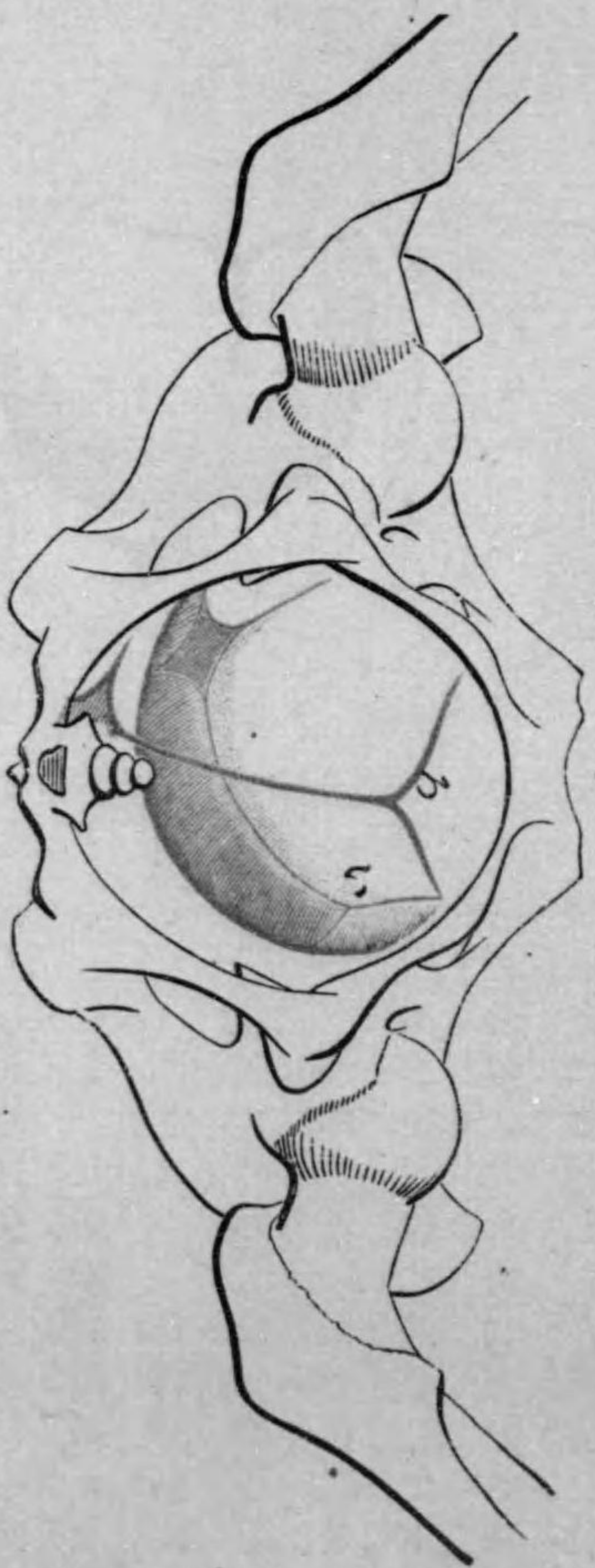
第四編 正規分娩及び其の取扱法 第八章 正規分娩の器械的作用

二四八

茲に於て後頭は恥骨弓下に
止り、會陰部より前頭、顔面、
頤部等を順次に産出す。之を
第三廻轉又は橫軸廻轉と云ふ。
此の際兒頭は反屈す。此の廻
轉は、頤部を胸壁より離れし
むる運動をなすを以て、第一
廻轉と全く反對の方向に廻轉
するものなり。
既に會陰より頤部を出す時は、
後頭は始めて恥骨弓下を離れ、
兒頭の娩出を終る。次で兒頭
は更に其の方向を變じて母の
右腿に向ふ。是矢狀縫合が骨

圖 十 二 百 第

(一の二三の大熱天) 況狀娩分の位置頭一第るけ於に口出盤骨



門頭小るけ於に口出盤骨 門頭小るけ於に内盤骨

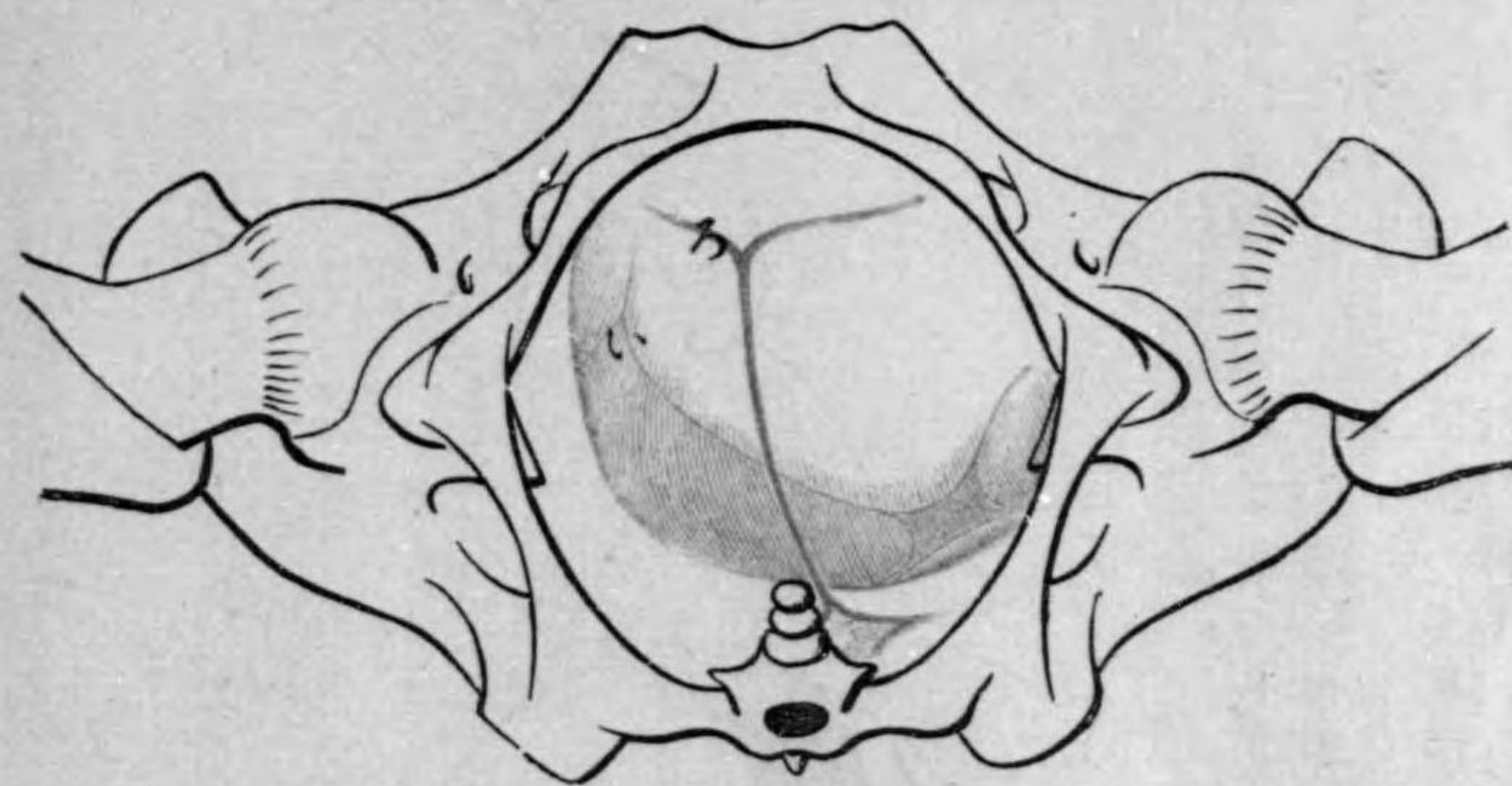
盤出口の直徑線に向ひて娩出し來る際、次に來る肩胛は、斜徑線の位置
を取りて骨盤腔に進むが爲、胎兒の頸部は、多少捻轉せられ居れるも、兒
頭娩出すれば直に舊に復するを以てなり。此の廻轉を第四廻轉とも云ふ。

第四編 正規分娩及び其の取扱法 第八章 正規分娩の器械的作用

二四九

第百二十一圖

骨盤出口に於ける第二頭蓋位の分娩状況

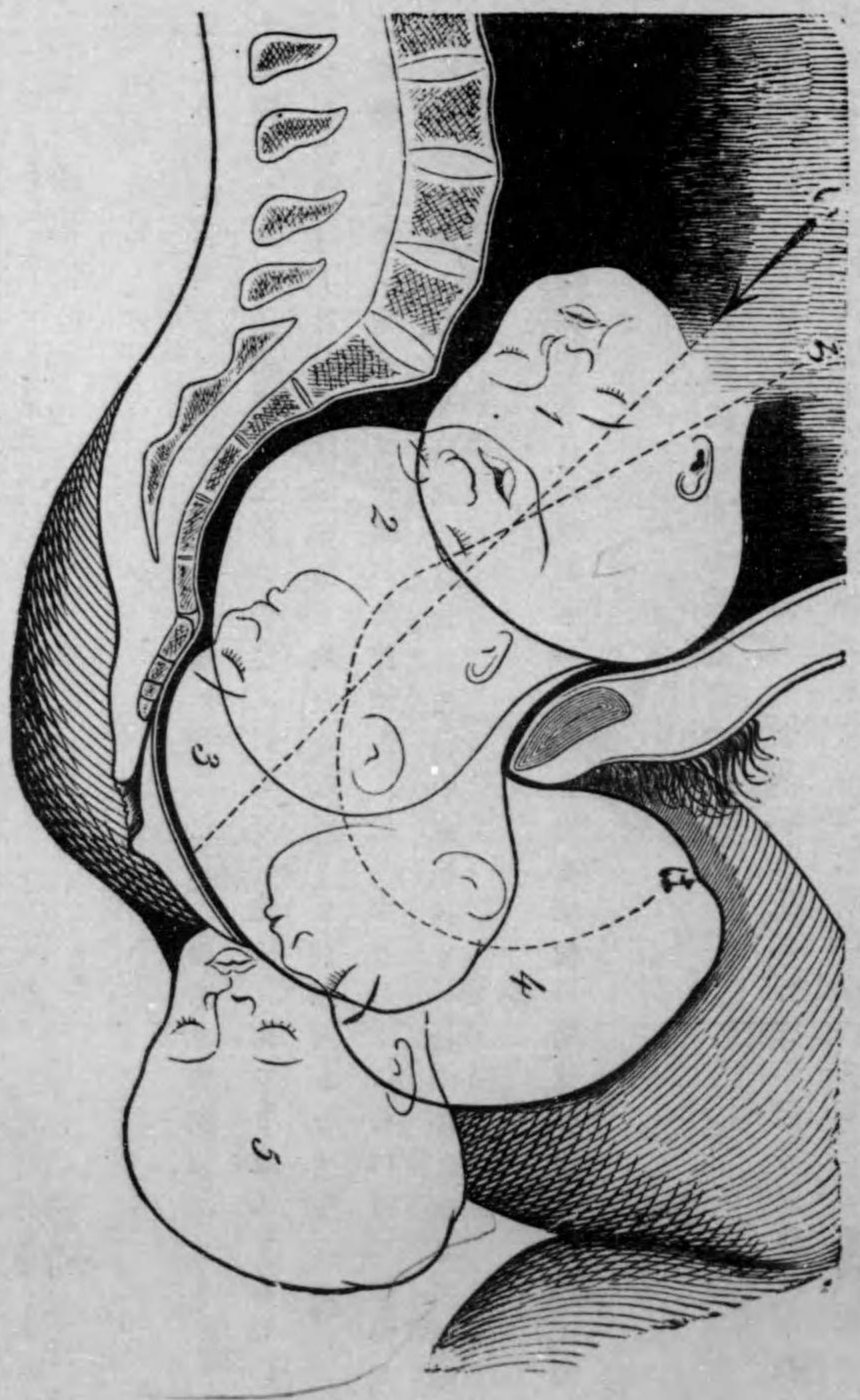


(天然の大三分の一)

い 骨盤内に於ける小頭門 ろ 骨盤出口に於ける小頭門

兒頭の産出する際 肩
胛は骨盤入口に位し、頸部は腔
にあり。而して肩胛の横徑線、
即ち肩胛線は矢狀縫合に一致せ
るものと、反對の斜徑線を取り
て入口に進入す。是肩胛線は矢
狀縫合と其の方向相反せるを以
てなり。即ち第一頭蓋位に於て
は、第二徑斜線に適合して下降
し、骨盤の右前方に存せる肩胛
は前方に廻轉し、左後方に位す
る、左の肩胛は後方に廻轉して、
遂に骨盤出口に至れば、肩胛線

第百二十二圖 第一頭蓋位の分娩器械的作用



線導器は、ろ 向方の力産い

第四編 正規分娩及び其の取扱法 第八章 正規分娩の器械的作用 二五二
は出口の直徑線に一致す。右肩は恥骨弓下に現はれ左肩胛は後方の會陰部より出で、全肩胛を娩出す。肩胛全く産出すれば、其の他の體部は頗る容易く出づるを常とす。

今更に器械的作用を理解せしめんが爲に左に兒頭の廻轉を特記せん。

第一廻轉 又は横軸廻轉は、兒頭が骨盤入口より骨盤腔に向つて進入する際に營むものにして、後頭は下降して、頤部は益々胸壁に近づき屈伏運動をなすを云ふ。

第二廻轉 又は縦軸廻轉は、兒頭が骨盤腔内に於て、左若しくは右に向て廻轉し、後頭は前方に向ひ兒頭の直徑(矢狀縫合)は遂に出口の直徑線と一致するに致るの運動を云ふ。

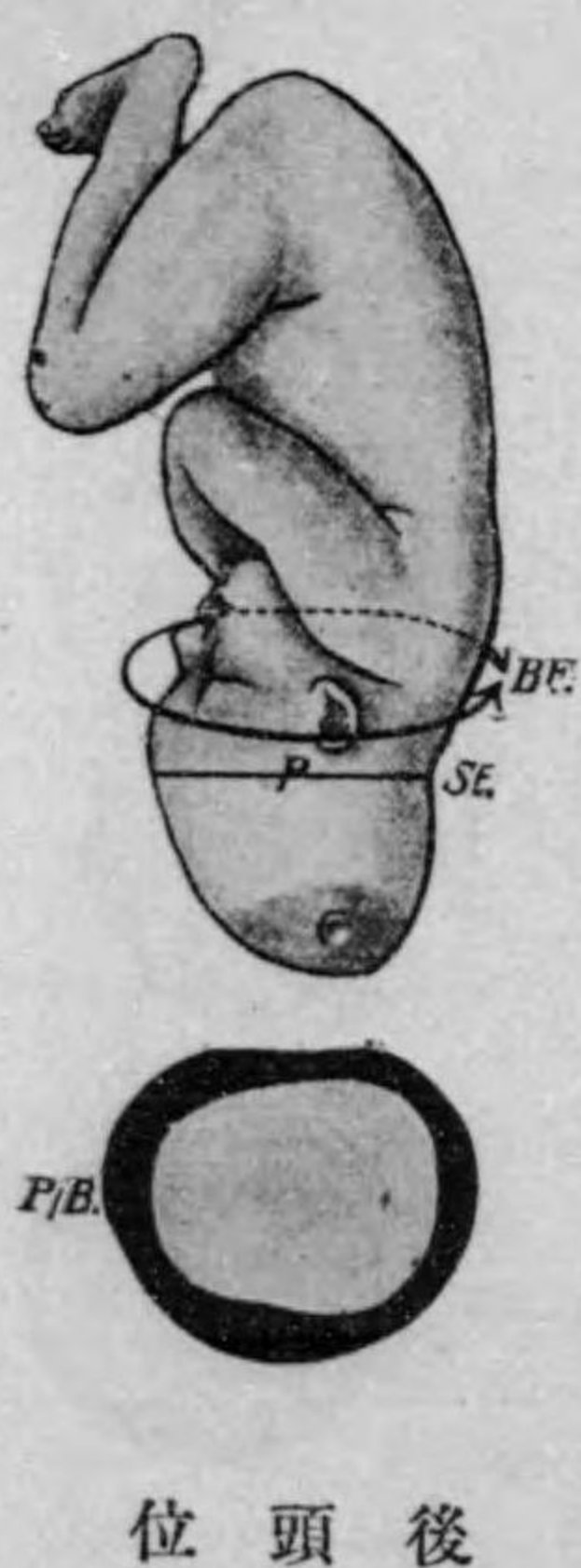
第三廻轉 又は横軸廻轉は、兒頭が第一廻轉と全く反對の廻轉を營み、頤部は胸壁を離れ頸部を伸展する運動を云ふ。

分娩機轉に關する最近の學說

兒頭の第一廻轉を營む原因は、從來の學說に因れば、脊柱の壓力、頭部の中央に向はずして後頭に近く働くが爲、槓桿の理により後頭の先進すること前頭部よりも速なる者とせり。然るに牛馬の如きは、脊柱更に甚しく頭部の後端に偏して附着するにも拘はらず、常に昂伸し顔面位を取るを以て、斯の學說の誤りなることを知

るべし。最近の學說に従へば、兒頭は産出に壓搾せられ、其の長徑は産道軸と一致するに至るが爲なりと云ふ。元來兒頭は、球形なれども、多少の歪形ありて長軸、短

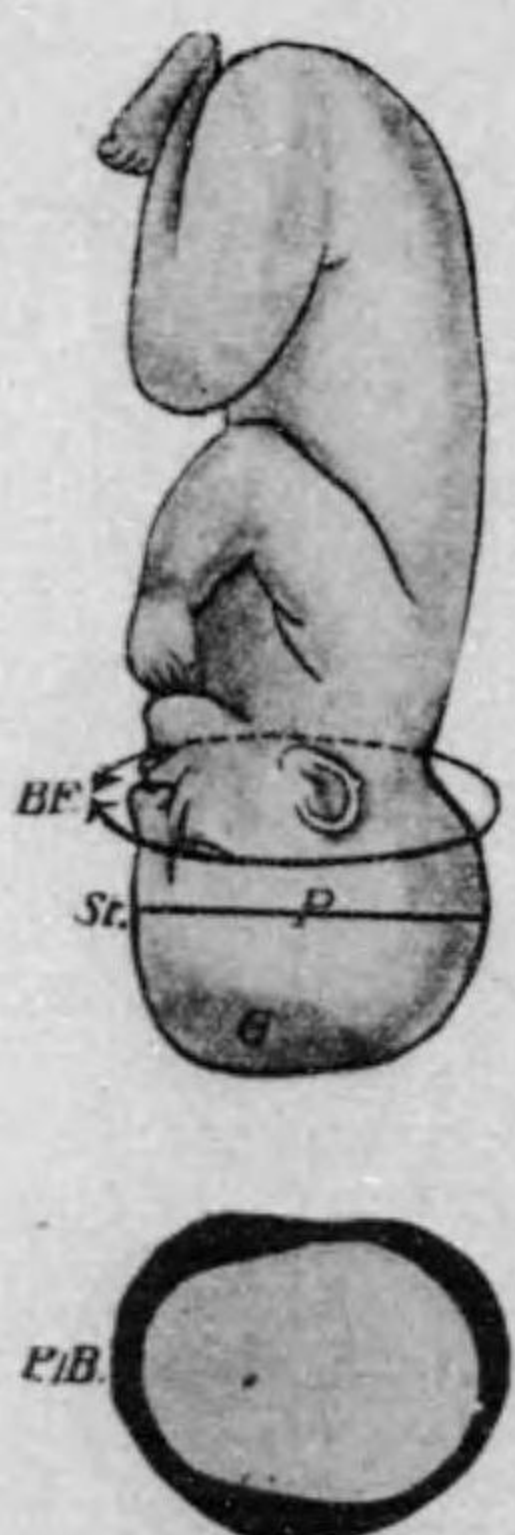
圖三十二百第



位 頭 後

軸の別あり又、其の周圍徑は部位の異なるによりて一様ならず。而して産位の異なるに従ひ、最大周圍徑の部位も亦異なりて、其大さ一定せず。後頭位に於ては、此

圖四十二百第



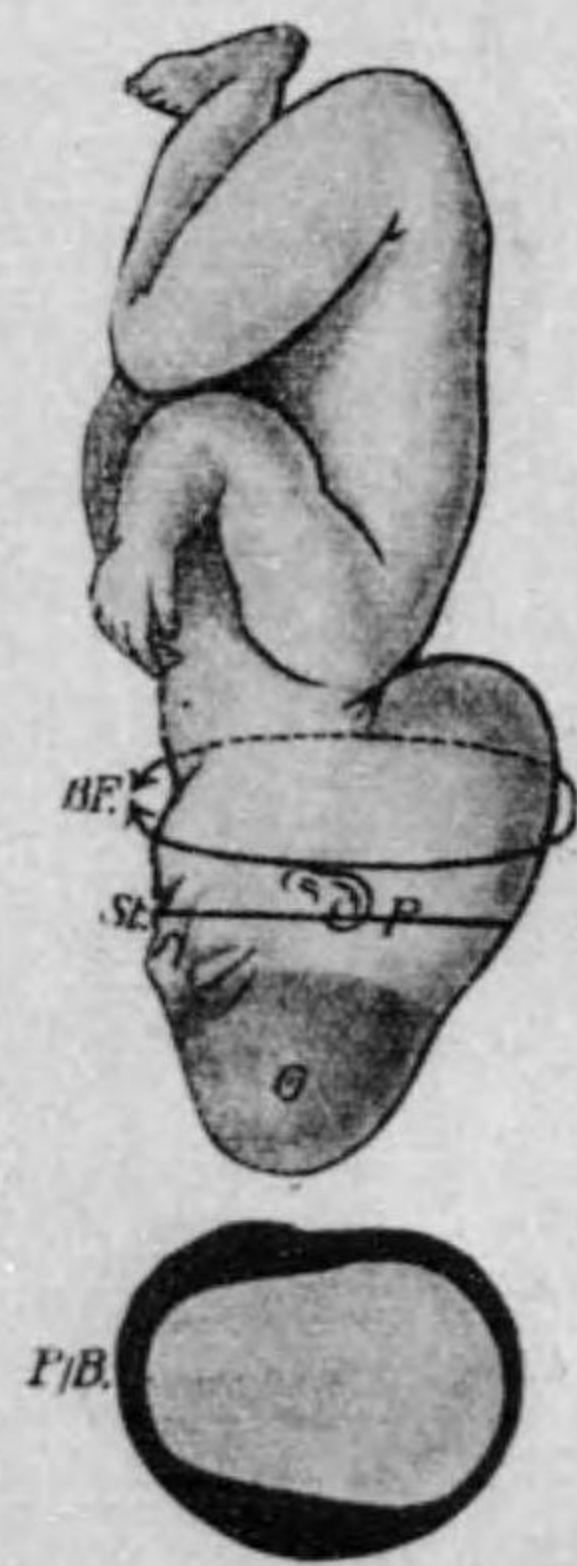
位 頭 前

の周圍徑最も小なるが爲に、分娩最も容易なること第百二十三圖に示すが如し。之を以て、兒頭骨盤入口に進入するに當りて、屈曲すること多きは、分娩するに最も

容易なるを以てなり。

胎児の下降するに當り更に第一廻轉を爲し、後頭は愈々先進し、頤部を胸部に接

圖五十二百第

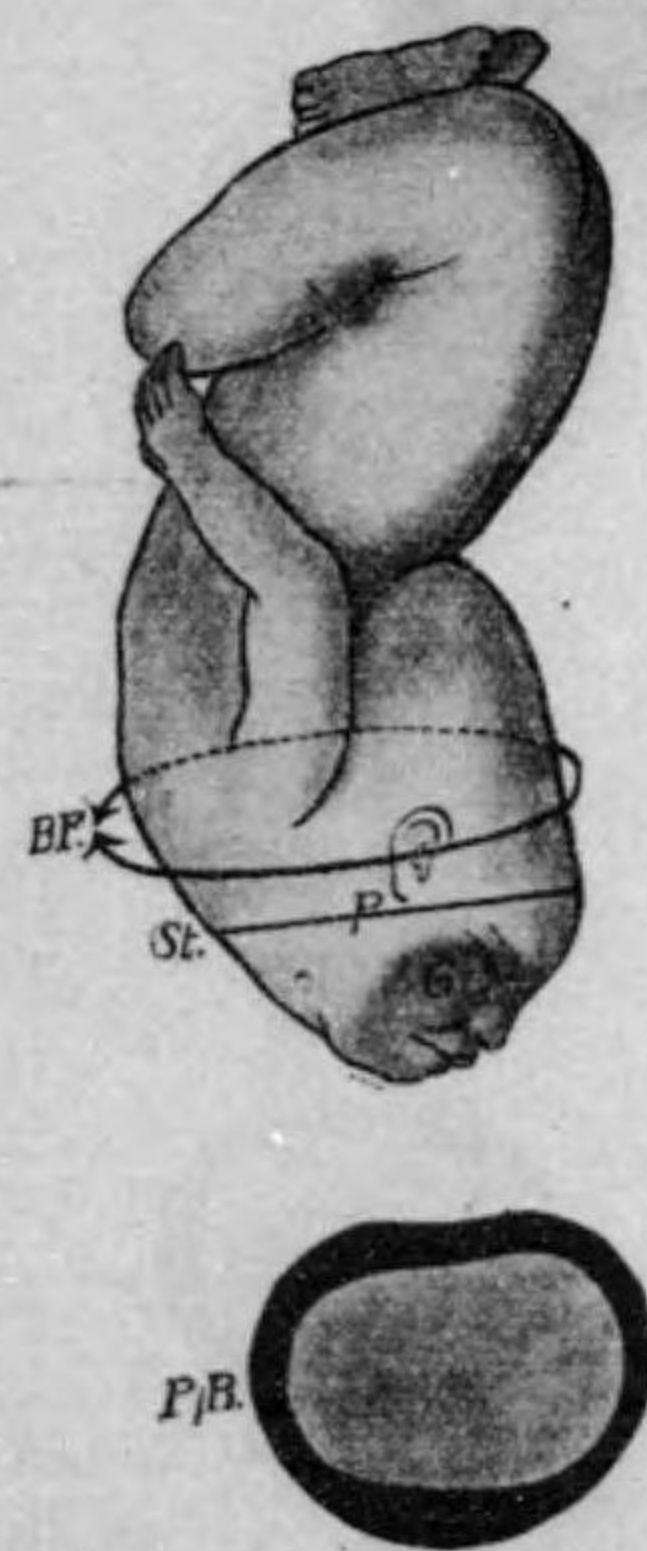


位 額

BF. 先進部の軀幹に對し最も屈曲する部
P/B. 標準平面と骨盤入口との比較

近せしむるは、兒頭の周圍徑を益々小ならしめんが爲なり。故に兒頭の大なるか、又は産道小なるかに困りては、頭部の分娩に困難を來し、著しく胎児の壓搾されし

圖六十二百第



位 面 額

時には、第一廻轉を營むこと亦大なりとす。顔面位の如き兒頭は軀幹に對し伸展しつゝ骨盤に進入するものによりて(第百

圖 七 十 二 百 第

響影態形の痕截骨恥るけに於に勢狀曲彎の管娩分



軸縱の管娩分適好す合適に弓骨恥の隆彎頭後 Ba
軸縱の管娩分るざせ合適に弓骨恥且てしく狭 Ca

二十六圖)更に伸展の度を増し、頤部を先進せしむるも、亦同一の理に基づくものにして、一旦伸展すれば、兒頭は既に産道の壓搾を受け屈曲する能はず、却りて依然伸展し、其の長短は多少産道軸に接近するに至るべし。

第二廻轉を營む所以も、從來兒頭の長徑が骨盤の長徑と一致せんが爲なりとせしむるも、近時寧ろ兒體先進部の後續部に對する屈曲性に準ずるものなりと云へり。

蓋し産道は、骨盤腔内上部に於ては一直線なるも、出口に於ては、著しく前方に彎曲するものなり。故に胎児の通過するや産道の方向に一致せんが爲に、最初一直線に下降するも、骨盤出口に達すれば、其の方向著しく前方に轉ぜざるべからず。故に此の際方向を變更し易き程分娩し易く、之に反するものは難しとす。然るに、兒體の

骨盤入口に進入するや、通常屈曲胎状を取れども、時としては伸展し、又稀に其の中間位なるものあり。而して如此骨盤内に進入するに當り、胎状の異なるに従ひ、出口に於て方向を變換するに難易の差あり。通常屈曲の胎状を以て進入せしものは、出口にて反對に伸展すれば、娩出し易く、之に反し、伸展の胎状を以て始むるものは、屈曲し終るを以て便とすべし。之を以て、後頭位は兒背を前方に廻轉し、出口にて後頭を恥骨弓下に固定して、伸展産出す。又前頭位、顔面位等の伸展胎状を以て



全臀位

曲するを以て胎兒は勢ひ其の方向に従はざる可からず。骨盤端位も亦同理に基づくものなれども、其の先進部たる臀部の後續部に對する屈曲が、後頭位と異なるが爲、其の廻轉の方向同一ならざるべし。後頭位第一廻轉によりて、後頭部の先進するが如く、臀位にありては、其の尾圓骨の先端先進して、骨盤軸に達し、骨盤出口に於ては又前方に屈曲せざる可からず。而して臀部の軀幹に對し、最も能く彎曲する部は胎兒の腰部なれども、脊柱と兩下肢とに防碍せられ、却て兩側にて自由に屈曲す。即ち側彎を以て、利となすがため

曲するを以て胎兒は勢ひ其の方向に従はざる可からず。骨盤端位も亦同理に基づくものなれども、其の先進部たる臀部の後續部に對する屈曲が、後頭位と異なるが爲、其の廻轉の方向同一ならざるべし。後頭位第一廻轉によりて、後頭部の先進するが如く、臀位にありては、其の尾圓骨の先端先進して、骨盤軸に達し、骨盤出口に於ては又前方に屈曲せざる可からず。而して臀部の軀幹に對し、最も能く彎曲する部は胎兒の腰部なれども、脊柱と兩下肢とに防碍せられ、却て兩側にて自由に屈曲す。即ち側彎を以て、利となすがため

圖九十二百第



不全臀位

に兒背は側方に向ひ、一側の臀部は恥骨弓下に固定し、他側は會陰部より娩出す。此の位置を以て經過し、胎部の露出するに至れば、舉上せる下肢を出し、軀幹の下端屈伸自由となり、兒背は多少前方に廻轉す。是胸部の廻轉に便なると、肩胛横徑を以て、骨盤入口に進入するに應ずる爲なり。更に進みて、肩胛娩出に際し、再び背部は

圖十三百第

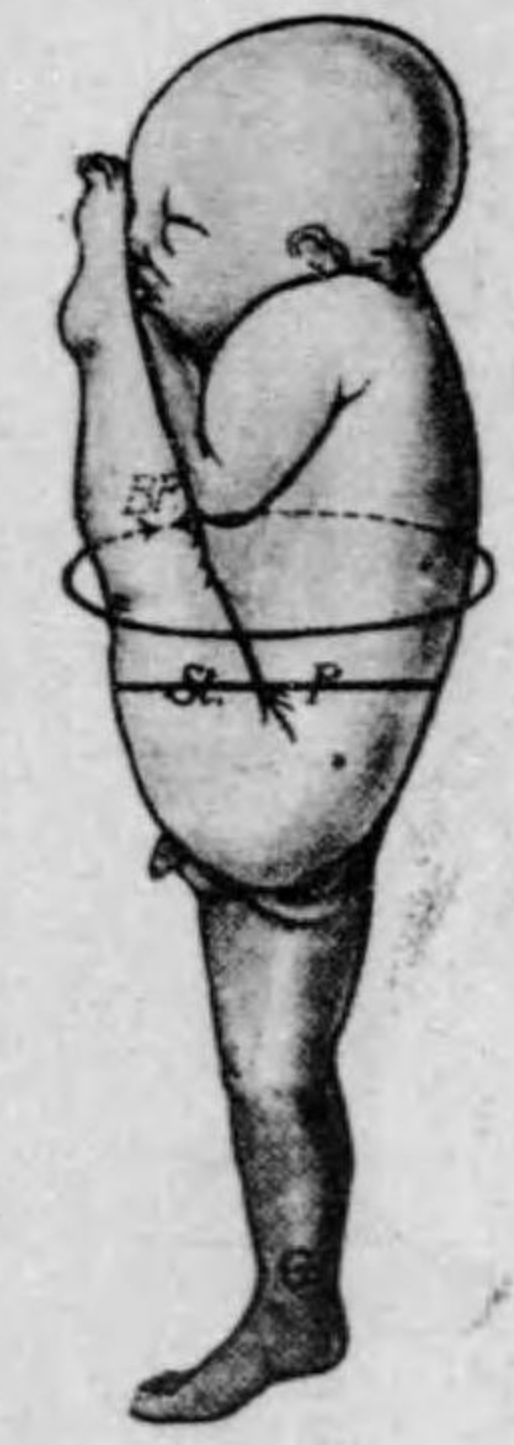


全足位

側方に向ひ、肩胛線は直径線を以て産出すべし。後進兒頭も亦先進兒頭の如く、産道の壓搾を受け、前方に彎曲しつつ下降し、出口

第四編 正規分娩及び其の取扱法 第八章 正規分娩の器械的作用 二五八
 に至れば、後頭部にて彎曲し易く、此の部を恥骨弓下に固定し、顔面は會陰部より娩
 出せず。

圖一十三百第



不全足位

不全足位にありては、下肢の伸展せる側面に於て、他側よも彎曲し易く、常に伸
 展し下肢側の臀部は、前方に廻轉し、他側は會陰部より娩出す。全足位にありては、

圖二十三百第

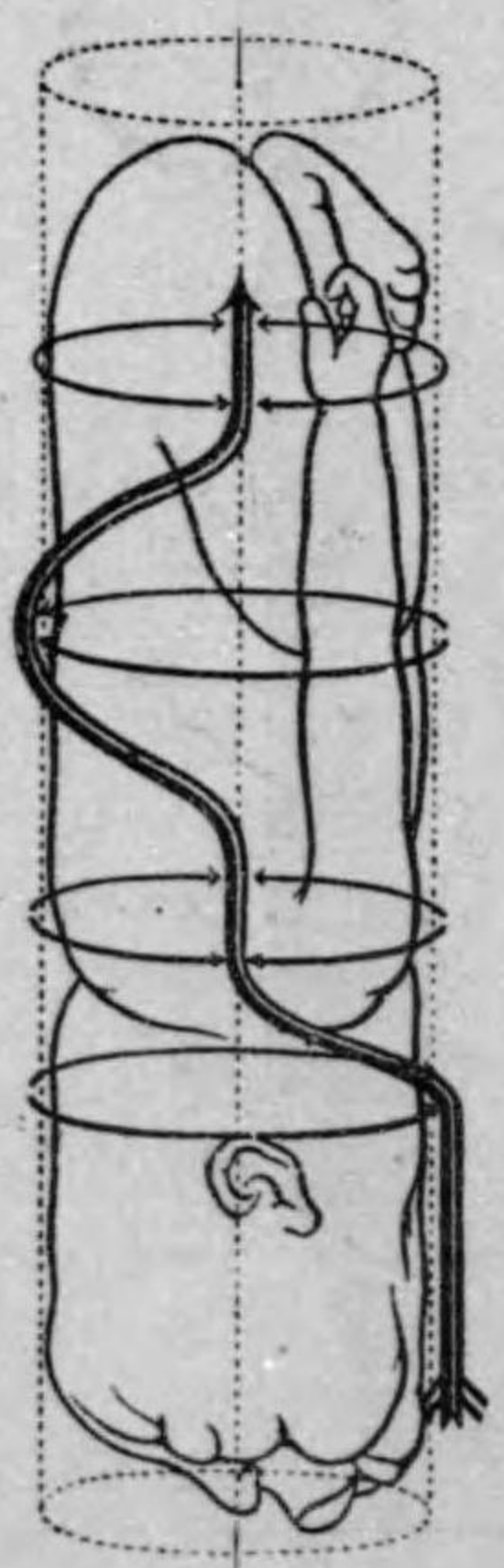


後進兒頭

背部の前方に廻轉すること著しく早し。之舉上せる下肢に彎曲性を防げらるる
 こと無ければなり。

上述の如く先進部の後續部に對する彎曲性は、分娩經過上重要にして最も彎曲
 し易き部分が、恥骨弓下に来り固定するを良しとす。然るに産位の異なるに従ひ、

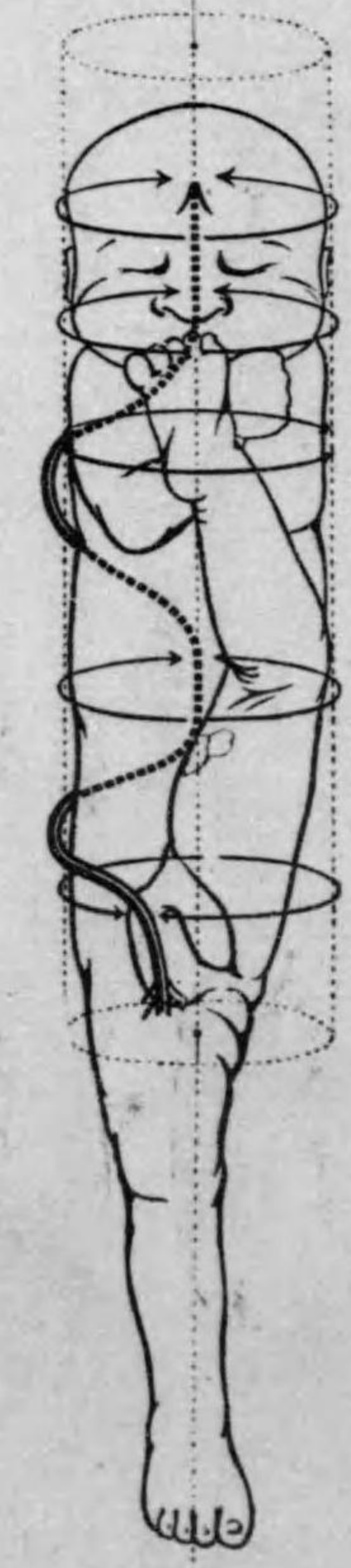
圖三十三百第



顔面位に於ける胎
 兒圖柱

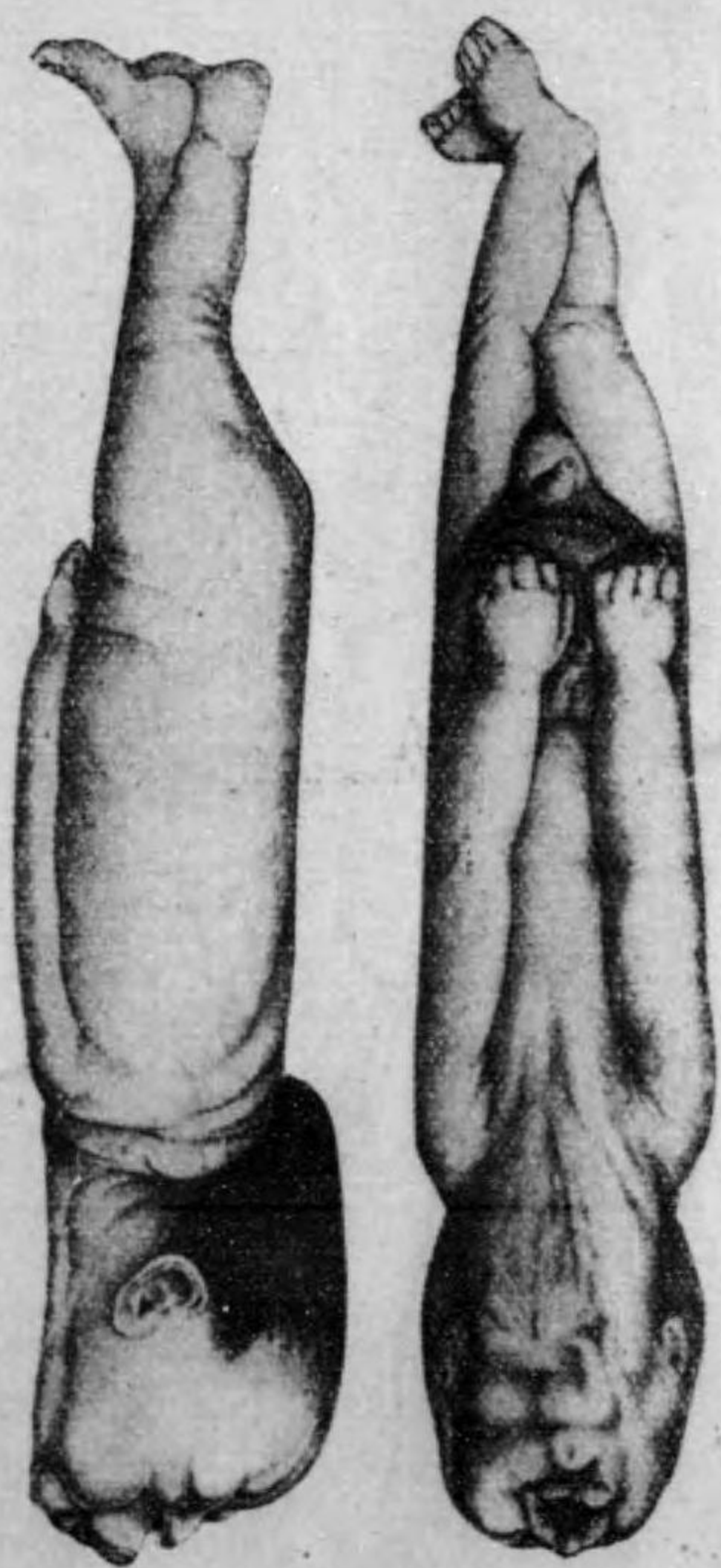
胎兒各部分により彎曲性異なり、或は前面となり、或は後面となり、或は側面となる
 不全足位に於ける胎兒圖柱

圖四十三百第



を以て、胎兒分娩中長軸廻轉を營み、常に彎曲し易き部を前方に來らしむ。
 第百三十三圖及び第百三十四圖は顔面位及び不全足位分娩に於ける胎兒の圖
 第四編 正規分娩及び其の取扱法 第八章 正規分娩の器械的作用 二五九

圖五十三百第



圓筒内を通過したる顔面位に於ける胎兒圓柱

柱を示せるものにして、其の彎曲せる矢は、身體各部の彎曲し易き部分を示せるものなり。之によりて各胎兒の分娩中長軸廻轉を爲すの理は自然に了解するに至るべし。

圖六十三百第



不全足位に於ける胎兒の形状

第九章 分娩時に於ける胎兒の變化

分娩時に際して、胎兒心音及び兒頭などには種々の變状を呈すべし。

胎兒心音の變化

一 胎兒心音の變化 胎兒の心音は、陣痛發作時に至れば著しく緩慢となり、休止すれば再び舊の如く増加するが故に劇しき陣痛永く持續すれば、心音は漸々緩くなり、遂には全く止みて胎兒死することあり。

兒頭の變形

二 兒頭の變形 胎兒の先進部は、其の自然の形狀の儘にて骨盤内を通過するものにあらずして、細長なる形狀に變ず。是狹隘なる骨盤内を通過せざるべからざるを以てなり。即ち後頭位を取りて産出せる兒頭は、前額より後頭に向て壓平せられ、後頭は著しく延長すべし。而して一側の顱頂部に産瘤を生ずるにより、其の部膨隆す。

兒頭の疊積作用

三 兒頭の疊積作用 兒頭骨盤内を通過するに當り、各縫合部の骨縁互に疊積して僅かに壓縮せらる、之を疊積作用と云ふ。

第十章 第一後頭位の診断及び分娩機轉

外検査

子宮底に於ては臀部を觸れ、恥骨縫際上に兒頭を觸知す。而して兒背は母體の左方に位し、小部分は其の右上方にあり。

心音は臍の左下方に於て聽取す。

内検査

先進部は圓形硬固にして浮游運動あり。縫合及び顛門を具ふ。

兒頭骨盤入口に在る時は、小顛門は低く左方若くは左前方に、大顛門は右方若くは右後方にあり。

矢狀縫合は骨盤入口の横徑若くは少しく第一斜徑即ち右斜徑線に一致す。

分娩機轉

兒頭は始め骨盤入口部に於て、其の矢狀縫合は横徑線に一致し、第一廻轉に由りて後頭下りて腔内に入る。次で漸々下降するに従ひ第二廻轉を營み、後頭は左前方に、前頭は右後方に廻轉し、骨盤出口に至りて右顛頂骨先づ陰裂の間に露はれ、次で後頭は恥骨縫際下に現はれ頂部其の下縁に抵止し、前頭は會陰部に向ひ、矢狀縫合は骨盤の直徑線に一致す。茲に於て、第三廻轉を現はし、頤部胸面を離れ、前頭面等會陰を通過す。

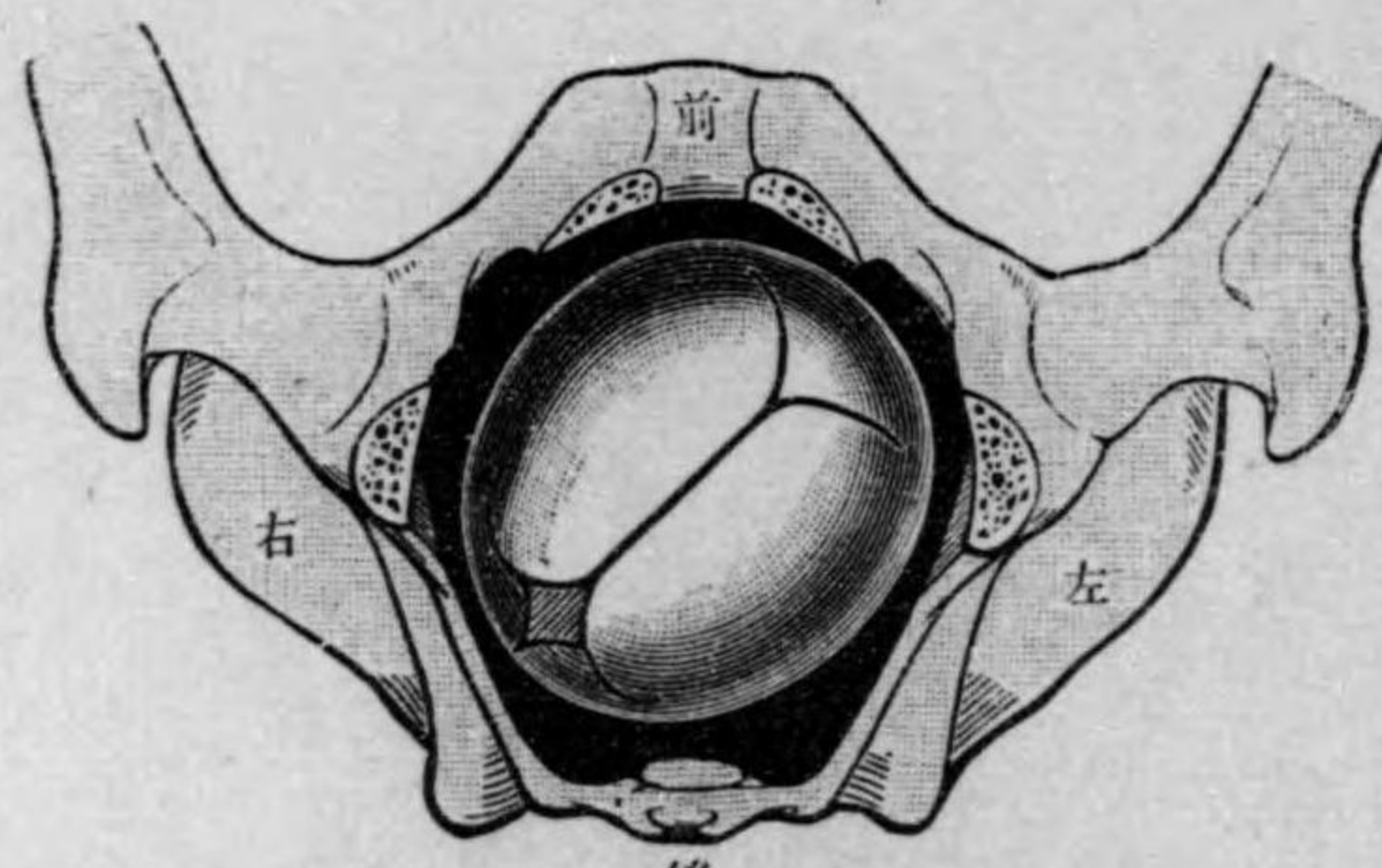
圖七十三百第



位蓋頭一第

第一後頭位
の診断
及
び
分娩
機轉

圖八十三百第



見所の上診内位頭後一第

致し、第一廻轉に由りて後頭下りて腔内に入る。次で漸々下降するに従ひ第二廻轉を營み、後頭は左前方に、前頭は右後方に廻轉し、骨盤出口に至りて右顛頂骨先づ陰裂の間に露はれ、次で後頭は恥骨縫際下に現はれ頂部其の下縁に抵止し、前頭は會陰部に向ひ、矢狀縫合は骨盤の直徑線に一致す。茲に於て、第三廻轉を現はし、頤部胸面を離れ、前頭面等會陰を通過す。

兒頭全く産出するの際、肩胛は骨盤入口にありて、肩胛の横徑は殆んど骨盤横徑に一致して骨盤内に進入するを以て、兒頭の第二廻轉と共に縦軸の廻轉を營み、右肩胛は下降し前方に廻り、左肩胛後方恥骨弓下に現はれ、左肩は會陰部にあり

に向ひ出口に至れば、遂に右肩は恥骨弓下に現はれ、左肩は會陰部にあり

第三百九十九圖



後頭位に於ける頭形の状態

第四編 正規分娩及び其の取扱法 第十一章 第二後頭位の診断及び分娩機轉 二六四
前後徑に一致し、兒頭は之が爲に第四廻轉を營み、其の顔面母體の右腿に向ふに至れば、左肩胛は恥骨縫際下に出で、支障せられ、軀幹は前後軸廻轉によりて左肩胛會陰より産出す。
胎兒の産瘤は左顛頂骨部に現はれ、頭部は大斜徑に延長し、小斜徑に短縮し、長き頭顛を形成するは第三百三十九圖の如し。

第十一章 第二後頭位の診断及び分娩機轉

外検査 子宮底に兒の臀部あり、恥骨縫際上に頭部を觸れ、兒背は母體の右側に、小部分は左側に存す。

内検査 心音は臍の右下方に於て聴取す。先進部の狀況は第一後頭位と同じ。

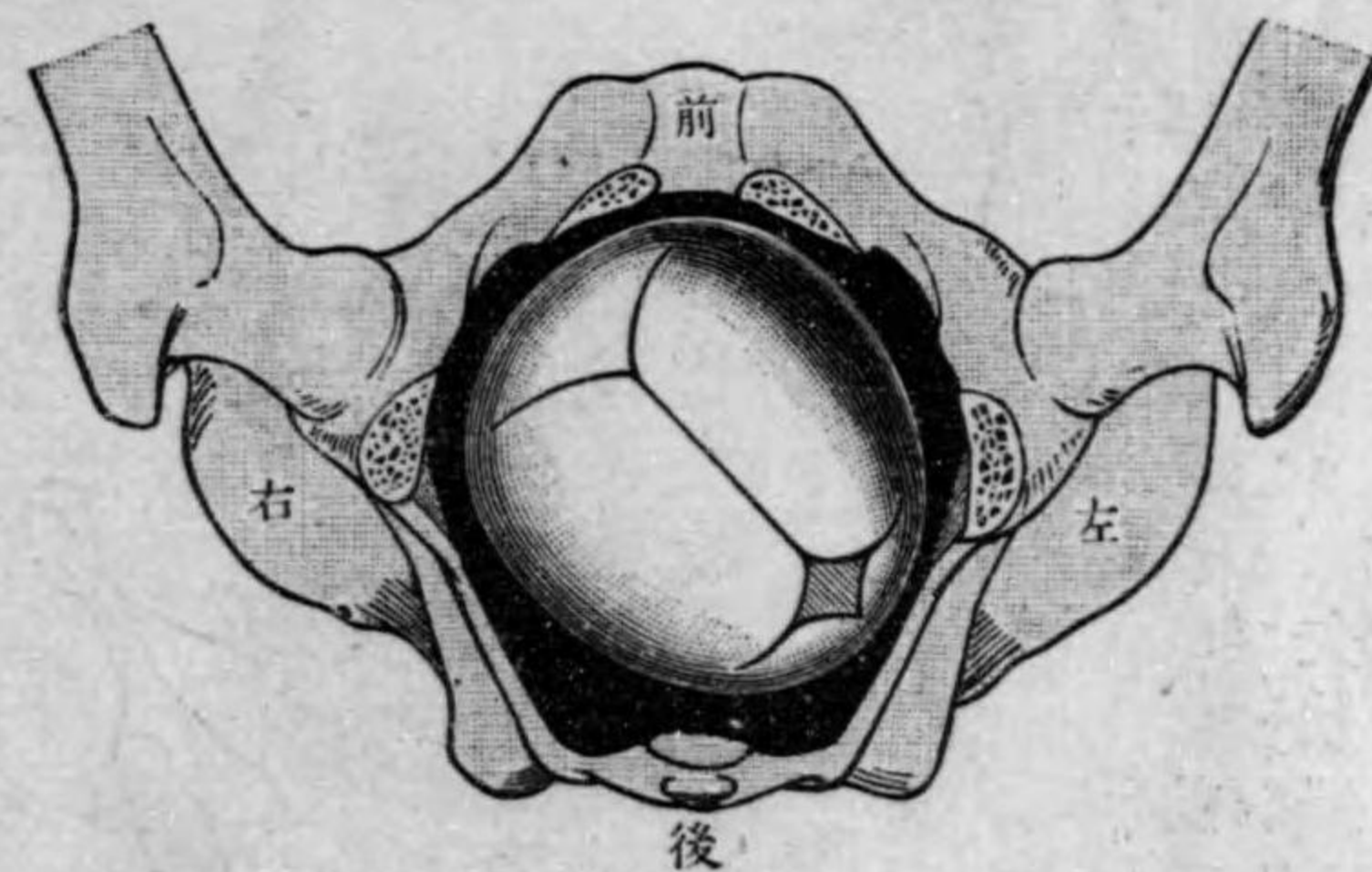
第四百十四圖



第二後頭位

兒頭骨盤腔に存する時は、後頭低く小顛門は右方若くは右前方に大顛門は左方若くは左後方に、矢狀縫合は横徑若くは第二斜徑線即ち左斜徑線に一致す。
分娩機轉 此の位置に於ける器械的作用は、第一後頭位と毫も異なることなく、只左右相反せるのみ。即ち第一廻轉により後頭下降し、第二廻轉を營むり後頭下出口に至りて後頭は恥骨弓下に止り、矢狀縫合は直徑線に一致し、第三廻轉に由て前頭及

圖一十四百第



見所の上診内位頭後二第

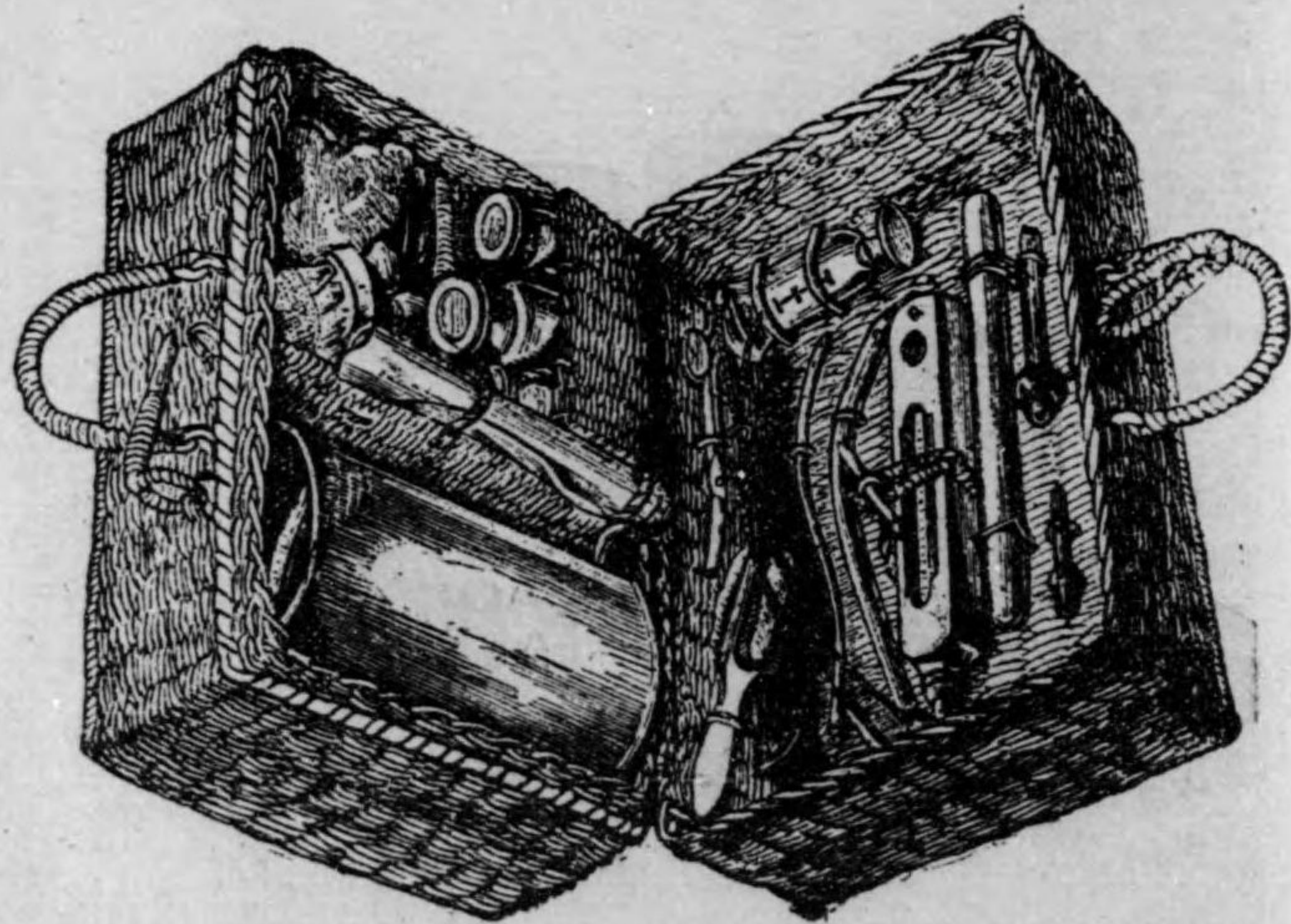
二六六
び顔面は會陰より娩出す。肩胛の横徑線(即ち肩胛線)は第一斜徑線を以て骨盤内に進入し、兒頭の第四廻轉と共に左肩は前方に右肩は後方に廻轉し出口の直徑線に一致し、左肩先づ恥骨弓下に現はれ、右肩は會陰部より産出すべし。胎兒の顔面は母の左腿に向ふ、産瘤は左顛頂部に生ず。

第四編 正規分娩及び其の取扱法 第十二章 正規分娩の取扱法

第十二章 正規分娩の取扱法

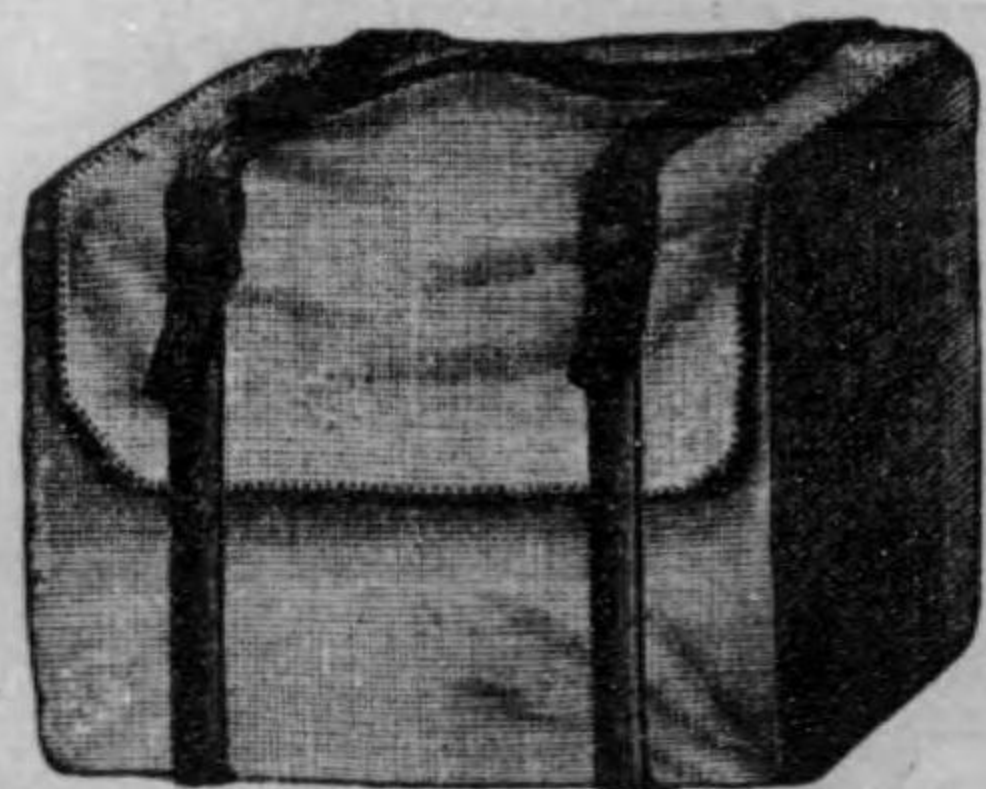
正規分娩の取扱法
に於ける助産婦の務は、自然の産出力を輔け、徐に其の

圖二十四百第



械器用帶携婦產助

甲 圖三十四百第



氏方緒 械器婦產助用帶携

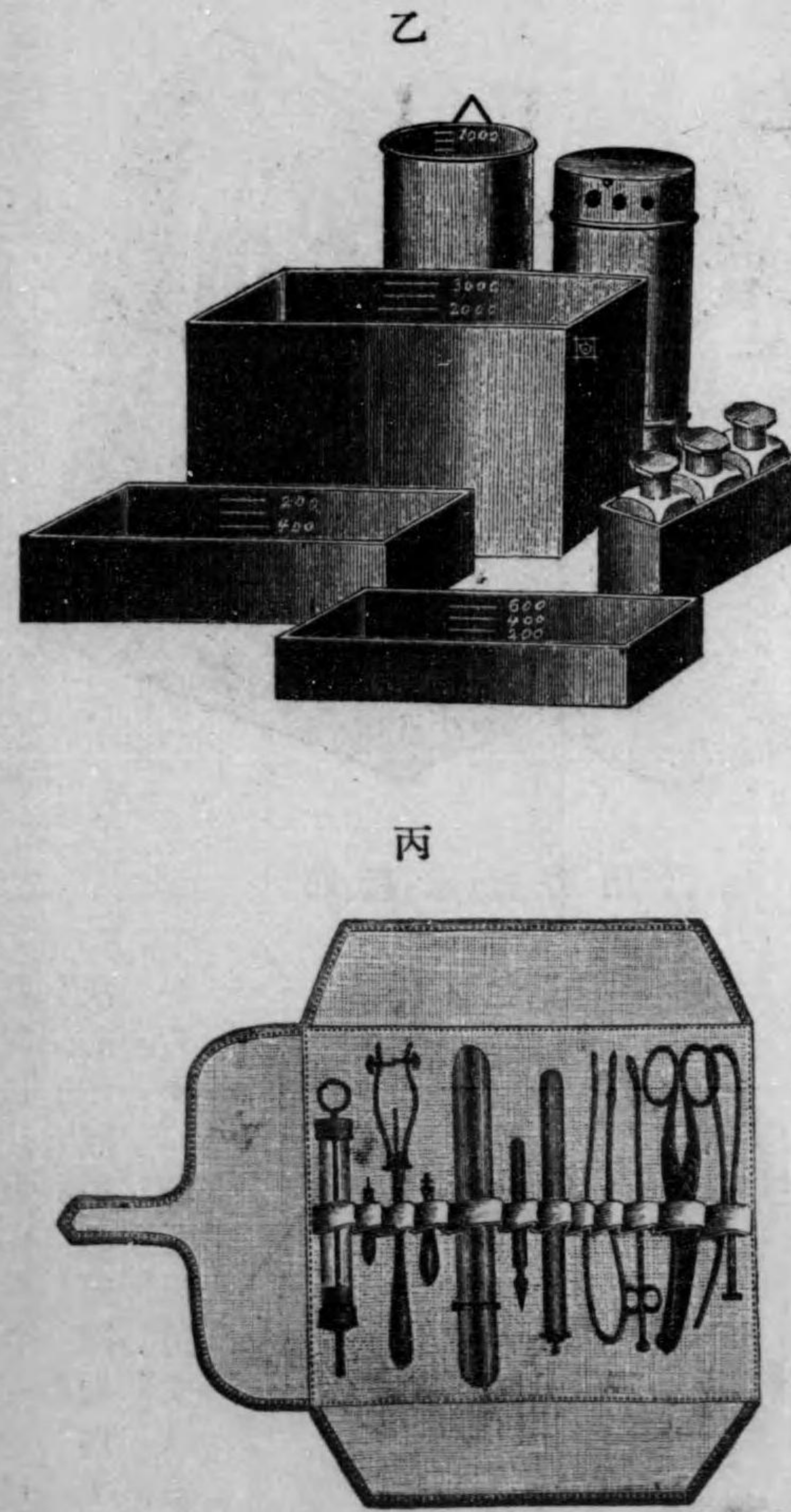
狀況に注意すべきものにて、決して無用の處置を爲すべからず。若し母體或は胎兒に危険を來すの虞れある時は、一刻も猶豫せず速に醫士の診察を請ふべし。

第四編 正規分娩及び其の取扱法 第十二章 正規分娩の取扱法

第一 助産婦携帶品

助産婦は常に其の携帶品を整へ、分娩に臨みて狼狽せざる様注意すべし。

緒方氏携帶用助産婦器械



殊に器械類は一度使用する時は、必ず消毒法を施し、清潔を保たんことを要す。而して此等の品は常に一の布囊、又は鞆の中に納め、決して他物を混入すべからず。今其の品目を擧ぐれば左の如し。

予が考案したる助産婦携帶器具は輕便にして廻診用に適す。大阪市東區道修町白井松之助の販賣する所なり。

分娩時に必要なる器具大約左の如し。

- 一 爪鉞及び爪鑷子 各一箇
- 二 刷子 二箇
- 三 石鹼 一箇
- 四 手洗鉢 二箇
- 五 巻尺 一箇
- 六 體溫器及び浴用檢溫器 各一箇
- 七 イルリガートル 一箇

但し一迷の護謨管付

- 八 腔内用嘴管並に灌腸用嘴管
- 九 受水盤
- 一〇 聴診器及び時計
- 一一 金屬製及び弾力性排尿用カテーテル
- 一二 臍帶剪刀

各一箇
各一箇
各一箇
一箇

圖四十四百第



浴用檢温器

- 一三 臍帶結紮絲
- 一四 小兒窒息用氣管カテーテル
- 一五 灌腸器
- 一六 手拭

數條
一箇
一箇
二枚

一枚は生兒を包み他は浴後拭ふに用ふ。

衣服の消毒

第二 助産婦の衣服

- 一七 リゾホルム及び昇汞
- 一八 硼酸或はデルマトール
- 一九 殺菌瓦設及び綿花
- 二〇 生兒の衣服

圖五十四百第



服衣の婦産助

助産婦は、白色の上衣及び前垂布を調製し、産床に臨む時は必ず之れを着くべし。一度用ひたる時少しにても汚染せば必ず洗濯するを要す。但し前垂布は毎回清潔なるものと交換すべし。又傳染病を有する産婦を取扱ひたるときは、必ず其の衣服に嚴重なる殺菌法を施すか、或に熱湯中に煮沸したる後清淨し、強き日光に曝露するにあらざれば之を用ふべからず。

第三 産婦の診断

産婦診断の順序

助産婦

は、産婦に接する時は、先づ問診し、次で診察を行ふべし。然れども前羊水既に漏泄せるを聞かば、問診後直に心音を聴取したる後手指並に産婦の外陰部に消毒法を行ひ、内診を施し子宮孔の開大を知るべし。然れども既に陣痛強く發作し收縮輪を觸知すれば其の開大の度を知るべきにより可及的内診を避け直に分娩の準備を成すべし。

問診の注意

一 問診 既往症は既に妊娠時に於て問へば、此の際、唯分娩に關す要件のみを問診すべし。若し助産婦にして、分娩に際し始めて招かれたる時は、第十七章妊娠の診断法條下に述べたる順序により其の既往を問診するを要す。今左に産婦問診の簡條並に順序を擧ぐべし。

- 一 破水の有無及び時期、
- 二 陣痛初發の時期、
- 三 陣痛の起始、強弱、持續及び反覆の數、

外診の注意(要項)

二 外診 にかいて、亦第十七章に述べたる方法により、簡單に左の簡條を検すべし。

- 一 子宮の縦徑延長、及び時々顯はるべき收縮輪の下部横溝、
- 二 膀胱の充滿又は後顛頂位に因りて、頭の側面と肩胛との間に成立べき、前腹壁上に顯はるゝ所のヘーガル凹溝、
- 三 胎兒の異常位置(前額及び顔面位の如き)と、後頭と頂部との間に成立すべき、側腹壁上に顯はるゝ所のヘーガル凹溝、
- 四 先進部骨盤内に嵌入せるや否や、並に其の程度、
- 五 胎兒心音の部位及び強弱、

三 内診

は、既に述べたるが如く、止むを得ざる場合の外は決して妄りに之を行ふべからず。故に一度内診すれば、綿密に検査を施し、屢々

行ふの要なからしむべし。而して内診を施すには、既に記したる方法により、手指及び外陰部に嚴重なる殺菌法を行ひ、内診の方式に従ひ、手指を腔内に挿入し、骨盤及び胎児の状況を精査すべし。其の要點を挙げれば左

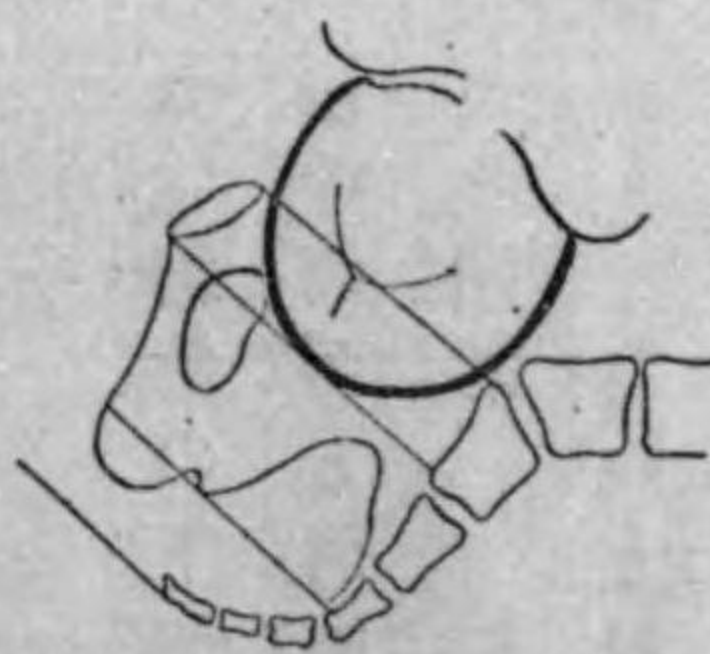
胎兒先進部の診断

圖六十四百第



矢狀縫合は薦骨岬及び恥骨下端平面上方であり最大周徑は骨盤入口上に一致し、胎兒軸は前方に轉じ懸垂腹を呈す

圖七十四百第



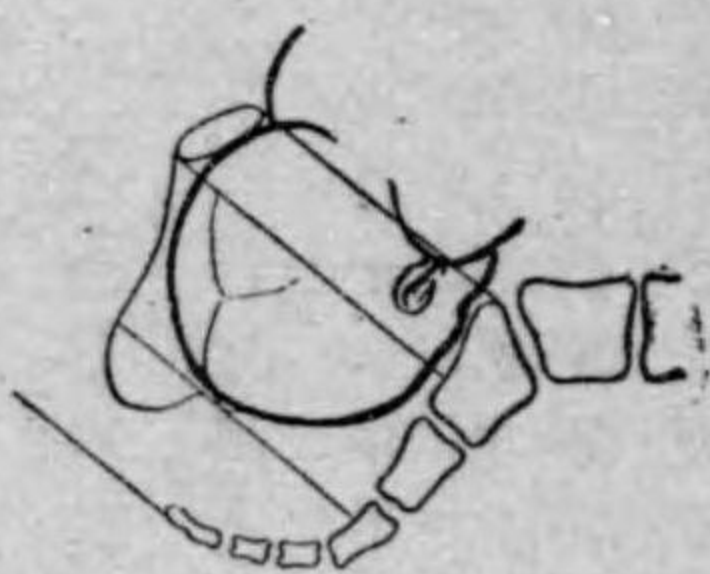
矢狀縫合は恥骨下端平面上あり、坐骨棘は尙能く觸知し得れども薦骨岬は伸展せる手指を以て達すること能はず、最大周徑は骨盤入口に一致す

の如し。

- 一 子宮口開大の度、及び其の口縁の状況、
- 二 胎兒先進部の、子宮口に達したるや否や、

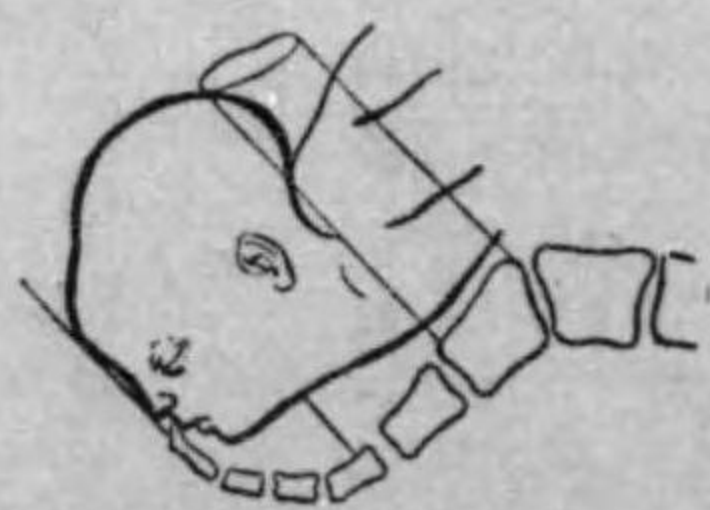
- 三 胎兒の先進部は、骨盤の何れの部分に存在せるや、
 - 四 大小顛門の位置、並に矢狀縫合の方向、
 - 五 四肢或は臍帯の脱出、若しくは其の他の異常なきや否や、
- 胎兒先進部の診断

圖八十四百第



矢狀縫合は坐骨棘平面上に在り既に斜徑線に一致す、最大周徑は骨盤入口の下方にあり殆んど恥骨下端平面上に達す坐骨棘は先進部の側に於て觸知し得べし

圖九十四百第



先進部は骨盤底にあり陣痛發作時は既に外陰部に露出し、坐骨棘は最早觸知すること能はず矢狀縫合は直徑線に近接す

- 六 陣痛時に於て先進部の下降するや否や、
 - 七 胎胞若し存在する時は、陣痛休歇時に弛緩するや、或は依然緊張の状態に止まるや否や、
- 小兒の顛門及び縫合は、子宮口全く開大するにあらざれば觸知し

難し、然れども兒頭は前腔穹隆部より腔壁を隔て、能く觸るゝを得べし。

以上の検査法に由て、若し異常を發見する時は、猶豫なく醫治を求むべし。而して内診の際は、妄りに手指を子宮口内に挿入し、若しくは之を上方に祛り擧ぐる等のことをなすべからず。又胎胞存在せば、決して之を探る勿れ。又若し内診中、陣痛發作すれば、其の休憩時まで其の儘休止すべし。然らざれば過つて胎胞を破裂せしむる虞あり。

千九百十二年出版の獨逸助産婦學は、産婦の内診に就て、頗る嚴格なる制限を加へ、助産婦は外診によりて、凡ての事を確定せざるべからず。危險極りなき内診は、止を得ざる場合に於て、稀に施行せらるゝのみといへり。而して、或學者は、外診により子宮口の開大を知るの法を公にせり。

即ち先づ、産婦の膀胱を空虚にし、陣痛發作時に於て、子宮の收縮輪(或は境界輪と云ふ)を觸知するにあり。乃ち陣痛發作時に於て、收縮輪を明に觸知する時は、子宮口の開大著明なりとし、左の如き規定を設け、多數の産婦に實驗して、其の確實なることを證明せり。

一 恥骨上に於て、收縮輪を觸知せざる時は、子宮口未だ舊一圓銀貨(直徑三、九仙

迷)大に達せず。

二 恥骨上、二指横徑の高さに觸知する時は、子宮口は舊一圓銀貨大に開大す。

三 恥骨上、三指横徑の高さに觸知する時は、子宮口は小手掌大に開大す。

四 恥骨上、四指横徑の高さに觸知する時は、子宮口は全く開大す。

斯の如く内診を行はずして、外診により子宮の開大を精確に推知し得べきこと日本婦人に就て實驗するも大差なし、但し收縮輪は分娩時殊に産出期に於ては陣痛間歇時と雖、能く觸知し得るも一定の練習を要す、然れども又稀に收縮輪は初産婦及び經産婦により前記の標準と一致せざることを知るべし。

第四 分娩の準備

助産婦が産家に招かれ分娩切迫したるを見たる時は、直に分娩の準備をなすべし。其の法左の如し。

一 産室 は、最も靜にして明るき室を選ぶべし。室の廣さは狭きよりも廣きを良とすれども、八疊乃至十疊を最も適當となす。室内の温度は攝氏二十度許に保ち、新鮮なる空氣を流通せしめ、多人數の出入を禁じ、

温順にして悟り良き一婦人をのみ止まらしめて、諸事を助けしむべし。且つ室内には決して家畜類を近づけず、常に清潔ならしめ、不必要の器具は、悉く之を除くべし。

二 産床

を造るには、通常の蒲團二枚を敷き、其の上を悉く油紙又は護謨布を以て被ひ、更に又其上に敷布を敷き、其の四方を安全針にて固定すべし。而して尙其の臀部には、分娩時に散流する液體を收容する爲に、二尺五寸四方を有する蒲團を載せ、再び之に同大の敷布を陳ぶべし。又床の頭部は稍々高からしむるか、若しくは括枕子を用ふべし。

括枕子

臀下に敷くべき方形の蒲團を造るには、三尺四方の油紙、若しくは護謨布を取り、其の周圍を折り返して二尺五寸四方のものとなし、其の中には脱脂綿數枚を入るか、又は藁灰を入れ、其の上に清潔なる白色の布片(二尺四方の大きさを有するもの)を置いて周圍の油紙、又は護謨布と縫合すべし。此の如くする時は、其の上に置くべき敷布を略するを得べし。又其の布片を縫合せずして、悉く油紙を以て造れるものあり。然れども之を以て直に

産婦の臀部に接觸すれば、甚だ不快を感じるものなるを以て、必ず此の上敷布を要す。

産床の方位につき、我邦の如き迷信家多き所にては、何れの方位に設くるも妨なしと雖、産婦の足部の暗き方向を採る場合に於ては、助産婦たるもの、其の取扱上不便にして且つ害あることを論すべし。

三 産褥床

は、分娩前別に之を造り、産床より幾分か離れたる部に於て兩床の頭の方を反對に向け置き、褥婦を廻轉して移すに便ならしむ。

但し此の距離は助産婦が介者と共に褥婦を助けて、床を移すに差支なき丈の間なるべし。而して此の産褥床は通常の如くに蒲團を延べ上に新鮮なる敷布を敷き、且つ臀部には分娩時と同じき方形の蒲團を敷き、且つ新しき衣服を延べて豫め温め置くべし。完全なる分娩處置を行ふに於ては、産室に隣れる明るき静なる一室を選び、褥婦を此の室に導き、以て産室及び産褥室を區別せざるべからず。然れども此の如き煩雜なることは、到底實地上行ふ能はず、加之、産床も亦交換せずして産褥床に用ふること多し。此

の際には豫め敷布及び方形の蒲團、並に新しき褥婦の衣服を準備し置き、分娩終るや直に之と交換すべし。但し産床を造れる蒲團のみは其の儘にすべし。

四 産位 は、西洋及び日本に於ても、古來の習慣により、各種の法行はるゝも現今多く用ひらるゝものは仰臥位及び側臥位にして、何れの方法を採るも可なれども、産婦の習慣、助産婦の技術、例之ば會陰保護を行ふに適したる位置を擇ぶは便利なりとす。

五 産婦の衣服及び頭髮 産婦の衣服は清潔寛裕にして緊縮ならざるものを選び、腹部以下は特に清潔なる廣き布片を以て被ふべし。蒲團は軽くして、大ならざるを以て身體を被ふを要す。頭髮は豫め梳りて結束し置き、其の紛亂を避くべし。

六 小兒の臥床及び其の衣服 小兒の寢床は、産床と隔りて豫め之を備へ置き、衣服を其の上に擴げ、湯婆を其の中に包みて之を溫暖ならしめ、小兒を沐浴せしめ終れば、直に此の湯婆と兒體とを交換するもの

清潔寛裕の衣服

小兒の臥床と衣服

なり。而して其の敷蒲團は甚だしく輕軟にして、身體を埋没せしむるが如きものは不可なり。又襪襪は柔軟なる綿布若しくは使用を経たる布片を用ふるを佳とす。

器械と消毒液の準備

七 器械及び消毒液の準備 器械即ち臍帶剪刀、カテーテル、嘴管等は金屬製盤、若しくは硝子製鉢中に百倍のリゾホルム水を入れ、其の中に浸し置くべし。又別に一箇の硝子製鉢に、此等の消毒液を入れ、數多の脱脂綿の小片、並にガーゼ數枚を浸し置くを要す。其の他手を洗ふべき金盥一箇を準備すべきものなり。又イリリガートル中には百倍のリゾホルム温液を盛り、適當の高さに懸垂し置くべし。

八 温湯及び冷水 は、多量に準備せしめ、手の洗滌、薬品の溶解又は小兒の沐浴等に供す。

九 初生兒沐浴槽及び湯婆 二三箇並に胎盤受容器は必ず準備すべきものにして、湯婆は夏季と雖、之を缺くべからず。

十 産婦及び小兒用布片類 を類別すれば、左の如し。

初生兒沐浴と保温法

- 一 瓦設及び脱脂綿 數枚
- 二 壓抵布及び丁字帶 數十枚
- 三 枕子 二箇
- 四 分娩後腹帶 一箇
- 五 西洋手拭 大小各一枚

産婦の飲食

十一 産婦の飲食物は、脂肪少なきもの、假令ばソップ、牛乳、餛飩、蕎麥、鶏卵、素麵等を與へ、野菜肉類等の不消化物は禁すべし。飲料は寒冷に過ぎざる新鮮の清水を良しとす。若し惡寒等の心地あり、或は暖かなる飲料を欲する時は、温かき牛乳、或は薄き茶を與ふべし。酒類、濃き茶、或は珈琲の如き身體を刺戟せしむるものは禁すべし。然れども葡萄酒、セリー、ベルムートの如き婦人に適したる飲料は準備し置くを要す、即ち分娩中若し體力衰ふることある時は、此等の亢奮性飲料を與へざるべからず。

第五 第一期分娩即ち開口期の取扱法

開口期に於て最も注意すべき條件左の如し。

一 大小便の排泄 分娩の初期に於ては、假令自然に便通ありて、未だ時を経ずと雖、尙灌腸するを良しとす。是直腸及び膀胱緊満する時は、子宮の收縮を減じ、産出力を微弱ならしむるを以てなり。然れども若し助産婦が分娩前より注意して、下劑或は灌腸により、充分之を排泄せしめたるものにして、且つ開口期の始に於て、既に多量の便通ありたる時は、必ずしも灌腸するを要せず。又た灌腸は開口期に於て必要なりと雖、産出期に至れば、之を施すを要せず。何となれば此の期にありては、假令灌腸を行ふも更に其の効なればなり。

灌腸 は、微温若しくは冷石鹼水、(粉末石鹼八瓦を五百瓦の水に溶解したるもの)三百瓦乃至五百瓦を以て施すべし。之を行ふには普通の灌腸器を用ひて可なりと雖、イルリガートルを用ふれば甚だ便利なり。即ち其

灌腸

の護謨管に灌腸用嘴管を附し、使用に臨み一回護謨管中に液を通じて其の中なかの空氣を排泄し、嘴管に華設林を塗り、以て婦人を左側臥せしめ、之これの後上方こうじやうほうに向て靜に肛門内こうもんないに進入すべし。次でイルリガートルを徐々に高舉こうきよする時は、其の中の液は自然に肛門内こうもんないに流入す。若し此の際液の流入停止りゅうにゅうていしすれば、稍々嘴管を移動して其の方向を轉せしむべし。液の流入適度に達たつすれば、指にて護謨管を壓し、液の散流を防ぎつゝ徐々に嘴管を抜き取るべし。灌腸終れば、婦人は直に、或は暫らくして便意を催すが故に、之を排泄せしむべし。

尿の排泄 も亦頗る緊要にして、膝肘位若くは仰臥位に於て之を營いとなましむ。而して尿は大抵自然に排泄し得るものなれども、若し利し難き時は指を前腔穹隆部に挿入して、指頭を少しく上方に壓すれば容易く利し得ることあり。

カテーテル は、如何なる方法によりても自然に排泄し能はず、且つ膀胱甚だしく緊滿せる際にのみ用ふべきものなり。何となればカテーテ

カテーテルの使用

弾力性カテーテル

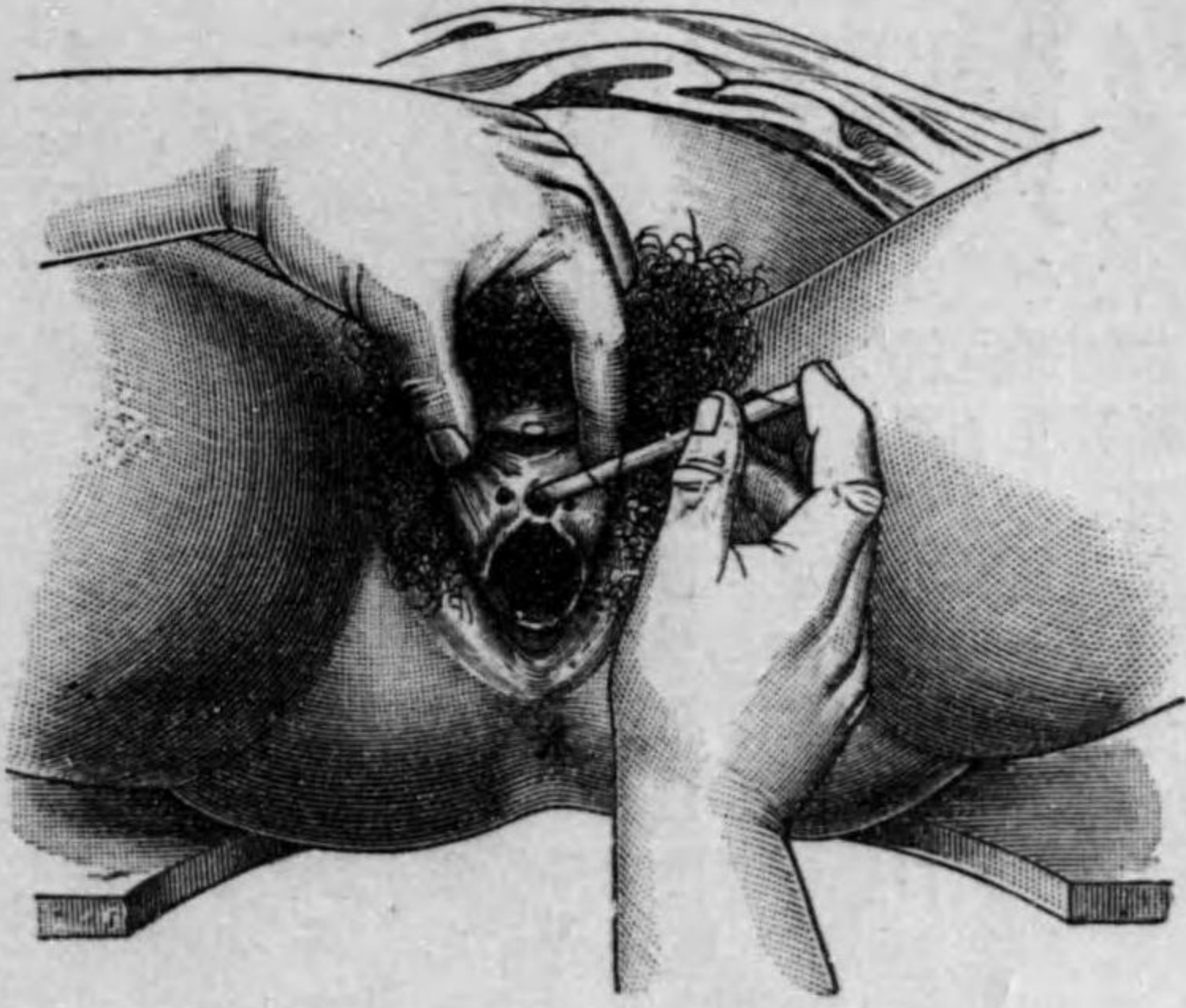
ルに附着せる細菌、或は不潔物は、其の挿入に依て膀胱内に導かれ、以て膀胱加答留を起すのみならず、甚だしきに至りては、輸尿管を経て腎臓に及び腎臓炎を發することあればなり。而して若し兒頭骨盤内に下降せる時は、尿道壓せられて彎曲するが故に、弾力性カテーテルを用びざるべからず。但し此の場合に於ては、極めて完全なる殺菌法を施さざるべからず。一般に於てもカテーテルは嚴重なる殺菌法を行ふべきものにして、若し金屬性のものを用ふるならば、先之を十分間熱湯中に煮沸し、次で一布仙のリゾホルム液中に浸し、而して後尿道内に入い入するものとす。

今硝子製カテーテルに就て、其の使用法を述べんに、先づ百倍のリゾホルムに浸せる綿花を以て尿道口を拭ひ、次でカテーテルに華設林を塗り、執筆狀に之を握り、且つ示指を以て其の外口を塞ぎ、強力を用ひずして尿道彎曲の方向に挿入す。始めカテーテルの尖端を後下方に、次で漸々前方に向はしめ遂に膀胱内に達すれば、示指を放ちて尿を流出せしむ尿の流出する間は決してカテーテルを移動せしめ、若くは其の方向を轉せしむべ

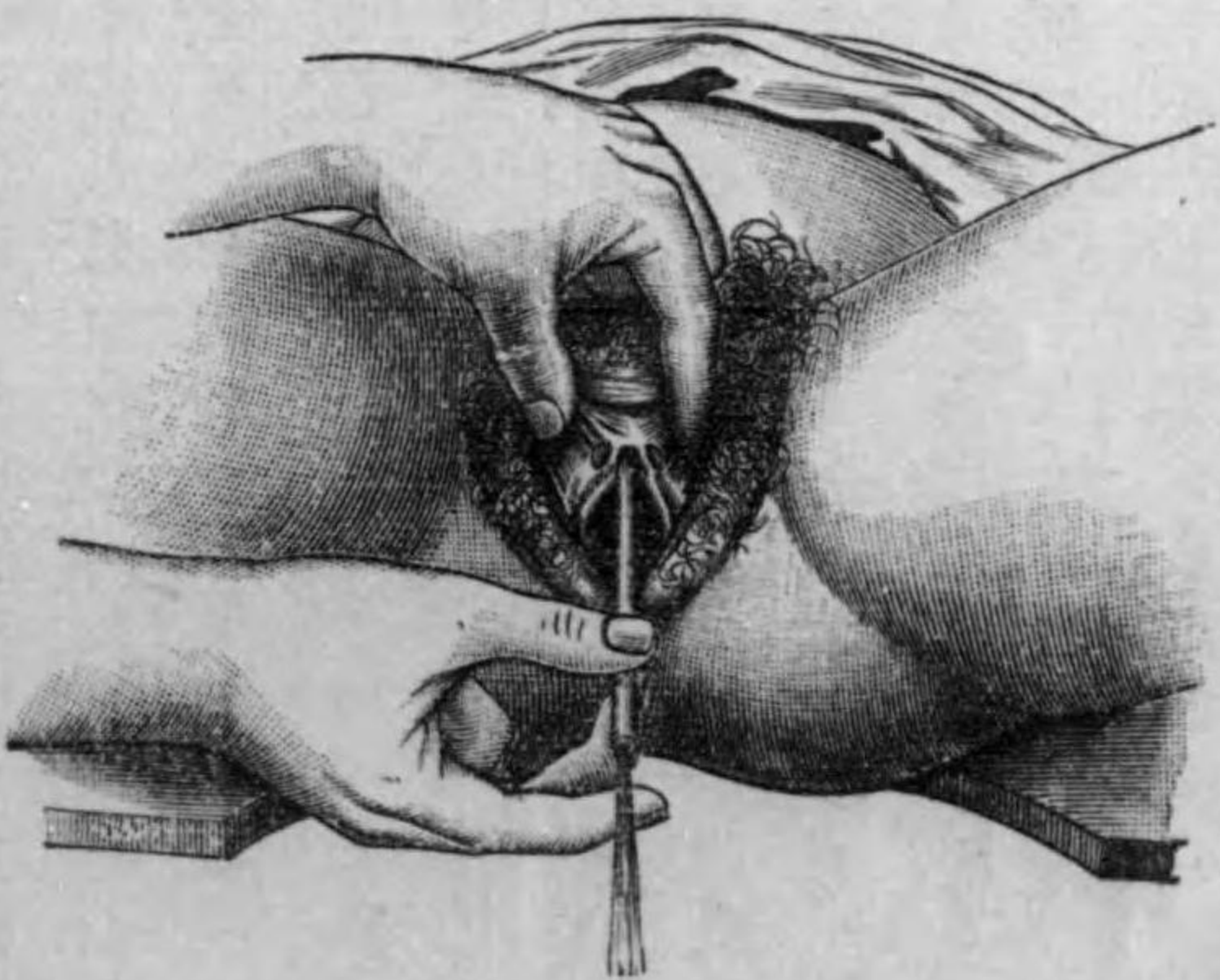
からず。排尿終れば再び示指を以て其の外口を塞ぎ、尿道彎曲の方面に従

カテーテル挿入法

第五百十圖



第五百一圖



ひて徐々に抜き去るべし。或はカテーテルの尖端に一寸五分位の護謨管を

附するも便利なり。

以上述べたるが如く、開口期に於ては必ず大小便の排泄に注意せざるべからずと雖、決して固に行かすむべからず。否らざれば不意に早期破水を來し或は分娩を催すことあり。故に假令開口期の始と雖、成るべく上圍せしめずして、室内に於て便器を用ふるを良とす。殊に經産婦に於ては最も注意すべきこととす。

産婦の就褥

二 産婦就褥の時期 開口期の始に於ては、尙産婦は室内を歩行するも座するも敢て害なしと雖、子宮口開大して、其の直徑三乃至四仙迷(一寸餘)に至れば、必らず産床に産かしむべきものとす。然らざれば往々早期破水を來し、種々の危険を招くの虞あり。又産婦虚弱なるか、經産婦にして分娩の經過頗る早き習慣ある者、或は狹窄骨盤、懸垂腹等の者は、開口期の始より就褥せしめざるべからず。

三 開口期に於ける産婦の位置 は、仰臥するも、側臥するも、總て産婦の意に任せて可なり。但し倚座位はなるべく取らしめざるを良と

可倚坐位は不

す。何となれば此の位置にありては、陣痛を強盛するを以て、分娩経過意外に急劇となることあればなり。されど若し陣痛弱き時は、倚座位を與へ、或は屢々臥位を交換せしむべし。然れども兒頭未だ骨盤内に固定せずして、能く移動する時は、仰臥位を取らしむべし。此の位置は兒頭の骨盤内嵌入を助くるものなり。

開口期の腹

四 開口期に於ては決して腹壓を加ふべからず

開口期に於ける腹壓は甚だ無益なるのみならず。却て胎胞を破開せしむるの害あるものなり。故に産婦若し自ら努責せんとする時は、助産婦は固く之を禁じ自然の陣痛に任すべし。假令此の期に於て陣痛の一二時間休止することあるも著しき害なきものなり。然れど陣痛餘り長く休止する時は、決して妄りに醫藥を用ふることなく、濃き茶或は珈琲を與ふるを良とす。

産婦の睡眠

五 産婦の睡眠

開口期に於て、産婦睡眠を催すことあらば、其の儘安眼せしむべし。之に由て大に其の氣力を増すことあり。而して助産婦は産婦の睡眠中、必らず其の傍にありて注意を怠るべからず。

六 産婦の検査

は、成るべく反覆すべからず。殊に内診は外検査の際、其の異常なきを認むれば決して之を行ふべからず。然れども開口期の経過長きに過ぐる時は、産機の如何程まで進めるや、或は其の他の異常なきやを知らんが爲、嚴重なる殺菌法を施し、陣痛休憩時に於て内診を行ふべし。此の際胎胞に觸れざるやう。又子宮口縁を刺戟せざるやう注意すべし。

腔内の洗滌

七 腔内の洗滌

通常の場合に於ては、腔内を洗滌する必要なしと雖、若し尿道より濃汁を漏らせるものなるか、或は多量の帶下あるものは、必ず一布仙のリゾホルム水を以て、外陰部及び腔内を洗滌すべし。然らざれば往々病毒を兒體に傳染せしむるの危険あるものなり。

外陰部壓抵

八 外陰部の壓抵布

既に産婦就褥の時期に達すれば、外陰部にガゼ片を抵て、屢々之を交換して分泌物の増多せるや、或は分泌物中に血液を混入せざるや、又は前羊水漏泄せざるやを検せざるべからず。若し開口期漸々進みて、腔内分泌物中に血液を混するに至らば、既に子宮口充分

開大せるものにして、胎胞の破裂近きにあることを知るべし。然れども始めより血液を混ざるものは、屢々異常あるものなるが故に注意せざるべからず。

前羊水の検査

九 前羊水の検査 胎胞破裂すれば、助産婦は直に其の羊水の性質を検査せざるべからず。即ち臭気ありや否や、緑色を呈することなきや否や、胎囊の混合せざるや否や、或は異常の混濁あるや否や等之なり。

第六 第二期分娩即ち産出期の取扱法

開口期の終りに於て、胎胞破裂するを常とすれども、時として子宮口充分開大するも破水せず。爲に分娩遅延するか、若くは兒頭既に骨盤内に下降して、胎胞陰唇間に現はるゝも、破裂せざる時は人工に之を破開せざるべからず。

而して是を破開せんとするには、先づ胎胞内を検し、此の中に臍帯又は四肢の下垂せざるや否やに注意せんことを要す。次で陣痛發作時に際し、

産出期の取扱法

胎胞充分緊張すれば、指頭を以て強く之を薦骨に向つて壓すべし。此の如くするも尚破開せざる時は、ピンセットを以て胎胞の一部を挟み之を破るを可とす。決して剪刀を以て切り破るべからず。而して産出期の處置としては、左の法を行ふべし。

胎胞破開直後の内診

一 胎胞破開直後の内診 にして、即ち嚴重なる殺菌法を行ひ、内診を施し、次で果して胎胞の破開せるや。子宮口の全く開大せるや。四肢又は臍帯の脱出なきや、並に兒頭の顚門、縫合の方向及び其の他の要件を委細に検査すべし。此の際若し異常を發見せば、直に醫士を招くを要す。而して産出期に在りても、亦内診は屢々行ふべきものにあらず。破水後に一回精密に行へば足れりとす。然れども陣痛正規なるに關らず、兒頭下降せずして、分娩遅延する時は、再び内診し、兒頭と産道の關係及び其の他の異常を來せるにあらざるかを検査せざるべからず。

二 産出期に於ける産婦の位置 産出期に在りては、産婦をして決して臥床を離れしむべからず。其の位置は仰臥又は側臥なれど、殊に

側臥を良とす。而して側臥せしむるには、必らず胎児の先進部即ち後頭の存在せる方向に臥せしむべし。

第一後頭位は………左側臥位

第二後頭位は………右側臥位

第三後頭位は………右側臥位

第四後頭位は………左側臥位

第三第四後頭位は、後頭の位せる側方に臥せしむる時は、往々小顛門下降して、第一及び第二後頭位の如き純良なる位置に轉することあり。顔面位及び臀位に於ても、胎児先進部の存在せる側に臥せしむる時は利益あるものとす。

腹壓の必要

三 腹壓の必要

強壯なる産婦に在りては、助産婦は之に努責を促し、腹壓を營ましむべし。即ち手に物を握らしめ、足も亦固定せしめ、以て努力せしむるを要す。然れどもこれは陣痛發作時にのみ促すべきものにして、休憩時に於ては毫も益なく、却て産婦を疲勞せしむれば、固く禁ず

胎児心音の注意

べし。かく腹壓は産出期に於て必要なりと雖、虚弱なる者、脱腸、脱肛、肺病、心臓病等を患ふる産婦には、害あるを以て決して努責せしむべからず。

四 胎児心臓音の注意

心音は産出期に於て、殊に注意して屢々聴取すべし。若し著るしく疾速となり(一分間百六十乃至それ以上)、又は緩漫となる時は(一分間百二十乃至それ以下)、胎児に於て危険なる徴候なるを以て、直に醫治を乞ひ、速に娩出せしめざるべからず。

五 陣痛時の注意

産出期に陣痛發作すれば、助産婦は此の際兒頭のよく下降するや、或は正規の廻轉を營むや等に注意せざるべからず。又産出期に於て陣痛休止することあらば、胎児及び母體に危険を來すものなるを以て速に醫士を招くべし。

六 便通の注意

産出期に於ては、兒頭下降して直腸を壓迫するを以て、頻りに便意を催すことあり。此の際決して排便を爲さしめず、産婦を懇に諭し、陣痛時に其の薦骨部を壓すべし。然る時は大に堪へ易きもの

産出期陣痛の危険

とす。

第四編 正規分娩及び其の取扱法 第十二章 正規分娩の取扱法

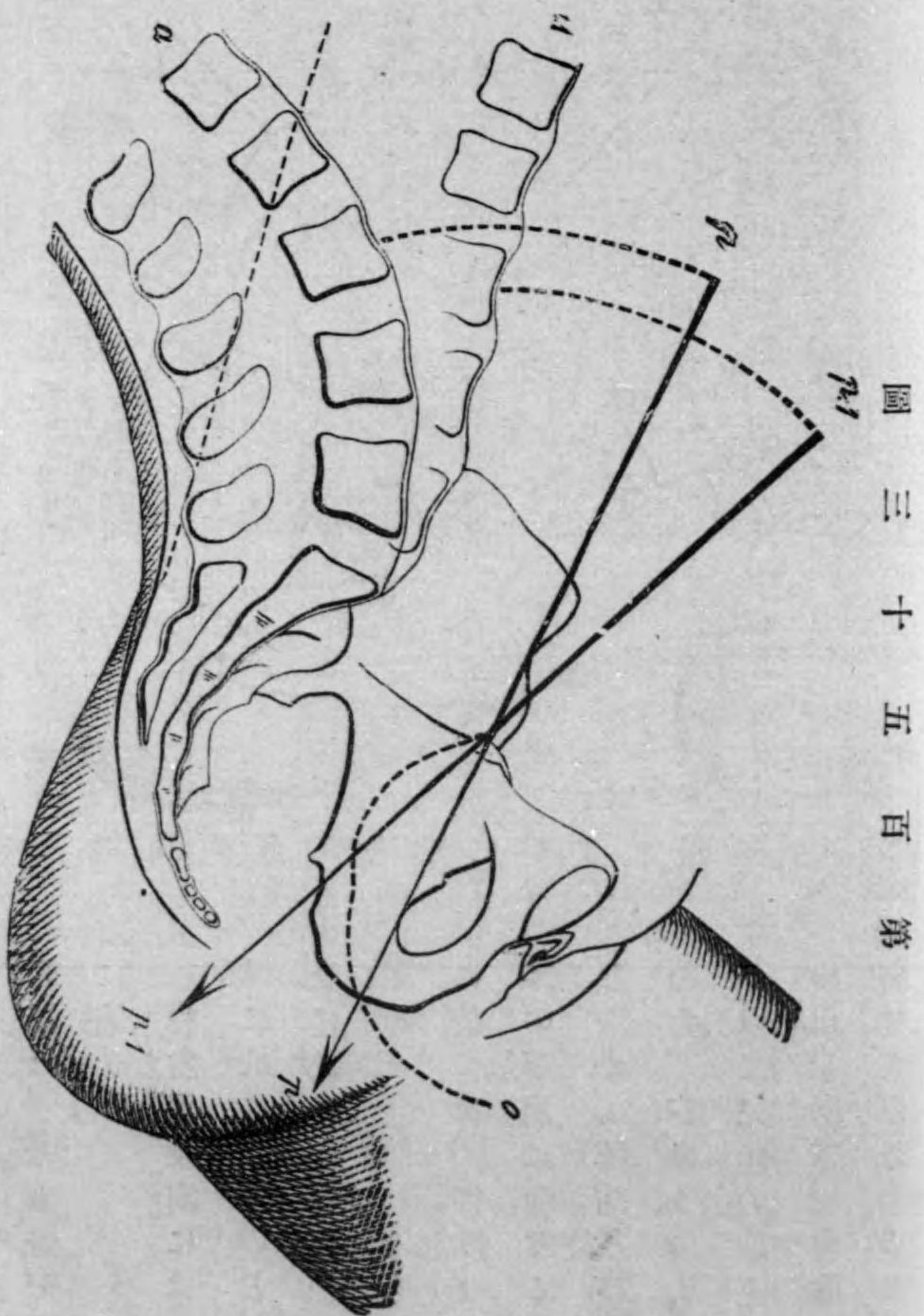
第五百二十五圖



緒方式會陰保護演習器

七 會陰膨隆時の處置 兒頭下降して會陰膨隆し來らば、仰臥せる産婦にありては、其の臀下に枕子を敷き、側臥せる産婦に於ては、之を其の兩脚間に挿み以て分娩を易からしむ。

會陰保護術 とは、兒頭將に露出せんとするに際し、其の急劇なる通過を防ぎて、會陰を破裂せしめざらんが爲に施す技術を云ひ、助産婦の最も緊要なる職務の一にして、其の巧拙如何により、直に熟練なるや否やを看破せらるべし。而して予



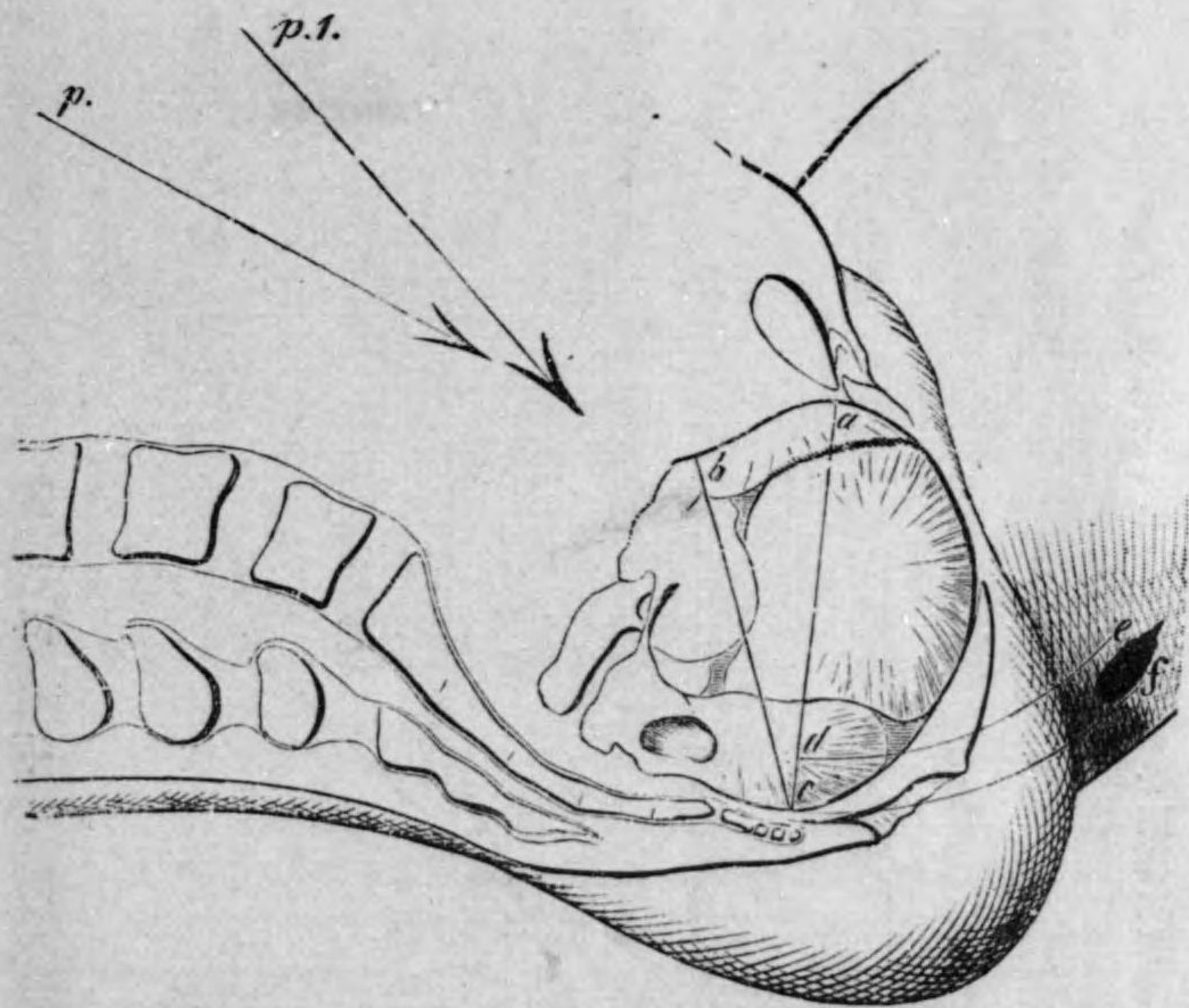
第三十三圖

(一分三の天然天) 況狀るす化變向方の力出排兒胎てり由に展伸び及曲屈の難虞

第四編 正規分娩及び其の取扱法 第十二章 正規分娩の取扱法

會陰保護演習器

第五百四十四圖



胎兒頭蓋の會陰對する關係 (天然の大三分一)

が考案せし會陰保護演習器は、最も是が實習に適せり。會陰保護術には、仰臥に於けるものと、側臥に於けるものとの二種あり。然れども側臥に於ては、仰臥よりも手の運用に便なるのみならず。陣痛及び腹壓の力、仰臥よりも弱きを以て兒頭の急速なる娩出を防ぎ、會陰を破裂せしむる事少なきの

會陰保護の時期

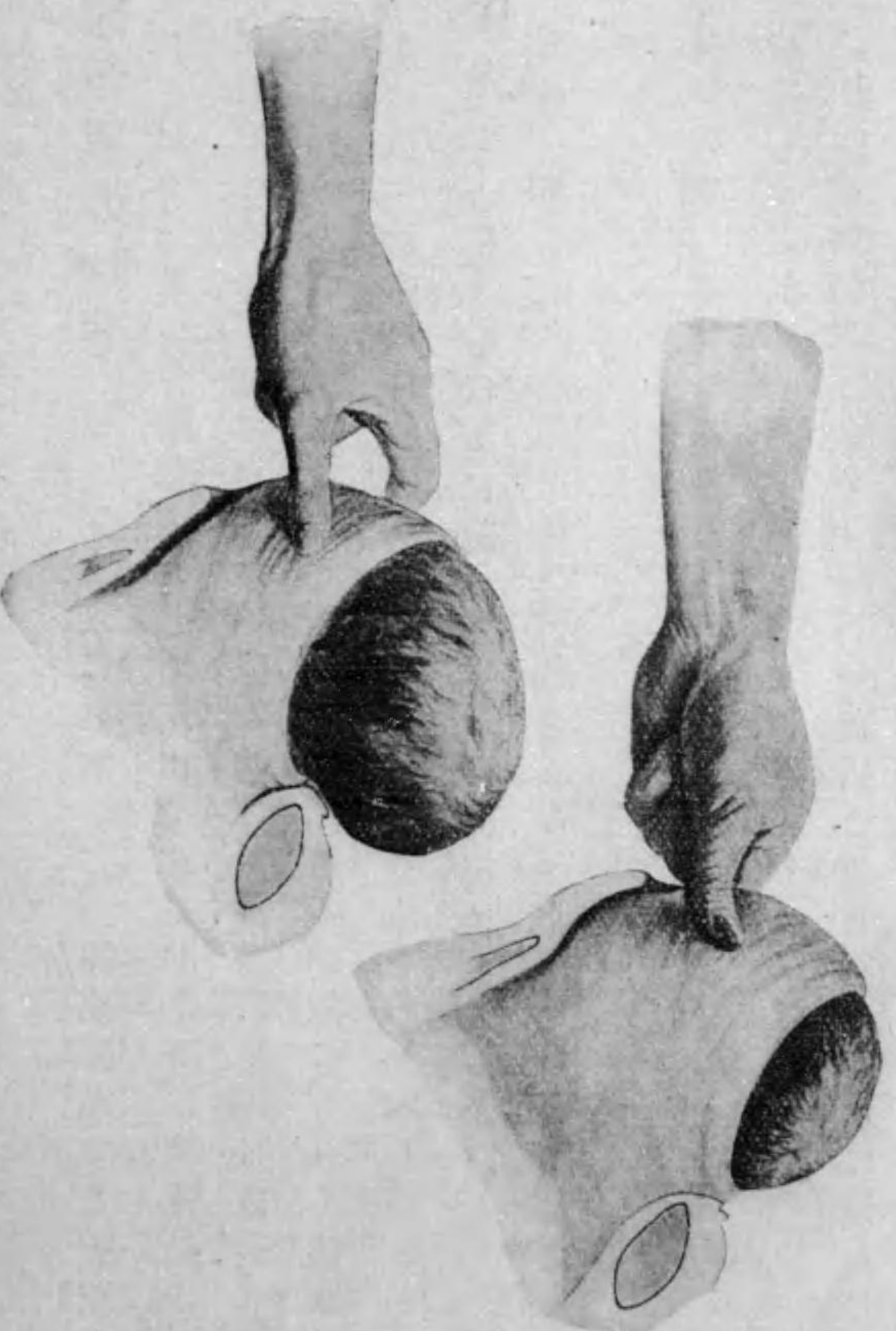
利あり。故に假令仰臥を取れるものにて、此の時期に至れば側臥に變せしむるを良とす。

會陰保護の時期 は、兒頭既に發露して、陣痛休歇するも腔内に退却することなく、且つ會陰部著るしく膨出せる時にあり。若し之を施すと早きに過ぐる時は、却て兒頭の下降を妨げ、且つ助産婦は疲勞して、必要なる時に充分の力を用ふること能はざるに至るが故に、克く注意せざるべからず。但し初産婦は經産婦よりも稍々早く之を行ふべし。

會陰保護法 を行ふに就ては、三箇の要件あり。

- 一 胎兒先進部例之は兒頭及び臀部を成るべく徐々に會陰を通過せしむること。
 - 二 兒頭の第三廻轉を補助し、誘導線の方向に進行せしむ。
 - 三 會陰を可及的伸張せしめ緊張を減せしむること。
- 等なり。而して此の法を施す間は、一布仙のリゾホルム水に浸したる棉花、或は瓦設を以て屢々會陰部を拭ひ清潔にすべし。殊に大便の出るとき、又

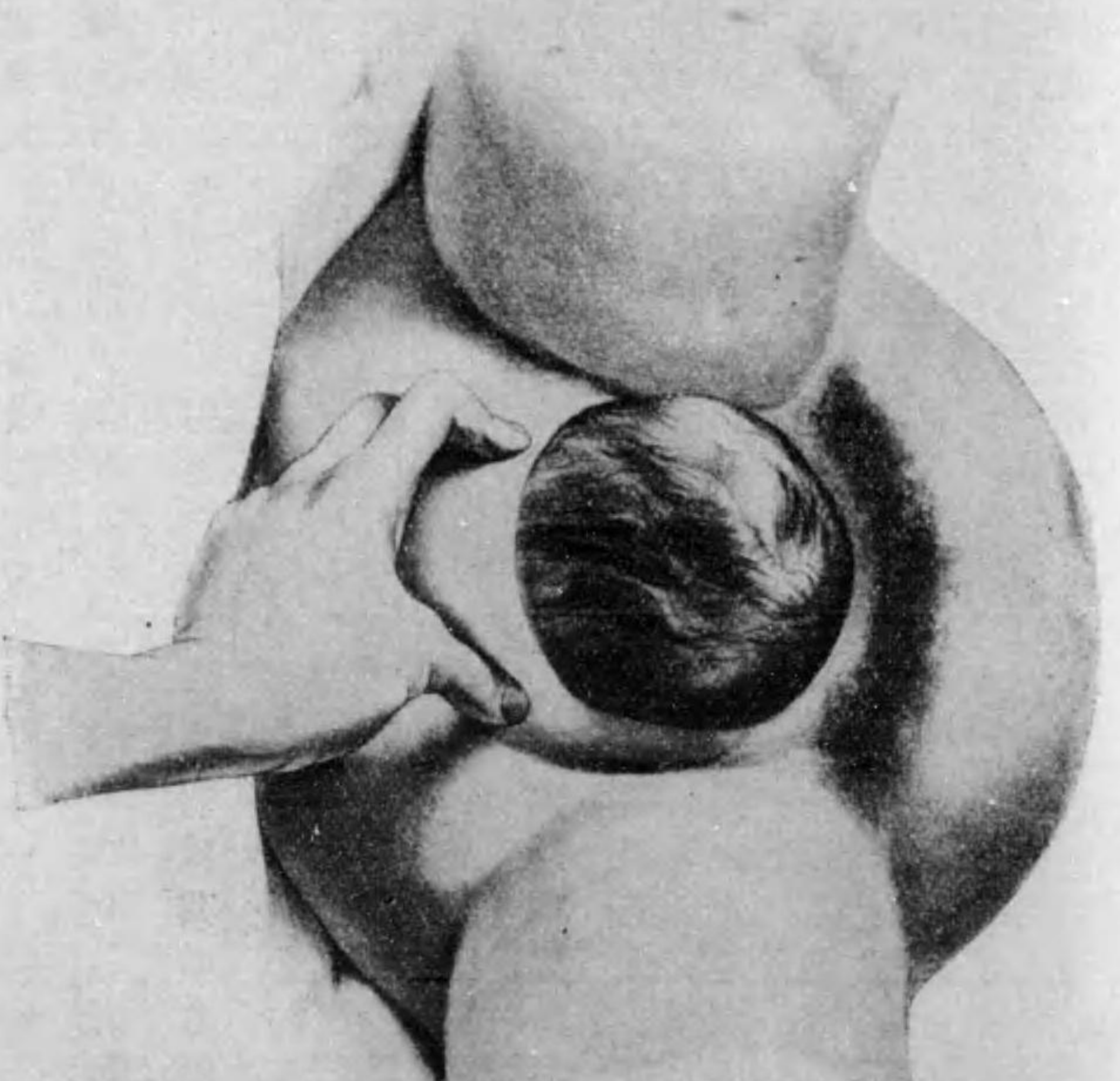
圖 五 十 五 第



況 状 へ た し 長 延 に 度 高 最 陰 會 し 露 發 頭 兒

會 陰 保 護 法

は 脱 肛 有 る も の に は 注 意 す べ し



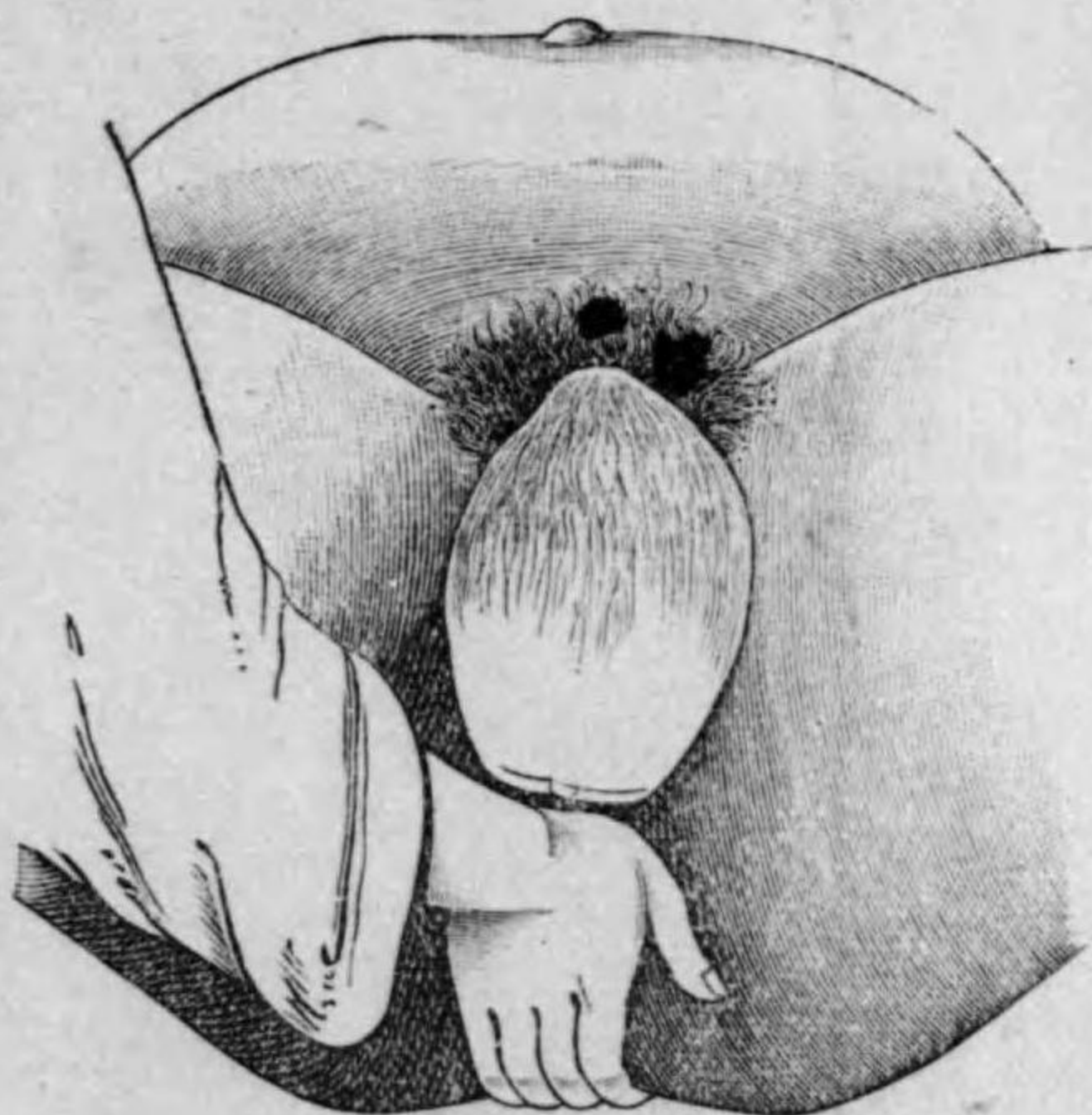
第 百 五 十 六 圖

今會陰保護を行ふに際し、産婦の採るべき位置に二種あり。

仰臥位に於ける會陰保護法

仰臥せる産婦の臀下に枕子を挿入し、頭部を低くし兩脚を開かしめ、助産婦は其の右側に坐し、右の手掌を膨隆したる會陰の上に抵て其の腕部を陰脣繫帶部に、手指は肛門を越えて後方へ向けて貼すべし。又左の手指を前方恥骨縫際上より兒頭に送り、陣痛の際之を壓する事前に述べたる所と毫も異なることなし。或は又側臥位に於て施す方法を應用することあり。

第五百七十七圖

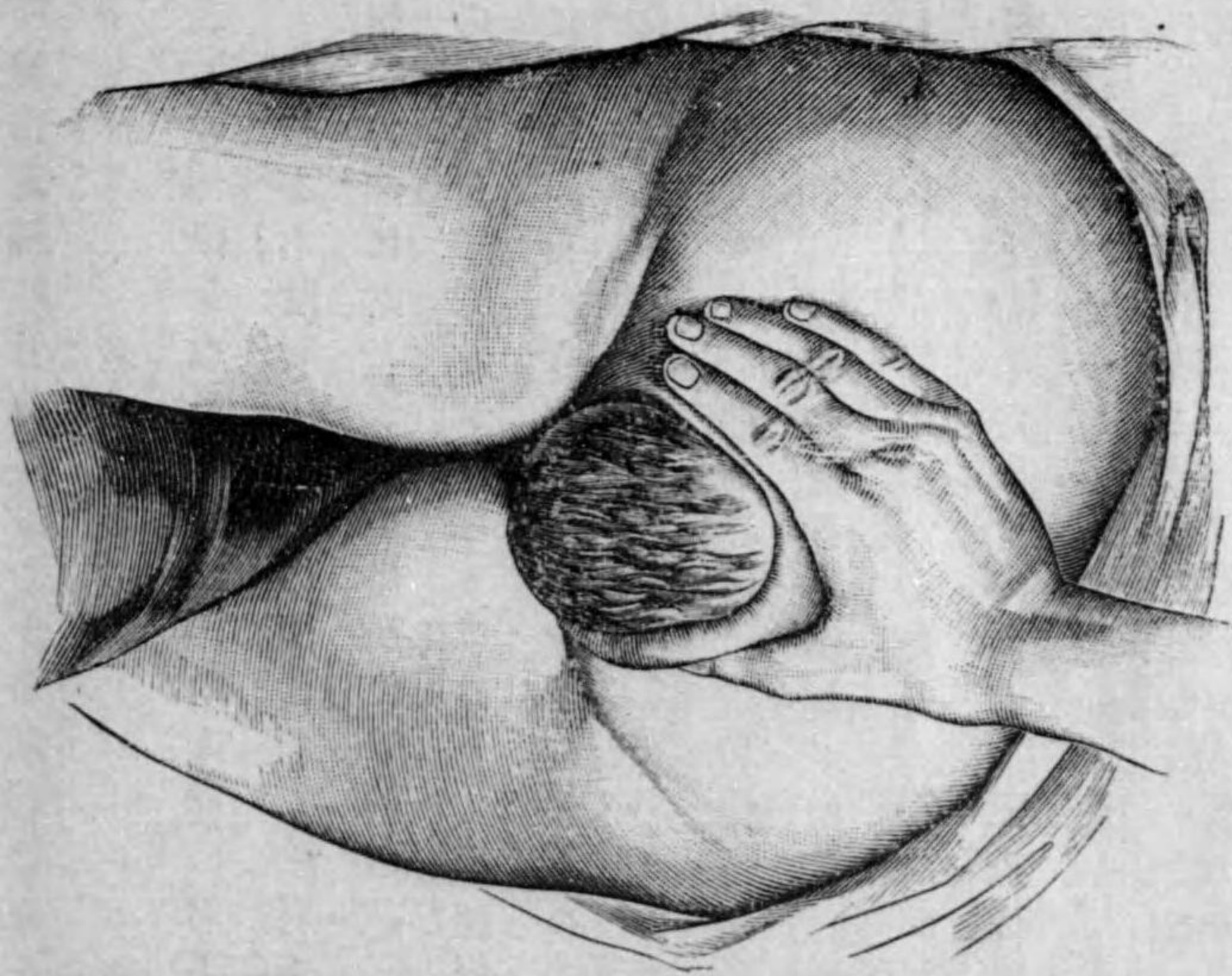


仰臥位に於ける會陰保護法

側臥位に於ける會陰保護法

助産婦は産婦の背側に坐し、之をして強く膝を屈せしめ、股間には大きな枕子を挿入し、殺菌瓦設或はリゾホルム水に浸せる瓦設を會陰部に置き、産婦若し左側臥を取れる時は、助産婦の右手を會陰部に貼して、其の指を開き、拇指を右陰脣上に他の四指を左陰脣上加へ、拇指と四指との間を陰脣繫帶の部に貼し、且つ僅かに繫帶の部より去らざるべからず。是會陰延長の状況を知らんが爲なり。而して助産婦の左手は前方に送り、恥骨縫際上より股間を潜らせ、手指を並列せしめて兒頭に貼すべし。今や陣痛發作すれば、兒頭の急劇なる産出を防がんが爲、後方の手を以て、稍々之を骨盤内に挿入するが如き心地にて恥骨弓に向て壓上し、同時に前方の手を以て、恰も第三廻轉を營ましむるが如き心地にて之を前方に牽くべし。此の際に於ては、産婦の努責を禁じ、手及び足を固定せしめず、口を開きて陣痛を弱からしむるを要す。而して陣痛休歇すれば、兩手の壓力を減じ、發作すれば再び壓すること前の如く爲し、成るべく徐々に兒頭を娩出せしむべし。若し強く速に露出し來らんとせば、右手の壓力を増し、以て之を

第五百八十八圖



制せざる可らず。又陰唇繫帯は、兒頭の娩出するに従ひ、後方に退くものなるを以て、助産婦の右手も亦之を追ひて後方に送り、常に繫帯縁を現はし、其の破裂せざるや否やを檢せざるべからず。若し其の部甚だしく菲薄となり、破裂せんとする虞ある時は、充分兒頭の進行を止め、且つ強く會陰を前方に押し

後會陰保護術

以て之を豫防すべし。

因に云ふ。後會陰保護術とは、肛門と尾骶骨との間に於て薄き軟部を隔てて胎兒の前額、或は頤部を觸知する際、一手を以て兒頭を保持し、其の速に娩出するを防ぎ、他の手掌を以て肛門と尾骶骨との間を押し、顔面を徐々に壓出するを云ふ。此の法は、仰臥を以て行ふよりも側臥を便なりとす。而して此の後會陰保護術なるものは、兒頭深く腔内に下れるに關らず其の露出するまで長時間を費し、胎兒危険の微ある際に行ふべきものとす。兩會陰保護術には各々長短あり、一般に仰臥位を用ふるもの多し。今側臥位の利害を擧ぐれば次の如し。

側臥位

- 一 腹壓を減す。
- 二 産婦を暴露す。
- 三 會陰を完全に監視し得べし。
- 四 兒頭會陰を壓迫すること少なし。

兩會陰保護術

五 會陰保護有効なるも内診を行ふに不便なり。

六 外陰部の消毒に不便なり。

七 臍帯纏絡を解くに困難なり。

八 子宮弛緩せるとき、空氣栓塞の危険あり。

八 軀幹産出期の處置

兒頭産出すれば、清潔なる瓦設を以て其の口及び鼻に附着せる粘液を拭ひ去り、次で直に一手の示指を兒の頸部に送り、臍帯の纏絡せるや否やを検すべし。此の際側臥を以て分娩を行ふ産婦にても、成るべく仰臥位に變せしむるを佳とす。斯て一手を以て兒頭を支持し、他手を以て臍帯の検査を行ふべし。若し纏絡せる時は、軽く之を撮みて牽引を試み、容易く應ずる所の一端を引き出し、以て之を弛め肩胛の出づるに至り、其の纏絡を解除すべし。即ち臍帯の蹄係部を撮み、頭部を越えて胸面に送るなり。若し臍帯の纏絡強くして著るしく緊張せられ、之を緩むること能はざる時は、止むを得ず二箇の結紮を施し、其の間を切斷すべし。然らざれば軀幹産出に際して斷裂し、或は胎盤の早期剝

離又は胎兒の頸部を絞めて假死に陥らしむる等の危険あり。

此の如く臍帯の検査終れば、尙會陰保護法に於ける如く、一手を會陰部に貼し、次回の陣痛を待つべし。若し二三分間を経るも陣痛發作せざる時は、一手を以て子宮底に輪狀摩擦を施し、且つ産婦に努責せしめ、助産婦も亦其の手を以て子宮底を強く下方に壓すべし。此の法によるも尙効なき時は、兒頭を兩手間に挟み、之を會陰の方向に壓し、前方の肩胛恥骨弓下に現はれたる時は、又是を前方に擧上すべし。然る時は、後側の肩胛は會陰を越えて産出すべし。此の際決して兒頭を掴みて牽引すべからず。只之を前後に移動せしむるのみに止むべし。此の如くするも肩胛産出せざる時は、一手の示指を兒背に沿うて腔内に挿入せしめ、會陰部に存せる腋窩に鉤狀に懸け、他手を以て兒頭を把持し、兩手共力して前上方に軽く牽く時は、後側の肩胛は會陰より脱出すべし。斯く一手の肩胛産出すれば、他の肩胛は自然に排出し得るものなり。而して助産婦は肩胛娩出時に於ても、亦會陰の保護を怠るべからず。若し助産婦自ら之を行ふを得ざる時は、助

兒頭を牽引せしむ

助手を介せしむ

手をして輔けしむべし。是會陰は頭部娩出時に於て、著るしく菲薄となれるを以て、甚だ破裂し易ければなり。肩胛産出すれば、會陰の保護を要せざる故に、此の手を以て兒體を受け、他手にて兒頭を把持すべし。此の時期に至れば、全く産婦の努責を要せずして、爾後の體部は直に自然に産出せられ得るものなり。

産婦仰臥せる時、兒體全く娩出すれば、其の兒を母の兩股間に置き、側臥せる時は其の後に仰臥せしめ、臍帯の壓迫又は牽引することなからしめ、温き襦袢を以て之を被ふべし。而して産婦の陰門は消毒せるガーゼを壓抵して之れを被ふべし。

第七 第三期分娩即ち後産期の處置

後産期

に於ては、助産婦は母體のみならず生兒にも注意せざるべからざるが故に、決して軽々しき處置をなすべからず。即ち以上述べたるが如く生兒を産床に臥せしむれば、活潑なる呼吸を營むや否やを窺ひ、若し

毫も障害なく、且つ高聲を發して啼泣せる時は、臍帯結紮の時期に至る迄其の儘にして待つべし。此の間又産婦に於て一手を腹上に貼し、子宮の能く收縮せるや、又は尙一兒の残れることなきや、或は外陰部より著るしく出血せざるや等に注意すべし。

小兒産出後

直に聲を放ちて啼泣せざる時は、手掌を以て軽く心部(緒方式輕症發啼術)或は臀部を打つべし。之にても尙啼泣せず、呼吸も亦發せざる時は、直に臍帯を結紮し、更に緒方式重症發啼術によりて、蘇生せしめざるべからず。(詳細は緒方著發啼術及び後篇發啼術の條を参照せらるべし)。

臍帯結紮法

一 臍帯結紮法 胎兒産出後、臍帯の搏動は漸々微弱となり、五分乃至十分間を経る時は、全く止むに至る。然る時は即ち之を結紮して切斷すべし。其の方法、臍より隔たること凡そ二指横徑の部に於て、長さ七寸許を有する結紮絲を以て緊しく結紮すべし。之を第一結紮と云ふ。今臍帯を緊しく結紮するには、前以て手指にて其の部の膠様質を擦り去るべし。

輕症發啼術

重症發啼術

第一結紮

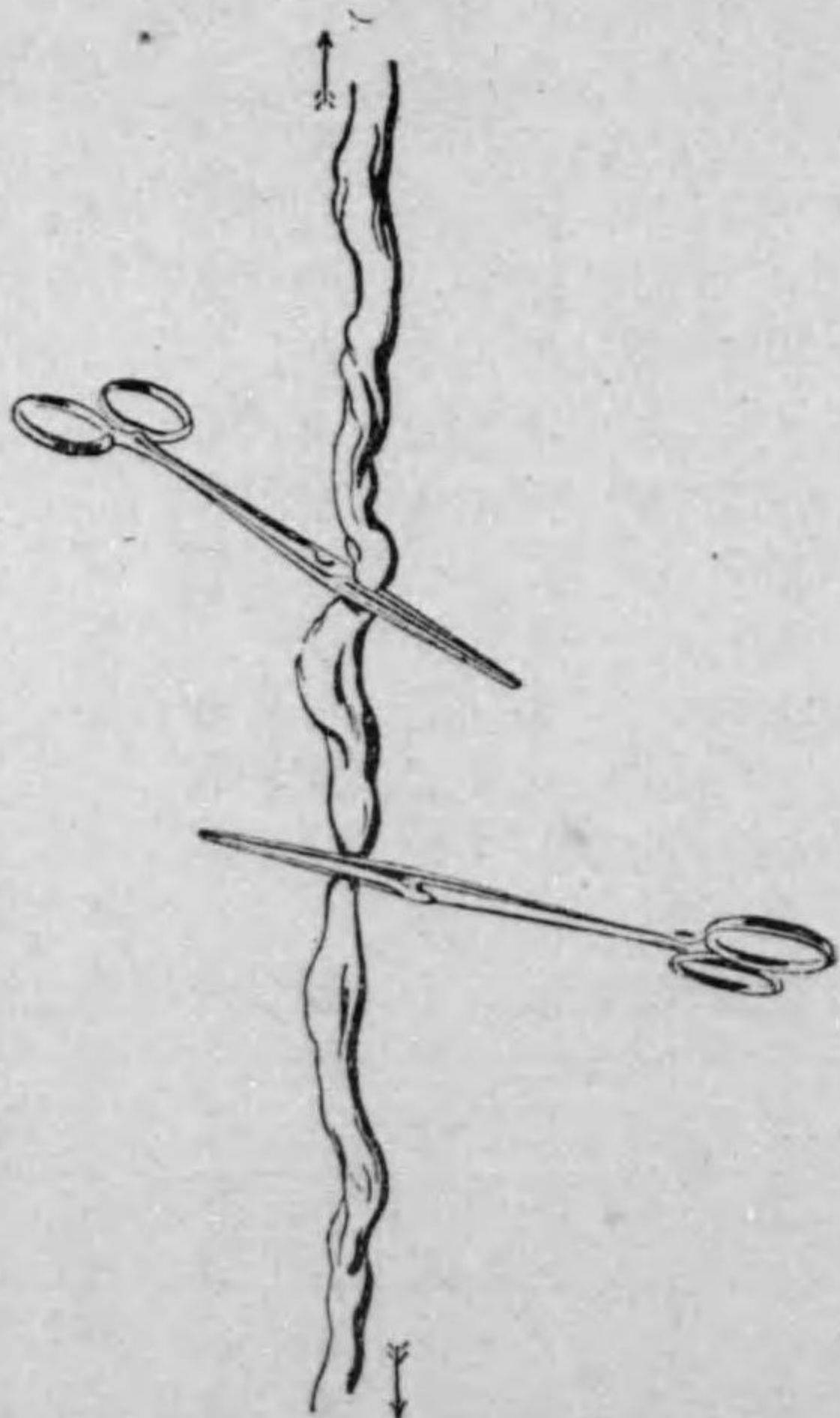
第二結紮
臍帶剪刀
結紮を行ふ理由

又一度結紮したる儘にては、充分固からざる時あるを以て、一度締めたる後、更に其の紐の兩端を廻して臍帶の反對側に於て、第二の結節を作るべし。次で此の部より更に二指横徑を隔て、同様に第二の結紮を施し、然る後兩結紮の中間を臍帶剪刀にて切斷すべし。但し此の際誤つて兒の手足を傷つけざるやう、左手を以て剪刀の尖端を覆ふべし。又臍帶結紮に際して、其の中の血液をすぎ出すは、甚だ危険なることなれば決して行ふべからず。

臍帶の第一結紮を要する理由は、小兒の血液を失はざらしめんが爲なり。第二結紮を施すの所以は、出血の爲に床上を不潔ならしむるを防止、且つ胎盤より血液の流出するを防ぎ、胎盤を軟らかならしめずして其の剝離を容易ならしむるにあり。

因に云ふ。予の産科院に於ては、第一及び第二結紮に換ふるに二箇の臍帶鉗子を以て鉗收し、その中間を截斷したるまゝ小兒を沐浴槽に入らしめ、沐浴を終りたる後、臍帶を腹壁に最も接近したる部に結紮す。次で消毒法を行ひキセロホル

第五百九十九圖



ムを撒布し臍帶を施行せり。斯の如くする時は、臍帶の殘片短く、從て乾燥壞死するも亦迅速なり。

二 後産娩出時の處置

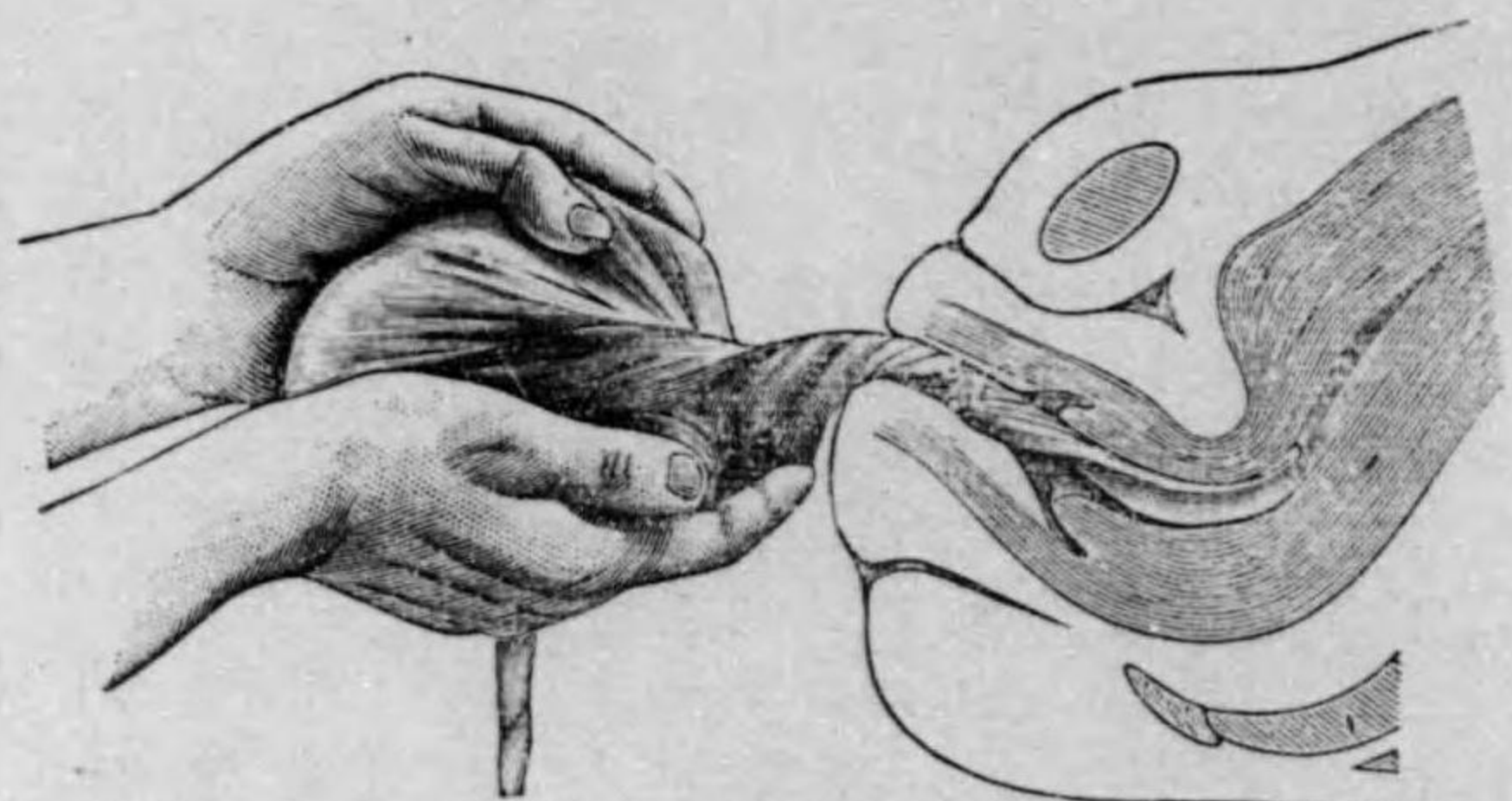
既に臍帶の結紮を終らば、小兒を温に被ひて、介助者に渡すか、或は其の傍らに臥せしむべし。而して後産娩出の際は、産婦に仰臥位を取らしめ、助産婦は絶えず子宮の收縮に注意せざる

べからず。此の際子宮變小して、硬固なる時は異常なしと雖、若し柔軟にして縮小せざる時は、徐々に子宮全體を輪狀に摩擦し、之が收縮を促すべし。又外陰部に壓抵せるガアゼを屢々検査して出血の多少を検すべし。胎盤の子宮壁より剝離せらるる際に起る出血は、産婦に害なきも、時として其の取扱法の宜しからざるが爲、又産道の損傷、子宮の收縮不全等の爲に、危険なる大出血を來すことあり。且つ其の出血は必ずしも外部にのみ流出するものにあらず時としては子宮腔内に滞留して、所謂内出血を來すことあり。然る時は甚だ危険にして、遂には生命をも失ふことあるが故に、若し子宮柔軟にして且つ漸々増大する時は、猶豫なく醫治を乞ふべし。

胎盤の剝離 せるや否やを知らんには、臍帯の腔口に出づる部に目標を付け置き、以て爾後の比較に供すべし。而して腔内より稍々多量の出血を來し、子宮變小して臍帯著るしく陰門外に出づるに至らば、胎盤は全く剝離せるものにして、其の大部は腔内を出でたるものと知るべし。

後産娩出 を處置せんには、胎盤の一部外陰部に現はれ來る時、兩手

第百六十圖



胎盤捻轉の圖

の後自然に排出し、或は容易く之を出し得るに至るものなり。

を以て之を握り、徐々に捻轉して其の娩出を補助すべし。然る時は胎盤に附着せる卵膜は、振れて索状をなし容易く出で、多くは破裂を生ずることなし。但し此の際胎盤を捻轉せずして單に牽引すべからず。そは卵膜の一片破れて子宮腔内に残留し、危険なる出血、或は産褥熱等の原因となるを以てなり。胎盤娩出を補助する際、卵膜の一片裂けて子宮内に遺残するものあらば、結紮絲を以て之を結び、胎盤側より切離し、嚴重なる殺菌法を施して放置すべし。然る時は十二時間乃至二十四時間

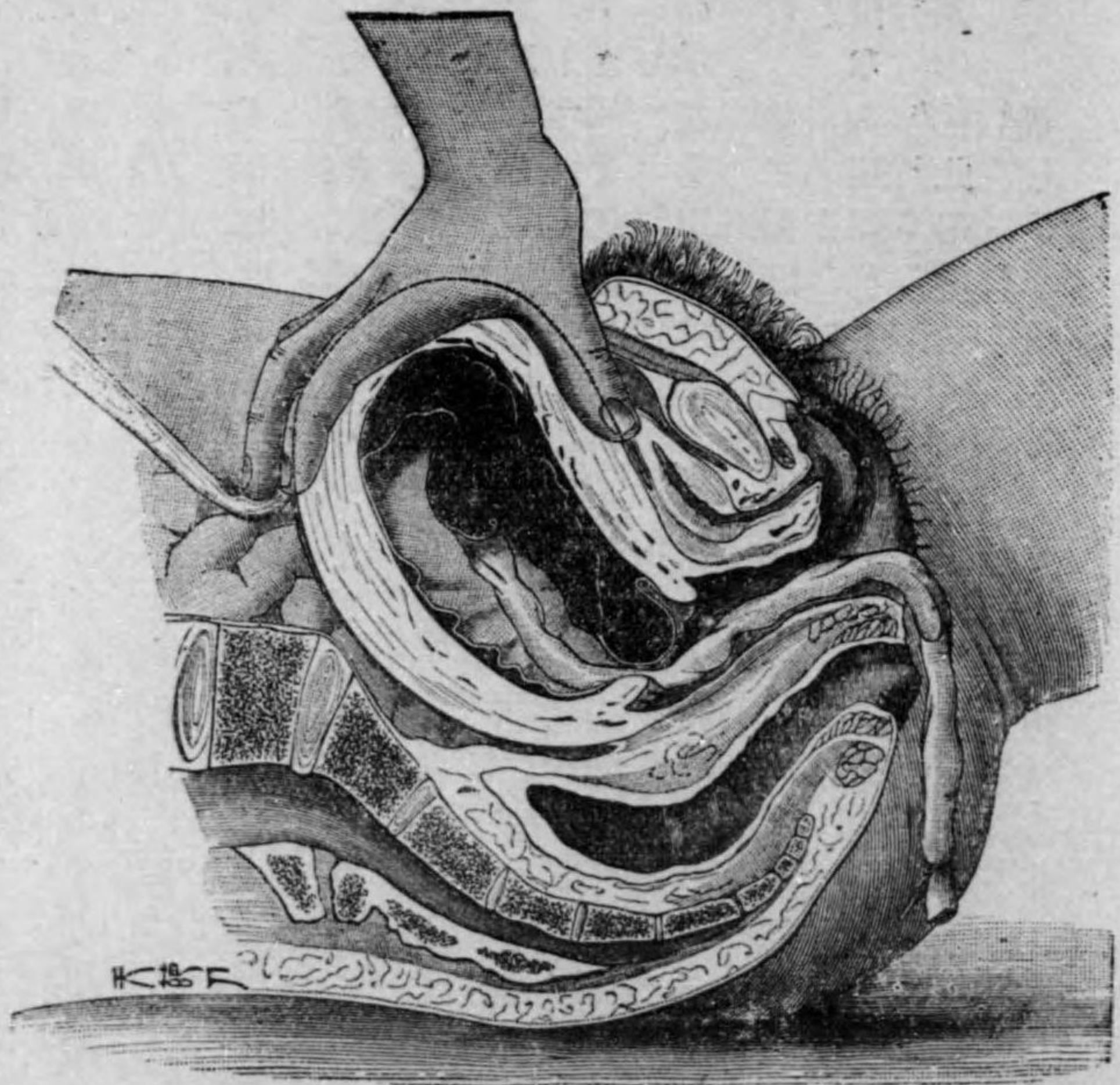
生理的待期法 近時胎盤の剝離及び排出を自然に放任することを稱用するものあり。即ち胎兒分娩後臍帶を切斷し、外陰部を清潔に拭除し、新しき産床と交換し、約一時間にして胎盤の子宮を剝離し去りて、子宮頸部及び膣穹隆部に達したる後、初めて多少の牽引と壓迫とを試むるの法なり。そは陣痛發作を見て腹壁上より恰もクレイデ法の如く壓迫するものにして、此の際少しく臍帶を牽引するも可なりとせり。

通常分娩出法 三十分間を経るも、胎盤下降せざる時は、子宮を輪狀に摩擦し、産婦に努責を命ずべし。然るに尙娩出せず、既に一時間餘を経過したるものは、クレイデ胎盤壓出法を行ふべし。

クレイデ胎盤壓出法 先づ子宮に輪狀摩擦を施し、陣痛を發せしめて充分其の收縮せる際、腹壁上より一手の拇指を子宮の前方に、他の四指を其の後方に貼し、手掌を子宮底部に抵て以て緊く子宮を攪み、全子宮を強く薦骨の内面に向つて壓迫すべし。之をクレイデ胎盤壓出法と云ふ。此の法は一回にして効なき時は、再三之を反覆すべく、且つ毎回必ず陣痛

クレイデ胎盤壓出法

第四百六十一圖



クレイデ胎盤壓出法

時に之を行ふべきものとす。然れ共若し陣痛の發作を待つことなく、續きて之を行ふは無益にして却て有害なり。而して大抵五六回行へば、容易く後産を娩出せしめ得るものなり。但し此の法を行ふこと早きに失する時は、却て子宮に不正の收縮を起し、以て容易に娩出し能はざらし